

「なる」の芸術実践
オートエスノグラフィーと芸術論

令和2年度

東京藝術大学大学院美術研究科
博士後期課程学位論文

美術専攻油画研究領域（油画）
学籍番号 1316904 新井麻弓

目次

第1章 はじめにー「わたし（たち）」について	1
1.1 序文	1
1.2 「わたし」について	2
1.3 （「わたし」のなかの）ウィリマンについて	5
1.4 「わたし」とウィリマン	8
第2章 研究という芸術実践	10
2.1 序文	10
2.2 研究の視座ー芸術実践と表現活動	11
2.3 研究の方法	14
2.3.1 この研究の方法	14
2.3.2 オートエスノグラフィー	14
2.3.3 この研究の方法とオートエスノグラフィー	19
2.4 論文の構成ー「もう1つ」の芸術実践の在り方へ	20
2.5 本章までにでてきた用語	21
第3章 自分を他者（相手）の中においてみるー香港・清水海岸	23
3.1 序文	23
3.2 表現活動1 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1 ((完全に) 消えるための手立て：再自然化 / 実践1)》概要	24
3.3 「わたし」たちの気づきの交換録 # 1	25
3.4 表現活動の考察文	36
3.4.1 表現活動の背景ー自分自身の〈よその感〉	36
3.4.2 表現活動の内容ー海に立ちつづける	41
3.4.3 表現活動の考察まとめ	49
第4章 相手と自分を重なり合わせるー日本・中之条	51
4.1 序文	51
4.2 表現活動2 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo (ギフト交換練習 / 招待 2.1：中之条)》概要	52
4.3 「わたし」たちの気づきの交換録 # 2	53
4.4 表現活動の考察文	58
4.4.1 表現活動の背景ーゲストとホスト	58
4.4.2 表現活動の内容ー交換生活する場をつくる	62
4.4.3 表現活動の考察まとめ	72
4.5 willimannarai「自己」紹介	76

第5章 重なりに見える自分自身に向き合うー 台湾・太魯閣国立公園	81
5.1 序文	81
5.2 《The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park》脚本	82
5.3 表現活動3 《The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park (ギフト交換練習 / 招待 4.2: 太魯閣国立公園)》概要	93
5.4 表現活動の考察文	95
5.4.1 表現活動の背景	95
5.4.2 表現活動の内容 ― 翻訳する	103
5.4.3 表現活動の考察まとめ	106
5.5 「わたし」たちの気づきの交換録 # 3	107
 第6章 重なりの中の重なり合えない「わたし」と出会うー スイス・	129
チューリッヒ、日本・上野	
6.1 序文	129
6.2 表現活動4 《表現活動4 《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno (アバター・ ツアーズ #2: 東京・上野)》概要	130
6.3 「わたし」たちの気づきの交換録 #4	151
6.4 表現活動の考察文	176
6.4.1 表現活動の背景	176
6.4.2 表現活動の内容	179
6.4.3 表現活動の考察まとめ	186
6.5 《Avatar tours #2: Tokyo Ueno》2020年12月20日版ツアーパフォー マンス脚本 (邦訳)	187
 第7章 「なる」論前章：形を重ねる (uni・form)	197
7.1 序文	197
7.2 「わたし」たちの気づきの交換録 #5	198
7.3 ユニフォームという表現	210
7.4 各表現活動におけるユニフォームの表現	215
7.5 ユニフォームの表現と「なる」の体験の関係性	226
7.6 まとめ ― 表現しつづけることから「なる」へ	230
 第8章 「なる」論後章：まとめ	231
8.1 序文	231
8.2 「なる」という表現活動	232
8.3 「なる」という芸術実践	236
 第9章 おわりに	241
9.1 序文	241
9.2 私と「わたし」(たち)	242

1 0. 用語と地図	245
1 1. 引用・参考文献一覧	247
1 2. 図表リスト	253
1 3. 謝辞	256

第 1 章

はじめにー「わたし（たち）」について

1.1 序文

第 1 章では、まずこの論述の「主体」である私（たち）、「わたし（たち）」について述べる。本論で芸術実践を語る「私（たち）」、「わたし（たち）」がどのような人物なのか、読者に知ってもらうことから始めたい。

1.2 「わたし」について

埼玉と東京でそれぞれ生まれ育った「わたし」の両親は、東京の証券会社の子会社の研究所で働く同僚同士であった。父は、70年代にアメリカの大学院に2年ほど会社から派遣され留学し、その繋がりもあって、結婚する直前にニューヨーク支社への転勤が決まった。母は会社を辞め、二人はニューヨークへ引っ越した。両親は、80年代から90年代初頭にかけて計約7年間マンハッタンに住み、その間に年が4つ離れた兄と「わたし」を生み、育てた。当時住んでいた場所は、ワールドトレードセンターの目の前の高層マンションだった。マンハッタン最南部にあるバッテリー・パーク・シティというエリアに位置し、ワールドトレードセンターやニューヨーク市のトンネル建設時に掘り起こした土砂を利用し作られた埋め立て地である。当時は開発したてで、近隣のマンションには多くの若い子連れ家族が住み、隣の公園には、ニューヨークらしくいつも様々な人種の子供たちが一緒になって遊んでいた。

ある時、兄と兄の友人たちが遊ぶ砂場で、「わたし」も砂遊びをしていたら、その友人の一人が、突然ふざけて「わたし」のおもちゃを取り上げた。「わたし」はとても怒り、“mine!(私のもの)”と言い放った。生まれて初めて話した言葉だった。

母は、子供の年齢が同じだったこともあり、同じマンションに住む旧西ドイツからきた駐在妻ハネローと仲良くなった。兄はその長男フィリップと常に一緒に遊び、彼の写真の横にはいつもフィリップがいる。妹のクラリッサと「わたし」も新生児から多くの時間を一緒に過ごしていた。

「わたし」は、当時のことを何も覚えていない、と同時に、色々と覚えている。両親は頻繁に当時のことを話し、「わたし」はそれを聞いて育ってきた。母の手料理には、ハネから当時習ったドイツ料理やその他欧州の郷土料理のレパートリーが多かった。「わたし」は幼い頃から度々古いアルバムを引っ張り出しては、事実を確かめるように、アメリカで撮影された大量の写真を観察した。赤ちゃんの「わたし」のことを、「わたし」はいつも父か母になって眺めた。ある時から、紙の上のイメージは、奥行きをもって当時の「わたし」の気持ちと共に現れる。「経験」とはなんだろうか。

「わたし」が2歳になる直前、父は再び東京本社に転勤になり、家族で日本へ移る。渋谷まで電車で30分。都心勤務の父親を持つ家族が多く住む神奈川県の実家。日本の一大グループ企業が公共移動手段、住宅、スーパーマーケットなどの商業施設を一括で都市計画をし、整備して作られた地域である。一帯には、同じような収入をもつ子連れ家族が住むマンションが立ち並ぶ。その中でも、両親は知人の助言で駐在帰りの多いこの地域を選んだ。「わたし」が通った小学校は帰国子女が日本で一番多い公立校だった。欧米の生活経験をもつ親たちは、自分たちの視野の広さに自負をもち、子供には「いい教育、いい大学を」と学

歴に対する意識が高い。彼らは、往々にして子供たちの教育に対する出費に躊躇がなく、私立の中高一貫校進学を選び、子供たちはその期待を当たり前のように受け止めて、受験勉強に励むといった環境だった。「わたし」は、そこで子供心にそういった競争的精神から逃避傾向をもち、思いついたままに自己流の遊びをつくっていた。例えば、友達の家に行った帰り道に、一人で自転車に乗って自分の家と反対方向にある道をただがむしゃらに漕ぎ続け、意図的に迷子になること。朝自習前の賑やかな教室で聞こえてくる音を、全て紙に書き写すこと。仲の良い友達数人集めて、物語も意味もない演劇のようなものを作ることであった。「わたし」はそれぞれの遊びの最中、今いる世界から飛躍し、別のある種恍惚感の溢れた世界に陶醉しているようだった。その中では、自由に泳ぐことができた。

「わたし」の家には、ベランダという名の「庭」がある。母は、近所の他のベランダと比較して、うちのが少しだけ広いことが自慢に思っているようであった。コンクリートで固められた細長く小さなその庭で、両親は「ガーデニング」をするのが好きだった。「わたし」が子供の頃は、日曜日に決まって駅前のホームセンターへ行き、両親は新しい植物の種、花やハーブの苗を買って来ては、ベランダのプランターに植え、コレクションを1つずつ増やしていくことを楽しんでいた。

「わたし」は子供の頃、いつも何かを飼っていた。兄の影響で、公園でカマキリやカブトムシやクワガタ、鈴虫を捕まえたり、河原でザリガニ、サワガニ、ミドリ亀、メダカを捕まえたり、或いはどこかからもらって来たりした。父の部屋の小さなベランダには、いろんな大きさの透明のプラスチックの入れ物と、それらのための青や蛍光緑色のプラスチックの蓋が重ねられて、たくさん置いてあった。何かを捕まえる度に、そのプラスチックの虫かごの1つに彼らを収めた。小さなプラスチックの入れ物に入れられた彼らを、カゴを持ち上げたりしながら、いろんな角度から観察した。

結局、「わたし」も母に言われるままに小学校4年生から塾に通った。いくつか受験したなかでギリギリある私立女子中高一貫校へと進む切符を手にした。その学校は、当時制服を一新し、校舎の全面建て直しをしたばかりで、何もかもが新しかった。有名大学の進学率と偏差値を上げようと、学校全体で躍起になっている進学校だった。プロテスタント系の学校で、英語教育には特に力を入れていた。生徒の3割は、ついこのあいだ帰国したばかりといったような帰国子女たちで、彼らは日常的に英語と日本語を混ぜた言語で話していた。「わたし」は、その中で初端から英語が一番苦手な教科になっていた。苦手意識を乗り越えて、ある種の憎しみのような感情を持っていた。なぜ半ば強制的に英語を学ばなければならないのだろうか、と、一人憤慨していた。周りの友達たちは、「わたし」を諭した。皆同じ服を着て、似たような場所から通ってきていたが、生徒間にはどれだけ周りに影響力があるかという権力格差があり、たわいも無い理由でのいじめが多発していた。

中学2年生の期末試験期間中のある日。自分の部屋で、目の前の教科書を必死で読み込んでいると、リビングルームから母親の悲鳴のような声が聞こえてきた。不審に思って近寄ると、テレビに、ワールドトレードセンターが音もなく煙を出しながらゆっくりと崩れていく映像が映っていた。母はただただ涙を流していた。教科書や学校の中の世界が、夢のように思えてきていた。

母と「わたし」は、その6年後再びマンハッタンの住んでいた場所を訪れた。「わたし」たちが住んでいた7階の角部屋の壁の一部は、まだ板で補強されていたままだった。

2018年2月、アメリカにて4ヶ月間のホームムービーのアーカイブ調査をする機会を得た「わたし」は、アメリカのビザの取得方法を調べていた。出生時に取得したアメリカ国籍は、20歳の時に日本国籍を選択したと同時に破棄されたものと思っていた。しかし、よくよく調べていく中で、米国籍を破棄するためには、米政府への支払いが必要であると知った。もしやと思い、乳児の頃の「わたし」の写真がついたパスポートをアメリカ大使館へ持っていく。

そこには、開館時間前から100人ほどのビザ取得希望者の長蛇の列ができていた。「わたし」は、その脇を通過して、ほとんど人のいない米国人用窓口へと進む。恐るおそる30年ほどの前のパスポートを出すと、「担当官が来るので少々お待ちください」と言われた。面接があると聞いていたので、どんなものだろうと少し緊張しながら待つこと2分後。名前を呼ばれて窓口に行くと、大きな身体 of 白人男性が窓口に座っていた。「わたし」の提出した書類を遠目に眺めながら、「Hi, How's it going? (調子どう?)」といいかにも親しげにリラックスしながら聞き、反射的に「わたし」は笑顔で「good」とだけ答えた。先ほどの日系担当官と雰囲気も対応方法も全く違ったことに面を食らった。彼はすぐに、「オッケー、もういいよ。家に書類が届くから待っていてね。」と言って奥へ消えた。面接は終わった。2週間後、自宅に真新しいアメリカパスポートが届いた。そこには、砂漠地帯や鷹のイラストと共に現在の「わたし」の写真が載っていた。こうして「わたし」はあっさりとアメリカ人となったのだ。いや、このパスポートをもらう前から、生まれた瞬間から、ずっとアメリカ人だったのではないか。しかし、日本の法律上、このパスポートが有効なのは「わたし」が日本の領土を出た時であり、日本国内では日本人でしかない。どこか他人事のような国籍は、「わたし」の中に当事者として表と裏、内と外、東と西、近さと遠さ、現在と過去という2つの対立する3次元空間を刻む。

1.3 (「わたし」のなかの)ウィリマンについて

ニナ・ウィリマンのスイス人の両親は、70年代に「社会的離脱者」¹であった。自給自足の自然派生活を試行するため、70年代後半にスイス・ルツェルン州のアルプス山脈に程近い平原の村トリーンゲン(Triengen)に引っ越し、広大な敷地に自らの手で無農薬の畑を耕し、動物たちの小屋や自分達の家を建てていった²。また、週末は育った野菜を父親が街まで売りへ行き生計を立て、2人の子供を育てた。「わたし」よりも6年早く1982年に生まれたウィリマンと彼女の兄である。当時は、まだ有機畜産や有機農法は非常に珍しく、両親は村の人々からは常に変わり者扱いを受けていたようだ。

その広い農園の全ての農作物や動物たちの世話を両親だけでは見られなかったため、よそから働き手を雇っていた。ウィリマンの幼少時代である80年代は、ポルトガルから来た男性が住み込みで働いていた。彼は、ドイツ語が話せなかったそうだが、ウィリマンや彼女の兄とすぐに仲良くなり、造った言語でコミュニケーションをとった。当時の彼女にとって、彼は憧れの存在であり、彼が畑を耕す時はよくウィリマンも後ろをついていきながら、耕す真似をして遊んでいたようだ。ウィリマンは、現在でも度々彼について思い出す。彼が外国人であること自体は特に気に留めてなかったそうだが³、一方で当時のウィリマンにとって地元の村人たちの方が、よっぽど「よそもの」だと感じていたと話す。その後も、彼女の家には入れ替わりで様々な国から働き手が住み込みで訪れ、彼女の幼少期はイタリア、ポルトガル、スペインから、90年代になると紛争を避け旧ユーゴスラビアから、その後は、近東やアフリカ諸国からの難民や、東欧、旧東ドイツからの労働者、世界中からの移住者というように、時とともに彼らの出身国は移り変わっていった⁴。

彼女の住んでいたトリーンゲンはカトリック教会が強く、人々は保守的な思想をもっていた。村人から変わり者扱いを受ける両親の影響で、彼女も学校の同級生たちから変わり者扱いを受け、周りから浮いていたと話す。そのため、小学校卒業後、村から出ていくことを両親に懇願したそう。中学では、音楽に興味がわき、フルートやトロンボーン、ギターの演奏に夢中になった。学校では、ひたすら楽器練習に明け暮れたそうだが、ある教師の指導が理由で、それらを全て辞めざるを得なくなってしまった。彼女は、芸術系高校に進学し、「オ

¹ ウィリマン本人による「drop-outs」という表現より引用。

² ウィリマンの幼少期は、まだ家作りが途中であり、床はしばらく土を踏み固めただけの状態のままだったそう。

³ ウィリマンの家の畑だけではなく、村には他にも多くのポルトガル、イタリア、スペイン、旧ユーゴスラビアからの労働者が当時来ていた。

⁴ 2018年、シリアから働き手を最後に外から人を雇うことはなくなった。現在では繁忙期を除き、主に父親だけで畑や動物の世話をできる限り行っている。2020年は、ウィリマンも週に1、2度実家へ戻り、父親の仕事の手伝いをした。

ルタナティブ」⁵とよぶコミュニティに属すようになり、自由な生活を送った。周りの友人たちからは、両親が自由な思想をもつことを羨ましがられたという。

ウィリマンは、高校卒業後、1年間スイス国内を年中回り続けるサーカス旅団で働いた。母親の影響で、手を動かすこと、つくることが好きだった彼女は、その後、スイスのビールという街の美術学校に1年間通い、基礎的な造形とデザインの教育を受ける。ビールは、ちょうどスイスの中でもドイツ語圏とフランス語圏の境界線に位置するため、街中ではドイツ語・フランス語の2カ国語が公用語として使われている。彼女は、そこで特にフランス語学習やフランス語圏のスイス人たちとの交友を深めていった。

卒業後、10代後半から長く興味を持っていたコンテンポラリーダンスを専門的に学ぶため、ドイツ・フライブルクの学校で、ダンスや振り付けについて学ぶ。ウィリマンは、自身のドイツ語圏スイスと現地・ドイツのその近すぎる関係性ゆえに、そこで馴染むにはかなり苦労したようだ。

卒業後、彼女はスイス・ビールに戻り、ダンスや振り付けの仕事とレストランの給仕の仕事を並行しながら、しばらく生活が続けた。ビールでは、チリからの2人の移住者と出会い、彼らと劇団 *Trop cher to share* を結成する。1人は、生まれ育ちもチリのコンテンポラリーダンサー。もう1人は、スイスからチリへ移住した父親をもち、チリで生まれるもスイス国籍を持ちチリで育ったスイス系チリ人の映像作家。彼ら3人は、チリにて、スイス系チリ移民やチリの先住民族グループとの共同調査やフィールドワークの経験をもとに、舞台作品を製作・発表し、現在も精力的に活動が続けている。このグループでの活動は、「わたし」との活動以外のウィリマンの主な創作活動の1つである。

その後、数年バーゼルに移り住み、大学で学ぶことを考え、チューリッヒへと移る。チューリッヒ芸術大学大学院の学際研究学科(MA Transdisciplinary)に4年間所属し、コンテンポラリーダンサーや振り付け家、演出家としての活動も続けながら、2018年に卒業。現在も、チューリッヒを拠点に活動が続けている。

彼女がダンサーとして雇われる作品は、何かしらの社会問題を主題としたものが多いそうだ。彼女は、共演者たちや演出家とその作品の内容について、ある一定期間の練習を通して、繰り返し話し合い、そこでえた気づきを共有することが、彼女自身の様々な実践にも生きていると話す。

ウィリマンは、2015年の香港での「わたし」との実践直後、コートジボワールへ飛んだ。彼女はスイス人女性演出家の舞台作品に呼ばれていた。共演者は、ウィリマン以外全員黒人であり、内半分以上はコートジボワール出身の地元のダンサーや役者であった。準備・練習期間の数ヶ月、コートジボワールに滞在し、その後パリとジュネーヴで発表するというスケ

⁵ ウィリマンらが、自身のグループを「オルタナティブ」と呼んでいた。「文化、音楽、アート、文学に関わる活動を行う左派的な考え方をもった集団」と、ウィリマンは話す。

ジュールだった。ウィリマンは、共演者たちとの日常的な会話の中に、絶対に立ち入れない隙間や共有しきれないものがあつたと時折その当時のことを話す。自分が何者かということのを忘れた頃にはいつも、何かしらの外部との接触による些細な出来事によって無理矢理思い出させられるようなことが多かったという。ウィリマン曰く、その演出家は意図的に彼女をメンバー内に加え、口を挟まず彼女の様子を観察していたそうだ。

ウィリマンは、チューリッヒに引っ越して以来、ゲノッセンシャフト Genossenschaft という協同組合による共同運営型アパートに住んでいる。スイス国内でもチューリッヒは、特に多くのゲノッセンシャフトがあり、中でもウィリマンが住むアパートは、とりわけ実験的に新しく建てられた場所である。建物は、ドーナツ型になっており、真ん中は子供たちが遊べる公園がり、その周りには居住者や近隣の子供が通う保育園と幼稚園、映画館や小さな有機食材品店、カフェ、共同オフィススペース、家族用フラットシェアや単身用フラットシェア、共同キッチン、共同洗濯場、DIY 作業スペースや自転車修理スペースなどがある。また、その中に難民・移民人権保護団体や、女性人権保護団体、労働者保護団体など様々な組織の事務所も入っている。共同空間の改修工事の検討や運営方針の確認と修正といった内容のミーティングが、月に一度開かれ、何か特別な事情がない限りは、住人全員が出席する。ウィリマンは、そこで単身用フラットシェアに住んでいる。9人の同居人たちは、LGBTQ・黒人コミュニティ人権活動家、欧州・中東間問題を主に研究するアーティスト/美術教師や1人の赤ん坊、1匹の黒猫がおり、それぞれが互いに生きることに対する様々な考え方を相互に共有しあい、話し合う場ができています。

ウィリマンは、ポリティカル・コレクトを守ることに對して自分自身に非常に厳しい。また、彼女の専門性の影響もあり、その眼差しは発言だけではなく、態度や振る舞いに対しても細かく向けられる。そこには、明確な「正しさ」や「善悪」と基準を設定されているように見える。ときにその強い基準設定が、偏った先入観を生んでいるように見える場合さえあると「わたし」は感じる。彼女自身、白人系ヨーロッパ人という特権的優位性への嫌悪感をもつ一方、チューリッヒと彼女自身が育ったトリーンゲンを比較した際に見えてくる社会的格差の中で揺れている。ともあれ、彼女は今まで歩んできた環境で様々な他者と接していく中で、自身が学んだ知識や思想の演出性に対して自覚することの重要性を知り、随時振り返るように努めている。そうすることで、少しでも能動的な身体を取り戻そうとする。

1.4 「わたし」とウィリマン

ウィリマンと「わたし」は、2015年8月24日から11月30日の約14週間、トランスカルチュラル・コラボレーション(異文化・異分野交流共同プロジェクト)と名付けられたプログラムに参加した。このプログラムは、スイスと香港と中国の5つの芸術大学が組み立て、台湾と日本の芸術大学が参加し、各大学の修士課程の学生を対象としたものであった。美術、音楽、演劇、ダンス、映画、芸術学などそれぞれの芸術分野を学んでいる東アジアやヨーロッパの各地から来た計22人が、チューリッヒで2週間、香港で10週間強、杭州・中国で2週間をともに過ごした。期間中は学際研究に関するいくつかの講義も受け、発表や議論を重ねながら、興味のあるトピックごとに2〜7名の6つのチームに分かれて、国籍・専門分野を超えた表現活動が行われた。

22人の集団は、プログラム当初から賑やかだった。しかし、全員に話しているというよりは、アジア人は、中国語で、欧州組は、それぞれ固まって、分かれて話していた。後で知ったが、ほとんどのメンバーが、アジアあるいは欧州の互いの土地に訪れるのが初めてであり、双方がどのように交流をとるべきか計りかねていた。その中で、ウィリマンはとりわけ「落ち着いた人」という第一印象をもった。唯一の日本人で、知り合いも当然いなかったため、「わたし」は教室で1人みんなの様子を眺めていると、ウィリマンは急に横に座って話しかけてきた。その様子は、「わたし」に関心があったというよりは、他に特に話す相手がいなかったのて来たといった感じであり、2、3言葉を交わすと、素っ気なくどこかへ消えていった。あまり話していないにもかかわらず、分け隔てなく接する人だと感じた。

「わたし」たちは、プログラム全期間を通して、2人で組んで活動を行った。プログラム当初、チューリッヒにて「わたし」が提示した「フォークダンス folkdance」というトピックに対し、ウィリマンが興味を持ったことがチームを組むきっかけであった⁶。東西冷戦の二極構造が崩壊した80年代終盤から90年代に育った2人は、形態や度合いは違えど、幼いうちから複数の言語や文化に、生活を通して接触してきた。フォークダンスというトピックは、グローバルとローカルが様々な局面で重なり合う現代において、身体を通した「文化」の現れとして興味があったが、「わたし」にはまた同時に、現地の人々と単純に一緒に踊っ

⁶ このスイスの「フォークダンス folkdance」を調査する活動は、その後も継続された。調査を通して、2人はそれらのステップが欧州内外のフォークダンスのステップを取ってきて、再構成したものだ気がついた。2017年から2018年にかけて二人は、「Swiss Step Aerobics」という名前の活動を行った。スイス国民の約40パーセントが移民背景を持っていること、そして当時ポピュリズム政党が移民排除運動の気運を高めるためスイスのフォークダンスをナショナルアイデンティティの象徴として利用していたことを背景に、ゆかりのある国のフォークダンス講師をしているスイス人ディアスポラの人々とともに、「今、スイスの《フォークダンス》をつくるとすると、どんな動きになるか？」という問いを考え、スイスの複数の都市の街中で完成したダンスのパブリックレッスンを行っていくという活動をおこなった。

てみたかったという、実直な動機もあった。以後、2 人で Willimann/Arai というユニットとして継続的に活動を行なっている。

2 人とも別々の土地を拠点に生活をしているため、共に表現活動を行う際は基本的にどちらかの土地に一方が赴くか、或いはどちらもある土地に赴く。これまで毎年3ヶ月から長い時は半年以上ともに同じ場に滞在し、活動が続けてきた。その他、別々の土地にいる期間は、次の活動に向けた計画や議論のために、ほぼ毎日連絡を取り合っている。また、2018年には、環境問題への配慮を訴えるグレッタ・トゥーンベリ氏の運動をきっかけに、欧州全体を中心に起こった「Flygskam 飛び恥」が広がり、度重なる長距離フライトの自粛として、インターネットを使った遠隔地間の表現方法の模索も同時にはじめていった。2020年現在は、世界全体で広がる新型コロナウイルスによる移動の自粛要請により、この表現の展開を積極的に行うことで、それぞれが異なる土地いながらにして共に活動を取り組んでいる。

本論文は、この「わたし」とウィリマンを主な登場人物として展開していく物語であり、芸術実践論である。

なお、本論文に登場するウィリマンをはじめとする多くの人物は、実名で登場するが、いずれの場合も本人の許諾の元、行われている。また、個人情報に関わる記述に関しては、全て本人が確認の上、公開をしている。



図 1-1 ウィリマンと初めて撮影した Willimann/Arai のセルフポートレート

互いに2人組として、どのような立ち振る舞いをするべきか思考中であり、まだぎこちない。(撮影: 2015年10月8日 / Willimann/Arai)

第 2 章

研究という芸術実践

2.1 序文

第一章にて本論文の「主体」について述べた上で、ここでは研究の視座、方法、構成を述べる。

2.2 研究の視座 ― 芸術実践と表現活動

ここでは、本論を通して語られる芸術実践と表現活動について述べることで、私のもつ研究の視座を示したい。

目的を優先しないということ

4年間美術大学で版画を学んだ「わたし」は、版を重ねるという実践を通して、レイヤーや層が重なり合っている状態そのものとしての複層性に興味をもった。そこで、より幅広いメディアで表現している人々と出会うため、2012年に別の芸術大学の修士課程に入学する。入学してしばらくは、点描画のように穴で風景をトレースした透明のビニールシートとその奥にある風景を重ねて撮影するという写真作品群を作っていた。ある時、その内の1枚を見た旧友から、「自分の一番古い記憶、昔見た風景を思い出した」と伝えられた。写真で写された風景は、特に珍しくない東京の住宅街の一角であったが、点描のされたシートが奥の風景をぼやかし、旧友の中にあったイメージを喚起させたようだった。「わたし」は、その一言により、レイヤーは、自ら作り出さなくとも、自分の外部に既に存在すると気づき、それから「レイヤー」を探すという実践に移っていった。

「わたし」はオブジェとしての「もの」を作ることから一旦距離をとり、アトリエの外を散策することに熱中した。まずは毎日通っていた上野桜木から、そして京都市西陣、群馬県みなかみ町やウィーンと訪れたそれぞれの街を歩き見てまわると、そこに住む人々と出会い、彼らの話を聞いたり話したりする中、その土地々にある期間どっぴりと浸かっていった。

1989年から1993年頃にかけて、美術界では非欧米作家や女性作家による文化的多元主義 multiculturalism に基づいた活動がさかんになった⁷。この傾向に対して、批評家ハル・フォスターは、『The Return of the Real リアルなものの帰還』（1996）のなかで、フィールドワークの真似事あるいは準文化人類学 quasi-anthropology 的アプローチによるアーティストの偽善を指摘している。それは、作家本人が誠実に取り組んだとしても、美術館などから依頼された仕事としてフィールドワークを行い、美術館でその結果を見せることで、結局作家のみが利益や名誉を得て、その活動が「調査」した土地に対しては何の貢献にもなっていないという内容であった。確かに、表現活動に対してある切り取り方をして抜き出した場合、そこには、「見るもの」/「見られるもの」、「与えるもの」/「与えられるもの」といった、一方通行で交換の原理とは異なる関係性が浮かび上がる。そして、ある種の権力関係や搾取の関係性が見て取れることもある。しかし、多くの表現活動は、何かの貢献を目的として行われているものではないため、偽善という言葉にはズレを感じる。そもそも表現活動とは、

⁷ 松井みどり 『“芸術”が終わった後の“アート”』 朝日出版社、2002年、118頁。

目的志向型の活動であり、何かを「達成すること」「獲得すること」「入手すること」を目指した営みなのだろうか？

表現活動

私は、緩やかにつながった個々の活動の寄せ集まりを内包するものが、芸術実践だと考える。それらの活動を、私は「表現活動」とよびたい。表現活動とは、何かを希求する心を表に現す試みであり、一つのかたちに定まった静的なモノというよりもむしろ、常に動きつづけるコト、行為そのもののものだ。1つの定められた最終地点に向かって直線的にすすむ「仕事」というよりも、目的を優先することない、どちらかというと「遊び」に近い。明確な目的に向かって進むことを意識的に避けているのではなく、表現活動の現場では、予期しない事態がたびたび起こるため、初めから終わりまですべてが準備周到に計画通り進むことはほとんど不可能である。主体はその都度反応し、状況に応じた瞬発力が求められるため、どうしても直観に従わざるをえないのである。その不意をつくのは、表現活動を行う主体のもつ「自己」とは異質な他者の存在である。

ここで、アトリエなど室内で行われる絵画表現活動を事例に、自己とは異質な他者の存在を見ていきたい。例えば、いつも通り紙に塗った絵の具が、その日の湿度と温度といった天候の関係で、前日よりも早く乾いてしまい、上から別の色を重ねて微妙な滲みをつくろうとしていた計画ができなくなってしまったとする。それに対して、行為主体は、描き進めるために、いつもよりも多めに筆に水分を含ませたり、紙を予め少し湿らせてみたりなど、新たな手立てを取るであろう。

このように、表現活動の中には絶えず「他者」とのかかわり合いが起きており、それに主体が応えようとすることによって、新たな気づきをよび、次の行為が生まれてくる。表現活動とは、常に主体の「自己」と「他者」との気づきと応答の積み重ねによって成り立っている。そして、それは結果的に有機的に変化していく動体となっているはずである。

表現活動における「自己」とは異質な他者の存在

「わたし」は、現場に訪れては帰り、また訪れてという活動を繰り返していく中で自ずと、そこで生じた「わたし」と出会った他者との関係性、あるいは「わたし」がその土地に足を運ぶ前から既にある文脈の中でのつながりを考えはじめた。それは、他者とのさまざまな交流の中でえた「生きられた経験」を表現におこそうとする際に、避けては通れない道であり、また時にそれは落とし穴のようにもなった。そこに一度はまると、抜け出すまでその穴からでしか世界を見ることができず、せっかく現場で生身の他者との間でえた喜びや葛藤といった豊かさと複雑さが抜け落ちてしまうからだ。穴から見える世界だけを語るのは、あまりに現実の世界から離れすぎており、また、経験した出来事だけに集中しすぎるとそれをわざわざ表象する必要性を見失う。芸術家という役割として、グローバル化した資本主義（芸術）世界におけるアクター、あるいは植民地時代の遺産の継承者として、「わたし」は、落とし穴ではない足元に広がる文脈の上に立ったまま、その時々豊かで複雑な出来事に全身の

感覚をフル稼働して応答するにはどうすればいいのか、頭を悩ませる。

美術評論家の松井みどり(2002)によると、90年代初頭に美術家たちの関心を最も捉えていたのは、パレスチナ系アメリカ人のエドワード・サイードが著書『オリエンタリズム』(1978)で実践したような「他者性」の脱構築だった⁸。サイードは、18世紀以来、ヨーロッパの列強が非ヨーロッパの地域を「支配し、再構成し、統治するために作った」、「オリエン」⁹という地域についての言及を通して、ヨーロッパ人の中にある虚構を描き出し、その先に二項対立的構図の間にある境界線を取り除こうとした⁹。その後、「オリエンタリズム」の概念がポストコロニアル研究に発展していったのは周知のとおりである。美術界では80年代から、それまで周縁とされてきた女性や非欧米人の作家たちが美術館等の大きな展覧会で取り上げられるようになっていった。そこで、彼ら自身の彼ら自身による「他者」として構築に対する異議やその「被害」の状況を叫ぶような表現がでてきた。こうした作品群に対して松井(2002)は、93年のホイットニー・ビエンナーレを例に、感覚的な喜びやユーモアをもつ表現がほとんどなかったと激しい批判が寄せられ、白人から押しつけられたステレオタイプを非白人が模倣することで脱構築するといった、メッセージも表現も画一的なものが多く閉塞感があつたと綴った¹⁰。

表現活動が社会制度や体制への異議申し立てや変化を訴えることを目的としたアクティビズムと限りなく近くなっていった場合、訴えそのものに重きがおかれ、喜びやユーモアや意味の複層性は邪魔なものとして優先的に排除されるということがある。しかし逆に、そうして構築された表現は、本当の意味では他者に伝わらなくなる可能性もでてくる。例えば、メッセージが単純で見るものを思考停止にさせたり、見るものが本当はないはずの裏の意味を読み取ろうとしたりする、といった場合である。しかし、実践者が、実際に自身の経験をもって抱いた問題意識であれば、そこに現れた表現は本当に画一的な表象になりうるのだろうか？

ここで改めて、表現活動のもつ性質を考察する。表現活動とは本来、作品と制作という様に、どこからどこまでが結果か、過程か、線を引くことは非常に難しい。例えば、実践者自身の経験をもとに抱いた何かしらの問題意識が表象される時、その動機となった経験と表象を生み出す過程は地続きであるはずだ。また、それは個々の活動や個々の発表時によって、その都度変わってくるものだろう。表現活動の過程全体を発表されることもあれば、ある一部分を切り取って発表される場合もありうる。つまり、表現活動の中身は、外側からではなく、その表現活動を行った主体自らが内側から向き合わなければ、描き出されないの

⁸ 松井みどり、前掲書（注釈7）、125頁。

⁹ 大橋洋一 「つらぬいた『異邦の異邦人』エドワード・サイード氏を懐む」『朝日新聞（夕刊）』2003年9月29日。および、有満保江 「文学にみる他者性—日本とオーストラリアの場合」『アメリカ太平洋研究』第14号、2014年3月、61-78頁。

¹⁰ 松井みどり、前掲書（注釈7）、125-127頁。

はないだろうか。

次の節では、この疑問に対する応答として、「わたし」たちが実践を通して行ってきた方法について述べる。

2.3 研究の方法

2.3.1 この研究の方法

私は、表現活動を内包する芸術実践のもつ創造性の在り方を描き出すために、自身の表現活動を事例とし、「他者とかかわり合いが、具体的にどのようなものであったのか」、「その時主体の中には何が起こっていたのか」、そして「主体の周囲ではどのような変化が見られたのか」、といった個々の体験を緻密な記述と省察を繰り返し、またそうしている自己さえも対象化しつつ得られた知を、芸術実践の歴史に書き込み、歴史を変えるという、芸術実践を試みる。

この方法論は、「わたし」がウィリマンとともに表現活動を行っていく中で、対話・撮影・ドローイング・記述といった複数のメディアを通して、自身の気づきを共有、省察していくことで、次に表現活動を進めるために必要な実践の1つと考え、意識的に行ってきたものである。つまり、本論文の記述するための方法論は、その中の1つである自分の言葉を書くということを通して行う手法である。

また、同時に「わたし」たちは、この方法論を進めていく中で、80・90年代以降民族誌、文化人類学、社会学を中心とした学術の世界の中で議論の対象となっている新しい研究方法の1つ・オートエスノグラフィーおよびその周りの議論について知り、「わたし」たちの論題の1つとなっていく。なぜなら、それは自分たち見出していった方法論がもつ立場や可能性に非常に近いと考えたからである。次の節では、このオートエスノグラフィーの歴史、および本論文との関連について述べる。

2.3.2 オートエスノグラフィー

オートエスノグラフィーは、自己エスノグラフィー、あるいは自伝的民族誌と邦訳できるだろう。従来の証拠の客観的・中立的な解釈を重要視する研究方法に対して生まれた、「調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する手法」¹¹である。この再帰的 reflexive・recursive とは、書き手自身の置かれてい

¹¹ 井本由紀 「オートエスノグラフィー - 調査者が自己を調査する-」 (藤田結子、北村文 『現代エ

る立場を社会的・文化的諸側面から振り返ること¹²であり、また「実際に体験した現場に生々しく立ち戻り、経験された感情を生き直すこと」¹³である。

オートエスノグラフィーの歴史

実証主義に依拠した社会学者たちは、「真理は存在する」ことを前提に、科学は絶対的普遍性と客観性をもったものであると信じ、観察から推論する際に筆者自身のもつ意見の偏りといったバイアスをできるだけ排除しようとしてきた。民族誌ももともと実証主義のもと展開し、調査者の主観を取り除き、「事実」を「客観的に」記録しつづけねばならないとされてきた¹⁴。その民族誌の原型を確立したのが、『西大西洋の遠洋航海者』(1922)を著したブロニスラフ・マリノフスキーである。彼によって、フィールドワークが人類学の主要な方法として位置付けられた¹⁵。その後、多くの欧米白人男性研究者によってその発展をとげてきた。しかし、そのマリノフスキーの死後、研究報告としてのノートとは別に、彼自身によって書かれた研究過程自体についての告白体の回想録『A Diary in the Strict Sense of the Term 厳密な意味での日記』¹⁶(1967) が、夫人の手によって出版された。その内容は当時の文化人類学者に衝撃を与え、理性を体現していたマリノフスキーのような西洋人男性調査者の絶対的な立場を揺らがした¹⁷。この本を読んだ私は、以下のように手記を書いていた。

そこに映し出されていたマリノフスキーは、ある種の「俗っぽさ」すらも感じられるほどの、あまりに生身で繊細で脆弱な人間の姿であった。それは、一読者である私自身の活動先で感じた自分自身や相手への葛藤など感情を呼び起こさせるものであり、マリノフスキーの経験でありながらも私に自身の経験をより戻させるような読書経験を促した。もはや読者というよりは、著者の活動の参加者になっていったともいえる。

70年代に入ると、ポスト構造主義やポストモダンといった大きな思想的潮流の中で、伝統的なエスノグラフィーに対し疑問が投げかけられるようになる¹⁸。オートエスノグラフィー

スノグラフィー：新しいフィールドワークの理論と実践』、2013年。)、104頁。

¹² 同書(注釈11)。

¹³ 岡原正幸 「喘息児としての私—感情を生きもどすオートエスノグラフィー」 (岡原正幸、小倉康嗣、澤田唯人、宮下阿子 『感情を生きる：パフォーマティブ社会学へ』 東京：慶應義塾大学三田哲学会、2014年)、78頁。

¹⁴ 藤田結子 「エスノグラフィー」(藤田結子、北村文編 『現代エスノグラフィー：新しいフィールドワークの理論と実践』 新曜社、2013年。)、23頁。

¹⁵ 同書(注釈14)、21頁。

¹⁶ マリノフスキー、ブロニスラフ 『マリノフスキー日記』 谷口佳子訳、平凡社、1987年。

¹⁷ 井本由紀、前掲書(注釈11)、106頁。

¹⁸ 藤田結子、前掲書(注釈14)、18-23頁。および、ピーター・ソントン 「ポスト構造主義とポストモダニズム」 (前掲書<注釈14>)、46-53頁。)

もその流れの中で展開していった。用語そのものの始まりは、1975年に人類学者のハイダーが、ニューギニア高地人ダニの人々による自分たちの文化についての説明を、ダニのオートエスノグラフィーとして言及したものであったという¹⁹。その後、1977年にゴールドシュミットや1979年にハヤノらは、人類学者が「自分自身」を文化的レベルで研究することと定義している²⁰。この展開は、それまで調査者は主に欧米の白人研究者だったのが、この時代になると、女性、下層階級の人々、特定の民族的・人種的集団、第三・第四世界出身者などそれまで調査される側だったものが調査する側にもなるようになり²¹、研究者全体の構成が変化したことも要因の1つだと考えられている。また、先に述べたサイードの著書『オリエンタリズム』(1978)以後、ポストコロニアリズムの思想によって、「書く・書かれる」という権力構造に光が当てられ、「今ある表象はいかに歪んだものであるか、偏ったものであるか」が明らかにされていった²²。つまり、事実というものは、結局は何かの一面でしかなく、常に誰かが解釈し、意味づけたものであり、解釈する者は、長い間「歴史上の覇者」であった。

80年代に入ると、『文化を書く』(Clifford and Marcus (eds.) 1986)や『文化批評としての人類学』(Marcus and Fischer 1986)によって、民族誌の権力や客観性への批判が巻き起こり、調査者自身の関わりと位置づけを意識的に省察した実験的な民族誌が記されるようになっていった²³。

現在では、オートエスノグラフィーは人類学や民族誌、社会学の分野のみならず、教育学さらに経営学といった分野でも、教師が生徒に対する理解を深めるため、また現場の組織運営の効率化を図るためなど多岐に汎用されてきている。欧米では、オートエスノグラフィーの手法で書かれた研究だけではなく、オートエスノグラフィーのもつ可能性や限界、倫理的問題などオートエスノグラフィーそのものの研究も進められてきている²⁴。日本では、まだあまり浸透してはいない手法ではあるものの、近年少しずつ増えてきていると言っていいだろう。井本由紀は、1995年に岡原正幸によって病を患う「私」と家族の間に共有される感情について書かれた『家族と感情の自伝―喘息児としての「私」』²⁵を、オートエスノグ

¹⁹ 川口幸大 「東北の関西人:自己／他者認識についてのオートエスノグラフィ」『文化人類学』 84巻、2号、2019年9月、153頁。

²⁰ エリス、キャロリン、アーサー・ボクナー 「自己エスノグラフィー・個人語り・再帰性：研究対象としての研究者」(デンジン、ノーマン・K、イヴォンナ・S・リンカン 『質的研究ハンドブック質的研究資料の収集と解釈』3巻、平山満義、大谷尚、伊藤勇訳、京都：北大路書房、2006年)、136頁。

²¹ エリス、キャロリン、アーサー・ボクナー 、同書(注釈20)、138頁。

²² 北村文 「表象の政治」(藤田結子、北村文、『現代エスノグラフィー：新しいフィールドワークの理論と実践』、2013年、)

²³ 川口幸大、前掲書(注釈19)、154頁。

²⁴ 近年は日本においても、そういった研究も行われている。(参照：沼崎一郎 「オートエスノグラフィーの可能性：研究と生活の人類学的往復」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』 2018年。堀口佐知子 「越境する人類学者による回顧的オートエスノグラフィー・ブログの可能性」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』2018年。他。)

²⁵ 岡原正幸 「家族と感情の自伝―喘息児としての『私』」(大村英昭、井上真理子編『ファミリーズム

ラフィーとして紹介している²⁶。最近では、石原真衣による曾祖母・祖母・母・自身の4世代のファミリーヒストリーをもとに描いた「サイレント・アイヌ」についての研究(石原2018)²⁷や、関西人である自身が長く東北に住んでいる経験をもとに国内の内なる「異なり」と自己/他者認識を重ねて描かれた川口幸大による研究(川口2019)²⁸などがある。

いずれのオートエスノグラフィーの実践も、まず著者自身に、自己についてのより深い理解を促し、さらに他者に対する理解が生む²⁹。しかし、意義はそれだけではなく、アーサー・ボクナーによると、「何かと戦いながら錯綜した状況を刻々と生きる人間の姿」が示されることは、「読者の経験や彼らが知っている他者の人生について、何事かを訴えかけ」³⁰、混沌、分裂、分断、周縁化、矛盾といったものの影響で、意味付けや価値観に疑いをいだいてしまうような一瞬に、生の連続性や一貫性を感じさせて、その統合性を守ったり回復したりする³¹、という。それは、オートエスノグラフィーが、読者へのエンパワメントという形で、ある種の普遍性を獲得することでもあるだろう。

現象/経験を書くということ

オートエスノグラフィーは、その実践が始められて50年ほど経とうとしており、前述のような広がりが見られる一方で、未だ従来の学術世界との大きな摩擦がある。それは、真実性や信頼性、一般化可能性といったものに対するそれぞれの立場からの捉え方の違いの現れであるといえるだろう。ボクナーは、これらの議論に対して、自身の研究対象であるコミュニケーションを例に挙げながら、「コミュニケーションとは、それを研究する人間のダイナミックな活動をも含んだ、一連の相互行為からなる過程」だとし、「人間のコミュニケーションを研究するためにコミュニケーションを行う者として、私たちは研究対象の内側にいる」³²という。私も話を聞くという実践を通して、自身が既に実践の対象である相手の内側に入ってしまうということに気がついていった。また、同時に私たちは、ある現象がまさに「わたし」たち自身に起こっている最中は、自分自身の状態に気が付くことができなく、またそういった現象を他者が気づくことも、難しいと気づく。以下に、それらのことを気づかせた1つの例を記す。

私は、2012年から東京・上野桜木で、そこに長く住む人々に本人がこの地域で体験した昔話を尋ね歩く実践をつづけている中で、2015年12月に香川さん(79)という女性と出会った。そこで体験したことを、当時の手記と交えて以下のように私は記述した。

 の再発見』 世界思想社、1995年)

²⁶ 井本由紀、前掲書(注釈11)、108頁。

²⁷ 石原真衣 「〈沈黙〉のオートエスノグラフィー：『サイレント・アイヌ』におけるサバルタン化のプロセスとポストコロニアル状況」 北海道大学大学院文学部博士論文、2018年。

²⁸ 川口幸大、前掲書(注釈19)、153頁。

²⁹ エリス、キャロリン、アーサー・ボクナー、前掲書(注釈20)、135頁。

³⁰ 同書(注釈20)、151頁。

³¹ 同書(注釈20)、142頁。

³² 同書(注釈20)、141頁。

「鴨をね 鴨をいただいたんすよ」

縁側で家族で鴨を囲んでいる。姉が楽しげにいう。「あーそうだ！ この鴨を持ってね先生のところ行ってね 2年生になれるか聞いてこよ。」家族はみんな驚いて、笑っていた。が、徐々に思い直して、やってみようと言いつけている。みんな、小学校に上がった途端胸膜炎で学校を1年やすまざるえなくなり、進級が危うい自分のことを心配しながら話してが、わたしだけポカンとしながらその様子を眺めていた。

鴨を抱え、夕陽を浴びながら、兄弟たちや母親と担任の先生のところへ向かう道。確かに死んでいるのに静かに眠っているように生温かい鴨の体の温もり、ずっしりとした重みや羽の質感、夕暮れ時の少し湿気の含んだ冷んやりとした風と頬に当たるオレンジ色の夕陽を肌を感じる。舗装されていない道の凹凸が、薄い靴底から足裏に伝わりながらゆっくりと一步一步進んでいく。

隣で関さんが豪快に笑っている。目の前の香川さんもそれにつられて笑っている。「わたし」は、関さんの雑貨家の奥に再び座っている。さっきまで抱えていた鴨はもういないし、夕焼けの風景もない。でも、確かに自分の手元に、鴨の感触や陽の光を温かさが残っている。「『鴨で2年生になったんだよ』って言ってちゃってね。」繰り返し兄弟の物真似をしながら笑う香川さんを「わたし」は見ながら、考える。「わたし」は確かに彼女の中にいた。さっき見ていた風景は当時の香川さんが見ていた風景だったのだ。それも自ら入ろうとしたのではなく、気がつかないうちに入っていた。そして、気がつかないうちに戻ってきていたので、きっと「わたし」は誰かに投げ入れられたのだろうと思った。

「わたし」は香川さんの昔話を聞くことで、話者である香川さんの中に「わたし」の丸ごと全部が、あるいは、「わたし」の中に話をしている香川さんが、入ってしまった。そして、当時の香川さんの身体を借りて、語れている場全体の様子を見ながら、その場の匂いや温度、湿度などを目、鼻、肌といった全身の感覚をつかって、語られている状況を感じとった。それにより、それまで「わたし」にとって、神社仏閣や墓地といった何年も蓄積して眠っている物語だった上野桜木が、そこにかつてあった生き生きとした人間味溢れる生活の物語として「わたし」の中で蘇った。それは、香川さんの一部と「わたし」が重なりあった体験だった。この体験を通し、「わたし」は自分自身と上野桜木の長い歴史の一部につながりを感じ、それまで意識せず通り過ぎていた現在の上野桜木も身近に感じることができ、いまもそこにある様々な歴史や人の生きている重なり合いに気づくきっかけをえた。

私は、相手との重なり合いの現象が私自身に起こっている時、どこからそれが始まり、どこで終わったのかははっきりと確認できなかった。それは、その現象が主体にまさに起こっている最中には、主体は自身の状態を気づくことができないからである。さらに、ノーマン・K・デンジンとイヴィンナ・S・リンカンによれば、「私たちは、生きられた経験を直接に研究することはできない。なぜなら言語、発話、そして談話のシステムが、まさに私たちが記述しようとするその経験を、媒介し定義するからである。私たちは経験の表象を研究するのであって、経験そのものを研究するのではない。」³³という。つまり、厳密には、経験を「そのまま」自分自身で認めることも、描き出す事はできない。それを踏まえた上で、オートエスノグラフィーを実践する私(たち)がやるべき、あるいはできることは、経験についての自身の「意味づけ」を表現していくことである³⁴。そのために、私(たち)は体験したことを自身によって、つぶさに書き起こし続けるだけではなく、その記述をたびたび振り返り考察し、構成し直し、さらに記述を進めていく必要があるだろう。

以上のことを踏まえて今回の論文では、表現活動を実践する主体の中で起こっている現象を語るために、本来不可分なはずの自己を致し方なく分け、2つの配役をつくらざるをえなかった。つまり、現象とともにいる主体は外から見なければ、表象できないと感じたからである。その配役とは、1つは、表現活動を行う主体としての《「わたし」》であり、もう1つは、行なった表現活動とその渦中の「わたし」について考察をし、記述する主体としての《私》である。

2.3.3 この研究の方法とオートエスノグラフィー

以上のようにオートエスノグラフィーの歴史と特徴を踏まえた上で、ここでは、自身の研究とオートエスノグラフィーの異なる点と重なる点について述べたい。

まず違いは、もともと何を志向した上での方法なのかという点である。

オートエスノグラフィーはこれまで述べてきた通り、もともと伝統的なエスノグラフィー/民族誌から派生したものである。伝統的なエスノグラフィーとは、他の民族を見つめ、その民族について記述を行うものであり、オートエスノグラフィーはその態度に対する疑問と応答によって展開している。一方、自身の研究は、他の民族について描こうとしているわけではなく、芸術を行う実践者自身がその実践を通してえた芸術実践のあり方を、自身の中から探るために記述している。

³³ デンジン、ノーマン・K、イヴォンナ・S・リンカン 「経験的資料の収集・分析法」第1部(同書<注釈20>)、33頁。

³⁴ 同書(注釈20)、151頁。

しかし一方で、自身の研究における記述の内容においては、実践の中で行ったこと、出会った環境の記録やそこでえた自身の感情変化や気づきであり、自己を振り返ろうとする記述に対する態度は、オートエスノグラフィーと重なる部分が多いと考える。また、私(たち)も、実践を通して、客観的な立場というものは存在せず、個がもつ主観性から逃れようがないという考えをもつため、その点もオートエスノグラフィーのとり立脚点と重なると考える。

オートエスノグラフィーは、ここまで述べてきた通り、まだ新しい研究手法なため、概念がはっきりと定まっていけないと言える。そして、私はむしろ明確に定めないことに意義をもつものだと考える。

一方で私が本論文で使用している研究手法は、私の表現活動を芸術論として論じるための方法として、ここまでの実践の中で内発的に見出してきた方法である。つまり、自分の芸術論を展開するためにどうしても取らざるを得なかった「認識」と「記述」の型が、自分(たち)自身の活動を自分で省察するという方法だったのだ。

私は、自身がここでとってきた研究手法をオートエスノグラフィーかどうか見定める必要は、本論文にないと思う。むしろ、オートエスノグラフィーの裾野を広げようとする研究者に対し、この論文を通して何かしらの新たな手法やその可能性を見出すきっかけを与えることを願う。

2.4 論文の構成 — 「もう1つ」の芸術実践の在り方へ

本論文は、次のような流れで展開する。まず第3章、4章、5章、6章では、表現活動の中身を探るために、Willimann/Araiの表現活動から香港、群馬県中之条、台湾、スイス・チューリッヒ、東京・上野で行った4つの活動を事例として取り上げる。各章では、それぞれの活動地における文脈の中で、活動の対象である相手とのかかわり合いを通し、表現活動を行う主体である「わたし」の中に生じた体験が記される。また、同時に活動の共同実践者や参加者に起こったことを述べていく。また、3章から7章の各章には『「わたし」たちの気づきの交換録』と題した「わたし」が表現活動の中で書いていった記録が挟まれる。第3章、4章、6章、7章では、概要の直後に配置したが、取り上げた活動の内容の関係上、5章のみ章の最後にもってきた。

第7章では、3、4、5、6章で述べた表現活動の中身をさらに深く掘り下げていくために、Willimann/Araiの表現活動に通底する基本的態度としての表現とその意味付けの考察を行う。そこから、その表現が、3、4、5、6章で述べた活動において、どのような影響を与えていたのかについて検討する。

第8章では、それまでの議論をもとに、表現活動の中身の体験について、改めてまとめて

述べることで、表現活動のもつ意義や価値を見出し、さらにその表現活動を内包する芸術実践の在り方を描き出すことを試みる。

第9章では、以上の議論を踏まえた上で、今回おこなった論文を執筆するという芸術実践を通して、行なった表現活動について考察し、記述している主体としての私の中におこったこと、そして「わたし」と私の関係性を述べ、この論文の締めとする。

近年、表現活動の設定や構造、主体の多様化により、従来の芸術実践のもつ創造性の在り方に対する見直しが迫られているように感じる。全体を把握しようと試みる美術評論家たちは、動機も意図も異なる個々の表現活動に枠を与え、それらを分けて理解しようと、新たにつくった枠の名称を絶えず増やし続ける³⁵一方、美学的評価や価値判断の限界を露わになっている³⁶のが現状ではないだろうか。私は、この状況を変えるべく、表現活動を外から批評する側と実践する側の〈見る・見られる〉の構造を超えて、他の誰でもない表現活動を行う主体が、自分自身の経験や知を通して培った芸術実践の意義や価値をふくめた在り方を、他者にも知覚可能にする必要があると考える。そうすることによって、その在り方は更新されていくものなのだろう。本論文は、その1つの取り組みとして行われる実践である。また、それがさらには芸術実践を含めた学術世界や「他者」そして社会に向き合う新たな態度の提示となることを願う。

2.5 本章までにでてきた用語

本章ででてきた用語の意味をまとめる。

表現活動とは、何かを希求する心を表に現す試みであり、1つの形に定まった静的なモノというよりもむしろ、明確な目標をもたず常に動きつづけるコト、行為そのもの。活動を行う主体のもつ「自己」とは異質な「他者」とのかかわり合い、気づきと応答の積み重ねによって、時に本来の意図を超えて有機的に変化していく動体である。

芸術実践とは、緩やかにつながった個々の表現活動の寄せ集まりを含むもの。

³⁵ ソーシャリー・エンゲージド・アート、コミュニティ型アート、実験的コミュニティ、対話型アート、浜辺のアート、介入主義的アート、参加型アート、協働型アート、コンテクスチュアル・アート、ソーシャル・プラクティス、その他多数、表現活動を名付ける枠組みは増え続けている一方である。

³⁶ 美術批評家クレア・ビショップは、著書『人工地獄』の中で、アートコレクティブ「スーパーフレックス」によるリバプールの高層住宅でのインターネット放送プロジェクト《テナント・スピン》に対する、キュレーターのチャールズ・エッシュによる批評方法において、「価値判断は証明可能な結果を重んじる政府の芸術政策と似たり寄ったり」と語る。(参照：ビショップ、クレア『人工地獄：現代アートと観客の政治学』大森俊克訳、東京：フィルムアート社、2016年、37頁。

●本論文をかたちづくる配役

「わたし」とは、表現活動を行う主体。

私とは、行なった表現活動とその渦中の「わたし」について考察をし、記述する主体。

第 3 章

自分を他者(相手)の中においてみる－ 香港・清水海岸

3.1 序文

この章では、香港で 2015 年に行った《How to disappear (completely)》((完全に) 消えるための手立て) シリーズの中から、実践者自身を他者(相手)の中においてみるという試みを行った《Re-naturalization / Practice 1 (再自然化/実践 1)》という表現活動を事例として取り上げ、表現活動の実践の中で起こる 1 つの体験について探る。

3.2 表現活動 1 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1 (完全に) 消えるための手立て：再自然化/実践 1)》概要

- (1) 表現活動の主体： ニナ・ウィリマンと「わたし」
- (2) 活動日：2015年10月28日(木) 15時10分から19時04分頃 (GMT+8) 計約3時間55分
主体 2 人は、2015年9月5日から11月30日の計12週間、香港島を拠点に滞在した。10月28日は、この月で最も干満差の大きい大潮の日時であり、開始時間の15時10分の干潮から21時34分満潮にかけて、3.5mの潮位の変化が観測された³⁷。日の入りは17時49分²であり、18時05分頃には、辺りが暗くなり遠くを走る漁船の灯りほどしか見えなくなった。
- (3) 活動場所：香港、清水湾第二海水浴場 Clear Water Bay Second Beach
香港新界西貢区清水半島の南東部に位置している。外海に面しているので水の透明度高く、水温は低く、波も強い。
- (4) 活動内容の概略：
干潮時の波の先が爪先に当たる位置を定点とし、站椿(たんとう)とよばれる太極拳で求められるもっとも基本的な立つ姿勢で、浜辺を背にして海側を向き、その場に留まり続ける。ウィリマンと私は立つ役を 1 時間ごとに交代をした。
站椿とは、膝を少し曲げ肩幅よりも少し狭いくらいに足幅を開き、立つ姿勢である。全身の重心は、東洋医学において湧泉と呼ばれる足裏の中心から少し指先側の凹みあたりにもってくる。関節や靱帯にいたるまで重力に任せて力みを取り、頭の頂点を天井から糸で軽く吊り下げられているかのようにする。目は、完全に閉じずに顔の筋肉に力みを感じないほどに薄く開き、まっすぐ遠くを見る³⁸。
- (5) 活動主体の装い：
主体 2 人は共に次のような装いをした。上から同じヘアスタイル³⁹の長髪のウィッグ、白いTシャツ、黒の長ズボンを装い、靴は履かずに終始裸足で行なった。服は、

³⁷ 干潮時 15 時 10 分は、1 年間の海面の高さから割り出した平均値である平均潮位 mean sea level よりも-1.0m であり、満潮時 21 時 34 分は、+2.5m であった。出典: CHOSEKI「釣りの為の Hong Kong にての 2020 年の潮見表」.参照 2020 年 6 月 12 日. <https://choseki.com/as/china/hong-kong>.

³⁸ 高見保則. 「気の武術の論理と倫理」. 大阪工業大学紀要 60, no. 1 (2015 年 9 月 1 日): p. 44 (41-53.)

³⁹ ウィリマンと「わたし」は、香港・北角駅にある商店街内のカツラ専門店で、「1つ1つ手作業で作られているので、若干の違いが見られるかもしれないが、全く同じ商品」だと店主にいわれ、その2つのカツラを購入。「わたし」のカツラは、ウィリマンのものに比べ色が暗く、耳下あたりまで直毛に近いなど差異がみられる。毛質は、天然毛ではなく、合成繊維でつくられた人工毛である。

低価格で幅広い国で流通されている大量生産品を選択した。

香港での表現活動以降、ウィリマンと「わたし」は、この服装を「ユニフォーム」と呼び、多くの活動時において着用している。



図3-1 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》活動風景

ウィリマンと「わたし」の交代時、記録用ビデオカメラの見守り役として途中から来てくれた写真家・カティア・グレースは、海に立つ「わたし」（たち）の姿をみるやいなや、興奮気味に持っていたカメラで撮影を始めた。（撮影: 2015年10月28日 / カティア・グレース）

3.3 「わたし」たちの気づきの交換録 # 1

ここでは、香港で2015年に行った《How to disappear (completely)》（完全に）消えるための手立て》シリーズの表現活動を通して、「わたし」とウィリマンによって書かれた気づきの交換録を示す。

*

2015 年 9 月 13 日 香港

私は、一人じゃない、ここにはゴキブリがいる。
Ich bin hier nicht allein, es gibt Kakerlaken.

*

2015 年 9 月 19 日 香港

午前三時。いつものよう Connecting space から家まで跳ねるように小走りで帰る。昼間の通りとうって変わって、夜中は人が少ないので、走りやすい。昼間には人のかき分け、15 分強かかる道のりも、10 分以内には家につく。走りながら、まだ寝ていない街の人たちを 2 倍速のビデオのように観察する。香港は、夜中でも昼間の半分くらいだが、活気がある。24 時間営業の軽食屋には、いつも数組かが何かしらをつまんでいる。閉店した食堂で店員が店内にホースで水をまきながら掃除をしており、時折急に道端に向かって掃除に使った水を勢いよく撒き散らすので、タイミングが悪いとかかりそうになる。運送業に従事する人々は、スーパーに明日の朝のための野菜や果物を運び入れる。ゴミ収集車に、通りに出された食堂の出した生ゴミを 1 つ 1 つ持ち上げて、投げ入っていく清掃員。食堂の今日の余り物をもらいに来る人々。街の活気を生み出しているのは、人間だけではない。掃除で流された水とゴミ袋から溢れ出た野菜の葉や果物の皮の中を走っているゴキブリ。香港のゴキブリは、東京で見かけるゴキブリより 2 回りほどは大きい。さまざまな種類の食料が無造作に街中に置かれている香港は彼らにとっても、さぞ美食の街だろう。毎日 3、4 匹の仲間と出会う。出会いはいつも唐突だ。「わたし」は、ゴキブリと一緒に街を走る。彼らを踏まないようにするために。

*

2015 年 9 月 16 日 香港

- * 吐き気とめまい
- * 震え
- * 呼吸困難
- * 高心拍数
- * 溺れたり、首を絞めたりするような感覚
- * 胸の痛み
- * しびれ
- * 過度の発汗

- * 考えたり、はっきりと話したりするのが難しい
- * 現実と非現実の区別がつかない
- * 泣いて叫ぶ
- * パニック発作
- * 統制が取れていない
- * 麻痺、一時的な運動不足
- * 恐怖
- * 不安

出典: 「ゴキブリ恐怖症」 <https://itspsychology.com/katsaridaphobia/> (2015.09.16)

- * nausea and dizziness
- * shivering
- * difficulty breathing
- * high heart rate
- * drowning or strangling sensation
- * chest pains
- * numbness
- * excessive sweating
- * difficulty thinking or speaking clearly
- * inability to distinguish between the real and unreal
- * crying and shouting
- * panic attacks
- * lack of control
- * paralysis, temporary loss of movement
- * fear
- * anxiety

Quelle: "Katsaridaphobia (Phobia of Cockroaches)" <https://itspsychology.com/katsaridaphobia/>
(16.09.2015)

*

2015 年 9 月 24 日 香港

新居にはテレビがある。(寂しいと思った時はこうするといいと聞いたことがある。) 今では、アフリカのどこかの「無名」の国で、壊れた靴を履いた子供たちからボクシングを習っている若いプレゼンターが登場する北京語や広東語のひどい吹き替えのルポルタージュや、公園のベンチで無邪気にイチャつく少年少女のシリーズ、北京語の字幕がついた古代中

国に関する英語でつくられた歴史映画、美容コンテストの広告、中秋節などに関するクイズ番組などに触発されることが多くなった。食事をしながら、シャワーを浴びながら、メールを書きながら。孤独を感じる事が少なくなった。しかし、自分の経験よりもテレビから香港人の日常について学ぶことの方が多いため、禁断領域に侵入している盗撮者のような気分になる。テレビは、現実にはアクセスを拒否されている、プライバシーへの洞察を与えてくれる鍵穴である。

Im neuen Zuhause habe ich einen TV. Den schalte ich nun öfters ein (Ich habe gehört dass man das so macht, wenn man sich einsam fühlt) und lasse mich berieseln von schlecht auf Mandarin oder Kantonesisch synchronisierten Re- portagen mit jungen Moderatoren die in einem namenlosen Land irgendwo in Afrika von Kindern mit kaputten Schuhen Boxen lernen, Serien mit Jungs und Mädels die unschuldig auf Parkbänken schäkern, englischen Historienfilmen über das alte China mit Untertiteln in Mandarin, Werbungen für Schönheitswettbewerbe, Quizsendungen über das Midautumn Festival etc. während ich esse, dusche und E-Mails schreibe. Ich fühle mich jetzt tatsächlich weniger allein. Aber ich fühle mich als Eindringling in ein verbotenes Terrain, als Voyeurin, denn ich lerne vom TV mehr über den Alltag der Hongkonger als aus eigener Erfahrung. Der TV ist ein Schlüsselloch, der mir einen Einblick in eine Intimsphäre gewährt, zu welcher mir der Zutritt in der Realität verwehrt bleibt.



図3-2 香港島・北角の自室からの風景

同じくらい大きさをした窓ばかりが見える。常に他者の気配を感じる。

(撮影: 2015年9月15日 / 新井麻弓)

*

2015 年 10 月 10 日 香港

みんな部屋を後にするときは、部屋を開けっ放しにしている習慣があった。なので、「わたし」も部屋出るときは開けっ放しにするようにした。スイスでもそうであったが、この習慣に馴染むことは、なかなか最初「わたし」には心細かった。大したものを置いているわけでも、同居人の物取りを疑ってわけでもまったくなかったが、心なし裸を見られているような不思議な気がして落ち着けなかった。そのうちに、逆に閉じている方が好奇心をいだかせるものだと思ふ自分のなかで納得させた。

ある日の週末、少し遅く起きると、誰も家の中にはいなかった。居間で、朝食のクッキーを手に取りながら、今まで気にしてなかったもののなんとなく開け放たれた彼女たちの部屋が気になった。クッキーを噛みながら、席を立て彼女たちの部屋の方に歩いていった。

彼女たちの部屋は、所狭しと物が置かれていた。「わたし」の部屋よりも 1.5 倍ほどは大きいはずだが、2 段ベットと 2 つの勉強机と本や洋服棚でほとんど足の踏み場もなく、とても狭く感じた。クリーニングから帰ってきたままでカバーをとっていない洋服は、ベットの縁にもかけられ、かなりの空間を占拠していた。手前の机には、大量の英語能力試験対策本が重ねられていた。ものに埋められた空間に圧倒された。ここに 2 人で住んでいるのかと思ひながら、2 段ベットの下の段を少し持て余している自分に少し気が引けた。

*

2015 年 9 月 17 日 香港

ゴキブリの家を建てている。

最近になって、私はある種の別れを交えた習慣をつくってしまったことに怖さを感じている。到着すると、また心の中で消えていく。長居しないことを確信して、ここにいる。少なくとも永遠ではない。永遠では決してない。いつも一時のために。癖になっている。習慣がある種の「故郷」をつくる場合：そこから永遠の別れをすることができる。では、夢いものも「故郷」になれるのか？

Ich baue den Kakerlaken ein Haus.

Ich habe kürzlich mit Schrecken festgestellt, dass ich in den letzten Jahren eine gewisse Routine entwickelt habe mit den Abschieden. Ankommen, und in Gedanken schon wieder weg sein. Ankommen mit der Gewissheit, nicht lange zu bleiben. Nicht für

immer zumindest. Niemals für immer. Immer für eine Zeit. Es ist eine Gewohnheit geworden. Und wenn Gewohnheit Heimat ausmacht: kann der ewige Abschied – kann das Ephemere auch eine Heimat werden?

*

2015 年 9 月 28 日 香港

香港にいた間使っていたスタジオは、滞在している部屋から徒歩圏内だった。部屋にはインターネットがないため、ついスタジオで午前 3 時くらいまで一人残って作業していた。そのスタジオは、地下鉄北角駅とフォートレスヒルの間に位置する。周りには活気ある市場や下町っぽい雰囲気、丘の上は文教地区になっていてこの 3 つの異なる雰囲気が接し合う場所にあった。

スタジオの隣には大きめの花屋、反対側は幅 1 m ほどしかない小さなクリーニング屋であった。スタジオと外は、透明の硬化プラスチックでできたシャッターで仕切られていた。中からは常に外の様子が見え、外からも中の様子が丸見えであった。夜になると、周りの電灯も少なくなり、このスタジオがその通りで一段と目立つ場所であった。

毎晩 23 時。70 か 80 歳くらいの華奢で小さなおばあさんが大きな荷車をひいてやって来る。荷車には、いつもきまってどこかで廃棄されていたような家具やおもちゃや機械がたくさん積んであった。おばあちゃんは、スタジオ前に着くと。小さな椅子を置いて、集めてきたものの修理を静かに朝方まで行う。

おばあちゃんは、いつもそこに来てから大体 1 時間おきくらいに、シャッターをコンコンと叩く。

右手と左手を合わせて枕で眠るポーズをしながら、優しく微笑み話しかける。

「寝なさい。もう遅いのだから。寝なさい。」

おそらく広東語だった。何を言っているかわからなかったが伝わった。

毎日わたしがここを離れるまでの約 3 ヶ月間続いた。

*

2015 年 10 月 13 日 香港

香港に初めて到着してまず目についたのは、縦に高く長く伸びる高層住宅の隙間にひっそりとある空間や小さな公園。そこで、いつも誰かしらが太極拳をしていること。朝だけでなく、昼も夕方も、場所によってはかなりの集団で太極拳をしていた。ラジカセから流される

少し眠くなるような二胡の音楽に合わせて、滑らかにゆっくりと動く体がすごく美しく見えた。

その後、「わたし」とウィリマンは、太極拳の動きと考え方に興味をもち、実際に太極拳のレッスンを通うことにした。知り合いから「英語を話せる良い先生がいる」と教えてもらい、言われた場所に行ってみた。それは野菜や魚が手に入る大きな市場の建物の最上階でやっていた。

先生は、今年 72 歳の女性。とても華奢だったが、凛としていて、非常に力強くも見えた。そのピンとした姿勢のせいか、どう見ても 40 代前半にしか見えなかった。1 回のレッスンは 2 時間。習ったことは 1 つだけ。ずばり立つこと。太極拳ではこの立ちの練習を站樁（たんとう）というそうだ。站樁は「杭のように立つ」という意味で、足の中指から少し下がった甲のあたりに全身の重心を意識し、足は地面埋まりそこで根をはっているような感覚で立つ姿勢である。

先生は、「わたし」たちに正しい立ち方を教え、「じゃあ、私が終わりというまでやって」と、「わたし」たちを放置した。正しい立ち方を保ち続けるのはかなり困難だった。無意識に自分の慣れた姿勢に戻ってしまい、その度に先生は直接身体をぐいっと触って直した。先生は「わたし」の肩がどうしても上が離すぎてしまうことを見て、「力を抜く」といい、金槌のように何度も力強く叩いた。しまいには「わたし」の肩を指さして、ウィリマンに対し「見て。本当《日本人》」と笑った。

40 分後、急に下腹あたりが気持ち悪くなってきた。しばらく我慢していると、その気持ち悪さは胸の方までだんだんと上がってきて、ついには喉の奥を通ってきた。「わたし」は、「ちょっとトイレに…」と言い、身体を動かそうとした瞬間、目の前がぐらっと傾き、その場に崩れた。

「わたし」自身、何が起きているかわからず、頭でのコントロールを超えて、ただはあはあと荒い息だけ排出された。頭上の蛍光灯がぼんやりと見える。ウィリマンがびっくりして、何かを先生にいつているような気がした。先生はすぐにとんできて、「わたし」のほっぺたを力いっぱい叩いた。パチン！いい音がした。あまりの痛みと初対面の先生から何の躊躇もなくいきなり叩かれたことに対し驚き、沼のようなところで何かに引きずられるように沈みかけていた身体が急に浮き上がった気がした。

そのあと、先生は「わたし」の身体の中心線を辿るように、おでこからへその下にかけて、両手の親指で、全身の体重をかけて力強く圧迫していった。特に、鼻下上唇は、前歯が軋んで折れるかと思い、その痛みのおかげで、霞がかっていた目の前がだいぶ晴れてきた。指圧のポイントは、あばらを通り過ぎて胃、そして、へその上を圧迫するところには胃のあたりのムカムカ感はいぶおさまっていた。指圧が終わると、不思議とすっきりした。ただ起き上がれる気力はなかったので、ぼんやりとしばらく天井を仰いだ。

先生は、太極拳を初めてやる人には、時々起こる事だといった。この姿勢は、気（氣（チィ））を作るらしい。先生は下腹部に手を当てながら言った。

「身体にもともと持っている気をおさめる箱が小さい人はこの立ちのポーズを長時間続けることで、急激に気を作りすぎて溢れ出て、そのせいで倒れる人がいる。」

練習をするほど、この箱は少しずつ大きくなっていくらしい。「わたし」は、箱を想像してみた。その小さな箱とそこから溢れ出る気体のように軽くて、はちみつのようなとろみがある玉虫色に反射する透明の気。この話は、「わたし」の身体にずっと染みこんだ。

日本に帰国してから、幼馴染みにこの太極拳の初めてのレッスンで起こったこと、先生が話していた箱の話をした。幼馴染みは、「箱って何？」と言い、大いに笑っていた。彼女は、最近ヨガをはじめ、教室に通っているらしい。

幼馴染みの彼女ならわかってくれるだろうと予期していたので、面をくらった。わかってもらえなかったことに対して、軽く憤りすら覚えたが、結局先生の身体を通して話されること、実際に自分の身体を使い体験してみることで納得できたのだという考えに落ち着いた。

站樁の姿勢になるたびに、わたしのお腹には箱は反射的にひょっこりと現れる。しかし、ひとたび普段の生活に戻ると、姿勢は曲がり、途端に箱は消えてしまう。

「わたし」とウィリマンは、この経験以降太極拳に魅了され、プロジェクトで上海や台南に長期滞在した際、現地で太極拳を習った。



図3-3 香港での太極拳の練習風景

教室に通うほか、ウィリマンとともに、九龍側の公営住宅地内にて毎朝太極拳を行う
地元のグループにたびたび参加した。（撮影: 2015年9月30日 / 新井麻弓）

*

2015 年 10 月 4 日 香港

もう昼になろうとしているのに、外は曇っていて日の光が弱く、家の中は薄暗い。いつもよりも遅く起き、朝食を済ませ、椅子から立ち上がる。足元に大人の頭の大きさくらいはあるトゲ状の突起が表面を覆った物体に気がつく。それは、新聞紙の上に置かれ、ゴロンと置かれていた。これは、確かドリアンという名前の独特の香りをもつ果実であることは知っていたが、実際には食したことはなかったので、不意に自分の足元にあることに多少驚きつつ立ったまま観察した。プラスチックを燃やしたときのような癖のある匂いその方向からしていることにいまさら気がついた、最近この居間のテーブルで食べるときに変わった匂いがすると感じていたのはこのせいだったのかと考えつつ、その場を後にしようと後ろを振り返った瞬間、家主がテーブル越しに静かに「わたし」の方見ながら立っていることを感じた。足元に転がっているその大きなドリアンを少し眺めていると、テーブル越しに気配を感じた。家主のおじいさんのそとと立っていた。わたしは手をあげて、「ジョウ サン」というと、ゆっくりと微笑みながら「おー」と低い声で答えて、こっちにやってきてドリアンの房を持ちあげ、床からテーブルに置いた。ドリアンはゴロンと寝転がり、それをおじいさんが別の方向にゆっくりと反対の面に向けるよう再び倒した。底に一筋のパックリと割れていた。割ったのか、自然に割れたのか判断できない。おじいさんは、その裂け目に顔を近づけてから、こっちを向いて、なにか中国語で「わたし」に発語した。匂いについての感想を述べているのかと思考していると、おじいさんは再度、同じ音を発語して、裂け目を指でし

た。匂いを嗅いで見るように提案されているかと思い、ゆっくりと顔をドリアンの方に近づけた。それは、燃えたプラスチックのような嫌な匂いと共に、甘い匂いに混ざっていて、余計「わたし」の肺のあたりをむっとさせた。おじいさんは、キッチンの方にゆっくりと消えいった。「わたし」は、再び視線をドリアンの方に向けた。またドリアンの観察に気が取られていると、今度は自分の横に気配を感じた。おじいさんが骨つきの魚や肉を叩き切ることができる太くてしっかりとした中華包丁を片手にもって、ゆっくりと「わたし」の方に向かってきた。切る対象はドリアンだとわかっているはずなのだが、反射的に息を飲んだ。雨が降りそうな気配で窓からの日差しはなく、部屋の中は薄暗かった。反射的に数日前に同居人の女の子が話した中国の日本との戦争ドラマについて思い出した。

そんなことを考えている際におじいさんは、包丁をテーブルに置き脇にあった新聞を広げ始めた。「わたし」もふと気づき途中から手伝う。おじいさんは、その上にドリアンを置きゆっくりと大きな包丁をドリアンに差しこんだ。その包丁の刺し方は、大きな包丁に対して、美しすぎるほど優しく、ゆっくりながらも動きに無駄がなく、まるで中身が見えているように、どこを切ればいいのか的確に分かっているかのように見えた。丁度いい切れ込みを2本いれると、ゴツゴツした分厚い皮をゆっくりとむき、中からラグビーボールのような形をした明度の高い黄色の塊が幾つか見え、それをおじいさんは、つぶさないように掴み出し、「わたし」の方に差し出し、「ハオチー」と言う。「わたし」は、「シェイ シェイ」といって、受け取った。小さな少々潰れ気味のラグビーボールは、生暖かく柔らかく、そして重量を感じる。そのままかぶりつき、恐る恐る噛んでみた。確かに、美味しかった。甘いバナナのような懐かしい感触が「わたし」の心を和ませた。

*

2015 年 11 月 16 日 香港

Google map が示した降りるべきバス停は、香港の高層ビル群からはかけ離れた小さな民家がぽつりぽつりと立ち並ぶ通りだった。路肩には、野生のバナナが無造作に生えている。昼過ぎだったがとても静かで、バスが立ち去ると、人の気配が全く感じなくなった。ウィリマンと「わたし」は、Google map の示す青い矢印だけを頼りに進む。

雑然とした草むらを抜けると、急に地面には草がなくなり、その先に海が広がっていた。海は不思議なほど静かで、波は川のせせらぎほどしかない。真っ平らに広がるその海の先に、ぼんやりと霞んで高層ビル群と山らしきシルエットが見える。「わたし」はその街まで歩いていけるような気がしたが、まるで蜃気楼のように、本当はないはずのものをしているような気にもなった。Google map をのぞくと、対岸は中国本土・深圳だった。

急に、上空から騒音が聞こえた。ヘリコプターが、頭上をゆっくりと旋回しながら飛んでいる。海岸沿いに歩きながらそのヘリコプターを眺めるが、どうやら自分についてきている

ようだと感じた。見られているならと、手を振ってみたが、それも飽きたのでまた前へと進む。ウィリマンは、どんどん前にいってしまって小さくなっていた。先には、朱色の5重塔のような建物が現れた。それは、遠くから見ても廃墟だということがわかる。また海には、横に寝そべった石碑のようなものが水面から出て、上には何か書いてありそうだったが、陸からは少し遠くて見えなかった。ただ、石碑のまわりには、大量のフジツボがへばりついて、もう誰にも何を伝えるために刻まれたものなのかその石自身も忘れてしまったようだった。これらの存在は、この浜全体を、見捨てられた場所という雰囲気をもたせていた。

少し近づき植物の密集地帯を眺める。ウィリマンもこの植物を少し離れたところから観察していた。しばらく観察していると、泡が割れるような小さな音がマングローブの一面の地面からしていることに気がついた。よく見ると、小さな大量のカニが左右にハサミを動かしながら、地面に出たり入ったりを繰り返した。「わたし」はウィリマンに「カニがいる」と指を差す。もう少し近くでカニを見よう、マングローブに一步近づいた瞬間だった。右足が、一気に地面にのめり込んだ。一瞬のできごとで何が起こったのかわからず、視線がずいぶん下がったことに驚き、左足を動かして抜け出そうともがく。が、左足も一緒に、ぬるぬると沼地に飲まれてしまった。誰かに沼の下から引っ張られているような感覚だった。腰まで沼にはまり、言葉にならない叫び声がでた。右手にもっていたビデオカメラを、一杯天にむかって上げて、沼につからないようにした。さっきまで黙って考え事をしていたようだったウィリマンも驚いて急いで近づいて、一杯「わたし」の腕を引っ張った。無事になんとか乾いた陸地の方に戻ってくることができた。

乾いた陸地から沼との境目を確認しようとする。非常にわかりにくかった。カニたちは、「わたし」がつくった突然の「地形」変動にも気にせず、せっせと沼から出たり入ったり繰り返している。



図 3-4 香港・下白泥から見える中国本土の風景

マングローブの奥には、中国・深圳の高層ビルと山並みがぼんやりと見える。
向こう側まで歩いて行けそうな距離感に見えて踏み出すが、実際には 5km 以上ある。

(撮影: 2015 年 11 月 16 日 / 新井麻弓)

3.4 表現活動の考察文

「わたし」とウィリマンによる気づきの交換録を踏まえた上で、本章で取り上げる表現活動である Re-naturalization / Practice 1 (再自然化/実践 1) の考察を述べる。

3.4.1 表現活動の背景 — 自分自身の〈よその感〉

1.1 〈よその感〉

香港に到着したのは9月の始めだった。この年の平均気温は例年よりも高く、毎日30度を超え、湿気も90%以上。「わたし」たちの滞在先は香港島の中心地だった。そこは、細くどこまでも伸びる高層ビル群、コンクリートの地面、狭い空に囲まれ、湾に程近いにもかかわらず風通しが悪かった。この環境は、「わたし」が慣れ親しんだそれとは大きく異なっていた。「わたし」は、湿度を帯びた重たい熱気が、まるでそこに毎日蓄積されていっており、地表付近の空気はずいぶん前にそこにやってきた空気が留まっているように感じた。「わたし」は、その空気を自分の肺に入れる。途端にその熱気で身体の中も熱くなり、同時に何か細かな塵などの異物さえも一緒に取り込んでいるかのように感じた。香港の空気は、普段あまり意識してこなかった呼吸という行為に対して「わたし」に自覚的にさせ、「わたし」を徐々に弱らせていった。

一方、街には常に人が溢れ、どの人もこの空気を気にしている素振りはなく、慌ただしく

動き回っている。また、人だけではない。高層ビルのすぐ後ろにある鬱蒼とした森も、街や室内を這うゴキブリやアリも、島を行き交う船も皆、活発に活動が続けている。

「わたし」は、こうした活気に満ちた様々な種の集まりとしての香港という領域を前に、自身との間に隔たりを感じた。到着して間もない頃感じたこの感覚をしばらく引きずり、街を歩くときも、部屋の中にいる時ですら、気を張り、身体が緊張状態にあった。終には、体調を崩した。

ウィリマンと「わたし」はともに、香港の昔から栄える商店街、団地、歓楽街、ビジネス街、中心地から離れた山地や誰も手入れしていない野生のバナナが無尽蔵に生えた海岸部にある古い住宅地区、8割以上が海外からの赴任者が住む人工ビーチの横に建てられた高級住宅エリア、島丸ごとファミリー向けの高級住宅地となっている地区、など香港のあらゆる地域を訪れもした。

しかし、その回数を重ねる度に、「わたし」たちは、香港という相手に対して、ますます「つながれない」という感覚をもっていた。この「つながれなさ」には、「不可解さ」、「居心地の悪さ」「不安定さ」「安全でない」「奇妙さ」も含まれ、それに対して「自分たちは他所から来たのだ」という気持ちを強めさせていった。

「わたし」とウィリマンは、この感覚を〈よその感⁴⁰⁾〉とよんだ。



図 3-5 開発が続けられる香港島

(撮影: 2015 年 9 月 17 日 / 新井麻弓)

⁴⁰⁾ 英語では、“foreign”とウィリマンとの間で呼んでいる。この foreign という語には、差別的意味合いが含まれる場合があるため、常に””をつける。また、ここでの foreigner は「わたし」たち自身である。

1.2 なぜ、この芸術実践をおこなったのか

そこで、「わたし」たちは、「どのようにすれば、香港という相手とつながることができるのか」という問いをたて、この自分たちが〈よそのもの〉であるという感覚を原動力に、香港の土地や社会がもっている場所に立つということで、その場と対話するという表現活動を行うことにした。なぜならば、場と対話することで、つながりを見つけることができると考えたからである。

特に、「わたし」たちは、そこで立って、そこで起きている色々な事象と、言葉ではなく、身体で対話するという方略を採用した。なぜ、そのようにしたかという、そもそも「わたし」たちの抱いた「つながれなさ」とは、言葉を通して感じたことではなく、「わたし」たちがその場で佇み、歩いて、自分たちの身体に直接感じとった感触だったからである。そのため、本やインターネット、あるいはAIや誰かの翻訳といった何かしらの媒介を通した客観性を省く必要があったのだ。

なぜ海か

「わたし」とウィリマンは、この章で取り上げる実践場所である清水湾第二海水浴場以外に、下白泥という沼地[図3-4]、大東山という山の上、ちょうど渋谷のスクランブル交差点のような香港の中心地である香港島側の銅鑼灣駅前の交差点[図3-7]、北角の商店街通り、九龍側の集合団地エリアの坪石邨の広場で行った。なぜ、山や沼や海とともに、住宅街や街中を選んだかという、香港という土地はわたし」たちにとって、人間のつくった社会と自然がつくった世界が密接に共存されていると考えたからである。

香港は、総面積の約40%が国立公園⁴¹であり、そのほとんどがイギリスによる植民地時代に制定されている⁴²。また、その領域内を開発することは2020年現在も法律で禁じられている。一方、香港の森は、100年経っていない比較的若いものが多い。第二次世界中、植民地支配をしていた日本政府および住民によって、燃料用に多くの森林が伐採されたためである。それにより土砂崩れの被害が多発し、戦後再びイギリス政府によって植林活動が行われた⁴³。

国立公園は、香港の移民の歴史に関連して1977年から順に制定されていった。1966年から始まった文化大革命から逃れてきた中国人、ベトナム戦争終結後にきたベトナム人、イ

⁴¹ 正式名称は、郊野公園(Country Park)。郊野公園は、自然公園法に基づいた国立公園をさす。

⁴² 「HONG KONG: THE FACTS - Country Parks and Special Areas」、
https://www.afcd.gov.hk/english/country/cou_lea/the_facts.html (2020年11月5日にアクセス)。

⁴³ 遠藤海斗 「香港の地理とジオパーク」 『糸魚川市博物館研究報告』 3号、2014年、67頁。および、「香港郊野公園 - 維基百科, 自由的百科全書」、
<https://zh.wikipedia.org/wiki/%E9%A6%99%E6%B8%AF%E9%83%8A%E9%87%8E%E5%85%AC%E5%9C%92> (2020年11月6日にアクセス)。

ギリス兵として働いていたパキスタン系イギリス人移民といった難民たちが、50年代から70年代にかけて大量に流入し、内陸側の新界エリアに定住した。この急な人口の増加は、川がない香港を深刻な水不足に陥らせた。それを受けてイギリス政府は、新界に大きな溜池をつくり、その周辺一帯を国立公園としていった。そのため現在も、香港島・九龍側に比べ、近年緊張関係が増している中国本土と接する新界側の開発の進度に幅がある。

また、香港島に集中する高層ビルとそのすぐ背後に広がる自然という景観は、アヘン戦争中からすでにイギリス政府によって貿易拠点とともにハイキングコースや見晴らしの良い場所の居住地を整備されていった歴史を背景とする⁴⁴。アヘン戦争後には、イギリスは香港島を占領し、九龍側と香港島側を隔てる内海であるヴィクトリア港を拠点として香港島の開発を進めた。ヴィクトリア港は、水深が深くまた狭いため、波も穏やかであり台風なども被害も少なく、大型の貿易貨物船や軍用船を安全に停泊させることができたためである。

また、九龍側に多く広がる公営住宅群は、1970年代からイギリス政府が開発地を増やすため、香港島や九龍側に広がっていた木造の貧困層地域を区画整理し、彼らを住まわす住宅としてつくられていった。また、衛生管理の面から、イギリス政府が1894年頃に蔓延したペストの被害を再び起こすことを恐れていたことも背景とする。

以上のように、香港は人間によって自然を切り開いていった歴史と人間のために自然を保護した歴史とが混在し、現在のような独特な風景を生み出しているといえる。「わたし」たちは、人通りの多い場所か自然に囲まれた場所か、どちらか一方ではなく、「わたし」たちが感じた香港という土地や社会を構成していると考えたさまざまな場所でこの対話を試みる必要性を感じた。



図3-6 ヴィクトリア港を九龍側へ渡るフェリーから香港島を眺める

(撮影: 2015年9月17日 / 新井麻弓)

⁴⁴ 鮎川慧 「アヘン戦争下の香港におけるイギリス人による都市建設 香港島の地理・自然環境からみる土地区画の分配とその利用」『日本建築学会計画系論文集』 78 巻、609 号、2013 年 8 月、1875-81 頁。

なぜ立ったのか

立つという実践に対する着想は、太極拳の站樁という練習および実践方法からえた。站樁とは、3.2(4)で述べたように、「杭のように立つ」という意味で、足の中指から少し下がった甲あたりに全身の重心を意識し、足は地面埋まりそこで根をはっているような感覚で立つ姿勢のことである。

ウィリマンと「わたし」は、香港の公園や街角で度々見かける太極拳を行う人々の姿に興味をもち、現地で習い始めた。太極拳の稽古で一番はじめに教わった姿勢が、この站樁であった。先生は、とても丁寧で厳しい方で、「わたし」たちは2ヶ月半のクラスでほぼこの站樁という姿勢しか教えてもらえなかった。しかし、毎回の稽古で2時間この站樁をひたすら行うという実践を通して、ただ立つという単純の姿勢が、いかに多くのことを実践者である「わたし」たち自身に教えてくれるのかということを知っていった。

それは、その地と接触している足裏をつたって、全身にその地を感じることができ、足裏以外の全身が触れている周りの空気を感じることができるということだ。またさらに、立っている場に自重が跳ね返されることで、普段＝生活の中であまり気に留めることのないひざや肩、腹部や腰など、自身の身体、自分自身の声がよく聴こえてくるということも体感できた。ウィリマンと「わたし」たちは、以上のような気づきを、まさにその場と対話していると捉えたのである。そのため、ウィリマンと「わたし」は、香港という相手とのつながりを見つける1つの試みとして、立つという行為を選んだ。

本論文では、それらの実践の中でもとりわけ得るものが大きかった海に立ちつづけるといふ表現活動について述べる。



図3-7 《How to disappear (completely): Integration / Practice 1》記録映像抜粋

香港島で最も人通りの多いとされる銅鑼灣駅前の交差点前にて、ウィリマンと交代で立ち続ける。人々は、特に「わたし」たちに目もくれずに忙しなく通り過ぎていく。

(撮影: 2015年11月7日 / Willimann/Arai)

3.4.2 表現活動の内容ー 海に立ちつづける

「わたし」たちは、香港島新界西貢区に位置する清水湾第二海水浴場 Clear Water Bay Second Beach の海を、香港の領域の1つと見立てた。そこで、「わたし」たちは、大潮の日に1時間ごとに交代しながら、計約4時間、干潮時から満潮時にかけて海に立ち続けた。

全体をぼんやりと見物する

最初の1時間目は、ウィリマンが立つ番になった[図3-8]。「わたし」は、カメラの横の砂浜に体育座りをしながら、12mほど先に立つ同じ格好をしたウィリマンを観察し始めた。平日の午後で、浜辺に人は少なかった。たまに、水着をきた2、3人の日に焼けた地元民らしい初老の男性らが海からあがってきたり、あるいは海に泳ぎに向かったり、浜辺でランニングをしたりしながら「わたし」の前やウィリマンのすぐ後ろを横切っていった。海の上に分厚いマットのようなものを浮かべてそこに立ち、サメ除けネットの手前で泳いでいる人たちの安全管理をしていると思われる監視員らしき人も1人いた。ウィリマンは、微動打もせず、立つ姿勢を保ち続けている。風はそれほど強くなく、人差し指ほどの大きさのウィリマンの履く、サイズが余り気味の黒のパンツの左右の端と、白いTシャツの袖だけを、異なるリズムでひらひらと揺らしていた。波の高さは、たまにウィリマンの足元をかすめている程度だった。天気は薄曇りであるが、雲の切れ間から突如として陽がさして、明るい黄土色の砂浜の波打ち際だけを黄金色に照らして、ウィリマンの白いシャツを輝かせた。

「わたし」は、波の来る心配のない乾いた砂浜の上に座りながら、目の前の風景を平和的で気持ちのいい景色だと見物していた。



図3-8 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 01

活動開始から2分後、15時12分頃の様子。ウィリマンが初めの1時間立つ。

(撮影: 2015年10月28日 / Willimann/Arai / 本活動記録映像より抜粋)

海の変化を外から観察する

開始から40分ほど経って、波は強くなってきている。それでも、ウィリマンの足元まで到達する波はまだあまりないが、波の上下運動の幅が増してきている。

一度砂浜に寄せた波は、すぐにまた海に吸い寄せられるように引き返していく。引き返しきれなかった水は、浜の上に残され、細かな砂でできた地の表面から奥へ奥へと浸透していく。しかし、浸透していく途中でまた再び別の波がやってくるため、完全に地に浸透し終わる前のさきほど海から送られた水と新たな海からの水は混じり合って、再び浜を濡らす。この運動の繰り返しによって、浜に絶えず濡れている領域とそうでない領域が作り出されている。波は毎回高さも大きさも異なるため、それらの領域は狭まったり、広がったりしていきながら、重なり合っていた。

ちょうど開始から1時間が経つ頃、10回の寄せる波のうち10回ともウィリマンの立つ定点よりも後ろまで寄せていた。ウィリマンの足元は、波が引いても水面下に隠れていた。ウィリマンの左右の足によって、砕かれた波が、静かに左右に分岐し、ウィリマンの背後で交差しながら再び混ざり合っていく。

「わたし」は、波のつくる細かな変化などを少しずつ発見し始めていた。しかし、それら発見は、「わたし」がその変化の中に入って、体感した変化ではなく、全て乾いた砂浜に座りながら外から観察した事象であった。

海の中に入る

交代の時間になり「わたし」は、さっきまで砂浜で観察していた海水で湿った領域に足を踏み入れる。水温は思っていたよりも、生温かった。ウィリマンのいる定点までいき、歩みの速さを落とし、そっとすぐ後ろにつく[図3-9]。足幅を、ウィリマンとほぼ同じほどに開く。海から絶え間なく吹く風に揺れて乱れている彼女のカツラの髪の毛に、自分の鼻がつきそうな距離間に立った。「わたし」は、「I'm here」と静かに呟いた。

ウィリマンは少し間を置いてから、何も言わずにゆっくりと前方に体をずらしながら、左方向にゆっくりと身体を転回した。

「わたし」の視界は急に開かれ、明るい光と水平線から吹く風、波の動きが一気に全身の感覚に押し寄せてきた。「わたし」は、足を滑らせるようにゆっくりと10cmほど前方にずらし、ウィリマンのいた元いた地点へ自身の全身をもっていく。足裏に砂粒がくいこみ、ひりひりした。ウィリマンが左手側の視界から徐々に消えていく。「わたし」は、広々とした開放感を目の前に、ここには一時停止して一息つくことも、逃げも隠れもすることはできないと感じる。

「わたし」は、目の前に限りなく広がる海という相手に対して、これから1時間もここに一人で立ってられるのだろうかかと心細くなった。「わたし」は、全身丸ごと海という相手に晒されていると感じ、おどおどしていた。



図 3-9 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 02

「わたし」がウィリマンと交代を行う。活動開始から 59 分後、16 時 09 分頃の様子。

(撮影: 2015 年 10 月 28 日 / Willimann/Arai / 本活動記録映像より抜粋)

海とつながろうと対話を試みる

開始してからすぐに、波の水位は、思っていたよりも高い位置まできていると感じた。浜からウィリマンを見ていた時は、波の高さはまだウィリマンの身体全体のほんの 20 分の 1 ほどにしか見えていなかったが、既に「わたし」のくるぶしとふくらはぎの中間あたりにまできて、水位の変化の早さに驚いた。潮の匂いをかぎながら、波の音の周期の変化を聞き、遠くの水平線あたりに視線を投げ続ける。倒れないように、足元に力を入れた。「わたし」は、この時点では、自身の身体を足や目といった部位ごとに分けて、立つ行為を行っていた。

しばらくすると、高い波がピークに達した時の水しぶきが風に飛ばされて、「わたし」の T シャツも濡らしはじめていた。その波が定点に辿り着いた時には、「わたし」の膝上まで海水につかった。波音はさらに増してきていた。

こちらに近づきながら波の体積は増して、高さの頂点に達し、その塊が海面に打ち付ける時、その音は海面だけではなく浜や両脇の半島、背後の山全体などあらゆる面と反響する。波音は大きくなるごとに、「わたし」は、だんだんと自身の身体も 1 つ反響体となっていて感じた。その音は時に、皮膚だけではなく身体の内部、内臓などのそれぞれの管の空間内でも響きわたり、身体から発せられる音をかき消す。そして、「わたし」の身体が「ここに立っている」と感じさせている体全体の重さの感覚を薄め、足の甲あたりに持ってきていた重心への意識が揺らいだ。次の瞬間、大きな波にぶつかり、身体全体がバランスを崩しかけ、倒れないように急いで重心に意識を戻し踏ん張った。何とか倒れることなくその場をやり過ごせたが、冷や汗をかいた。

「わたし」は、目に見える波そのものよりも、その音によって、身体全体が取り込まれる感覚をもち、海に対して不気味さを感じた。そこで、足や目など部分ごとに分けていた意識を合わせて、身体全体を1つの塊とみとめた。そして、次の高い波に備えた。波がくる。今度は先ほどまではぶれなかったものの、やはり身体のバランスが浜へと持っていかれそうになった。

「わたし」は、浜へ寄せる高い波に、身体を持っていかれそうになるという同じ失敗を何度か繰り返していた。高い波を3~5m先に迫ってきたことを確認すると、数秒後に自分の立つ地点までそれが来ることを想像し、恐怖心に包まれた。身体全体を岩のように硬くし、動かないように波に備えた。

波がきた。岩のような「わたし」に、波は強く跳ね返り水しぶきを大きく上げ、「わたし」のTシャツを濡らした。

「わたし」は、もう一度波のことを観察する。後ろの水面よりも1段盛り上がりながら自在に形を変えるロール状の波。その形に自身も真似てみることで、波のぶつかりを抑えることはできないかと考えた。波の動きを追いながら、「わたし」も同じく身体を柔らかくし、ぐにゃんと曲げてみる。この行為を何度か繰り返していくうちに、1つ1つの波の違いを楽しめるようになってきた。それは、波という海のメッセージに「わたし」が応えているように感じた。

「わたし」は、定点に留まっていたが、同時に動いていた。「わたし」は、静と動の動きを行き来させながら、海と応答する。

時間がきて、交代をする。「わたし」は再び浜に座りながらも、ウィリマンが自分の代わりに定点に立つ姿を見ながら、波のエネルギーは、「わたし」を包み込んで、再び手放しにして去っていくのを感じていた。

日が暮れていく。奥の半島の外灯もつき、チラチラと揺れているのが1つ見える。あたりはだいぶ薄暗くなってきて、ウィリマンの輪郭もぼやけている[図 3-10]。



図 3-10 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 03

3 回目の交代前の海に立つウィリマン。活動開始から 2 時間 45 分後、17 時 55 分頃の様子。

(撮影: 2015 年 10 月 28 日 / Willimann/Arai / 本活動記録映像より抜粋)

否応無しに見えてきた「わたし」の構え

再び交代の時間がきて、ウィリマンのすぐ後ろに立つ。目の前のウィリマンが、横にずれると、再び急に視界が広がった。目の前の海の高さが前回よりも、ずっと自分の目の高さに近づいて来ている。恐怖をおぼえ、足がすくみそうになった。

海と空の境目は、もう「わたし」の視力では確認できない。辺りが暗くなり波が高まるごとに、「わたし」は海に飲み込まれるような恐さを感じ、身体がこわばる。同時に、海と「わたし」の間にある圧倒的な違いを感じ始めた。海は、世界中と繋がりながら無限の深さと質量を持つ流体である。それに比べて「わたし」は、全長 153 センチ前後の大きさに 42 キロ程度の質量しかない水分とタンパク質の塊である。「わたし」はこの違いを考えれば考えるほど、「わたし」の皮膚から内側全体を頑丈な盾のように硬くし、「わたし」自身を守ろうとした。すると、ますます海はその盾を大破しにくるかごとく、「わたし」に敵意を向けて全体で向かってくるかのように感じ始めた。次の瞬間、高波が大きく「わたし」の身体にぶつかり、水しぶきは「わたし」の顔まで飛んで、眼鏡についた大きな水滴がしばらく視界を遮った。世界中に広がっている海にとって、「わたし」がここで立っていることなどは、何のお構いもなし、といった様子であった[図 3-11]。

「わたし」は、確かにその場にいるはずなのだが、たった一人そこに取り残され疎外されたような感覚をだんだんと持ち始めた。あるいは、先ほど感じた海のエネルギーの堆積物の 1 つに自分もなってしまうのだろうか、ゾッとした。波の動きを観察しようとするが、先ほどのように辺りが明るくない。不安定なところに立っているのだと自覚するほどに、「わたし」の中が恐怖心で満たされていった。

さっきまで浜辺で海と対話していたときに感じた心地よさから、簡単に一変していた。「わたし」は、「人間は、人間、自然は自然という別々のものだ」という世界を捉え、意味付け、行為する枠組みをもっていたことに、気がついた。



図 3-11 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 04

3 回目の交代後の海に立つ「わたし」。日が暮れ、周囲が目視で確認できなくなってきた

活動開始から 2 時間 50 分後、18 時 00 分頃の様子。

(撮影: 2015 年 10 月 28 日 / Willimann/Arai / 本活動記録映像より抜粋)

香港の海の構え、そしてつながる

自身の構えが気づいた「わたし」は、海にのみ込まれてしまわないように、砂浜に座っていた時に観察していた風に揺れてひらひらと動くウィリマンの T シャツや黒いパンツの裾の動きを思い出し、ヒントを得る。押しでは引いていく波のエネルギーのリズムを聴覚など全身の感覚をつかって感じ、自分の呼吸を合わせて身体を同時に動かす。海の作法に合わせて振る舞う「わたし」は、変化し続ける海に敏感に反応し続けることで、なんとかその場に立ち続けることができた[図 3-12]。

波は時に高く力強く押し寄せてきては、またすぐに穏やかで優しい細かな動きに戻り、様々な表情をみせた。その波ひとつひとつが、エネルギーの堆積物のように思えた。波は水面下の海藻や魚やプランクトン、海底の砂、そしてそこに埋まっていた化石からつくられてさらに捨てられたプラスチックなどを巻き込み、巻き上げながら、1 つになってこちらにゆっくりと向かってくる。「わたし」もその一部のように振る舞う。太古の昔から世界中にはてしなくひろがったり、干上がったりを繰り返している海の動きによって、人間なるものではないものも人間なるもの生まれては無くなってきた。そこに、個々の違いは大した問題ではなく、全てはつながっている。

「わたし」はそれを、香港の海の構え、あるいは、香港の構えとして受け取った。そして、応答するごとに、その構えに徐々に「わたし」の身体は染まっていった。それにより、「わ

たし」は香港の海（あるいは香港）とつながりをもつことができた。



図 3-12 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 05

周囲の明るさや波の強さに対する体感が急激に変化してきた活動開始から 2 時間 54 分後、18 時 04 分頃の様子。(撮影: 2015 年 10 月 28 日 / Willimann/Arai / 本活動記録映像より抜粋)

海の構えを保つことの難しさ

しかし、水位が腰の高さを超え、波が胸元以上になり始めたあたりで、状況は再び一変した。波の高さは、しぶきもあり「わたし」の身長を優に超えているようにも感じさせた。海水が海面で跳ね返り、「わたし」の顔面を何度もたたき、鼻から体内に塩水がはいってきた。もう浜はだいふ離れ、浜からの音は何も聞こえなかった。目を閉じているのか、あるいは開けているが辺りが暗いので、何も見えないだけなのか、わからなくなっていた。

すると、突然遠くの水平線に遊覧船か、漁船の灯りが見えた。ゆっくりとまっすぐ波の上を滑っていく。だが、すぐにまた半島に隠れて灯りは見えなくなってしまった。「わたし」はいよいよ何も見えなくなってきた。海だけではなく闇にも「わたし」の身体も飲み込まれてしまったように感じた。大きく深呼吸をして、気持ちを落ち着かせようとするが、恐怖のせいで鼻と口の両方から息を吸い込み、まともに深呼吸ができない。浅い呼吸がしばらく続いた。「わたし」の身体の動きはコントロールがきかなくなり、波のなすがままにふらふらと左右に大きく揺れた[図 3-13]。

ウィリマンが交代を告げにくる。「わたし」は、浜にもどってから、自分が大きく定点から後ろに下がってしまっていたことに気がついた。自分自身に情けなさを感じ、海の構えを保つことの難しさを学んだ。その後、終える時がきて、ウィリマンは実践を終えた。



図 3-13 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 06

周囲が全く見えない中、押し寄せる波に対する恐怖心で、無意識に左後ろへ動いていつてしまっている「わたし」。ウィリマンとの交代の直前。活動開始から 3 時間 45 分後、18 時 55 分頃の様子。(撮影: 2015 年 10 月 28 日 / Willimann/Arai / 本活動記録映像より抜粋)

実践をおえてー自然と人間のつながり

実践が終えた直後、左の半島の山の上から満月が顔を出して、ゆっくりとのぼってきたことに気がついた[図 3-14]。満月がでると、一気に明るくなり辺りの雰囲気は一変して見えた。不気味に水位を増していった海が、この圧倒的に手の届かない遠くの月との関係によって起こっていると考えると不思議にも感じた。



図 3-14 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 07

ウィリマンが交代後、時間がきて実践を終えると、丘の後ろから満月が出て、あたりが少し明るくなった。活動開始から 3 時間 55 分後、19 時 05 分頃の状況。
(撮影: 2015 年 10 月 28 日 / Willimann/Arai / 本活動記録映像より抜粋)

3.4.3 表現活動の考察まとめ

「わたし」たちは、清水湾を香港の一部ととらえ、海に立ちつづけるという芸術実践を行った。

海という相手を外から眺めるのではなく、相手の中の入り、香港と「つながれない」ために感じた自分たちが〈よそのもの〉であるという感覚を原動力に、全身をつかって、海との対話を試みた。

「わたし」は何度も失敗しながらも、全身の感覚を使って、その相手の絶え間ない変化に応えようとすることで、だんだんと海と応答できるようになった。

日が暮れて波が高まり、恐怖心がふたたび増していく中で、これまで自分自身が、自然と人間が分断されたものだということのように世界をとらえ、意味づけ、行為する枠組みをもっていたことに、気がついていった。この表現活動を実践する「わたし」が常にもっているものを、本論文では「**構え**」とよぶ。「構え」は、私の、言語、教育、生活環境など、知識や人種、宗教、性別、身体的特徴、年齢、職業、出身地、家族構成といった社会的要因などによってつくられている。

さらに海と応答を続けると、だんだんと自然と人間といった差異を超え、つながってどこまでも拡がっている構えというものが、「わたし」の中に入ってきた。「わたし」は、それを香港の一部としてみた清水湾の、あるいは香港の構えとして受け止めた。

「わたし」は海（香港）の構えにしばらく浸かることによって、身体にゆっくりとその構えが染み込んでいき、香港という相手とのつながりを見いだすことができた。

一方で、一度手に入れた自然と人間が繋がった構えも、保ち続けることは難しく、またその構えを完全に「わたし」の構えとして受け入れることは、危険な行為でもあり相手に呑み込まれること意味するということがわかった。しかし、香港とつながりあいによって、自分自身がよそのものであるという感覚が薄まった新たな「わたし」が生まれた。

この事例のように、表現活動を実践する私が、私の意志の有無とは無関係に、表現活動の対象（相手）とかかわり合うときに生じる、私自身が対象と「重なりあう」体験を、本論文では「**なる**」とよぶ。この「重なりあう」体験により、実践者としての新しい私（のあり方、有り様）が生まれるという体験もそこに含まれる。

海に立ったり、海の動きに合わせて身体を反応させていったりといった行い自体を始める段階には、そこに明確な理由はなく、直観で動いていた。表現活動とは、最終目的地に向かって進むものではなく、その場で感じた違和感や疑問のようなものを表にだす行為である。しかし、この活動でもあるように、その行いの過程の中で、多くのことを見つけることができる。

「わたし」は「わたし」と海の間の隔たりを超えることはできなかった。つまり、「わた

し」は海、あるいは香港という相手の一部にはなれなかった。だが、「つながりたい」という思いから応答の方法を全身の感覚を使い見つけていくことで、相手との対話が生まれ、最終的に相手とつながることができた。そこで重要となったのは、まず自分自身の構えを知ることであり、そののちに、相手の構えというものが見えてくるということがわかった。

つまり、ここでの「なる」は、応答するという能動的な行いの先に、相手の構えが自分自身の身体に受動的に浸透していくというものであった。

ちなみに、本活動を行った 2015 年は、2014 年の香港反政府デモからの緊張状態は続いていたものの、街全体は一度落ち着きを戻していた時期であった。「わたし」とウィリマンは、本章でも示した通り、自らの主観的な実感と体験をもとに活動を進めており、本活動を通して香港デモに対する直接的な政治的メッセージを意図していない。しかしその後、特に 2019 年から激化した香港での民主化デモ以降は、この活動に対する受け取られ方は大きく変化していった。活動が実践者自身の意図を離れて解釈されていくことに対して考えさせられる活動となった。

第 4 章

相手と自分を重なり合わせるー 日本・中之条編

4.1 序文

第3章では、「自分を他者（相手）の中においてみる」という試みに着目し、「なる」という体験について述べてきた。第4章では、《The gift exercise / Invitation 2》シリーズから、2015年に群馬県中之条にて行った《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo（ギフト交換練習/招待 2.1：中之条）》という事例を取り上げ、相手と自分を重なり合わせるという試みに着目し、「なる」という体験のもう1つの側面を探る。

4.2 表現活動 2 《The gift exercise / Invitation 2.1:

Nakanojo (ギフト交換練習/招待 2.1: 中之条)》概要

- (1) 表現活動の主体： ニナ・ウィリマンと「わたし」
表現活動の参加者： 中之条の住民
表現活動の観客： 展覧会「中之条ビエンナーレ」に中之条の外から訪れた人々
- (2) 活動期間： 2017年8月19日 から10月11日 (計54日間)
群馬県中之条町で2年に1度開かれている地域展覧会・中之条ビエンナーレ⁴⁵の開催期間は、2017年9月9日から10月9日。
- (3) 活動場所： 群馬県吾妻郡中之条町大字中之条町905
JR 中之条駅が位置する大通り沿いの元電気屋店舗[図 4-1]。この元店舗空間は、電気は通っていたが、ガス・水道・トイレはない。通りに面して一面が、大きなガラス戸になっている。また雨が降ると外から水が流れ、雨漏りがした。
大通りには、昔から続いていた多くの店舗が跡地となり並び、空けている店舗も商店としてほとんど機能していないところが多かった。
- (4) 活動内容の概略：
実践場所である元電気屋店舗で、ウィリマンと「わたし」が住むために必要な家具や寝具、調理器具、食料といった生活物資一切を中之条の住民から借りてくる。その引き換えに、貸主が「わたし」たちに望む何かしらの頼みごとを行う。以上の交換生活を続ける。
この交換は、貨幣を返礼としない活動である。「わたし」たちは、この貨幣を使わない行為を強調するために、あえて領収書を使い、金額欄に頼みごとを貸し主に記入してもらった。
- (5) 活動主体の装い：
ウィリマンと「わたし」は、3章の香港における実践時と同じくユニフォームを装う。具体的には、白いTシャツに、黒のパンツ、黒い靴、黒い靴下、同じカツラ。こ

⁴⁵ 中之条ビエンナーレ 2017 は、展示会場が町内 51 ヶ所、参加アーティスト数 162 組。全会場入場者累計のべ 42 万人(参照：「中之条ビエンナーレ 2017」『中之条ビエンナーレ公式ウェブサイト』、<https://nakanojo-biennale.com/archives2017><2020 年 7 月 21 日にアクセス>)。かつて某美術大学で教える作家が教え子を引き連れてきたが、当初の目論見は頓挫。しかし、その学生だった作家の卵たちが残り、仲間と一緒に自分たちの活動の場所をこの山村につくり始めたことが、このビエンナーレの立ち上げにつながっている。このトップダウンではない、ボトムアップの成り立ちが手作り感のあるオープンな雰囲気づくりに影響している。また、都心からのアクセスも比較的良好ながらも、奥深い山の風景が楽しめ、多くの名温泉地もあるため、観光気分で一般の人でも楽しみやすい。(引用：「中之条ビエンナーレ 2013、あいちトリエンナーレ 2013：キュレーターズノート」『美術館・アート情報 artscape』、https://artscape.jp/report/curator/10091665_1634.html、<2020 年 7 月 21 日にアクセス>。)

の実践においては、外に出る際、2人とも大きな麦わら帽を身に付けた。



図 4-1 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》活動場所前に立つウィリマンと「わたし」

住民から借りた雨漏り時の掃除用モップや水タンクなどの食器洗い道具一式を建物前に配置した。

この場で生活する中で、徐々に物も増え、配置も日々変化していく。

(撮影: 2017 年 9 月 11 日 / 松尾宇人)

4.3 「わたし」たちの気づきの交換録# 2

この節では、本章で取り上げる表現活動《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》の活動期間中に「わたし」とウィリマンが記述した気づきの交換録の抜粋を載せる。

*

2017 年 8 月 21 日 群馬県中之条

私たちは、高齢の紳士（私は彼がどこことなく寂しい人だろうと思っている。）に招待されて、郊外にあるガソリンスタンドの隣のイタリアンレストランで食事をする。彼は、数日前私たちに、実用的な冷蔵庫、ホットプレート、洋服掛け、真新しいガスコンロ、ほとんど新

品に近いカメラを貸してくれた。(いや、貸してくれたというよりも、) 彼はそれらを返さないでほしいと言った。

マユミのぎこちない翻訳でその紳士の物語にはほとんどついていけないことに、少し申し訳なく感じた。それは彼のアイススケートへの情熱、山と彼の 5 匹の猫についての話だった。しかし、それは私たちが提案した契約とまったく同じではないか? 素材と物語の交換: 形のある生活に不可欠な何かに対して、それを支払う余裕のある人たちによる聞く時間のある人たちに対する非物質的な何か。

Wir essen in einem Italienischen Restaurant neben einer Tankstelle am Rande der Stadt, eingeladen von einem (ich schätze etwas einsamen) älteren Herr, der uns davor einen funktionierenden Kühlschrank, eine Herdplatte, eine Garderobe, einen nagelneuen Gasherd und eine fast neue Kamera geschenkt hat. Er wollte nichts zurück. Ich fühle mich ein bisschen schuldig, dass ich den von M holprig übersetzten Geschichten des Herrn kaum folgen kann. Es geht um seine Leidenschaft fürs Schlittschuhlaufen, die Berge und seine fünf Katzen. Doch – besteht nicht genau darin der Deal, den wir vorschlugen? Im Tausch von Material gegen Geschichten: Handfestes, Lebensnotwendiges gegen Immaterielles, von denen, die es sich leisten können an diejenigen, die Zeit zum Zuhören haben.

*

2017 年 8 月 29 日 群馬県中之条

私たちは初めてこの空間で寝ることにした。ここのドアは壊れており、内側から施錠できないため、私は少し心配であったが、マユミは私の心配を振り切って、日本はチューリッヒより安全だからと問題ないと思うと言った。その言葉は私を落ち着かせた。早朝、私は小学校の休み時間を知らせるベルを思い出させるような音で目覚めました。外では、スピーカーから眠そうな日本語の声が何か話していた。暗闇の中で、隣の布団にいるマユミの座っている影が見えた。彼女は、その声を私に翻訳した: ミサイル警報。スピーカーの声は、日本に向かっている北朝鮮のロケットの発射について知らせ、地下室や安定した建物など安全な場所に行くことを勧めている、と。ここには地下室はない上、建物の木材は腐っていて、2 階の床が半分落ちてきている。マユミはそれを真剣に受け止める必要はないと言った。その言葉は私を落ち着かせ、私は再び横になった。マユミは携帯電話を取り出した。外はとても静かで、車は 1 台も通り過ぎず、街はまだ眠っているようだった。しばらくすると、2 回目の発表で不審な物体を見つけた場合は直ちに警察に連絡しなければならない、それはミサイルの一部である可能性がある、という警報で再び私は眠りから覚めた。私はしばらく携帯電話の画面に照らされたマユミのシルエットを見て、再び眠りに落ちた。

翌朝、マユミは、実はかなり恐れていたけど、私には心配させたくなかったと告白してきた。地震はよくあるうえ、ミサイルもこれまで何度も飛ばされてきているため警報には慣れているが、ミサイルが日本の領海に落下したのは知っている限り初めてだと。知らなかった。日本は脅かされ、皆不安になっていた。この事件はすべてのメディアで激しく議論され、すべてのテレビ局は、朝の空に飛ぶロケットのぼやけたカメラからの画像とキム・ジョンウンの写真、ロケット発射のアーカイブ画像を交互に放送していた。北朝鮮の南隣で軍事演習を行なっている米国は、公式にはこの一件に対して動じていないと伝えた。しかし、証券取引所は事件に強く反応した、と SRF ニュースアプリのモデレーターはいう。

Wir schlafen zum ersten Mal im Raum. Die Tür ist kaputt und von innen nicht abschliessbar, ich bin ein bisschen beunruhigt deswegen, aber M winkt ab und meint, dass sein kein Problem, Japan sei sicherer als Zürich. Das beruhigt mich. Am frühen Morgen wache ich auf wegen eines Geräuschs, das mich entfernt an die Pausenglocke meine Primarschule erinnert. Draussen spricht eine schläfrige Stimme aus Lautsprechern auf Japanisch. In der Dunkelheit nehme ich den aufrecht sitzenden Schatten von M im Bett neben mir wahr. Sie übersetzt: Missile Alarm. Die Stimme im Lautsprecher informiert über den Abschuss von Raketen in Nordkorea die auf Japan zusteuern und rät, sich in Sicherheit zu bringen, im Keller oder stabilen Gebäuden. Keller gibt es hier nicht und das Holz unseres Gebäudes ist morsch. M sagt, das müsse man nicht ernst nehmen, das beruhigt mich, und ich lege mich wieder hin. M zückt ihr Mobile. Draussen ist es ganz still, kein Auto fährt vorbei, die Stadt schläft noch. Nach einer Weile reisst mich eine zweite Durchsage aus dem Schlaf mit dem Aufruf, es soll sich sofort bei der Polizei melden, wer seltsame Objekte finde, es könnte sich um Teile der Rakete handeln. Ich schaue noch eine Weile Ms Silhouette im Schein des Bildschirms an und schlafe wieder ein. Am nächsten Morgen gesteht sie mir, dass sie Angst hatte, mich aber nicht beunruhigen wollte damit. An den Missile-Alarm ist man zwar gewöhnt, so wie man sich die Erdbeben gewohnt ist, aber dies ist das erste Mal, dass Raketen Japan überfliegen, bevor sie ins Meer stürzen. Unangekündigt. In Japan ist man alarmiert und fühlt sich bedroht. Der Vorfall wird in allen Medien heftig diskutiert, sämtliche Fernsehstationen senden verwackelte Bilder von Kameras, welche die Rakete im Morgenhimmel suchen, abwechselnd mit Aufnahmen von Kim Yong Un und Archivbildern von Raketenstarts. Die USA, die vor Nordkorea gemeinsam mit dem südlichen Nachbarn gerade ein Manöver durchführen, zeigen sich offiziell unbeeindruckt. Aber die Börse habe stark auf den Vorfall reagiert, sagt der Moderator im SRF-News-App.

2017 年 9 月 10 日 群馬県中之条

中之条で、「わたし」たちは、ある時点から地元の人にとって動物園のパンダのような存在になっていることに、心と身体の疲労とともに気がついた。

この家に住み始めて、しばらく経ったある日の夜、ウィリマンが「わたし」に疲れた顔で呟いた。

「あのさ、わたし、最近、突然ノックもせずに私たちのスペースに入ってくる人たちのこと憎いと思い始めているって気がついたの。《だめっ！私のものに触らないで！》って、心の中で叫んでいる。…まあ、多分疲れのせいだね。」

「わたし」は、それに対して「…うーん、でも、この状態って「わたし」たちがあえて作ったからさ、そうは言えない？」と、あまり深く考えずにウィリマンを説得した。今思えば、それは単なる「わたし」の道徳的な動機からくるものだったのかもしれない。それに対してウィリマンは返事にならないような声で答えた。「わたし」は、そのウィリマンの言ったことがしばらく心の中で引っかかったまま、その夜が過ぎていった。

朝が来る。シャッターを開ける。また否応無く客がひっきりなしにやって来る。「わたし」たちが丁寧に整えた洋服や食器を触りながら好き勝手なコメントを言って、その場を後にする。「わたし」はそれをぼんやりと観察していた。この空間において所有権はどこに存在するのだろうか？ここに置かれているものは、全て地域の人たちのものではある。「わたし」は、ウィリマンが昨日言っていたことを思い出しながら、じんわりと「わたし」の心にもその感情が侵食していくのを感じていた。「わたし」たちが招いた状況だったにも関わらず、「わたし」たち自身が疲弊していった。

＊

2017 年 9 月 12 日 群馬県中之条

私たちの協働（ここでは、常に一緒にいること）と私たちの「ゲスト」との交換の両方に限界を感じている。もはや私は性格と発言の欠如に我慢できず、自分の服、髪、言葉に憧れ、自分の後ろで閉めることができるドアに憧れる。

Ich spüre eine Grenze, sowohl in unserer Zusammenarbeit (das ständige Zusammen-sein) als auch im Austausch mit unseren „Gästen“. Ich ertrage ich meine Charakter- und Sprachlosigkeit nicht mehr. Ich sehne mich nach meinen Kleidern, nach meinen Haaren und nach meiner Sprache, ich wünsche mir sehnlichst eine Tür, die ich schliessen kann hinter mir.

*

2017 年 9 月 13 日 群馬県中之条

私たちのもてなしは、この空間を提供することである。私たちは申し出をして、誰かが私たちに答えるのを待ちます。この開放性と自由は、全く計画していなかったことを引き起こす可能性を持つ。しかし、それはまたゲストがすべてのスペースを乗っ取り、さらに私たちを追い出すというリスクも含む。デリダによると、根源的なもてなしとは自己消滅を考慮に入れているという。歓待とは悪用される可能性をもち、排他的で、強引で、依存的あるいは攻撃的にもなる。あるいは、それはもはや歓待ではないのだろうか？

反則はどこから始まるのだろうか？ 幸いなことに、私たちは物理的な意味での攻撃に直面したことはない。しかし、実際にはそれに限りなく近い幾つかの状況に直面した。そして、不安や問題を吐き出す多くの人々に出会い、私たちが求めずとも、人々の愛情や保護を受ける。そして、どこにも行きたがらないゲストにも。

問題は常にこうだ：どれだけ遠くまで行けるだろうか？ ゲームを中止するためにノーというタイミングはいつにするか？ あなたの限界はどこか？ 他者の限界はどこか？ そして、アートの限界はどこにあるのか？

Our hospitality consists in providing space. We make an offer and wait for someone to answer us. This openness and freedom allow things to happen which you could never plan. But it also includes the risk that our guest takes all the space and even displaces us from it. Radical hospitality, according to Derrida, takes into account self-extinction. Hospitality can be abused, it can be exclusive, overbearing, parasitic or aggressive. Or - is this no hospitality anymore?

Where does transgression begin? Fortunately, we have never been confronted with an assault in the physical sense. But with some marginal situations indeed. And with many people who have dumped their worries and problems, and also their care and love in our room without asking. With guests who did not want to go anymore. The question is always: how far can one go? When did the point come to say no, to abort the game? Where is your limit? Where is the limit of the other? And where is the limit of art?

*

2017 年 9 月 21 日 神奈川県川崎市

今日も Willimann/Arai 役になった久美子さんから、写真や動画がいくつか送られてきた。その写真をウィリマンと共に見ていると、その中の 1 つに「わたし」たちは釘付けになった。それは、馴染みのゲストである林さんと久美子さんのトロフィーフォトであり、写真の真ん中には五月人形があった。久美子さんから、「トシちゃん、こんなの持ってきてちゃってさ、返さないでって言われちゃった、どうしょっか」とメッセージがついていた。

ウィリマンから予想通り大量の質問一気にくる。

「これなに？何に使うの？宗教的な人形？どうやって処理するの？」

林さんは、何度も交換をしにきてくれていたので、このプロジェクトが「貰う」ではなく、「借りる」という趣旨としていることはよく知っていたはずだ。だが、あえて返さないでほしいものを持ってきたのだから、処理に困っていた要らないものを都合よく引き受けてもらおうと思ったのだろうか。中之条には、粗大ゴミを非常に破格で引き取ってくれるセンターがある。だが、そこに他人の人形は持って行きたくないのか。頭の中で、目をそらしながら片方の口角だけ少し上げて静かに笑ういつもの林さんの笑顔を想像しながら、悪意なのか善意なのか、あるいはただの悪戯か。悶々と考えはじめた。

久美さんが送ってくれた写真の中にあった林さんは領収書の交換サービス欄には、「げんきでがんばれ」と書いてあった。

4.4 表現活動の考察文

この節では、以上の「わたし」とウィリマンによる気づきの交換録を踏まえた上で、本章で取り上げている表現活動〈The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo〉での考察を述べる。

4.4.1 表現活動の背景 — ゲストとホスト

1.1 ゲストとホスト

本章で取り上げるこの表現活動 2 〈The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo〉では、2016年にスイス・フランス語圏にあるロマンモティエで行った表現活動〈The gift exercise / Invitation 1: Romainmôtier〉で学んだことを応用した。

そこでの実践場所は、元巡礼宿⁴⁶であった。そこではかつてキリスト教の教えに基づいて、かつて他所からきた知らない巡礼者全員を、名前も聞かずに扉を開けて、泊まらせていたと知る。巡礼宿ではキリスト教の教えに基づいて、かつて他所からきた知らない巡礼者全員を、名前も聞かずに扉を開けて、無条件で受け入れ泊まらせていたと知る⁴⁷。スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラを目指して歩くヨーロッパ大陸中の多くの異邦人は、そこで旅の疲れを癒していた。巡礼宿はその昔、今では病院を意味するhospital(ホスピタル)と呼ばれていた。旅路で怪我や病気をした者たちあるいは、もともとが病気や怪我をおっており治療するために巡礼をしていた者たちが、必然的に長居をしていた。日本語で歓待やおもてなしを意味する hospitality(ホスピタリティー)という語も、このhospitalの派生語である。

「わたし」たちは、ロマンモティエでの実践を巡礼宿から学んだ「見知らぬものを信じ、自分の家に招き入れる」という構えによって実践を試みた。「わたし」たちは、家など個に所属する空間に相手を迎え入れたり、個が所有する物や知を相手に渡したりする行いを「招く」とした。そして、その招くという能動的行為の主体のもつ役割を「ホスト」と呼び、招かれるという受動的行為の主体のもつ役割を「ゲスト」とよんだ。また、ホストあるいはゲストによって相手に渡される、直接的にあるいは、表立って返礼を必要としない物や知や行為を「ギフト⁴⁸」とよんだ。

ロマモティエを訪れた時期は、ちょうど地元でカボチャの収穫が行われる時期であった。地元住民からギフトとしてカボチャをたくさんもらったため、「わたし」たちはそれを使って、住民たちを自分たちの滞在場所である「家」へ招くことを思いついた。そこで、ロマンモティエの全住民500名分の招待状をつくり、そこにはもらったカボチャつくった自作のクッキーを添え[図4-2]、一軒一軒のポストに投函した。結果、当日はカボチャをくれた住民を含め25名のすでに顔見知りであった人々のみが家に訪れた。予想よりもずっと少ない人数のゲストしか来なかったことに「わたし」たちは、少し落胆したものの、ホストとなり、彼らを家に招くことにより、当日訪ねてくれたゲストである住民たちとつながりをもつことはできたと実感した。また同時に、それは「わたし」たち自身に招くという行

⁴⁶ この元巡礼宿は、1 世紀に建てられたスイスで最も古い教会の隣にある石造建築である。

⁴⁷ 「絶対的な歓待とは、自分の家の扉を開き、異邦人だけではなく、完全に、未知の、匿名の他者にも、手を差し伸べ、彼らを招き入れることをさします。つまり、それは、相互作用であり、彼らの名前さえ尋ねずに、その提供した場所で行われることなのです。」(引用：デリダ、ジャック、アンヌ・デュフルマンテル 『歓待について：パリ講義の記録』 広瀬浩司訳、東京：ちくま学芸文庫、2018 年。)

⁴⁸ 「わたし」たちは、贈りものではなく、ギフトとよぶ。それは、ドイツ語の「毒」という意味をもつ Gift という言葉との繋がりを示すためである。「わたし」たちは、スイス・ロマンモティエでの実践にて、喫茶店のオーナーや教会のシスター、アーティスト・イン・レジデンスのオーガナイザーや巡礼の研究者など、もてなし hospitality の専門家たちへのインタビューや対話を行った。そこで、贈りものは相手に友好的な証を示す肯定的な意味だけではなく、時に、受け取る者に対して「有害」ともいえるような否定的な意味をも含む、相反する感情を持った両義的な ambivalent なものであると、感じたことを背景にもつ。

為について考えさせるきっかけとなった。

この実践を通して、「わたし」たちは、相手とつながるためには、ゲストとホストというはっきりとした固定した役割をもった二者の間で、何かしらの交換がなされない限り難しいのではないかと考えた。

The gift exercise（ギフト交換練習）

「わたし」たちは、このロマンモティエの実践をきっかけに、2020 年現在に至るまで The gift exercise（日本語では、「ギフト交換練習」という訳をあてた）という実践シリーズを行っている。

この実践シリーズは、実践活動地ごとに、ゲストとホストの役割になる場をつくったり、あるいはその土地に既にあるゲストとホストの関係を見出したりしながら、「わたし」たちがそれぞれの設定に入っていくという手立てをとるものである。そうすることで、「わたし」たちは、活動地ごとの実践参加者といった相手と繋がりを生み出し、ゲストとホストの相互作用と依存関係、交換可能性、そしてそこに刻みこまれた力関係について問い続ける。



図4-2 《The gift exercise / Invitation 1: Romainmôtier》記録写真

スイス・ロマンモティエにて、地元住民からもらったカボチャを使い招待状に添えるクッキーを作る。（撮影: 2016年10月8日 / 新井麻弓）

1.2 なぜ、この芸術実践をおこなったのか

本章で取り上げるこの実践2〈The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo〉においても、The gift exerciseの手立てを用い、ゲストとホストの役割を原動力に、中之条という土地や中之条の住民を相手に、芸術実践をおこなった。なぜならば、招くこと、招かれることの行為によって、知らない人々との繋がりを生むと考えたからである。

また、「わたし」たちは特にそのゲストとホストの役割を外側から観察するのではなく、その内側に入って、それらの役割になるという方略を採用した。というのは、「わたし」自身がもともと持っていた構えを探り、相手の構えとともに自己自身が、不安定に揺らぎながら変化する過程を見つめる行為こそ、ゲストとホストのつながりを考察し、また、相手とのつながりを生むことであると、考えるからである。

中之条の住民がもっていると想定した構え

そこで、「わたし」たちは、そこでロマンモティエでの実践〈The gift exercise / Invitation 1: Romainmôtier〉で学んだように、ゲストとホストの二者の間で何かしらの利益が交換されるような仕組みをつくった。なぜ、二者間での利益の交換が必要かと考えたかという、巡礼宿から学んだ「見知らぬものを信じ、無条件で自分の家に招き入れる」という構えを、近代社会において再現することについて改めて検討し、「わたし」たちは、この「無条件で」という部分に、いささか現実味がもてなかったからである。

仮に、無条件で見知らぬものをホストが招き入れたとしても、ゲスト側としては、ホストが何かしらの目論みを隠しているのではないだろうか、と疑う。また、ホスト側としては、その場では無条件とはいえ、次回はこの招いたゲストが今度は自分を無条件で招待してくれるのだろう、といった何かしらの「見返り」を期待する、と考えた。

この巡礼宿のような無条件の招待は、隣人愛といったキリスト教の教えに対する強い信仰心によってたちあがった構えからくる行いであり、そのような宗教的な信仰心や犠牲的精神がない、あるいは薄い構えをもつ限り、人々がそのように行うことは難しい。特に、近代社会においては、資本主義経済においてますます人々からこういった構えを消し去る流れにある。

中之条も、過疎化が進む地方に位置するとはいえ[図 4-3]、近代社会の体系をもつ街の1つである。「わたし」たちは、中之条の住民が《ゲストとホストは、互いの利益を、両者の約束事として、二者間で交換してつながっている》という構えをもった人々だと想定した。



図 4-3 (左) 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》活動拠点となった元店舗前の普段の様子



図 4-4 (右) 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》活動拠点が面する JR 中之条駅へと続く街一番の大通り(図 4-3・4-4 とともに、撮影: 2016 年 11 月 5 日 / 新井麻弓)

4.4.2 表現活動の内容: 交換生活する場をつくる

「わたし」たちは25日間、「1. 実践したこと - (5)実践概要」で述べたように、元電気の空き店舗[図 4-3 および図 4-5]を使い、生活に必要な様々な物資を中之条の住民から借り、貸してもらったお返しとして、貸主が「わたし」たちに望む何かしらの頼みごとを行う場をつくり、そこに住み、生活をした。また告知は、簡易ポスター[図 4-6]をつくり、活動拠点のガラス戸に貼り、そして地域の回覧板でも回してもらった。



図 4-5 活動初日の室内の様子 (撮影: 2017 年 8 月 19 日 / 新井麻弓)



図 4-6 活動を伝えるフライヤー

地域の回覧板でも回した。(撮影: 2017 年 8 月 19 日 / 新井麻弓)

返礼のいないホスト — 「わたし」たちのもっていた構え

実践が始まって 2 日目。初めての交換が行われた。それは、たまたま軽トラで、「わたし」たちの空き店舗前を通りかかった隣街に一人暮らしをする山口さんとであった。山口さんは、普段見慣れた空き店舗に電気がついていることに驚き、通りに軽トラを停めて、部屋の中をガラス戸越しに不思議そうに眺めていた。「わたし」たちは、山口さんを中に招き入れて、この実践のことを説明する。山口さんは、一通り静かに話し聞いた後、「ふーん。で、何が今必要なの?」と聞いてきた。「わたし」たちは、少し躊躇いながら、実はまだ掃除しかできておらず、何も集まっていない旨を話した後、冷蔵庫や調理道具や寝具、扇風機などなんでも必要だと、とりあえず一通り状況を伝え、山口さんは「なるほどね。じゃあ、これからのまま、うちに行って、冷蔵庫とかいろいろ取りに行こう。」と言った。「わたし」たちは、あまりに急な話で半ば信じられず、驚いていると、山口さんは、軽トラの荷台に早く乗るように急かしてきた。

山口さんは、隣街で元々電気屋をやっていたためいくらか家に余っている古い家電があるといい、冷蔵庫、ホットプレート、ガスコンロ、物干し竿、ビデオカメラをいっぺんに貸してくれた[図 4-7]。また次の日も山口さんはやってきて、さらに布団や扇風機、余っている新品のタオル、デスク用ライトを貸してくれた。「わたし」たちは、生活に必要な多くのものが、あっという間になんの努力もせずに、揃ってしまったことに呆気にとられた。そして、

こんなに貸してくれたので、さぞ大きな頼みごとをされるのではないかと思いながら、山口さんの前に領収書を出し、希望する頼みごとを尋ねると、山口さんは「頼みごと？何もいらないよ。」といい、返礼を拒んだ。「わたし」たちは、想定していた構えと山口さんが大きく異なり、混乱した。

その後、しばしば山口さんと同じように、領収書の金額欄に何も書かない、あるいは、「毎日食事をする事」「毎日笑顔であいさつ」など特に頼みごととはいえないようなことや「げんきでがんばれ」などメッセージを書く住民たちにも出会った。「わたし」たちは、その都度、彼らの気持ちに対する嬉しさと恐縮するような申し訳なさをもった。

彼らの構えは、「わたし」たちにとって、巡礼宿のそれと重なった。また、同時に「何もいらない」という言葉の裏に隠れた何かしらの目的や利益があるのではないかと、とも勘ぐりもした。これらの状況を通して、中之条の住民がもっているだろうと設定した構えは、もともと「わたし」たち自身がもっていた構えであったということに気がついていった。



図 4-7 活動 4 日目の様子

運んでいると他の地元住民が運搬も手伝いしにきてくる（撮影: 2017 年 8 月 22 日 / 新井麻弓）

ホストの中のゲスト性

一方、「わたし」たちが当初から予想していたような「頼みごと」である「イングリッシュレッスン」、「ガーデニング」、「こしのマッサージ」などの依頼を受けると、すんなりとその仕事に取り組んだ。「わたし」たちは、実践当初、交換となる頼みごとは、借りた物

品と同じ価値を持つうる肉体を伴った労働だという構えをもっていたことに気がついた。しかし、同時に「わたし」たち自身は、終わった後に、それ相応の身体的疲労や達成感と共に、頼みごとを通じた住民との対話を楽しんでいたということにも気がついた。

「わたし」たちは、頼みごとを行う能動性をもつホストとなったが、同時にゲストとともに対話という楽しみを受け取る受動性ももっていた。ゲストであった中之条の住民も、同じように、頼みごとをしてもらうという受動性だけではなく、対話を行うという能動性をもっていた。ホストとゲストは、必ずしも一方的に行う行為をする・される者ではないと気づいた。

ともに過ごすことに価値を見いだす構え

その後、領収書の金額欄に、「ちょこちょこ遊びに来ます」、「気軽によります」、「楽しい会話をありがとう」と記す住民も訪れた。「わたし」たちは、これらの経験を通して、そうした住民の持つ「些細な会話や対話など、ともに過ごす時間やそこで生まれるつながりに、貸した物品と同等の価値を見出す構え」がだんだんと「わたし」たちの中にも入ってきた。

家となった元店舗、そこに無断に入ろうとする者を〈よそもの〉だと捉える

その空間に「台所」ができ[図 4-8]、初めて自炊ができるようになったある日。静まり返った街を見ながら、「わたし」たちが作った豚汁を食べていると、何者かが怪しく光る金属物を持って部屋の前に立ってこちらを覗き込んでいることに気がついた。「わたし」たちは、反射的に包丁だと思い、息を飲んで身構えた。

「わたし」たちは、反射的にその得体の知らない人物を〈よそもの〉として捉え、その人物が自分たちの空間を侵入することに恐れを感じた。そうして「わたし」たちは、この元電気屋店舗が、そこにある 1 つ 1 つの調理道具、お箸、ちゃぶ台を含め、「わたし」たちの領域であり、「わたし」たちの家だと徐々に感じるようになってきていると、気がついた。

ホストになった「わたし」たち、無条件の招待、ゲストとホストの役割を行ったり来たりする

「わたし」は、恐いという感情を持ちながらも好奇心にかられて、ガラス戸に近づき外をよく見ると、不審者だと思った人物は、飼い犬の散歩中の近所の住民であり、手に持っていたものは犬の糞を拾うためのシャベルだった。その人は、普段見慣れた空き店舗に電気がつき中に誰かいるので、気になって覗き込んでいたと言った。安心しきった「わたし」たちは、その人を部屋に招き入れ、自分たちが食べていた豚汁をその人にもふるまった。その人物は、小池さんといい、中之条の森林組合で働く木こりであった。彼は、中之条の森や自然、中之条の深い山の中にある自分が育った古民家での生活のことを教えてくれた。日本語が話せないウィリマンも sympathetic guy（好感がもてる人）といい、「わたし」たちは会話を楽しんだ。



図 4-8 「わたし」たちが中之条を去る直前の台所（撮影: 2017 年 9 月 12 日 / 新井麻弓）

「わたし」たちは、知らず知らずのうちに、名前も聞かずに見知らぬものを自分たちの家に招き入れ、ホストとなり、見返りなど考えずに豚汁、つまりギフトを渡していた。「わたし」たちは、実践当初に目の当たりにした山口さんらがもっていた無条件の招待の構えを、実践の中で繰り返し交換や対話を通す中でだんだんと解釈していき、それは自らの中にも入っていった。

また、ゲストとなった小池さんは、中之条の自然に関する対話を通して、中之条について教えるホストとなり、「わたし」たちはゲストとなった。このように、「わたし」と小池さんは、意図せず、ともにゲストとホストの役割を、ひっくり返すように何度も行ったり来たりした。

お裾分け ― 拡がるゲストとホストの輪 ①

翌日、小池さんはトラックで再び現れ、「わたし」たちが探していた小さな机や椅子と共に、自分の畑で取れすぎた 2 kg ほどはある大量のミョウガとジャガイモを持ってきた。「わたし」は、そんな大量のミョウガを見たことがなかったので驚いていると、小池さんは「これは裏山のたった 3 m 四方ほどの小さな区画の畑で取れたもので、まだ畑の上にあと 30 キロほどはある。収穫したミョウガはそのままビニールシートをかけて畑に置いたまままだ。」と話した。そのミョウガは、丸々と太って身が締まっていた。「わたし」は街の人たちはよく自分の畑で余った野菜をもらって欲しいと店先などに置いてあることを思い出した。中之条のよく肥えた土の力で育った水々しい野菜を食べて生きている中之条の人たちと、地の栄養がつながっているを感じた。小池さんは、それらと引き換えに、ビエンナーレを毎回楽しみしている 3 人の娘たちも一緒に「ファミリーで食事」を依頼した。

小池さんが去っていった後、「わたし」たちは頂いたミョウガを家の前で新聞紙の上に載

せて乾かしていると、前を通りかかった人々から、「美味しそう。売っているの?」と尋ねられ、お裾分けをしていった。「わたし」は、小池さんの3m四方の畑が、広がっていくことを感じていた。また、「わたし」は別の住民からもらった中之条の田んぼで取れたお米とそのミョウガで炊き込みご飯をつくった[図4-9]。そして、それも家に遊びにきた人々に振る舞った。すると、食べた人からまた別のミョウガ料理を教えてもらい、それを一緒につくったりした。その頃にはすでに何組かの家族が《常連客》となっていた。朝から晩まで、様々なお客さんが遊びに来て、部屋の中はいつも賑やかになっていた。

「わたし」たちは、お裾分けといった、見返りの求めないギフトを渡すホストになることによって、もともともっていた「交換は、ホストとゲストの二者間内だけで行われるものだ」とする構えから、「ゲストとホストの二者だけの交換という小さな輪を開くことにより、地域というより大きな集まりへとその輪を拡げることができる」という構えへと、気づきとともに変化していった。

この試みにより、「わたし」たちは、より多くの中之条の住民たちとのつながりを見出すことができた。



図4-9 借りた炊飯器と小池さんの畑でとれたミョウガで炊いた炊き込みご飯

(撮影: 2017年8月28日 / 新井麻弓)

お裾分けー 拡がるゲストとホストの輪 ②

1週間後、「わたし」たちは頂いたジャガイモでスイスの郷土料理、ロイシティとニョッキをつくり、小池さんファミリーを招待した。「わたし」たちは一緒にご飯を食べながら、スイスの料理や山や畑、自然の話をした。小池さん夫婦は中之条で取れる野菜や山とスイスのそれらとの共通点を見つけながら、「いつかスイスに行ってみたい」と言い、「子どもたちが外に出る子に育ててほしい」と話した。「わたし」は、ウィリマンの話や小池さんの返答を翻訳しながら、所々「わたし」のスイスでの経験や思ったことも付け加えて伝える。「わ

たし」は、自身を《スイス》と《日本・中之条》のどちらにも行ったり来たりと属させながら、その話を続けていた。

「わたし」たちは、小池さんが初めて「わたし」たちの家を訪れた日のように、小池さんファミリーと「わたし」たちの間で、ゲストとホストを行ったり来たりする。

たまたま前を通りかかった瀬山さん一家がその様子を見つけ、「わたし」たちの家へと入ってきた[図 4-10]。「わたし」たちは、瀬山さんたちにもニョッキやロイシティを振る舞う。ミョウガのお裾分けによって起こったゲストとホストの輪の拡がりの時のように、ここでも小池さんにもらったジャガイモでつくった料理によって、自然発生的に輪の拡がりがあった。

ゲストとホストの雲散霧消

瀬山さんも子供連れだったため、部屋の中には子供が4人になり、皆な走り回りながら遊び始めた。初めはその様子を見ていただけであった「わたし」も、その様子があまりにも楽しそうだったので、思わず一緒に走り回り始めた。すると、子供たちも当然のように「わたし」を受け入れ、喜び狂ったかのように叫びながら追いかけてこが始めた。「わたし」も、一緒に叫び追いかける。すると、瀬山さんも一緒に混じって遊びはじめた。その時の「わたし」は、その日そもそも自分たちが小池さんを夕飯に招いたということなどはすっかり忘れていた。そして、ただ大人も子供も一緒になって遊んでいた。そうやって、その夜もなかなかお開きになることはなかった。

子供たちと一緒に遊ぶ「わたし」は、誰かのホストでもなく、ゲストでもない。大人も子供も夢中になって遊ぶことで、《ホスト》と《ゲスト》の役割を忘れていった。



図 4-10 活動 23 日目の様子

毎晩中之条の住民たちが家族連れで、通りがかりに遊びに来る

(撮影: 2017 年 9 月 10 日 / 新井麻弓)

助け合うという構え

翌日、瀬山さんが突然やって来た。「昨夜みんなにお茶を一杯一杯出すのが大変そうだったから」と保温瓶を持ってきてくれた。確かに、急須はいくつか借りられたのだが、人が一気にくるとお茶を一杯ずつ出すのも一苦勞であった。ひどい時には、ゲストを放置して「わたし」たちはお茶を作ることに手一杯になることがなっていることもしばしばあった。

「わたし」たちは、家にゲストを招く際、ホストである自分たちがゲストである中之条の住民を見て知って、中之条のことを学んでいると思っていたが、それと同様にゲストである中之条の住民も「わたし」たちのことをよく見ている、ということに気づかされた。

瀬山さんは、少しの間家の「居間」に座って、「わたし」たちと一緒に会話をした。すると途中で、「（保温瓶の）領収書書かなきゃね。」といい、金額欄に「ドライブに行く」と書いた。また、ちょうどその時の「わたし」たちの様子から、瀬山さんはビエンナーレの観客のための飲み水を幾らか買いためしに行こうと「わたし」たちがしていたことに気がつき、近くのスーパーまで車で送り迎えをしてくれた。

こうして「わたし」たちの中に「互いの利益よりも、そこで生まれたつながりを大切にし、相手を思いやることにより自然とゲストとホストの役割が生まれる」という構えが入っていった。



図 4-11 活動 24 日目の様子

夜仕事を終えた住民たちが、外れやすいすだれを取り付けに手伝いに来てくれる。

(撮影: 2017 年 9 月 12 日 / ニナ・ウィリマン)

中之条の住民もホストとなる、共同体のような一つの集まり

ビエンナーレが始まると、東京、埼玉、栃木など県外から多くの観客が毎日ひっきりなしにやってきた[図 4-12]。「わたし」は、この状況を受けたウィリマンとの対話を、ノートに以下のように書き留めていた。

9 月 10 日 中之条

[...] ウィリマンが「わたし」に疲れた顔で呟いた。

「あのさ、わたし、最近、突然ノックもせず私たちのスペースに入ってくる人たちのこと憎いと思い始めているって気がついたの。《だめっ！私のものに触らないで！》って、心の中で叫んでいる。…まあ、多分疲れのせいだね。」

「わたし」は、それに対して「…うーん、でも、この状態って「わたし」たちがあえて作ったからさ、そうは言えない？」と、あまり深く考えずにウィリマンを説得した。今思えば、それは単なる「わたし」の道徳的な動機からくるものだったのかもしれない。それに対してウィリマンは返事にならないような声で答えた。「わたし」は、そのウィリマンの言ったことがしばらく心の中で引っかかったまま、その夜が過ぎていった。

「わたし」たちは、中之条の外から来たビエンナーレの観客を〈よそもの〉のように感じ始めていた。一方で、中之条の住民に対しては、昔からの馴染みの仲間のような親しみの気持ちにより一層湧き、それまでに築いてきた中之条の住民たちと自分たちの間の結びつきをより強固に感じるようになっていった。

また、中之条の住民たちは、「わたし」たちの「家」に遊びにやってくるのは、観客に対して、自宅からもってきたものを紹介し、これまでどのように交換が行われてきたのか、「わたし」たちの代わりに率先して説明するようになっていった。さらには、「わたし」たちが説明せずとも、彼らが扉の前に立ち、ビエンナーレの観客を招き入れ、「わたし」たちは、すっかり説明を彼らに任せ、使い終わった食器を外につくった簡易水場で洗う作業を続けていることすらあった。

このように、中之条の住民たちもホストとなり、ビエンナーレの観客を招き入れていった。「わたし」たちと中之条の住民たちは、ともにこの元店舗であった「家」、そして家という場をつくった多くのゲストとホストのつながりを大切にしたい、いわば共同体のようなホストとなった。



図 4-12 県外からやってくる観客たち

多い時は 20 人ほどが一気に「家」に訪れる。(撮影: 2017 年 9 月 25 日 / 村上久美子)

中之条の住民だけによるゲストとホストのごっこ遊び

数日後「わたし」たちが去らなければいけない日の直前に、頻繁に遊びにきてくれた常連客である中之条の住民たちが「わたし」たちの家に集まってくれた。彼らは、「わたし」たちが去った後に「わたし」たち Willimann/Arai になってこの空間を引き継ぐことを提案してきた。

Willimann/Arai のユニフォームを着て、交換を続け、ビエンナーレの観客を招き入れ続けた彼ら[図 4-13]。その後毎日、メッセージと共に、彼らから写真や動画が届いた。そこから彼らが《ホスト》や《ゲスト》役になることを、まるでごっこ遊びのように楽しんでいる様子が伝わってきた。

彼らは、この空間にビエンナーレの観客を招くホスト役になったり、同じくユニフォーム

を着て、この空間に遊びにやってくるゲスト役になったりと、どちらか片方の固定の役におさまらず、自覚的に役割を入れ替えて遊びつづけていた。元電気屋店舗は、まるで劇場のようになり、ゲストとホストの役は、招くという能動的行為をするものと招かれるという受動的行為をするものという機能面だけがあえて形式的に残り、利益の交換といった側面は、消えていった。



図 4-13 ユニフォームをきた中之条の住民たちが新たな客を招き入れ続けた
(撮影: 2017 年 9 月 24 日 / 小池藤夫)

4.4.3 表現活動の考察まとめ

構えの変化の流れ

「わたし」たちは、ゲストとホストの役割を原動力に、中之条という土地や中之条の住民を相手に、生活必需品と頼みごとの交換生活の場をつくる芸術実践をおこなった。なぜなら、自分自身たちが内側に入ってゲストあるいはホストになることにより、自身のもっていた構えを探るとともに、相手のもつ構えとともに自己自身が揺らぎながら変化していく過程を、自身の実感とともに見つめる行為こそが、ゲストとホストのつながりを考察する手段だと考えたからである。

実践当初は、「わたし」たちは中之条の住民が《ゲストとホストは、互いの利益を、両者の約束事として、二者間で交換してつながっている》という構えをもった人々だと想定して

いた。

しかし、実際に実践を通す中で、返礼をこぼむホストと何度か出会い、はじめに想定した構えは、彼らではなく「わたし」たち自身のもつ構えだったということに気が付いた。

その後、住民からの交換としての頼みごとを行っている最中の住民との対話の経験を通し、ホストとゲストは、必ずしも一方的に行為をする・される者ではないと気づいた。また、些細な会話や対話を返礼にする住民と出会うことで、ともに過ごす時間やそこで生まれるつながりに、貸した物品と同等の価値を見出す構えがだんだんと「わたし」たちの中にも入っていった。

交換が進み、物が集まってきたことで、ようやく「生活」ができるようになり、元電気屋店舗を「わたし」たちは「家」だと感じるようになった。そこでホストとなり、見返りも求めずに住民たちを招き入れ続けるという構えを手に入れていった中で、住民との対話やつながりがさらに生まれた。

また、もらったものをさらに別の住民にお裾分けすることで、ホストとゲストの二者間内だけで交換の輪を開き、より大きな集まりへと輪を拡げることができるという構えへと変化にいたった。この試みにより、「わたし」たちはより多くの中之条の住民たちとのつながりを見出すことができた。

「家」は、朝から晩まで様々なお客さんが遊びに来て、部屋の中はいつも賑やかになっていった。中でも、子供たちが家に訪れた際は、夢中になって一緒に遊ぶことで、大人や子供、ゲストやホストといった役割の隔たりを超えた構えが入ってきた。

また、中之条の住民より「わたし」たちを気遣い選ばれた物を受け取ることによって、「わたし」たちの中に、互いの利益よりも、そこで生まれたつながりを大切にし、相手を思いやることで、自然とゲストとホストの役割が生まれる構えが入っていった。

そして、ピエンナーレの観客の存在により、中之条の住民と「わたし」たちは、ともに〈よそもの〉を無条件に招き入れ続けるという構えを手にし、共同体のような 1 つの集まりとなった。

最後に、「わたし」たちが去った後、中之条の住民たちは〈招く・招かれる〉の役割であえて遊んだ。彼らは、この「家」の中で、意図的に自らの行いの振る舞いや意味づけを変化させる主体性をもった構えを手に入れていった。

「わたし」たちと中之条の住民は、ゲストやホストの役割を行ったり来たり、あるいは時に忘れてすることで、構えを共有していき、さらに「わたし」たちが去った後は、彼ら自身の構えも変化していった。



図 4-14 招き入れた新たな客と共に遊ぶ中之条の地元の子供たち
(撮影: 2017 年 9 月 19 日 / 村上久美子)



図 4-15 「Willimann/Arai」役としてそれぞれが活動の主体となり、招き入れ続けた中之条の住民たち
(撮影: 2017 年 10 月 10 日 / 新井麻弓)

まとめ

「わたし」たちは、実践当初、ホストとゲストとは、《招くという能動的行為をするものと招かれるという受動的行為をするという機能性を持った、二者の間での利益の交換を行う役割》という構えを持ち、活動を始めた。しかし、芸術実践を通して段階的に、「わたし」たちの中に、ホストとゲストとは、《その都度の出会いとつながりを大切にすることで、自然発生する役割》という構えが入ってきた。この後者の構えは、もともとそれぞれの中之条

の住民がもっていた構えであり、彼らと出会い、時間を共有していく中で、幾つかの構えが「わたし」たちの中で複合されて、生まれていった。この構えにおいて、招く・招かれるという機能や互いの利益は二の次であり、また時にそれらはなくなることさえあった。また、構えの変化は、「わたし」たちだけではなく、中之条の住民にも起こっていった。構えの変化したもともと参加者であった彼らは、いつの間にか表現活動の主体となり、自らその空間・自身を取り巻く世界を変化させる能動性を獲得した。このことは、彼らが新たな彼ら自身と出会ったと言える。

この活動では、第2章2.3.2で紹介した香川さんとの事例のように、相手の構えが丸ごと一度に入ってきて、相手の一部になったのではなく、また香港のように、相手の構えが徐々に浸透する中で相手と繋がりをもったものとは異なる。「わたし」たちの中に、実践参加者となった相手も巻き込みながら、それぞれの相手の構えが段階的に複合されながら入り、実践参加者と「わたし」たちが共同体のような新たな集まりへとなったものであった。



図 4-16 「気軽によります」というお願いと交換された招き猫

「二人を彷彿させる」と中之条の住民が招き猫を二体持ってきた。

(撮影：2017 年 9 月 12 日 / 松尾宇人)

4.5 willimannarai「自己」紹介

ここでは、中之条の表現活動を終えて、互いの気づきの交換録を共有しながら、生まれた表現活動であるレクチャー・パフォーマンス《Reflection fig.1: Hospitality》の脚本から抜粋した一節を取り上げる。この考察は、第6章へと繋がる。

＊

皆さん、こんにちは！
ようこそ。ここで会いできてとてもうれしいです！
自己紹介もしたほうがいいですか？

私は、ウィリマンナライです。

…さて、他に何を話そう。

尋ねられなければ、
通常、私は自分のことを話しません。
私は1人の人間ですが、個人ではなく 複数でのみ存在します。
私は少なくとも4ついます。
時にはもっと
そして、ほとんどの場合2人です。

私はあなたが与えたものによって生きています。私はあなたの家具や物語の中に住んでいます。
私はあなたと自分を合わせます。
私はあなたのホストであり、同時にゲストです。
私の家は私のものではありません。
それは私を守りません。
しかし、それはあなたも守りません。
なぜなら、ここは何も保護されていないので。
たとえば、
プライバシー
または
所持品。

私はあなたの家出した息子と娘です、

あなたの孫娘
そして失われたパートナー。
私は付き添いです。介護者。
貸し出し用の女性と掛け布団。私はもろいです。
わたしは迷子です。
私はあなたの生徒であり、先生です。
あなたの観客。
あなたの証人。
私はあなたの庭師、あなたの料理人であり、そしてあなたのマッサージ師です。
私はあなたの芸能人です。
私はピエロです。動物園のサルです。
私はあなたの看護師でありながらパーソナルトレーナーであり栄養士です。
私はいつもあなたの言うことを聞いています。そして他のすべての人のことも。
わたしは
差異と時間の充足人です。
わたしは
ユニバーサルな一対の断片。
風の中の旗。
私は何でもないです。
私は空っぽです。
私は天使です、
私は寄生虫です。
私は偽りの義理の娘です。妄想のペテン師。悪戯好きの詐欺師、遊び人の盗人、誤った道へ
いく運転手、恐喝師、偽りの後継者
と魔女です。
私は女性の原理。
わたしは
他人です。
わたしは
まさにあなたの鏡です。
あなたがつくった影です。
そして、
わたしはたった今

消えました。

(Willimann/Arai レクチャーパフォーマンス 《Reflection fig.1: Hospitality》脚本他より抜粋 / 和訳: 新井

麻弓)

(以下、原文)

Hello!

Welcome to everyone, I'm very happy to have you here!

Maybe I should also introduce myself?

I am willimannarai.

Hmmm.... Well, what else shall I say –

If not asked,

usually I do not tell anything about myself.

I am characterless, colorless, and shapeable, adapting to every context.

I become the vessel into which I am poured.

I do not create anything. I'm a person but not an individual, and I exist only in plural:

I am at least four,

sometimes more,

and most likely two.

I live from what you give me. I live in your furniture and in your stories.

I align myself with you.

I am your host and your guest

at the same time.

My home does not belong to me.

It does not protect me.

But it does not protect you, neither.

Because there is nothing to be protected here

such as

privacy

or

possessions.

I am your runaway son and daughter,

your granddaughter

and lost partner.

I'm an attendant. Career.

A rental woman and comforter. I am vulnerable.

I am lost.

I am your pupil and your teacher.

Your Spectator.

Your Witness.

I am your gardener, your Cook, and your Masseuse.

I'm your entertainer.

I'm a Clown. I'm the monkey in the Zoo,

I'm your Nurse, personal trainer and nutritionist.

I'm the one who is always listening to you. And to everyone else.

I am

a gap- and time-filler.

I am

a universal set piece.

I am

a flag in the wind.

I am nothing.

I am empty.

I'm an angel,

I'm a parasite.

I'm a false daughter-in-law. A delusional cheat. A Swindler Trick thief Player Wrong-way driver Extortionist and deceitful inheritor
and a Witch.

I am THE FEMALE PRINCIPLE.

I am

THE OTHER

I am

just your mirror

Your projection.

I actually

just

disappeared.



図 4-17 willimannarai セルフポートレート

中之条での表現活動を通して、「わたし」たちは
二人での活動時に第3の人物になっていると意識し始める。

(撮影: 2017 年 11 月 / Willimann/Arai)

第 5 章

重なりに見える自分自身に向き合うー台湾・太魯閣国立公園

5.1 序文

第3章では、「自分を他者（相手）の構えの中においてみる」、第4章では、「相手と自分の構えを重なり合わせる」という試みにそれぞれ着目し、「なる」という体験について述べてきた。第5章では、《The gift exercise / Invitation 4》シリーズから、2015年に群馬県中之条にて行った《The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park（ギフト交換練習/招待 4.2：太魯閣国立公園）》という事例を取り上げ、その構えの重なりに見えてくる自分自身に向き合うという試みに着目し、「なる」という体験のもう1つの側面を探る。

なお、5章は、「2章2.4 論文の構成」で述べた通り、第3章、第4章と異なり、記述の内容上、まずここで取り上げる表現活動で使用された脚本の載せ、その後、概要、考察文と続き、最後に気づきの交換録を配置した。

5.2 《The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park

（ギフト交換練習/招待 4.2：太魯閣国立公園）》脚本（邦訳版）

原文執筆: ナツ・ヒジウ, 李尚喬, ニナ・ウィリマン, 新井麻弓

翻訳: 新井麻弓, 李尚喬, ナツ・ヒジウ

翻訳協力: 新井怜奈

李尚喬:

「私は何者なのか」という探究が始まる前に、いくつかのルールを破る必要があるかもしれません。従うべき振る舞い、話すべき言葉、記憶に残る歴史的な過去、それら全てが私を今の私にしているのです。もしかしたら、それらのガイドラインを慎重に守ってきた後も、私の小学校のあだ名はアメリカ人だったということを、伝える価値はあるかもしれません。

では、私は一体何者ですか？

ナツ・ヒジウ:

私は花蓮県秀林郷サカダン村出身のタロコ族です。1977年に私はサカダン歩道の道中で生まれ、幼少期はずっと1,100m以上の高地で、電気も外の世界へ繋がる道路もない場所で育ちました。そこは、台湾で唯一、産業道路に通じていない村です。

私たちは台湾の山岳先住民族の1つの部族であり、(現在の)太魯閣国立公園内で暮らしていました。しかし、台湾国民政府は1980年に医療や教育資源の不足を理由に、村全体を山の麓の指定した平地に移しました。しかし、そこには仕事はなく、平地生活の適応に苦勞する私たちは、先祖代々の土地に戻るために、毎回6時間かけて歩いて戻ることに耐え、自給自足の生活をしています。

山はタロコの子孫を養います。

李尚喬:

兄と私がまだ幼い頃、母はよく中国のおとぎ話を読んでくれました。学校では漢詩や中国文学を読みました。それから数年後、家族で中国の蘇州に旅行に行き、そこでどこにも懐かしく感じる瞬間に出くわしました。なぜ私はこんなにも異国の地の寺院や庭園や山のことを知っているのだろうか。私は故郷の埔里についての文献を何も読んだことがありませんでした。

教科書で、私たちは原住民が漢族の首狩りをするという話を習いました。

胡傳(Hu Chuan)は清朝の役人であり、台湾に赴任していました。1892 年、彼は埔里市民が先住民を虐殺し、その肉や骨を「野蛮な軟膏」の原料にし、75 グラムごとに 2NTD で販売されたことを記録しています。この軟膏は高級品とされていました。この記録、埔里に住む漢族系台湾人の「野蛮な歴史」、私が生まれながらにして受け継いだ歴史は、教科書には載っていません。

では、私は一体何者ですか？

ニナ・ウィリマン:

私はアルプスからそう遠くない中央ヨーロッパの平原の村で育ちました。

李尚喬:

「どこから来たの？」と彼らは親しげに尋ねてきます。

ニナ・ウィリマン:

「本当は、どこから来たの？」

李尚喬:

「ここだよ」私はぎこちなく答えました。

肌の色から判断されて「台湾人」のバッジをもらっている人たちがいて、それ以外の人たちはこの土地の暗い影のちらつきになるということですか。

彼らはそもそも存在していますか？

ニナ・ウィリマン:

私はスイスの白人女性です。

私のパスポートはほとんど全てのドアを開き、私の可動範囲と移動の自由は実質的には無制限です。

李尚喬:

私はこの島にとって見ず知らずの人です。私は自分自身にとって赤の他人です。

ニナ・ウィリマン:

私の国籍も私が白人であるという事実も、ヨーロッパの帝国主義と植民地主義の遺産の一部だということを示しています。

では私は、《どのように》そして《誰に向かって》これらの不当な特権を感謝すべきですか？

新井麻弓:

渋谷まで電車で 30 分。子持ちの東京都心勤務者が多く住む神奈川県住宅街にあるマンションで、私は育った。

李尚喬:

私は、島民の家系、閩南系台湾人の子孫です。

私は祖父母に日本風木造宿舎で育てられました。祖父は日本の本の箱を持っており、祖母は手提げ袋を「Kaban かばん」と呼んでいました。祖父は、ちょうど国民革命党軍が中国本土から台湾に逃れてきた時期に、中学校の教職に就くことになりました。任命状は日本語で書かれており、日本語と台湾語がしだいに禁止されていった数年間、なんとかその地位を維持し続けました。私は祖父がどの言語で教えていたのかは、決して知りませんでした。

新井麻弓:

祖父は私が物心ついた頃には、すでに脳卒中で目も身体も不自由で言葉を話せなくなっていた。祖父は、戦時中、空軍の航空機設計士だった。機械好きが転じて、アマチュアカメラマンでもあった。

祖父を訪ねに行く度に、私たちはいつも 35mm フィルムカメラで、色々なものを一緒に撮影した。祖父は、ジェスチャーと「あゝー」や「うゝー」といったような声で、私にカメラに対する愛情と撮影することの楽しさを教えてくれた。とにかく沢山の写真を撮ったということ自体は覚えているが、唯一はっきりと記憶しているのは、祖父と母と一緒に老人ホームの庭のベンチに座って目の前の窓ガラスに反射する私たちの像を、私は写したということ。その反射したガラスには、カメラを構えた祖父の姿もあった。

李尚喬:

祖父母と私の間には、いつも言葉の壁がありました。標準中国語や英語をより流暢に話すことで、台湾語（台湾閩南語）を私の「母国語」にする資格を失ってしまったのでしょうか。

では、私は一体何者ですか？

ニナ・ウィリマン:

初めて台湾に訪れた時、台湾先住民の多くがキリスト教を信仰していることに驚きました。私は彼らの言葉を話すことはできませんし、彼らも私の言葉を話すことはできませんが、キリスト教を通して私たちは何か — 物語や想像に共感できる特定の価値観 — を共有し、そしてまたそれらを通して物事を理解することができると感じました。この「思いがけない親しみやすさ」を発見したことで、自分が育ったキリスト教の環境が、世俗的なものでしたが、私の世界の捉え方にどれだけ影響を与えていたのか、そして自分がどれだけそれを意識していなかったのかを思い知らされました。

李尚喬:

言語は私たちを形作ります。

土地が私たちを形作ります。

生活環境は、私たちを形作ります。

ニナ・ウィリマン:

西洋から来たキリスト教宣教師たちは、ラテン語のアルファベットを使って聖書を先住民の言語に翻訳しました。

ナツ・ヒジウ:

台湾先住民に「唯一の真の神」の信仰が伝わってくる前、私たちは先祖代々の精霊であるウトゥクス(Utux)とガヤ(Gaya)の伝統的な規則を信仰していました。私たちは祖霊こそが私たちの真の神であると信じていました。子供の病気や怪我、幽霊の憑依など、家族に不幸が起こると、人々はその原因を知るために呪術師を頼りました。呪術師は竹や竹の箸を使って、亡き長老に相談しました。また、人々は呪術師を介して神々に尋ねました。

自分たちの土地と権利と仲間を守るために、命を賭けて戦い、首狩りの儀式を行いました。私たちは呪術師を招いて、首狩りの行いを祝い、歌を歌い、酒を飲んでその首の霊を戒めま
す。戦士がより多くの人を狩ることができるよう、死者の家族の帰還を祈りました。これは
良い評判を立たせと高い名声を得て、強さを証明し、侵入者を追い払うためのものでした。
倫理に反し、怠惰で、ガヤを軽視した人々には厳しい罰則がありました。タロコの人々は、
敬愛の念と恐れを抱きながら、祖霊とガヤの遺産を崇拝しました。

タロコの人々は音声記号で示された教えと主流教育を受け入れるようになって以降、ガヤ
と聖書の教えの間に共通点が発見しました。タロコ族の女性チワン(Ciwang) - 信仰の母 -
はキリスト教を説き始めました。こうやってタロコ族の宗教は、祖先の霊から大自然万物に
おける唯一の真の神へと変化していきました。

何十年もの間、タロコ族は日本政府と国民党政権に支配されてきました。幾度かの民族戦
争、戦争犯罪、民族グループ間の紛争、植民地政府による虐殺を経て、ガヤに忠実なタロコ
の人々は祖先の霊をさらに敬いました。

私の祖父はタロコの第二世代の宣教師でした。私は第 5 世代のキリスト教信者に属してい
ます。私はキリスト教の教えとガヤの伝統的な信仰との間に類似点を見つけました。そこ
には矛盾も冒涇もありますが、補完的な力があります。

新井麻弓：

1909 年、台湾総督府は柵で台湾の山地全体を包囲した。この隘勇線と呼ばれた柵は、高压
鉄条網が使用されており総延長 470km にもなった。山地にすむ先住民の強い抵抗のため、
その時点までこの包囲された範囲は日本軍統治下にできていなかった。総督府は、五箇年理
蕃計画をつくり、1909 年から 1914 年にかけてこの隘勇線を絶えず圧縮し続け、先住民族
の生活圏を狭め、その武装抵抗を誘発した。1914 年、日本軍は台湾中央山脈の西側と東側
の双方から兵力を投入し、最後の包囲圧縮を行った。この戦闘は 4 ヶ月間続いた。それは、
タロコ族とのものであった。

この五箇年理蕃計画の主な目的の 1 つは、台湾の山地に無尽蔵に繁茂していたクスノキだ
った。クスノキは樟腦の原料であり、チップを水蒸気蒸留することで得られる。当時、台湾
は世界的に樟腦の主要な生産国であった。1899 年に台湾総督府は樟腦に対する専売制を導
入し、欧米諸国に大量な樟腦の輸出を開始した。そこで得られた利益は総督府の歳入の 19

パーセントを占め、主たる財源となった。

樟脳は、医薬品、防虫剤、宗教上に必要な香料などの主成分であった。

1870 年、アメリカでセルロイドという名前がつけられた新しい素材が発明された。この素材は、歴史上初めての人工合成樹脂であり、ニトロセルロースと樟脳を合成して作られた。柔軟性が高く、加工しやすいセルロイドは、その後様々な工業製品の原材料となった。1889 年、それまでガラスや金属板、紙などの硬い素材でしか実現してなかった写真の支持体が、イーストマン・コダック社の開発によって、セルロイドを原材料にしたロールフィルムとなった。この発明により、これまでの硬い素材のフィルムでは不可能であった動画撮影が可能になり、映画産業の発展のための重要な第一歩となった。

デジタル技術の発達と共に成長した世代の私だが、今でもフィルムを日常的に触る生活を続けている。35mm フィルムの 24 枚やスーパー 8 の 3 分 20 秒などの制限は、私の身体感覚を研ぎ澄まさせる。ある瞬間の記憶は、撮影という行為を通して写された結果としてではなく、身体に強く刻まれる。その記憶された瞬間は、私の眼差しであり、時に私が撮影した誰かの眼差しでもある。眼差しには、その時の私なりの、そして誰かなりの決意がある。頭の中でカメラは拳銃に変わる。シャッターはトリガーだ。私はトリガーを引く。私の視線は、誰かの黒目によって跳ね返される、あの窓ガラスのように。

ガラスに映った私は、何者か。

私は、拳銃を持ったことも触ったこともない。

ニナ・ウィリマン:

私の両親は 1980 年代の環境保護運動に参加していました。両親は、社会からドロップアウトした若者であり、急速に成長する資本主義的消費社会に代わるものを探し、持続可能な自給自足のライフスタイルに憧れを抱いていました。「原点回帰」の旅の途中で、両親は小さな村のはずれに定住を決め、有機農場を作りました。

私は、成長していく中で、自然は人間の影響によって脅かされており、それゆえに保護する必要があるということを学びました。

ナツ・ヒジウ:

歴史的な記録によると、サカダンのタロコ族は 241 年前からこの土地に住んでいました。国立公園は私が子供の頃、1986 年 11 月 28 日に私たちの村の下に設立されました。名前は、この土地を地元とするタロコ族にちなんで付けられました。

ニナ・ウィリマン:

ユーロパーク連盟(EUROPARC Federation)の声明によると、国立公園は「後世のために野生の自然を保護する場所であり、国家の誇りの象徴である」としています

ナツ・ヒジウ:

国立公園に、私たちは山の下から村へと帰宅できるように道路の建設を申請しました。彼らは、環境保護と(山の上に)「居住地」がないことを理由に、この申請を却下しました。私たちの狩猟権は制限されており、結果的に動物の数が増え、農作物の生産が脅かされています。

ニナ・ウィリマン:

人間の影響から自然を守るという環境保護主義者の使命は、主に西洋的な自然観に基づいています。自然の概念とは本質的に人間の文化と異なる、という考え方です。

「文明化」という植民地計画も、この分類に基づいていました。つまり一方は、自然を支配することで自然から解放された「文明人」であり、他方は非西洋人のすべての民族を含む「未開」を表す「原野」としての自然でした。

このような「文明」と「未開」の分類は著しく問題があり、人間の区別に適用する場合には人種差別になるということは、今日ではよく知られています。

しかし、自然と文化の二分法の文脈で使用される場合には、ほとんど疑われてきませんでした。一方、現代の視点からは、人間の与えた影響と関わりのもたない「野生の自然」を想像し続けることは馬鹿げているようでもあります。気候変動は人為的なものであり、地球全体に影響を及ぼしています。それは国や国境などは気にしません。

ナツ・ヒジウ:

国立公園が公園内の環境保護活動の参加を先住民に促すことに対して、私たちは誠意も善意も感じられません。

ニナ・ウィリマン:

国民とは誰のことですか？

ナツ・ヒジウ:

歴史的背景を考える限り、私たちはホストであり、ホストは自分たちの土地を改良する権利を持つべきです。そして管理の面では、政府はこの領域におけるゲストであるべきです。国

立公園の設立は、自然資源を維持するために地元住民を支援すべきです。

ニナ・ウィリマン:

産業化の過程の中で、「野生の自然」は飼い慣らされていきます。

ナツ・ヒジウ:

国立公園は私たちの居住権を強制的に制限しています。私たちは、自分たちが所有する木を切ることもできません。私たちは、自分たちが望む家を建てることもできません。私たちは罰金や罰則に苦しんでいます。国立公園は観光客のために道路を建設することはできますが、私たちは彼ら観光客の滞在場所をつくることもできません。国立公園は観光地の施設や設備を拡張することはできますが、私たちは法律による権利を制限と観光客に提供するサービスの規制によって、差別を受けています。

ニナ・ウィリマン:

私物化され、管理され、保存されることで自然は、脅威を感じさせなくなり、疎外された都市生活者の憩いの場となりました。

ナツ・ヒジウ:

これは土地を手に入れたり、所有したりすることではありません。
私たちは自分たちが生まれた土地を大事にする責任があるのです。

ニナ・ウィリマン:

西洋の環境保護の概念は、人間の活動が自然破壊につながることは必然であるという結論に基づいています。これは、自然を支配することと搾取することに基盤とする西洋社会とそれが発展させてきた資本主義システムの場合には、間違いなく真実です。しかし、この結論は普遍的な真理として有効ですか。それは果たして全ての人類に当てはめることができますか。

ナツ・ヒジウ:

植民地政府は、現地の人間の文化や歴史を尊重することを拒んでいます。ルールや制限を課し、服従を求めますが、地元住民の意見は無視します。

土地の暴力的な占領は許されません。しかし、タロコ族の元々の領域の場合、それが起こったことは紛れもない事実です。

もしもあなたの土地が尊重されず、法律によって自由が制限されているとしたら、あなたはそれを受け入れることができますか？

私たちは国立公園が存在する前からここにいました。公園は、ここに設立されるべきではなかったのです。私たちは、彼らが大禮⁴⁹や大同⁵⁰に住んでいる人々の苦しみを理解して、私たちに自由を与えるという点でもっと柔軟になってほしいと心から願っています。

李尚喬:

2017 年以來、山の上でも下でも、タロコの人たちの家に招かれるようになりました。彼らが(中国語の)方言で会話を交わしている時は、ほとんど理解できたような気になります。

87 歳の男性が 14 回も崖に落ち、そのたびに奇跡的に助かったことを知りました。人々は、「彼には何か特別なものがある」「精霊が見守っている」と言っていました。山で帰郷の旅路のことが話される時は、頻繁に「崖」という言葉は話題に上ります。タロコ語で「崖」という名前の犬がいるほどです。

私は自分自身が、彼らと一緒にいる漢族系台湾人であると知っています。それ以外には、まだ何者なのかわかりません。

新井麻弓:

2018 年 7 月 31 日午後 7 時半頃、サカダン。日も暮れて風呂もすませ、寝室で化粧水をつけながらニナと雑談をする。そこにナツの母、ヤヤがポンプ付きの小さなガラス瓶を持ってやって来る。

「これ、つける。」

ヤヤは子供の頃、日本語教育を受けた両親が話しているのをよく聞き、日本語を少し覚えた。私とヤヤは、その少しの日本語とヤヤから教わったほんの少しの中国語とほんの少しのタロコ語、表情、そしてノートを使ったドロージョウと漢字の混ざった言語で会話をする。

ニナ・ウィリマン:

ヤヤはサカダン村でゲストハウスを経営している。彼女の主なゲストは、国立公園を訪れ 1100 メートル登る勇気のあるトレッキング観光客です。

⁴⁹ サカダン村の隣村ホホス村の中国語名称。

⁵⁰ サカダン村の中国語名称。

新井麻弓：

ヤヤから渡された瓶は曇り加工がされており、中が見えにくいがそこにはオレンジと濃い茶色の液体が入っていることがわかる。ヤヤは、その瓶の液体を手のひらに出して、腕を撫でるジェスチャーを私たちに見せる。私はそれを両腕につけた。その液体は、さらっとしたつけ心地でスッと皮膚に浸透した。柑橘系のフルーツと木の匂いの混じったようないい匂いが、私をホッとさせた。

「いい香り」と私は言った。ヤヤは「そうそう、ふふふ」と言って、ニコッと笑った。

そしてヤヤは続けて、「マユミ あんた いつも心配ばかり あー 心配いらない 心配いらない」と言って、彼女は部屋を去った。

あとで、私たちはあれがクスノキの成分を含んだオイルだったということを知る。

ニナ・ウィリマン：

「良いゲスト」になるには何が必要ですかという私たちの質問に対して、ヤヤは答える。「良いゲストは、自分たちが招かれる場所に対して、その場をいるある種の責任を感じているでしょうね。そこであなたがどこことなく家にいるように感じるならば、あなたはその場所を大事にする方法も知っているはずです。」

李尚喬：

言語は私たちを形作ります。

土地が私たちを形作ります。

生活環境は、私たちを形作ります。

ナツ・ヒジウ：

先祖から預かった土地を維持することは、私たちの責任であり義務でもあります。

ニナ・ウィリマン：

どうすれば、この星において私たちは「良いゲスト」になれるのだろうか？



図 5-1 大日本帝國陸地測量部が作製した地図における太魯閣国立公園の領域

大正 9 年に日本陸軍参謀本部の外局である陸地測量部によって作製された地図から現在の太魯閣国立公園の領域を抜き出した。山岳先住民族の抵抗と険しい地形のため、長らく測量がすすまなかった山深い内陸側が、白紙のままになっている。地図中央より右上の沿岸部近くの山間にヒジウが生まれ、

そして「わたし」たちが滞在していた「サカタン社」の字が見える。

(引用：大日本帝國陸地測量部 『五十万分一輿地図』 東京、1920 年。

(所蔵:アメリカ議会図書館/米国))

5.3 表現活動 3 《The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park （ギフト交換練習/招待 4.2：太魯閣国立公園）》

概要

- (1) 表現活動の主体：ニナ・ウィリマン、「わたし」

表現活動の参加者： ナツ・ヒジウ、李尚喬

ウィリマンと私は、台湾先住民族⁵¹の1つ・タロコTruku(トゥルク)族の文化人類学者であり彼女自身もタロコ族であるナツ・ヒジウと漢民族系台湾人の脚本家/翻訳家である李尚喬を招いた。

表現活動の観客： 朗読会（リーディングパフォーマンス）に訪れた人々

- (2) 活動期間：2018年7月27日から2020年現在も進行中

ウィリマンと私は、2017年7月から台湾・太魯閣国立公園を拠点に行ったアーティスト・イン・レジデンス森人ー太魯閣藝駐計劃に招聘され、参加作家として初めて台湾に足を踏み入れる。そこで、タロコの人々の家に招かれ滞在しながら、ホストをしてくれたヒジウやヒジウの母ややなど家族とともに、表現活動実践〈The gift exercise / Invitation 4.1: Sakadang/Datong〉を行った。以来、毎年台湾に帰り、プロジェクトシリーズ〈The gift exercise / Invitation 4: Taiwan〉を進めている。本節で取り上げる〈The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park〉も、一連のプロジェクト内の1つの表現活動実践である。2018年に行い、2020年現在も発表を続けている。

- (3) 発表地： 台湾・太魯閣国立公園、TheCube Project Space台北（2018年8月

Tsung-Yeh Arts & Cultural Center/台南（2019年10月）、臺北市立美術館/台北（2020年2月）、六龜警備線 /高雄（2020年2月）

- (4) 活動概要：

太魯閣国立公園での各自の経験を背景に、個人的な視点で「領域」に関して綴った文章を持ち寄り、組み合わせ再構成する。タロコ語・中国語・英語・日本語による4つの異なる言語で書かれた1つの文章を脚本とし、中国語、英語の全文翻訳を行った。「わたし」たちは、それを観客の前で朗読するという行為と本にして、観客が文章として読むという2種類の発表方法をとった。「わたし」たちはこの朗読会を、レクチャーパフォーマンスあるいはリーディングパフォーマンスとよぶ。リーディ

⁵¹ 台湾では、「先」は「既になくなってしまった」という意味を含むため、「原住民」という言葉が使われるが、本稿では日本語表記に合わせて「先住民」を使用することとする。

ングパフォーマンスでは、4人が観客の前でそれぞれが書いたパートをそれぞれの言語で読み上げる。また、4言語の脚本、その台湾中国語訳・英訳、そして1724年から2018年に8カ国で作成された31枚の太魯閣国立公園の地図で構成された本も併せて製作した。



図 5-2 《The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park》記録写真

レクチャー・パフォーマンスを初めて公演した際の記録写真。台北にあるギャラリーTheCube Project Space Taipei にて。(撮影：2018年8月11日 / Dorothy WONG Ka Chung)

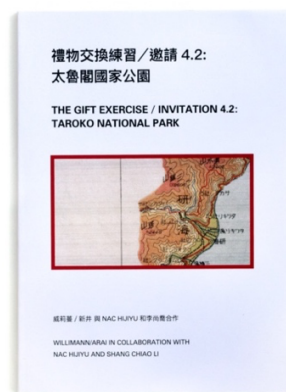


図5-3 『禮物交換練習 / 邀請 4.2: 太魯閣国家公園 The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park』脚本表紙 4

言語の脚本、台湾中国語訳・英訳、そして1724年から2018年に8カ国で作成された31枚の様々な太魯閣国立公園の地図で構成された本を製作。レクチャー・パフォーマンス後、希望した観客は持って帰り、家でも再度パフォーマンスを振り返れるようにした。(Willimann/Arai、ナツ・ヒジウ、李尚喬著、2018年。写真は、2020年2月に台北にて印刷した第5版のもの。)

5.4 表現活動の考察文

5.4.1 表現活動の背景

1.1 国立公園という歪んだ像

2017年7月末、ウィリマンと「わたし」は初めて台湾を訪れ、約17日間、山岳民族のタロコの人々にホストしてもらいながら、彼らの家がある太魯閣国立公園内の山の上のサカダン村と山の下に滞在した。

太魯閣国立公園

彼らの家は、2つある。1つは、彼らがもともと住んでいた場所で、もう1つは、彼らが住まなければいけなくなってしまった場所だ。国は山の上にあった学校や警察署、教会を山の下に移動させ、1980年には医療や教育資源の不足、自然保護を名目に、彼らは強制的に山の下に降りなければいけなくなった。国は、山の下土地と家を引き換えに、彼らは賃貸料を払わせた。しかし、長い間山の上で、狩猟や農耕を糧に生活してきた彼らにとって、山の下での生活は苦しく、結局彼らは半ば違法な形で片道6時間以上かけ、山の上と下を行ったり来たりする生活となっていった。全ては、1986年の国立公園制定にむけて行われていた。

この生活は、しだいに家族や村内の人々のつながりを割いていった。

1980年代に子供だった世代の人々は、山の下にしかない小学校に通うため、幼い頃から親元を離れて生活し、親は子供達を養うために、山の上で農業や狩猟を行った。ヒジウの母ヤヤは、夫を若い時になくし、6人の子供を1人で育てるために、当時農業の副業として、とても高価に売買されていた蘭の球根を、山の奥地で野営をしながら探し歩いたとって、山の上の自分の庭に埋めたいくつかの残りの蘭をそっと見せてくれた。ヤヤは、自分が台湾の業者に売った球根は、日本で2.5倍の値段で売られていたとって、ノートに数字を書いた。今は、もう蘭の採取は禁止されている。

また、タロコの人々は皆1920年代から代々キリスト教徒であり⁵²、山の上に戻った村人の

⁵² 日本の統治下の時代、台湾総督府による神道教育を逃れ、多くの先住民族は、それまでの先祖崇拜や精霊の信仰からキリスト教徒となっていった。サカダンや隣村のホホスに住むタロコの人々も、1920年代長老派教会の宣教師から直接教えを受けた信仰の母と呼ばれるチワン Ciwan によって、秘密裏に広まり、皆熱心な信仰者となった。当時、チワンがその後牧師となるフーワット Huwat やウィラン Wilang に隠れて信仰を伝えたとされる洞窟は、現在の山の下教会の後ろであり、残っている。その後、代々キリスト教の教えはつながり、ヒジウは、第5世代目にあたる。ちなみに、台湾にやってきた宣教師は、台南に残る台湾最古の教会である太平境馬雅各紀念教会の石碑によるとイギリス人およびカナダ人とされる。一方、タロコの人々の間では、チワンと会った宣教師は、アメリカ人であったといわれている。彼ら

中でも、信仰心に厚く礼拝のために毎週山の下の教会へ戻る人々と、それぞれの理由で戻らない人々との間で亀裂が生じた。



図 5-4 滞在していたタロコのホスト・ヤヤの家の一部

いつもみんなで集まって食事をする小屋の中から。ヤヤは、村の中でも特に敬虔深いキリスト教徒であり、山の下にある教会の1つをまとめている。

(撮影: 2018 年 7 月 31 日 / 新井麻弓)

その他には、生計を立てるために林業を行うものと反対する者の間でも亀裂が生じた。国は、当時、山の上に繁茂していた檜などの高級木材の伐採を輸出のために率先して行っていた。この伐採は、材が無くなるまで続き、その後1986年の国立公園制定に至った。

また、山の地質に目をつけたセメント会社は、国との癒着によって、国立公園制定後も観光客に見えにくい山の反対側を、毎日削っていつている。その様子は、山を登りサカダンへ続く道の途中で、時折山を崩す大きな音とパツクリと削られた灰色の表面を見せた山とともによく見ることができる。当然いくらかのタロコの人々もそこで、生計を立てるために働きに行っており、その一方で山を崩すことに断固反対するタロコの人々もいる。

によると、それは太平洋戦争前の日本に対するアメリカ人の戦略の1つであったという。しかし、当時まだ文字を持たなかったタロコの人々は、それらの歴史を記述として残してはいない。戦後、タロコの人々は、アメリカ人宣教師ラルフ・コーヴェル Ralph Covell(タロコ名は、Yudaw Watan)氏の協力のもと、タロコの口頭言語をローマ字で書記言語化し、聖書の翻訳を行う。それにより、台湾先住民族の中でもいち早く、書記言語の導入がおこった。(参照: 臺灣聖經公會 『太魯閣語聖經 = Patas Suyang Kari Ttuku: 現代臺灣太魯閣語聖經: The Truku Bible: Today's Taiwan Truku Version』 臺北: 臺灣聖經公會、2005年。)



図 5-5 サカダン村へ続く道・サカダン林道から望む向かいの山肌

段上に削られ、その上に新たに植林された様子が見える。(撮影: 2019 年 9 月 13 日 / 新井麻弓)

国立公園制定後は、山の上で農業をおこなっていた村人たちの間では、自分たちの家を解放し、時折やってくる登山客を招き入れ、生計の足しとして、山小屋としても営みが始まる。それにより、たった数軒ほどしかない村の中で客の取り合いが起こり、表面上は親しい隣人同士付き合いがあっても、どうしても裏では損得勘定で互いのうわさ話やいがみ合いが起こってしまっている。

次高タロコ国立公園

こういった国民党政権による戦後の太魯閣国立公園制定の背後には、戦前の台湾総督府による1937年に制定された「次高タロコ国立公園」があった。総督府内部においても、景色の良さを生かして国民の保養地を設け、観光客誘致による経済発展を主張する側と、人工施設による自然破壊を拒み、自然保護を強調する側とで意見が割れていた⁵³。

また、本論文の「5.2 〈The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park〉脚本」でも述べたように、この国立公園制定以前には、19世紀後半に西洋で発明された世界で初の人工合成樹脂素材であるセルロイドの存在により、20世紀初頭にその原料となる樟木の伐採と植林が台湾の山地で盛んにおこなわれた。当時、台湾は世界的に樟木の主要原産国であった。

しかし、ある地点から奥地へは、山岳先住民族の強い抵抗のため、なかなか思うようには進まず、最終的に先住民族を統治することと、樟木の伐採を目的に、総督府は1909年から

⁵³ 東啓 劉、油井正昭 「第二次世界大戦以前における台湾国立公園の成立に関する研究」『ランドスケープ研究』 63 巻、5 号、2000 年。

1914年にかけて五箇年理蕃計画という戦争を起こす。元・次高タロコ国立公園および現・太魯閣国立公園エリアは、最終戦闘地であり、太魯閣戦争とよばれ、タロコの人々も日本軍も多くの人々がこの地で命を落とした⁵⁴。この凄まじい戦いを通して、日本は台湾の山岳地帯を強引に占領していった。

この太魯閣先生のことは、当時日本軍がおさめた写真を載せた本を写真でさらに写されたものや以前村を訪れた漢族系台湾人の歴史学者が残していった資料とともに、今でも村の人に代々語り継がれている。ヤヤやヒジウやヤヤのいとこのユリは、「わたし」たちを集めて、それらをみせ、原本の写真の隅に小さく書かれた日本語の文語体の意味を「わたし」に聞いてきた。

サカダンにあるユリの家の敷地内には、太魯閣戦争後に建てられた国民学校の日本人の先生が住んでいた家の風呂場が残っている。ユリは草むらを分け入って、ある日案内してくれた。風呂場周りの分厚いコンクリート塀だけがどうしても取り壊しきれなかったようで、そこだけしっかりと残っていた。周囲や中、塀にまでびっしりと様々な種類の植物が生い茂り、風呂場だと言われなければなかなか想像しづらいものであった。だが、タロコの人々は、以前は竹のみで、現在では竹とトタンと木の板で家をつくるため、少なくとも「タロコの人々のものではない」ということは感じられた。



図 5-6 サカダン村に残るかつて日本人の先生が住んでいた家の風呂場跡

分厚いコンクリート塀とタロコの村の人が最近通した水道管とのコントラストが強い。

(撮影: 2017 年 8 月 2 日 / 新井麻弓)

Skadang

⁵⁴ 徐如林、楊南郡 『合歡越嶺道：太魯閣戦争與天險之路』 臺北：行政院農業委員會林務局、2016 年。

さらに日本軍による山岳地域の占領が始まる以前、タロコ族を含む山岳民族には、本論文の「5.2 〈The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park〉 脚本」内にてヒジウが記しているように、宗教的儀式と結びついた首狩りの風習があり、村同士で自分たちの土地や仲間を守るために、頻繁に小規模の争いが起こっていた。

ヤヤの畑

こうした様々な種類のいがみ合いの歴史を学んでいった一方で、ヤヤの畑を通して異なる種とのより広い視野をもった結びつきについて教わった。

ある日の夜、「わたし」たちは山の上で夕飯を済まして食器を片付けていると、ヤヤとヒジウが、食器の片付けはあとでいいので、こっちにおいでと、暗闇を懐中電灯で照らしながら、別の家の方に連れて行かれた。そこでは、村の住民の一人、ミウが「わたし」の身長ほどある動物を屋根から吊るして、1mほどの大きなのこぎりで解体していた。毛皮はすでに剥がされているので、何の動物かはすぐには分からなかった。ヒジウが、ミウの近くにあった大鍋を指さした。大きな牙をもつ猪の顔があった。目は透き通った薄い水色になって、沸騰した水の中で震えていた。ヤヤの畑の罫にかかった大猪だった。動物による農作物被害は日常茶飯事で、特に週末お祈りのため山の下へ降りると、週明けには、ちょうど収穫時期を迎え始めた多くの作物は食べられてしまっていた。ヤヤは罫の金網を置いてあるが、動物は賢いので、滅多にかからないそうで、猪がかかるのは1年に1度くらいだ、とヒジウは話した。「わたし」たちは、ホースを持ってきて、ヤヤとともに取り出した臓器を水洗いする。ヤヤは手際よく猪の腸を手に取り、先端をみつけると、そこにホースと差し込んで、反対側から中に詰まっていた消化中だった緑色の泥のようなものが大量にでてきた。ヤヤは、これは全部わたしの畑のサツマイモだといった。ヤヤは、大きな肝臓のかたまりを手で取り、分厚い包丁で薄く1枚切ると、持ってきた塩の袋につけ、取り出した。「わたし」にそれを差し出す。「わたし」は、それを口に入れて、噛む。レバーは、普段苦手で味付けの濃いものしか好んで食べてこなかったが、それは、口に入れた瞬間に新鮮さが伝わってきた。旨かった。今朝まで生きていた血の味が口いっぱい広がる。人間もその他の生物も、調和も征服もせずに、この大地の上にもともに生きているのだと感じた。



図 5-7 畑を荒らす動物除けの罠に捕まった大猪の解体

腸からは、消化中だったヤヤの畑のサツマイモが大量に詰まっていた。

(撮影: 2018 年 8 月 13 日 / 新井麻弓)

タロコの人々が山から追い出されていったように、国家という枠組みの中で文明化という名のもと、経済的価値基準ばかりが優先され、人間と土や森、その他多くの生き物とのつながりが途切れていった。また、本来追い出された側であったタロコの人々も、生きていくために、そういった状況に追いやった側に自ら加担せざるを得なく、人および国家と大地とのゲスト・ホスト関係はより入り組んだものへと変化していつている。

一方、ヤヤと畑のサツマイモと罠にはまった大猪のように、私たち生き物たちは、大気や水そして大地を介してつながっている。大地を前にして、私たちはみな、等しくゲストであり、奪ったり奪え返したりしながらも、完全に自身の統治下にすることもなく、ともに生きている。「わたし」にそういった構えが、猪の腸の中の消化中だったサツマイモを洗い、肝臓を口にし、猪の血が自分の身体に染み込むことによって、入ってきた。

この生き物同士がつながっているという構えが「わたし」のなかに入ってくることによって、大地ではなく国家が握るホストという役割に対し、ますます違和感をもつていった。そのゲストには人間しか含まれておらず、またこの関係性によって、人間をふくむ多種多様な生き物や人間同士の横のつながりが途切れてしまっているという感覚をもった。

1.2 なぜ、この芸術実践をおこなったのか

入り組んだゲストとホストの関係

「わたし」たちは、タロコの人々のゲストとなり、山の上でともに過ごすことで、太魯閣国立公園の大地やタロコの人々がこれまで通ってきた道のりを知っていった。そうすることで、歴史的に国家が大地を、その地に生きるものたちとは切り離れたやり方で治めようとすることに對して違和感をもっていった。「わたし」たちは、日本人・西洋人として、こうした国家の手法を押し進めた当事者の一人であり、また同時にこの歴史に巻きこまれていた一人でもあるという認識をもった上で、その違和感を、表現活動を行う力とした。

「わたし」たちは、その地に生きる多種多様な動植物とのつながるため、今回は太魯閣国立公園において身近な存在であるヒジウたちをその相手と見立て、彼らとともに表現活動実践を行った。

i. 〈The gift exercise / Invitation 4.1: Sakadang/Datong〉

2017年には、「わたし」たちは、ヤヤやヒジウ、ヒジウの家族とともに、ノートの上で、ドローイング、漢字、わずかな日本語と英語の単語の混ざった共通言語で、この入り組んだゲストとホストの歴史や現在の状況をおしえてもらったり、話し合ったりした。そして、その対話の痕跡で《地図》をつくった。

《地図》

地図という手法を選択した理由は、活動開始時点では、ウィリマンと「わたし」の中に明確な意識はなく、直観で地図がいいと感じていた。しかし、作り終えた後には、いくつかの点が見えてきた。

まず、タロコの人々と山の中を歩いた経験をもとに入って来た構えを示す手法として地図という媒体が適していると感じたこと。そして、これまで多くの太魯閣国立公園地域を含んだ地図がタロコ以外の人々から製作されてきたことに對して、これまでのタロコの歴史を重ねた上で、より個人的な地図をつくる事に意味を感じたこと。

また、自らその《地》の《図》をともに描くことで、「わたし」たちが巻き込まれ、背負っている枠組みを超えて、互いにつながることができるを見出すことができた。

地図を作り終えた後、「わたし」たちは主に台北など都市から観客をよび、サカダンへのハイキングツアーをタロコの人々とともに開催した。観客は、おもに先住民族社会に関心があっても普段関わる機会が少ない漢族系台湾人であった。道中配布した地図を通して、観客とタロコの人々、観客と「わたし」たちとの間に対話が生まれていった。



図 5-8 ヒジウの息子ユブがキョンを狩るテクニックを伝えてくれる様子

少ない言葉とドローイングが、「わたし」に臨場感のある狩りの様子を迫体験させる。

(撮影: 2017 年 8 月 7 日 / ニナ・ウィリマン)

ii. 〈The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park〉

ヒジウはこの2017年の実践を経て、再び「わたし」たちとともに表現活動を行いたいと、提案をしてきた。彼女は前年の実践を通して、自分たちの置かれている状況や歴史の対話でき、普段関わることの少ない漢族系台湾人の人々となつながらすることができたと驚き、喜んでいた。また、そこで生まれたつながりによって、「もしかしたら自分たちの手によって、この現状に変化を起こせるかもしれない」と背中を押された感じがしたと話した。(彼女は、その後、徐々に消えつつあるタロコの文化を自ら研究し、次の世代に残していくための活動を進めていくことになった⁵⁵。)

そこで、2018年はヒジウと李を共同実践者として招き、「どうすれば、この大地において『いいゲスト』になれるのだろうか?」「『いいゲスト』とは一体なんなのだろうか?」という問いをもとに、表現活動をおこなった。それは、それぞれの太魯閣国立公園での各

⁵⁵ 90年代以降、政府が変わり、原住民族人権運動の広がりもあって、現在では政府も積極的に先住民族の「文化」を残す支援している。しかし、そこで扱われる「文化」とは、ホテルでの先住民族の少女たちを集めた踊りの発表や、各先住民族の伝統衣装を纏ったキャラクターグッズなど、外客誘致など観光事業と結びついた外向けにデザインされたものを見かけることが多い。ただし、そういった動きも後押しし、例えば太魯閣国立公園ではひっきりなしに大型国内観光バスは、訪れている。また、都市部に住む若者を中心に、「先住民族=かっこいい」という認識が広まっているのも事実である。一方、ヒジウは、2018年に花蓮県にある東華大学民族文化人類学科の博士課程に入学し、さらに現在は台湾国内の様々な場所で、タロコ語教師として活動している。また、家族で演劇グループを組み、台湾の様々な先住民族の人々に対して、先住民族社会の内部で事故の多発している山の上での飲酒運転に対する注意喚起など、演劇を通して種族の違いを超えて問題を共有し、演劇コンクールにでるなど、精力的に活動をつづけている。

自の経験をもとに、それぞれの言語で「領域」というテーマで文章を綴る活動となっていた。

「わたし」たちは、大地と国家の入り組んだ関係により、切れてしまっていた人間を含む多種多様な生き物を、今回は、ヒジウと李と見立て、表現活動を通して、「わたし」たちはヒジウと李とつながりたいと考えた。また、発表を通してその他様々な立場の人々とも、つながりをもてることを願った。

《言葉》

この活動では、「わたし」たちは、これまであまり使ってこなかった《言葉》あえて使うことにした。それは、この太魯閣国立公園での実践を通して、台湾先住民族たちの歴史が文字を長い間有していなかったために認められてこず、それを理由に真っ当な扱いを受けてこなかったという事実にたびたび目の当たりにしたことに由来する。「歴史」は正確な科学ではなく、それを解釈して表現する能力は常に権力によって左右されている。

また、ウィリマン以外は、自身の母国語を使用した。それぞれの言語のもつ構造の中に、すでに世界をとらえたり、意味付けをしたりする枠組みが存在する。母国語をつかうことによって、より自らの構えを歪ませずに表すことができると考えたためである。また、ここまでたびたび述べてきた大地と国家の歪んだゲスト・ホスト関係により、その他の先住民族言語と同様に、年々タロコ語を話す人口が減っており、このままいくと近いうちに消滅すると予測される現状を背景に、ヒジウにとって、母国語を書き、話すことに対し、決意と責任と挑戦の意味があった⁵⁶。

5.4.2 表現活動の内容 ― 翻訳する

ヒジウ、李、ウィリマン、「わたし」は、それぞれの文章執筆と朗読を通じて、自己のもつ構えに対するふり返りと発見が行われた。また、それらは中国語と英語の翻訳や朗読の過程でうまれた対話の中で共有されていった。

ここでは、「わたし」と李の間で行われた対話を例に、それぞれの構えがどのように互いに入ってきたのか述べる。

⁵⁶ ヒジウのタロコ語での執筆は、ヤヤの協力のもと行った。ヒジウは、タロコ語が母国語とするが、当時の政府の方針で、義務教育において台湾中国語のみを使用し、先住民族の言語教育を受けてこなかったため、普段から特に筆記は、中国語の方が慣れている。現在の台湾の義務教育では、普段は中国語で行われているものの、先住民族や客家系など異なる民族が住むエリアでは、小学校からそれぞれの言語の特別授業が組まれている。一方、李や他の漢族系台湾人の友人たちは、各先住民族の人々が話す・書く中国語は、それぞれの民族の言語の語法などの影響もあり、漢族系台湾人が話す・書く中国語とは、言葉の選び方に違いが見られると話す。

李と「わたし」

李は、中国語でまず原文を書き、その後本人によって英語による翻訳を加えていった。李は、本人によって中国語・英語の執筆可能だったため、第三者の翻訳による解釈の間違いや偏り bias の心配はなかった。しかし、逆にどちらも自由に彼女自身によって表現ができるため、「わたし」はその彼女が書いた中国語の文章と英語の翻訳内容を読み比べることで、語られている内容が恣意的に異なる箇所に対して、疑問を持っていった。「わたし」は、李とつながりたいと思っていたため、この疑問をうやむやにせず、素直に李に尋ねてみる事にした。そこで、「わたし」たちの間に本当の対話、互いのもっている構えを見いだしていくということが起こった。

李との対話 - Islander として

李は「我來自所謂本省人家庭。（和訳：私は、いわゆる本省人の家系のものです。）」という本人による中国語の原文に対し、英語では“I'm from a Hokkien Taiwanese decedent, islander family.（和訳：私は、島民の家系、閩南系台湾人の子孫です。）”と表現した⁵⁷。中文で使われている「本省人」とは、1945 年以前に台湾に渡ってきた、あるいは台湾にもともと住んでいた人々とその子孫をしめす。英文で使われている「閩南系台湾人」とは、中国福建省南部から台湾に渡ってきた先祖をもつ家系の人々をしめす。ここで「わたし」は、李が英文の「島民 islander」という箇所を強調しているように感じ、気になったため李に尋ねてみた。

李のふり返し

これに対して、李は自身が、長年祖父母・両親との世代を超えたコミュニケーションの齟齬を通して“アイデンティティ・クラッシュ”を持っていることを語る。彼女は、自分置かれている状況と台湾先住民族の置かれている立場に共鳴し人権運動に参加し、活動家 activist としても活動している。彼女は、その運動を通じて、多くの台湾先住民族の人々と出会い、彼らの歴史や言葉を学んでいる。しかし、自身の祖父母の母国語である台湾閩南語を話せずにより、その勉強ができていない自分がいることに気がつき、後ろめたさと葛藤を感じていた。

彼女の祖父母は、日本統治時代に日本語で教育を受けていたため、中国語はあまり話せない。一方、李は母国語を台湾中国語とし、言語教育に特化した特別な高校に通っていたため、そこで英語と日本語を学んだものの、その後、大学では第二言語として英語を集中的に勉強した。そのため、日本語での簡単な会話はできるが、自在に使って対話することは難しい。

李は、「わたし」に自身の思いを語りながら、彼女自身についてふり返っていった。

⁵⁷ 本論文第 5 章「5.2 〈The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park〉脚本」に対応。

見えてきた「わたし」の構え

李の思いに耳を傾けながら、語られた内容は「わたし」の中で、自分事として響きあい、自己自身について振り返っていた。ここでは、以下のような2つのふり返りを取り上げて述べる。

1 つ目は、自身が育った土地に対するふり返りである。「わたし」は、2013 年以降、表現活動実践のため、多くの時間を「わたし」の育って慣れ親しんだ土地から離れた土地で過ごしてきた。こういった生活により、自身が根無し草になってしまったような気になり、たまに帰ってくると、その慣れ親しんだはずの土地との間に隔たりのようなものを感じていた。この感覚は、「わたし」のなかに、何か自分がもっていたものを無くしてしまったような心細さと不安定さ引き起こした。しかし、同時に、人はどこか特定の土地だけを自分のものと思ったり、帰属したりせずともいいのではないかなと思うようになっていた。

2 つ目は、自身に属する国家に対するふり返りである。この表現実践を通して、特に漢族系台湾人の鑑賞者から、アイヌや琉球がおかれている現在の状況について「わたし」個人としての意見を求められることが増えた。しかし、「わたし」はアイヌや琉球について自身の経験に基づいた確固たる意見を持っていない。そのため、尋ねられるたびに後ろめたさを感じると同時に、質問に対する違和感をもつという異なる2つの感情を持っていた。それは、アイヌや琉球を筆者である「私の一部」として見ている（と「わたし」が解釈した）質問者の構えに対して疑問視と、そうはいつでも、一日本人として、過去に日本人が台湾に対して行ったことと同じことを現在でも続けていることに対する責任のもち方や、その事実に向かい合う態度をはっきりと示せていない自身に対する後ろめたさとの葛藤であった。

1 つ目のふり返りでは、「わたし」は、自身が育った地を自身のもっているものだとしめている。また、2 つ目のふり返りでは、「わたし」は、アイヌや琉球は果たして自身の一部だろうかと思いつつも、自身が属する国家が、ある域の土地を保持し、その土地の保持に関して「わたし」も当事者の一人として、責任があるとみなしている。

「わたし」は、《土地は人に所有されるものであり、人間を組織化する国家は、大地を治め、大地は国家のもとにある》という構えを自身のもっているということに気づいた。また同時に、近年の自身の経験により、《必ずしもどこか特定の土地だけに帰属したり、その土地を所有したりしない》という構えもあるのではないかと思い始めている。

見えてきた李の構え

一方、李の構えはどうだろうか。彼女は、歴史的背景が要因で家族や大地に根ざした自己の在り方がもてずにおり、どこに立てばいいのか迷い、苦しんでいる。そして、台湾という島に根をはりたいと願っている。それは、李の執筆した文章の中にある「土地は私たちを形作りづくれます。」という一文にも込められている。

「わたし」に《大地は、人を形づくるもので、国家に帰属するものではない》という構えがはいってきた。

見えてきたヒジウの構え

さらに、ヒジウの構えはどうだろうか。ヒジウの執筆した文章⁵⁸では、タロコの人々がもつ土地と人の関係についての言及がいくつか見当たる。例えば、以下のような記述がある。

「これは土地を手に入れたり、所有したりすることではありません。
私たちは自分たちが生まれた土地を大事にする責任があるのです。」

ヒジウは、人間は大地を所有するのではなく、先祖から受け継いだ地を大切に守り、手入れをし、大事にする責任があると主張する。

「わたし」に《人は土地を征服したり統治したり所有するのではなく、それぞれが守るべき土地を世話し続けるべきだ》という構えが入ってきた。

つながる

「わたし」は、李との対話を通して、「わたし」自身の構えを見出すことができ、それによって、李やヒジウが語っている内容があたかも自分事のように、身体にストンと落ちてきて、自分の身体が重くなっていくのを感じた。この体験は、彼らが普段どのように自身を取り巻く世界をとらえ、意味づけし、行為しているのかが、「わたし」の中に入ってくるものであった。それにより、「わたし」は同じ地の上に立って生きるものとして、李やヒジウとつながることができたと感じた。

5.4.3 表現活動の考察まとめ

「わたし」は、李の文章を細かく読みこんでいき、中国語と英語で書かれた文章の違いをもった疑問を彼女に問いかけた。その問いかけは、彼女とつながりたいという主体的な意思から、自然とおこった行為だった。それにより、言葉の選択の背後にあった彼女の思いに関する本当の対話が、紡ぎ出されていった。それは、李が自分自身と見つめ合い、李自身について気づいていった過程でもあった。そして、彼女の思いに触れ、その思いに呼び起こされるかのように、自分自身についてふり返った「わたし」は、そこから自身の構えを見出していった。さらに、自身の構えがみえてくると、李やさらにヒジウの構えを読みとることができ、それぞれの構えが「わたし」の身体の中に入り、彼らと重なりあう体験が起こった。

⁵⁸ 本論文第5章「5.2〈The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park〉脚本」ほか。

この実践と第2章「2.4 「なる」の発見ー 上野桜木での体験」で取り上げた香川さんとの事例と異なるところは、この実践では、ある物のふり返りが、相手に共有されることで、その相手がその人物の内省を自分事のように受け止め、相手の中の自分自身のふり返りが呼び起こされるという点である。

「わたし」は、李やヒジウの構えとしてとらえたものが自分自身の中に入ってくることで、同じ地の上に立って生きるものとして李やヒジウとつながりを感じることで、それによって、もともと「わたし」がもっていた国家が大地を治めている構えを超えて、自分自身はこの大地（星）という大きな広がりの中の1ゲストである、という新たな構えを手に入れることができた。

このように、李と「わたし」の間だけではなく、李、ヒジウ、ウィリマン、「わたし」の4人は、この実践の翻訳や朗読の過程の中で度々お互いに問いかけを繰り返したことで、自分自身と向き合い見つめていった先で、相手の構えと重なり合い、相手とつながっていった。

5.5 「わたし」たちの気づきの交換録#3

この節では、本章で取り上げた表現活動《The gift exercise / Invitation 4》シリーズの活動期間中に「わたし」とウィリマンが記述した気づきの交換録の抜粋を載せる。このシリーズは、すべて台湾にて行われてきており、現在も継続している。

*

2017年8月1日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

裸電球の温かい光。自分の手がつくる影と文字が重ならないように方向を気にしながら、ノートに書いている。

今日はホームステイ先のお母さんである Nac Hjiu ナツ・ヒジウとともに初めてタロコの山を登った。ヒジウが幼少期を過ごした Skadang サカダン村を訪れるために。木曜まで2泊、山の上で過ごす予定だ。ヒジウは、台湾山岳先住民族の1つタロコ族の女性だ。

朝5時に起きて、ヒジウの様子を見がてらトイレに行きがてら2階へ降りたら、ヒジウが「出発時間を変更するからもう少し寝ていいよ」といつてきた。「わたし」は出発直前まで、やっぱりあれはいらないのではないか、これもいらないのではないかと、荷物を出したり入

れたり何度かした。予定していたバスではなく、ヒジウの夫・セイサン（別の村出身のタロコ人）が車で登山口まで連れて行ってくれてるようだ。6時半ごろ家を出発し、登山口には7時には着いた。登山口までの道中、セブンイレブンで車が止められた。「朝ごはんを調達するように」と言われる。ヒジウが何かを息子ユブに言って、ユブがそれを携帯で翻訳した。Google 翻訳は「わたし」たちに、「登りがきついから、昼ごはんは食べられない。次のご飯は夕食。」と告げた。「わたし」は、一瞬絶句した。内心、いくら坂がきつくても昼飯は食べられるだろうにと思っていたら、ヒジウが後ろから「Next food is dinner!」と言った。「わたし」は念のため少し多めにご飯を買うことにした。豆乳（低糖）とパン2種類とおにぎり2つ。

登山口でドロシー、ベンヤミン、エヴァと合流した。いつも和やかに元気そうに振る舞っている彼らが来ると、雰囲気が変わる。

皆で山道を歩く。先週末に直撃した大きな台風のせい、道には、たくさんの枝や葉っぱが落ちていた。山道脇には、大人3人ほどの太さのある木もなぎ倒されていた。その上をみんな歩く。前の人が踏んだ枝が、歯切れのいい音を立てる。乾燥しているのか、すごく高い音が出る。焚き火がふと頭の中に出てきた。薪が割れる音に似ていたからだろう。昼間の風景と夜の風景が重なり合う。みんなが枝を踏む。みんなの歩いたリズムがそのまま音になって、風景になる。乾いた木、湿った土、重なったレイヤー状の葉っぱ。

「（モハウアイ ス ビー）」

タロコの言葉で「有難う」を意味する。直訳すると「share・you（あなたと共有）」だとヒジウは教えてくれた。

しかし、そんな平和な坂道は、すぐに表情を変えた。途中からかなり陰しくなった。その後2時間ほど続いた急な登りは「わたし」の呼吸のリズムを乱し、途中で誰かに話しかけられると、「少し黙ってくれ」と思ってしまうほどまで、機嫌が悪くなった。

「サンガイ ダダ（＝おやすみなさい）」

急にヒジウの母ヤヤは電気を消した。

まっくら

*

2017年8月2日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

昨日は途中で消灯になってしまったので、続きを書くことにする。

昨日サカダン村へ歩いている途中、Dadao ダダオという老人に出会った。ヒジウは、ダダオを見つけた途端に「ダダオ マウエイ！ ダダオ マウエイ！」と何度も叫んで、彼を振り向かせようとした。ヒジウはかなり大きな声で叫んでいたが、全く相手は振り向かず、近くまで近づいてから、ダダオは「わたし」たちの気配でようやく気がついたように振り向いた。ヒジウを見ると、にっこり微笑んで、タロコ言葉で話しかけていた。

（ここからは、「わたし」の勝手な想像である）

ダダオ：「帰って来たのか？」

ヒジウ：「そうなの！」

ヒジウは「わたし」たちにダダオに紹介してくれた。ヒジウは、「わたし」とダダオが日本語で話すのを見たいようで、何度も「わたし」に“He can speak Japanese! (彼、日本語話せるよ！)”と言ってきた。「わたし」は、“But, I don’t know if he likes to speak in Japanese. (でも、彼が日本語を話したいか、わからないし)”

「わたし」は老人と日本語で話すことをためらった。ヒジウは、“I don’t know! You can try! (わからないけど、試してみなよ！)”と背中を強く押してきた。仕方がないので、恐る恐る日本語で話そうとした。

すると、老人の方から「日本人ですか？」と聞いてきた。アクセントもほぼ完璧な日本で「わたし」に話しかけてきた。「はい、日本人です。」

それから、「わたし」たちの会話が始まった。日本占領時代と中国占領時代（現代）との違いについて彼は少し話してくれた。彼が小学校を卒業した時は、ちょうど日本が台湾から去って行った時だったらしい。彼は、続けて中国の政治が嫌いな理由を話した。そして自由とは何かについて。

*

2017 年 8 月 2 日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

滞在している家は、ヒジウの母ヤヤの家である。入り口に、Sapah Yaya と書かれている。Sapah はタロコ語で、家をあらわす。斜面にたっていて、敷地のおそらく 5 分の 1 ほどが住居で、敷地の端に建てられており、あとは畑になっている。「おそらく」というのは、柵かなにかがあるわけではないので、実際どこまでがヤヤの敷地で、どこからが隣のイサオやユリの敷地なのかははっきりとはわからないからだ。畑もどこまでがヤヤの畑として使っていて、どこからが、「本来の山そのもの」なのかは、定かではなかった。また、ヤヤの畑はとりわけ色んな種類の植物をあまりはっきりと分けせず、混在させて育てているため、「わたし」の目には、ぱっと見はここまで来る途中で見た山道とあまり変わらないように感じた。しかし、夕飯時にヒジウとヤヤが、「勝手に土地を広げて、ヤヤの敷地に入ってきて

いるので困る」といった内容の話をしていたので、はっきりとどこからどこまでが、誰の土地なのかというのはあるようだ。

建物は、入り口部分のトタン以外は、ほぼ竹でできていて、全て手作りだった。ヤヤは、村の男たちが 5 日ほどで作ってくれたと言っていた。畑側の壁面の半分は、窓枠のようになり、塞ぐ代わりに、流木や動物の頭骨などが細い縄で結ばれて、半分覆われ、風通しがよく、日の光も入りやすい廊下をつくっていた。それらは、夕方西日が差すと、土床に豊かな形の影をつくるので、「わたし」はその廊下のような空間がとりわけ気に入っていた。

サカダンの朝は早く、朝ごはんの後は、先日の台風を受けて、家の横に水はけをよくするための穴を掘ると、深さ 1.5m ほどの穴を掘っていく作業や畑仕事でみんな忙しなかった。「わたし」とウィリマンも穴を掘る作業を手伝った。太陽が正午にむけて、天頂に上がってくると、気温もぐんぐんあがり、頭がぼんやりとしてきた。普段夜型人間の「わたし」は、慣れない早起きに穴を掘りながら、睡魔におそわれた。ふらふらしている「わたし」に、ヤヤはそっと寄ってきて、「やすむ」といって、畑で取れた山菜のお茶をだしてくれた。苦味がきいていて、眠気が少しとんだ。

昼食を終え、ようやく「わたし」も本調子がでて、働く気力に満たされていると、ヤヤは「わたし」の肩をたたいて、「やすむ」といった。どうやら昼間は基本的に皆昼寝をするようだった。皆、半屋外の食事小屋に集まり、竹でできたベンチの上に寝転がって、だらだらと過ごしていた。「わたし」は、午前中眠気でぼんやりとしすぎて、あまり戦力になれなかったもので、休むのには気が引けて、ヤヤに何か手伝えることはないかと尋ねた。しかし、「やすむ やすむ」といわれ、断られてしまった。「わたし」もとりあえず、皆といっしょに竹のベンチに座って、ノートを開いた。

昨日、ヤヤの家へ向かう途中、ヒジウがこの辺りで取れる山菜を教えてくれた。タロコ語でマーダというその草は、日陰を好み、大きな植物の影に生える。また、近くには形のよく似た異なる草もあるため、紛らわしく探すのに一苦労する。「わたし」とウィリマンは、マーダ探しに熱中した。初めのうちは、それらしき草をみつけると、ヒジウにみせて「これか?」というのと、十中八九「ノー!」と言われた。マーダの穂先の形は、わらびに似ていて、クルクルと渦を巻いて丸まっていた。「わらびか?」とヒジウに google 翻訳で繁体字に翻訳してみたが、「ノー」といわれたため、自分の知っているものと照らし合わせて分かうとすることを諦めた。マーダはマーダだ。

紛らわしい植物とマーダを並べて、巻かれた葉の形や葉の生える間隔が違うと、ヒジウは「わたし」たちに教える。そのうち、すぐにウィリマンは、マーダの特徴を掴み、要領良く次々と見つけだしていった。ウィリマンは、農家育ちのため、植物の知識が豊富で、普段から様々な植物を見るのに「わたし」よりもずっと慣れていた。「わたし」は、飄々とマーダを見つかるウィリマンに対して悔しさを抱きながらも、なかなかその違いがわからずにいた。そのうち手当たり次第、それらしき植物をとっては、ヒジウに見せるということを繰り返

返し、いつの間にかヤヤの家までたどり着いてしまった。ヤヤは、夕飯用にとってきた大量のマーダを水にしばらくさらしてから、マヨネーズをかけてサラダにした。マーダを食べながら、自分で食べるものすら自らとってこれれずに、情けなさを感じていた。「わたし」は、山に生かしてもらいながら、周りの人々にも生かしてもらっている。

ヤヤは、マーダを食べた後、自身の小学生の頃の話をしてくれた。「学校に行く途中、マーダとる、先生にあげる、3日に1回」といった。私が「優しいね」というと、ヤヤは、そうではなくて、マーダを渡すと先生は遅刻しても、勉強をしなくても許してくれたから、と話した。ヤヤが小学生の頃は、まだ小学校と交番が隣村のホホスにあった。当時は、サカダン村から13人、ホホス村からも13人、計約26人の子供たちがいたとヤヤはいった。ヤヤは続けて、本当は8時半には学校についていなくちゃいけないのだけど、皆こないで、9時ぐらいに国民党の旗が上げて、ようやく始まったといった。戦前、交番も小学校の建物も、もともとは総督府が設置して使っていたもので、戦後その旗だけが交換されたようだ。ヤヤ曰く、学校は実質月曜から水曜の午前中週に3日だけで、1人の先生が学年ごとに1時間ずつ見ていたそうだ。先生は、山の上では学校に泊まり、木曜には山の下に降りてしまうといった。ただ、そう決まっていたわけではなかったため、子供たちは、木曜・金曜・土曜も先生が来ているかもしれないと、サカダンから片道2、3時間かけて見にいったものだといいた。授業は、そろばんと中国語と体育と美術があった。美術は、花や山や山道の絵を描いた。歴史の教科書もあったが、先生は何も教えてくれなかった、とヤヤは話した。

ヤヤは、学校は楽しかったが、兄弟の世話もあったので、1年生だけ週に2、3回通い、母が亡くなった2年生からは週に1回だけ通ったといった。ヤヤは、14人兄弟のうち腹違いの兄弟が7人いて、同じ母から生まれた兄弟はヤヤ以外全員亡くなったと話した。

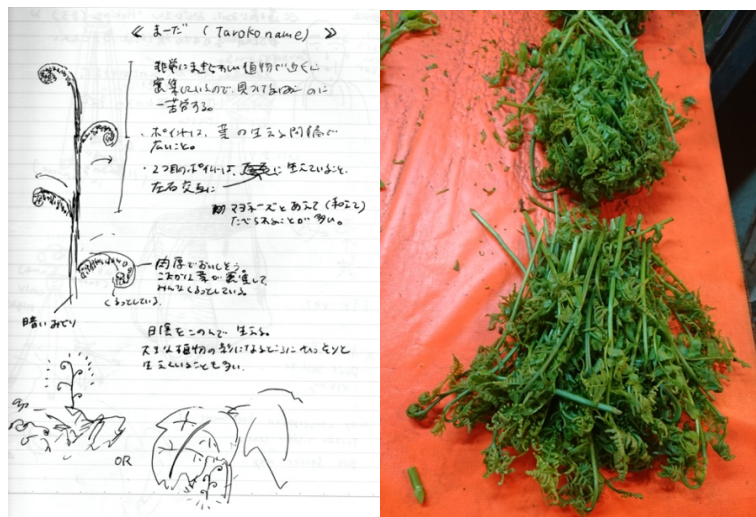


図 5-9 (左) サカダン林道によく生える食用の野草・マードを図解したメモ

ややから教わるものの、マードと「マードではない植物」との違いを捉える事に苦労する。

(描画: 2017 年 8 月 6 日 / 新井麻弓)

図 5-10 (右) 山の下の花蓮市市街の市場で売られているマード

複数の先住民族が住む花蓮市街地の市場では束で売られている。

(撮影: 2020 年 2 月 29 日 / 新井麻弓)

*

2017 年 8 月 6 日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

山の頂上に立つダダオの民宿に皆で泊まる。今日は、台北からのツアーパフォーマンスの観客/参加者約 30 人を連れての登山だったので、いつもよりも大分時間がかかった。夕暮れ前によくダダオの家に着いた。ダダオの家は懐かしい気持ちにさせた。よく見ると、ふすまや障子のようなデザインをした部屋の仕切りがいたるところにあった。聞くと、ダダオが自分で作ったようだ。

ダダオと会うのは今回で 3 回目だった。今日はなぜか以前に比べてずっと距離が近く感じられた。「わたし」は、ダダオと再会し嬉しかったので、「ダダオ! 私のこと、覚えていますか?」と日本語で尋ねた。するとダダオは、「わたし」を見ながら中国語で「すみません。中国語は少ししか分かりません。私は、日本語を話します。」と言った。

ダダオは完全に「わたし」の顔を忘れていた。それも仕方がない、1 回目も 2 回目も数分話ただけのことだったから。「わたし」は日本語で「私は日本人です。」と言った。今回は、以前よりも少し自信を持って日本語を彼に向かって発語した。

「ああ! 日本人でしたか! おお、いらっしやい。私たちは日本語で話せますね。」と「わたし」の手を取り嬉しそうに笑ってくれた。「わたし」は、とても嬉しかった。この 3 5 人ほ

どいる集団の中で、たった一人日本語で彼とコミュニケーションが取れるのが「わたし」だという事実も、妙な優越感を「わたし」に抱かせてが、同時に果たして誇れることなのだろうか、と反省をした。

夕飯の後、ダダオの家の前に火が焚かれた。自然とその場にいる全員が大きな円になって、椅子に座った。このレジデンスのオーガナイザーであるチェンタオが、中国語で観客に参加に対する礼を伝え、話す。一通り話し終わった後、チェンタオは、ダダオに「みんなの前では是非得意な歌を歌ってほしい」とせがんだ。初めダダオは、「いやいや」と言っていたが、結局3曲ほど腹の底からでた隣の山まで響くほどの大声で歌ってくれた。どの歌も日本の演歌だった。

全員が手拍子を打ちながら、ダダオの歌を聞く。「わたし」だけが、歌詞とそれを歌う人物がダダオであるという事実のコントラストに圧倒されている。

1曲目は、故郷を思う歌。タイトルは、『赤い夕日の故郷』で、後で調べたら1958年にリリースされた曲で、1945~1955年頃に多く発表されたふるさと演歌の中で特に多くの人に愛好された曲の一つらしい。2曲目は、愛についての歌。タイトルは、『骨まで愛して』で、1966年にリリースされた歌で、当時ミリオンセラーになったほど売れた歌。3曲目は、酒場で夢と捨てられた恋人を語る歌、タイトルは『夢追い酒』で、1978年に発表された曲である。

ダダオは、どこでこの歌を覚えたのだろうか。サカダンには、電気はなく、電波も届かない。当然テレビもない。

呼んでいる 呼んでいる

赤い夕日の故郷が

うらぶられの旅をいく

渡り鳥を呼んでいる

馬鹿な俺だが

あの山川の

呼ぶ声だけは

おーい

今聞こえるぜ

(横井弘(作詞) 『赤い夕日の故郷』 中野忠晴(作曲)、三橋美智也(歌)、1994年(発売)。)

生きている限りは

どこまでも
探し続ける
恋ねぐら
傷つき汚れた
私まで
骨まで骨まで
骨まで愛してほしいのよ

(川内康範 (作詞) 『骨まで愛して』 北原じゅん (作曲)、城卓矢 (歌)、1966 年 (発売)。)

話して
まにまに
この酒を
誰がなくせた
酒場のフマド
あなた なぜなぜ
私を捨てた
まで尽くした
その果てに
夢の買いを買いましょ
もう一度

お酒でごまかす
虚しさを
貴方なぜなぜ
私を捨てた

(星野栄一 (作詞) 『夢追い酒』 遠藤実 (作曲)、渥美二郎 (歌)、1978 年 (発売)。)

*

2017 年 8 月 6 日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

ダダオが演歌を全員の前で披露した後、みんなは散り散りになってそれぞれ小さな輪でおしゃべりを始めた。

ダダオは突然「わたし」の横にやってきて、言った。
「この歌知ってる？」

「むかし むかし 浦島は
亀の背中におんぶして
竜宮城へ 行きました
戻れたお家は何処へやら」

「この歌知ってる？ これ 私の先生 日本人 この歌を教えた 学校の先生が教えてくれた」

当然浦島太郎は知っていたが、歌なんかあったっけと思いながら聴いた。

すると、ダダオがもう一度。
「ねえ、この歌知ってる？」

「むかし むかし 浦島は
亀の背中におんぶして
竜宮城へ 行きました
戻れたお家は何処へやら」

聞いていると、確かにメロディに聞き覚えがあるような気がしてきたが、歌詞は完全に忘れていた。

すると、ダダオがもう一度。
「ねえ、この歌知ってる？」

「むかし むかし 浦島は
亀の背中におんぶして
竜宮城へ 行きました
戻れたお家は何処へやら」

今度は、ダダオの歌を聴いて、実際に自分も一緒に歌って見た。

「この歌知ってる？」
「歌詞を覚えてなかった」
「？」ダダオは、「わたし」が言ったことが分からなかったようだった。
そして、もう一度ダダオは言った。
「この歌知ってる？」
「もう一度！もう一度歌おう」

『むかし むかし 浦島は
亀の背中におんぶして
竜宮城へ 行きました
戻れたお家は何処へやら』

「わたし」とダダオは、こりずに何度も一緒に歌った。「わたし」は、300年未来に行ってしまった浦島太郎と、すっかり同じ言葉を話す人が周りにいなくなってしまったダダオを重ねていた。

山の下や山の上のサカダン村一帯に住むタロコの人々は、ここ30年以上みんなアルコール依存症で65歳頃には大体亡くなっていた。なので、日本統治時代を経験して覚えている70代後半の年齢の人は、ほとんどいないに等しい。ダダオは今年85歳で、ここらでは珍しい長老であった。（しかし、ダダオもアルコール依存症を患ってはいた。村の人はみんなダダオのことを、「運がめちゃくちゃいい奴」と呼んでいた。）

次の日、ウィリマン含めた仲間たちや観客でツアーパフォーマンスに参加しに来てくれた多くの人たちから、「わたし」とダダオが一緒に歌う姿に胸を打たれたと伝えられ、彼らが自ら撮影した写真や音声をスマホで見せられた。



図 5-11 日本の童謡を一緒に歌うサカダン村の村長・ダダオと「わたし」

忘れていた日本の童謡をダダオが教えてくれ、一緒に何度も歌う。

ウィリマンら周囲の人々は「わたし」たちのその姿を撮影した。

(撮影: 2017 年 8 月 5 日 / ニナ・ウィリマン)

*

2017 年 8 月 7 日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

昨夜ダダオと李とずいぶん長く話をしてしまっており、気がついたらほとんど全員寝静まっていた。急いで水を浴びて、寝なければと風呂場へいくと、同じタイミングで入ろうとしていた数人がおり、「わたし」はのろまなため、先に入るよう進めた。彼らもでてきて、ようやく自分の番になった。もう誰も起きていなさそうだった。

風呂場には照明がなく、真っ暗なため、懐中電灯を 1 つ持ち、中に入る。水を浴びる支度をする。ダダオの家は、サカダンのどの家とも同じように、山の水をバケツや箱にためて浴びる方式の風呂場である。服を脱いで、濡れなさそうなところに置き、水をためた桶はどこかと、懐中電灯で部屋を一周照らした。すると、一瞬とても鮮やかなコバルトブルーが目に入った。妙だと思い、懐中電灯をゆっくりとさっきと逆回しに照らすと、光がコバルトブルーと黒の縞模様の紐のようなものを一瞬捉えた。部屋の角の壁と壁の間いた 1m ほどの蛇だった。表面は光をぬるりと照り返りかえしていた。あまりに驚いて声は出なかった。体も一瞬硬直したが、急いで服を羽織り、そとに飛び出て扉を閉めた。蛇も突然の来客に驚いただろうが、「わたし」もだいぶ心臓に負担をかけた。

その日は、そのまま風呂に入るのを諦めた。誰かに言いたかったが、寝室の大部屋に帰ると、30 人ほどいたが誰 1 人起きていなかったため、黙って自分の寝る場所についた。薄布のような寝袋をかけてとりあえず目を瞑ったが、黒と青の縞模様ぬるりとこちらに向かってくる様子が見えた。思わず目を開けると、右手の甲に 5 センチほどのゴキブリが乗っていた。普段なら大騒ぎをするが、不思議と冷静で、なんだゴキブリかと、左手ではらいのけた。とりあえず、寝袋に深くもぐって、寝ることに集中した。

目を瞑ると、今度はハチの白い幼虫が頭に浮かんた。「わたし」が小さな虫が苦手だと知っているノアが、夕方ダダオの家に着いて、ひと段落しているところに、冗談半分で巣ごと「わたし」のところに持ってきた。しかし、その時も自分でも不思議なほど動揺せず、巣にもぐっている幼虫を見いった。食べられるというので、動いているまま口に入れた。幼虫は、歯でつぶすとクリーミーなイクラのような味がした。そのあと、アーシャンは、それにパセリのような香りのする葉をまぶして、油で炒めた。そっちも食べてみるように勧められたので、いただいた。炒めた方は、鶏のささみのような味がした。どちらも美味しかった。ヤヤの家では昆虫を調理しているところは見たことがなかったが、アーシャンに尋ねると、山で見つければ食べるよと教えてくれた。

*

2017 年 8 月 7 日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

山を降りる途中で、83 歳のロキンという名のタロコの村人に出会った。一緒にいたヤヤは、「ロキンは日本語が上手だよ」と「わたし」にいい、話してみるようにうながした。ロキンは、竹籠を背負って、1m ちょっとの切った竹を杖代わりに歩いているところだった。他のサカダン村で出会った人々よりも肌艶も良く、何よりも背筋がすっとのびていたので、言われた年齢よりもずっと若く見えた。

ヤヤは、タロコ語でロキンに「わたし」が日本人だと伝える。ロキンは、わたしを向いて落ち着いた声で、「日本人ですか。そうですか。」と静かに話した。ロキンの表情に、喜怒哀楽はあまり感じなかった。「わたし」が、どこに家があるのか尋ねると、彼は村の端の方角を指さした。その家は、山の下からサカダン村に来る時に必ず通る崖の下に建っているため知っていた。その崖の下は開けた平地で、山道から見下ろせる家の横の畑は、きれいに区画整備され、それぞれの区画に何が植えてあるのか小さな立て看板が土に刺さっているように見えた。息子と二人暮らしのおじいさんが住んでいると、前にヒジウから聞いていた場所だった。

「わたし」は、何か他にも尋ねようとしたが、これといった質問が急に出てこずに、数秒の間があいた。すると、ロキンは「私は、ブラブラ行くとしますので…」と、再び無表情で静かに言い残し、すっとその場を去っていった。「わたし」には、ロキンのあまりの無表情さに、何かに怯えて、警戒している動物のようにうつった。ロキンが去っていった後に、「わたし」は、彼は日本人と話したくなかったのではないかと勘ぐった。すると、ヤヤは歩きながら、ロキンはキリスト教徒だけど、山の上にいることが好きで、下にはほとんど降りてこないと話した。そして、彼は 3 ヶ月に 1 度だけ山の下教会に祈りにくると続けた。ヤヤは、山の下にある 1 つの教会を取り仕切っており、夜中にヘッドライトをつけて聖書をずっと読んでいるほど熱心な信仰者だ。「わたし」は、ヤヤの話を聞きながら、彼女はロキンが 3 ヶ月に 1 度「しか」お祈りにこないことを、こころよく思っていないのではないかと感じた。

＊

2017 年 8 月 9 日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

朝起きると、食事小屋の前に皆が集まっていた。ヒジウの夫・セイサンとヒジウの兄・キンボは、竹籠からムササビを 1 匹出しずつながら、慣れた手つきで皮を剥ぎ、金網に固定し、そして、バーナーであぶっている。ヤヤもヒジウも、ヒジウの息子ユブも皆ボーっとその様子を眺めていた。聞くと、さっき森から帰ってきたばかりだという。確かに、昨夜の夜中寝ていると、外で大きな喋り声とともにガタガタと何人かが敷地から出ていく音がしていた。どこかで集まって酒盛りでもするのかと思っていたが、ようやくその理由に気がついた。黒焦げになったムササビは、皮を剥がれた状態よりも、さらに小さくガリガリに痩せてみえ、

青と緑の中間色のような小さくまん丸の目と細かく尖った歯が目立っていた。「わたし」は、竹のベンチに座ってその様子を見ながら、なんとなく、そこにある長年使われているような竹籠をスケッチした。スケッチをしながら、丸焦げの物体とふわふわの毛皮は、さっきまで一心同体だったのかとぼんやり考えた。

夕方、食事小屋に変わった匂いが立ちこめていた。ウィリマンが小声で、「実家にいた豚の糞の匂いがする」といった。鍋の中には、ドロっとした濃い緑土色のシチューのようなものがあつた。セイサンが、ニヤニヤしながら、「マユミ、食べるだろ?」と皿に大盛りでよそってくれた。ムササビの腸の中身だとヤヤが教えてくれた。ムササビは、草食動物なので、腸の中にはたくさんの消化中の発酵した草が詰まっている。セイサンは、昔からタロコの人々は、これが大好物で、整腸剤としても利用してきたと、身振りを交えながら教えてくれ、ニコニコしながら美味しそうに食べていた。一方、ヤヤは、ほんの少しだけ食べ、ヒジウにいたっては、「私は絶対無理!」と腕を振った。ヒジウの娘二人は、「くさい!」とはっきり言い、食卓から少し離れたところに座り、「わたし」とウィリマンが一口噛んで困っている顔を見て、笑っていた。



図 5-12 ヒジウの息子ユブが教えてくれたムササビ狩りの方法

ユブとドローイングを通して話していく中で、徐々にその動物がムササビだと見えてきた。

(描画: 2017 年 8 月 9 日 / ユブ・セイサン、新井麻弓)

＊

2017 年 8 月 11 日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

山を降りる。ホホス村の入り口をすぎ、しばらく進むと 1 時間ほど続いていた平坦な道から、長い急な下り坂に変わる。その直前で、緑に覆われていた視界がパッと開け、さっきまでは聞こえなかったような音が両耳を塞ぎ、「帰ってきたな」という気分に包まれる。「わたし」たちは、登ったり降ったりを繰り返しているのに、山の上に連泊で滞在するのは長くても数日間程度だ。それなのに、この音を包まれるたびに、長らくずいぶん遠くに行っていたような気がしてくる。

その音は、皮肉にも、隣の山が削られ、トラクターで石灰質の地表が運ばれていくものだ。時折、ドーンと山々を響かせる低音の爆発音も混じる。「わたし」にとって、それはまぎれもなく「人の気配と匂い」だった。

少し懐かしい気分になったあとに、目に入ってくるのは、パツクリと開かれてしまっている灰色の地表である。何度見てもその図に、「わたし」は反射的に痛みを感じる。傷口をえぐられているように見えるからだろう。周りには、削られた後に均等に植林された木々整列し、周囲の森から浮いて見える。

隣の山も国立公園の一部ではある。しかし、石灰質に目をつけたセメント会社が国に金を支払い、観光客には見えない山の反対側を毎日少しずつ切り崩している。タロコの人々の中では、この山の切り崩しに反対意見を訴えるグループと、生きていくためにそこで働くことを選んだグループとで分かれている。

問題は、一枚岩ではなく、何層にも入り組んでいる。

＊

2018 年 7 月 31 日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

昼。今年もセイサンとキンボが狩ってきたムササビやキョンを食べる。慣れない匂いで少ししか口に入れられないものの、食後には必ずと言っていいほど腹痛がくる。頭では理解したつもりでも、身体は全くついていけない。身体は正直である。彼らと自分の間にある距離を、身をもって感じる。

＊

2018 年 8 月 1 日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

ウィリマンの唯一喋れる日本語は、「たべる」である。それは、「わたし」からではなく、ヒジウの母、ヤヤから教わった。教わったというよりも、ヤヤが、食事の際、しょっちゅう「わたし」たちに、言うのでウィリマンも音で覚えたといった方が、その事実に近い。その言葉は、ヤヤが喋れる数少ない日本語の単語の1つである。同時に、「わたし」たちとヤヤをつなぐ大事な言葉でもある。

「わたし」よりずっと食の細いウィリマンは、いつも早く食べ終え、ヤヤは箸の動きが止まったウィリマンを見つけると、すかさず「ニナ、たべる、たべる」という。そして、続けて、言えばもっと食べるとわかっている「わたし」に対して、「マユミ、たべる、たべる」という。

＊

2018 年 8 月 1 日 台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

昨日から「わたし」とウィリマンは、ヤヤと 3 人で、ヤヤの山の上の家に泊まっている。昨夜、9 時頃、「わたし」たちはヤヤと 3 人で布団を敷いて寝る支度をする。部屋には、ウィリマンがスイスからもってきてヤヤにプレゼントした小さなソーラーパネルのついた自家発電ライトしかついてないので、かなり暗い。ヤヤは、「おやすみ」といって、ライトを消した。まだ眠くなかったので、しばらく外の音を聞いたりしながら、今山の中でようやく起き始めて活動を始める動物や虫たちのことを想像しながら、時間を過ごした。

ヤヤが急に「ねたか？」ときいてきた。どうやら、ヤヤも眠くなかったようで、起きていた。ウィリマンもやはりまだ起きていて、身体をヤヤの方に向けた。ヤヤはライトをつけた。そして、おもむろに、「わたし、あんた、あんた、いっしょ、ねる、わたし、こころ、」ヤヤは、そこで止まって、胸に手を当てて、「ぐーぐー」と目をとじながらいった。「わたし」は、「あんしん？」というと、「そー」といって、笑った。ウィリマンにヤヤがいったことを翻訳すると、ウィリマンは「1 人でここに泊まっていると、不安になるか？」と聞いた。ヤヤは、外の方を指さして「あっち、おとこ、さけ、のむ」といって、首をふりながら「あー、さけ、よくない」といった。10 人ほどしか住んでいない村人内でも、様々な問題がある。アルコールはその中の 1 つだ。

「わたし」たちは、しばらく夜 1 人でいる恐さについて話した後、眠りについた。

夜中ふと目が覚めると、ヤヤは小さく声を出して寝ながら笑っていた。

翌日、ウィリマンにそのことを話すと、ウィリマンもその声を聞いたといった。「わたし」は、気になって、ヤヤに笑っていたことを伝え、どんな夢を見ていたのか、尋ねた。ヤヤは、それを聞いて、大きな声で笑った後、「ニナ、アメリカのダンサー、まゆみ、音ならず、わたし、うたう。」といい、また笑っていた。お祭りの夢をみていたようだ。

「わたし」たちは、夕食後それを再現してみることにした。ウィリマンは、こんな感じが

とヤヤに、思いついたステップを見せる。ヤヤは、大きな声で笑い、奥へ行った。竹餅（竹に米をいれて、炊く）用に切った竹筒の中から、ヤヤは何本取り出して試しに叩き、2本選んで持ってきた。

それを見て、「わたし」は「きうり」とヤヤがよぶ畑でとれた佛手瓜という名の瓜と金属製の碗と箸、ヤカンを椅子の上にとりあえず置いて、思いついたままに叩き始めた。

15分くらい経つと、不思議なトランス状態にはいつていた。ウィリマンは、椅子を頭にのせて、ちょうど座面の真ん中に開いていた丸い穴から外をのぞいた。ヤヤは子供のキョンの頭骨を首に巻いていた手拭いで頭に固定して、ちょうどヤヤも頭からツノがはえ、キョンになった。わたしは、横にあった針金ハンガーを頭につけていた。「わたし」たちは、雄叫びをあげながら中腰になって、ぐるぐるまわる。だれが歌い手でだれが音を鳴らす役でだれが踊るのかは、役割分担はなくなっていた。誰かが竹で土床を叩くと、また誰かが箸で壁の竹を叩く。さらに、それを受けて誰かが吊ってある流木や様々な動物の骨を叩き、音を鳴らす。かわるがわる動きを交換し、互いの動きに応答していき、その応答の寄せ集まりが、「わたし」たちの真ん中に、徐々に謎の「彫刻」をつくりあげていった。



図 5-13 謎の「彫刻」と「わたし」たちの雄叫びにつられてやって来た犬

ヤヤの家の真ん中に、踊りながらできあがっていった。

(撮影: 2018 年 8 月 1 日 / 新井麻弓)

*

2018 年 8 月 3 日 台湾・花蓮県新城

新城、夜。近所の寺の夜市で夕飯を済ませ、タロコ族のホストファミリーのヒジウの家に帰る。電柱の蛍光灯の光を反射して黒光りしながら走り去るゴキブリが 1 匹、2 匹、3 匹。米粒の塊がゆっくりと動いる。蟻たちが集団で巣へ運んでいる。彼ら 1 つ 1 つの存在が視界に入るたびに、思わず声が出る。昨日の下山でなった両足の筋肉痛のせいで、うまくそこから逃げられない。夜道はサバイバルだ。狙われている。

＊

2019 年 10 月 12 日 台湾・台南市拔林駅

李の案内のもと、台南駅周辺での香港への応援デモに参加しに行った帰り。各駅停車の電車でレジデンス先の最寄りの駅で降りる。

さっきまで電車の中でうたた寝をしていたので、まだ意識がまどろんでいる。駅も駅の周りも本当に暗い。小さな明かりを頼りなく灯す電灯が、5 m ほどおきにある。22 時頃。無人駅の拔林駅のプラットフォームをでて、ウィリマンと何も話さず裏手の自転車置き場に向かう。自転車置き場にも 1 つの電灯しかないため、持ってきた小さな懐中電灯でカバンを照らしながら、鍵を出して、ようやく自転車に跨がる。ゆっくりこぎ始めると、硬い何かをタイヤで割ったような音がした。自転車を止めて、地面を見る。電灯でぼんやりと照らされた地面を、掌の半分ほどの大きさのカタツムリら横断していた。いくつかのカタツムリは、コンクリートの地面を舐めながら、のっそりのっそりと進んでいく。

＊

2020 年 2 月 14 日 台北

ウィリマンから、オランダで嵐に巻き込まれて到着が 1 日遅れるという連絡が来ているに気がついた。李に、台北に着いたことを知らせる。

李は彼女の仕事の上司のアドに会わせたいといい、私は彼女の家まで連れていかれた。アドは、台湾先住民族バンザ族のミュージシャン、女優、アイドル、そして「原住民族テレビ局」の司会やディレクターでもあるそうだ。

アドの家は、駅前の高層マンションだった。エントランスが高級ホテルを思わせる造りで、「わたし」は、どんな人が来るのかと少し緊張し、身構えた。

アドは、30 から 40 代くらいの女性で、大きな瞳に濃い茶色のカラーコンタクトをしていた。アドは話すときにしっかりと目を見て話し、「わたし」をまっすぐと見つめる。「わた

し」も彼女の目を見るが、カラーコンタクトのせいで、彼女が何を感じて話しているのか掴めなかった。そのせいで、ある種の壁が彼女との間にあるようにも感じた。

「これ、マユミにあげる」と、自身の音楽 CD を手渡してくれた。「いろんなオストロネシアの先住民たちと一緒に作ったのだ」と彼女はいった。彼女は続けて「台湾の先住民族は、オストロネシア系の原点なの」と話した。「彼は、ニュージーランドの先住民族。」アドは CD ジャケットの背面を向ける。アドと彼が海岸で目を瞑り、おでこを合わせている様子の写真が使われていた。そこでアドが着ている赤いドレスも彼が背負っている葉っぱで編まれたようなショールも、真新しく綺麗なものだった。「わたし」は、それを見て違和感を持った。アドのカラーコンタクトと重なって、「偽物」像のようにも思ってしまったからだ。ただ、それは「わたし」が勝手に抱く先入観もあるのかもしれない。

彼女の音楽は、とても美しかった。様々な言葉が聞こえたが、どの曲も非常に調和がとれすぎるほどに、とれているように感じた。

*

2020 年 2 月 21 日 台北

昨日のアドと李の強い誘いのもと、台北市内のビジネスタウンの中心地にある雑居ビル内のレンタルオフィスへ一人で向かった。アドは、今 10 代の 2 人のバンザ人の青年のラッパーデュオをプロデュースしている。彼らは、バンザの言葉で、ラップをつくり、歌っており、最近徐々に台湾国内でファンもついてきて人気がでてきているそうである。バンザの言葉を話すことができる人口は、他の台湾先住民族の言葉と同じように、入り組んだ侵略の歴史を通して、減っており、高齢者を残して僅かという現状である。2 人のラッパーも、普段は中国語(台湾国語)を話しているが、アドの指導で、バンザ語を習い、四苦八苦しながら歌詞をつくっているそうだ。今日は、その彼らにアドがバンザと台湾先住民の歴史、そして現在の台湾先住民が立たされている社会的現状について、プライベートレッスンを受けさせるらしい。ウィリマンは用事があったので、「わたし」だけ参加した。

レクチャーの先生は、アドの友人のバンザ人の男性であった。普段は花蓮で幼稚園の先生兼休日は先住民族人権活動を行っており、李曰く先住民族人活動家のなかでも中心人物らしい。先生は中国語でレクチャーを進め、終始李が「わたし」に英語通訳してくれた。

一番はじめに、先生は 1 つの質問を 2 人の少年に投げかけた。

「自分たちバンザ人の起源はどこ？」

少年達が、答えに戸惑っているのをみて、先生は、「それはここ台湾です」といい、世界地図をみせながら、オストロネシア語族について説明する。これは、遺伝子学的にも、言語学的にも証明されており、遠くニュージーランドに住む先住民族の彼らも自分たちのルー

ツを経験しに台湾を訪れると説明する。「わたし」は、このルーツの話に、日本統治時代の日本がとっていた教育方針を重ねてしまい、少し居心地の悪さを感じた。しかし同時に、ルーツは状況によって強く主張しなければいけないことも納得できる。

先生は、プユマ族やプノン族について冗談も交えて説明したあと、「バンザ人はどんな人間でしょうか?」と聞く。部屋の端で話を聞いていた李は、「いつも明るくて、前向き!」と明るく答えた。すると、先生はこちらを向き、「それは、「馬鹿」ということですか?」と明らかに敵意を向けた言い方で李に言い放った。李は、びっくりした様子で「そういうつもりでは言ってないです…」と小声で言い、部屋全体が一瞬静かになった。

全体の注目が、他に移った頃、「わたし」は隣にいる李の様子を伺いながら、小声で大丈夫か聞く。李は、手でokサインをつくって、また翻訳を「わたし」に続けた。息が詰まりそうになった。

帰りがけに、アドや先生からみんなでご飯に行こうと誘われたが、丁重に断った。李も今日は用事がと、足早に帰って行った。

後日しばらく気になったため、李に先日の先住民族レクチャーの感想を尋ねた。李は、下をむきながら「家に帰ってから泣いたよ」と静かに言った。李ほどまで身近に一緒に働いている仲間間ですら、消えないわだかまりがあることに正直面を食らった。李は、そういった苦い思いをすることがあっても、彼らから学ぶことがたくさんあるので、私は付いていく、と続けた。

*

2020 年 2 月 26 日 台湾・高雄県六龜警備線

台南大や、台南芸術大、高雄師範大の研究チームと高雄の山道を登る。ここは、かつて日本軍がこの一帯に住む山岳民族の領土を狭めるために通した高圧鉄条網の跡地があり、現在は登山マニアなどごく一部の人を除いては、滅多に人も通らない場所である。「わたし」たちは、時折道に落ちている割れたビール瓶を、立ち止まって眺める。そこには、DAINIPPON BREWERY とエンボスが入っている。兵士たちが、仕事終わりに、そこで酒盛りをしていた様子が目に浮かぶ。ガイドの登山家が、厚みの違う瓶は、兵士の階級が違ったことを示している、と話した。みんな、熱心にたくさん写真を撮っている。登山家はその様子を見ながら、「これらは全て山の精霊だから、絶対に持って帰らないように。触ったら、必ず元の位置に戻すように。」と声をかける。かつてここで占領を企んでいた日本人が持って来たものですら、精霊になる、あるいは宿る、と考えるのかと思いを巡らせる。



図 5-14 日本軍がかつて台湾・高雄の山道に残した酒盛りの痕跡

熱心に DAINIPPON BREWERY という瓶にかかれた文字を写真にとる「わたし」を撮影する運営チーム。

(撮影: 2020 年 2 月 26 日 / 「人類世與當代藝術論壇: 歩道, 古道, 警備線」企画・運営チーム)

*

2020 年 2 月 29 日 花蓮県吉安郷

今日は、台北からバスを乗って、日本に留学していたというアドのお父さんに李とアドのお願いもあって、花蓮のアドの実家・お父さんの住んでいる家まで訪ねに向かった。「わたし」は、少し複雑な気持ちもあった。

アドの父親は、1950 年代に先住民族から日本に留学していた数少ない人物らしく、とても興味を惹かれていた。植民地時代を経て、中国本土から国民党が流入し、政府を作り上げ、白色テロが始まっていた頃。どのような複雑な気持ちで、そして実際どのような手筈で彼は台湾を出て、日本にきたのだろうか。

李は、このアドの実家を訪ねる件について、こう話した。「アドは父親のドキュメンタリー映像を製作するために、彼が日本にいた頃の彼自身の記憶を掘り起こしたい、と言っている。それらの記憶は、彼の日本語の記憶の箱に整理されているため、日本語で掘り起こす必要がある」李は、続けて先日アドの実家を訪ねて、彼に日本語でインタビューをしたときの記録映像を見せてくれた。その映像から、彼がどれだけ日本語が今でも堪能かがよく見て取れた。李は、「私の日本語ではベーシックなことしか話せなくて、深いところまで思い出してもらうには、力不足だ」と言った。

「わたし」は、見ず知らずの人の知らないその「記憶の箱」を、初めて会うにもかかわらず、そして娘のアドすら最近知り合ったばかりなのに、「わたし」というイレギュラーな存

在によって、不意に開けてしまったいいのだろうか。罪悪感に少しかられた。結局、頼まれているならば、と不安を振り切り、会いに行くことにした。

昼。アドは、実家に到着した「わたし」たちを予め呼んであったタクシーで、レトロでお洒落な猫のいる喫茶店に連れて行った。アドは、たまに来るのだと言いながら中に入り、先に来ていた友人らしき男性に挨拶した。彼もバンザ族であり、ロンドンで1年間、英語教育の修士号を取得後、台湾に帰ってきて地元のこの花蓮の中学で英語教師をしながら隠れて、翻訳の仕事を週末にしていると、と話していた。しばらくそこで滞在した。李とアドは、中国語で会話をしていたので、「わたし」はウィリマンと話しながら、時々横目で李とアドの様子を観察していた。李は、「わたし」たちと話すときは、基本的にあまり声を上げずに一定のリズムで淡々と話し、そして最終的に話の流れは、暗くなるというのが落ちだった。が、アドと話している李は、身体を前のめりに、深くアドの話に頷きながら、声が3トーンくらい明るかった。「わたし」は、その李の姿勢が、アシスタントという社会的役割の上でその態度を演じているのか、彼女はアドの何かに人間として共感しているのか、惹かれているのか、考えていた。

喫茶店を後にして、私たちは市場へいき、夕飯のための食材を買った。アドは、喫茶店であった友人のスクーターで買った野菜を持って、先に帰って行った。「わたし」たちは、アドの家の前までゆっくり歩く。家に着いたが、李の咳が酷かったので、コロナの疑いもあったので、少し慎重にとりあえず外で咳止め薬が効くまで3人で待った。アドの家の前には、「阿美族文物館」と書かれた建物ある。アドは、「この変一帯は、『バンザ族』が住むエリアだ」と教えてくれた。しかし、バンザ族は、日本の植民地時代に阿美族として分類されたため、それを受け継いだ国民党政府も変わらず阿美族と分類している。建物は、中は劇場のような作りになっていたが、空っぽだった。

李は、阿美族文物館の階段に座って、少し咳き込みながらも、アドたちが置かれている言語的複雑さについて話し始めた。アドの母国語はバンザ語であるが、今はバンザ語よりも中国語を話す機会が多いため、中国語が彼女の第一言語となっている。一方、日本語教育を受け、その後中国語を教育も受けたものの、日本に留学した父とは、共有しきれない大きな壁がある。それをアドはいつも父親に会うたびに感じてきたと、李は話す。李は、それを自分にも重ねていた。家族全員からも慕われてきた李の祖母は、李が子供の頃、病に倒れて、病院で寝たきりになってしまった。李の祖母は、日本語教育で育ったため、あまり中国語が話せず、日本語を第一言語としていた。李も彼女に対して特別な共感の感情をいっていた。しかし、最後の最後まで、祖母とうまく話せなかった。李は、「わたし」たちの前で、そのお葬式を思い出して泣き始めた。外はすっかり暗くなって、会館の前の電灯が灯り始めていた。とても静かった。「わたし」は、李がアドにいただく個人的な共感と、アドとの繋がりを

願う李の個人的な動機が垣間見えた気がした。アドも李の思い出に共感し、二人は大きな歴史を超えて関係を築こうとしているのかもしれないと感じた。

食事に呼ばれて、アドの家の中に入った。初老の男性が一人、リビングで大音量でテレビのニュースを眺めていた。挨拶したが、ぼんやりとしか返事が返ってこなかった。ゲストが来ることの慣れているような感じだった。食卓を囲む。アドが彼女の父に、「マユミは日本人だよ」と伝える。すると彼は、「日本人だと思った。見たらすぐにわかった。」と流暢な日本語で話した。どの瞬間に「わたし」の顔を見たのだろうと不思議に思った。

彼は、なおも伏せ目がちに食事をゆっくりつついていたが、突然「私は、根津に住んでました」と言った。「根津」と聞いて驚いたが、東京大学とも予想はしていたので、やはりそうかと納得していると、彼は「東京藝術大学、知ってるか？」と私に尋ねた。1950年代後半に東京藝大に通っていたと続けた。当時、もちろん台湾先住民族からも、そして台湾からも唯一の留学生だったらしい。彼は2年間楽理科の大学院に所属した。「わたし」も、芸大生だとわかると、急に「わたし」の方を向きながら話し始めた。

「あの坂を下がったところに住んでいましたよ」「あの坂の下がったところの角に、八百屋があって、ある時、その八百屋の主人から顔をまじまじと見られながら、『あんた、どこから来た人？琉球でしょ？』と言われた。それで、『ああ、そうです、そうです』と答えたよ。」と話した。

彼曰く、当時彼は長いあご髭を生やしていて、それが主人をそう思わせたらしい。

「春になると、上野公園の桜の下で、裸になって楽理科のみんなと踊ったよ。」と話した。アドがすかさず「どんな踊りだったの？」と聞くと、「こんなだよ」と踊って見せてくれた。満開の桜が見えて、騒がしい花見客の声が聞こえてきた。アドはとても感激していて、顔が溶けていた。

第 6 章

重なり合えない「わたし」たちと出会う

ー 日本・上野 & スイス・チューリッヒ

6.1 序文

第 6 章では、日本・東京およびスイス・チューリッヒで 2020 年に行った《Avatar tours (アバター・ツアーズ)》シリーズの中から、《# 2: Tokyo Ueno (#2: 東京・上野)》という表現活動を事例として取り上げ、表現活動の実践の中で起こる 1 つの体験について探る。この表現活動では、観客から表現活動の「参加者」となったツアーの参加者たちを通して、実践者たちが自分たちを重なり合わせようとする試みを行った。それに伴い、ツアー参加者も実践者たちの重なり合おうとする試みと葛藤に向き合い続ける実践となった。

6.2 表現活動4 《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno (アバター・ツアーズ #2: 東京・上野)》概要

6.2.1 《Avatar tours #1: Zurich Altstetten》概要

本章で取り上げるこの表現活動4《Avatar tours #2: Tokyo Ueno》は、2020年7月から9月にかけて行なった表現活動《Avatar tours #1: Zurich Altstetten》の後継活動として行われた。そのため、まず《Avatar tours #1: Zurich Altstetten》についても、以下に概要をまとめる。

(1) 表現活動の主体：ニナ・ウィリマン、「わたし」

表現活動の参加者：ツアーゲスト（ツアーに参加したチューリッヒの住民）

(2) 活動期間：2020年7月9日から2020年9月30日

(3) 活動場所：私の自宅および自宅周辺（日本・神奈川県川崎市）、アーティスト・イン・レジデンス施設および制作スタジオ施設Gastatelier Gleis70およびその周辺（アルトシュテッテン地区（チューリッヒ））

(4) 活動概要：

活動の中で、いくつかの異なる取り組みを行った。まずは、全体の活動の軸となった2つの実践を取り上げ、その概要を説明する。

① 「わたし」とウィリマンが声のみのインターネット電話で繋がりながら、ウィリマンがアルトシュテッテン地区を歩き、その時々に見えるもの・聞こえたものなど感じたことを言葉にして「わたし」に伝えていく。「わたし」たちは、このオンライン回線通話を通してどちらか一方の身体を通して、もう一方が向こう側の世界と間接的にふれあう手法を、「アバター」とよぶ。そして、向こう側の世界や他者と自身の身体をもって直接ふれあい、インターネットを介してつながるもう一方に、その状況を実況し、伝え合う橋渡しの役割をする者を、「willimannaraiウィリマンナライ」と呼ぶ。

また同時に、ウィリマンに伝えられたことをもとに、「わたし」が即時的にそれをA4版の白い紙に黒いペンでドローイングを描いたり、キーワードを書き取ったりすることで記録していく。「わたし」たちは、それを第5章で取り上げた2017年の台湾での活動と同様に、「マップドローイング」とよぶ。

また、時に歩いている中で興味深い人に出会ったりした場合には、ウィリマンを通じて、「わたし」がその人物と話した。

② ①で行ったことを、「わたし」とウィリマンの間で歩く役と記録する役を交代し、

「わたし」の自宅周辺（神奈川県川崎市）で同様に行う。

①と②の実践は、8月中旬まで1回ずつ交互に行われた。それ以降は、ツアーを予定したチューリッヒに実践を集中した。毎回歩く時間を1時間と決め、歩く道の決め方は、記録する役側がランダムに決める場合と、その場を偶然通り過ぎた人の後について行く場合と、2通りで適宜行った。また、

③ 歩き終えた後には、Google Documentを使い、ウィリマンと「わたし」で、同じドキュメント上に、英語でその日の「散歩」体験について日記を書いていった。その際、ウィリマンも「わたし」も、自己および互いを表す両方の人称を“I”で統一した。

上記以外にも行った活動の概要を以下に示す。

④ 「アバター」を用いて、人にインタビューを行う。

ウィリマンあるいは「わたし」が誰かに会いに行き、もう片方が、ウィリマンあるいは「わたし」を通して、その人物に1～2時間ほどのインタビューを行う。チューリッヒにて4名、東京にて3名に行った。

⑤ 「Self自己」に何かしら関連すると考えた西洋とアジアの文献をウィリマンと「わたし」のそれぞれの母国語で読み、考えたことをお互いに話す。（取り上げた文献：ジュリア・クリステヴァ[著]『外国人：我らの内なるもの』、西田幾多郎[著]『善の研究』、『易経』（私は、『易経』現代日本語訳版の中で以下のものを選んだ：黒岩重人[著]『全釈 易経』（上・中・下）

また、活動終盤には、チューリッヒの住民たちとこの「アバター」による歩きの実践を共有するために、参加者たちを集め周辺を案内するツアー パフォーマンスを行うことに向けて、その準備・実践・記録を行った。以下は、それらの実践を時系列順に並べたものである。

⑥ ツアーの概要や流れ、巡る順路について、ウィリマンと「わたし」で話し、「わたし」がツアーの順路を決定する。

⑦ ツアーパフォーマンスの脚本執筆のため、ツアーで話す内容に関して、①の実践だけでは不足した知識を、ウィリマンと「わたし」の双方が適宜調べる。

⑧ 歩く実践と並行して、脚本を執筆する。執筆は、主に「わたし」が行い、ウィリマンが補足および英語の文法修正を行った。

⑨ それまでに執筆した脚本を用い、「わたし」が決めたツアーの順路で、ウィリマンと「わたし」だけでツアーパフォーマンスのリハーサルを行う。各リハーサル後、適宜脚本の追加・修正を行う。

⑩ 予め招待した1～3名の参加者を実際に連れて、テスト・ツアーパフォーマンスを行う。計4回行った。

- ⑪ ツアーパフォーマンスの参加者募集を呼びかける文章やイメージをアーティスト・イン・レジデンス運営チームGleis70とともに作り、Gleis70および「わたし」たちそれぞれで、呼び掛けを行う。
- ⑫ ツアーパフォーマンスを行う。

開催場所：Gleis70入り口前を出発し、周回し、同地点に終着、解散(図6-1参照)。

開催日程：2020年9月10日 18:00-19:30(スイス時間)/午前1:00-2:30(日本時間)

参加者人数：19名

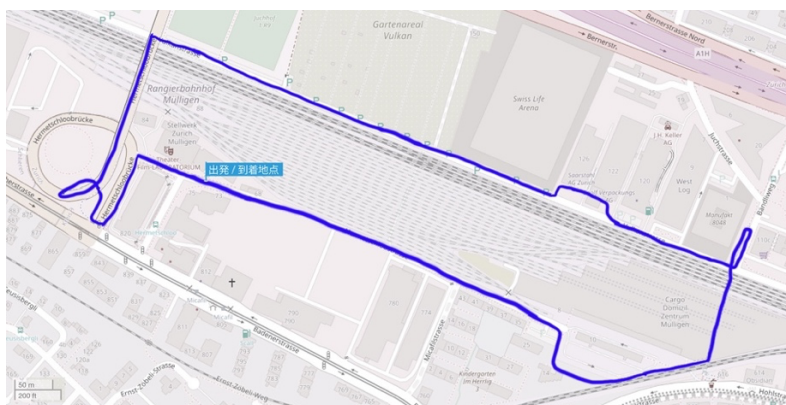


図6-1 《Avatar tours # 1: Zurich Altstadt》のツアーパフォーマンスでウィリマンが参加者を連れて歩いた道（地図引用：©OpenStreetMap contributors, <https://www.openstreetmap.org/#map=17/47.39411/8.47575> <2021年3月8日にアクセス>）

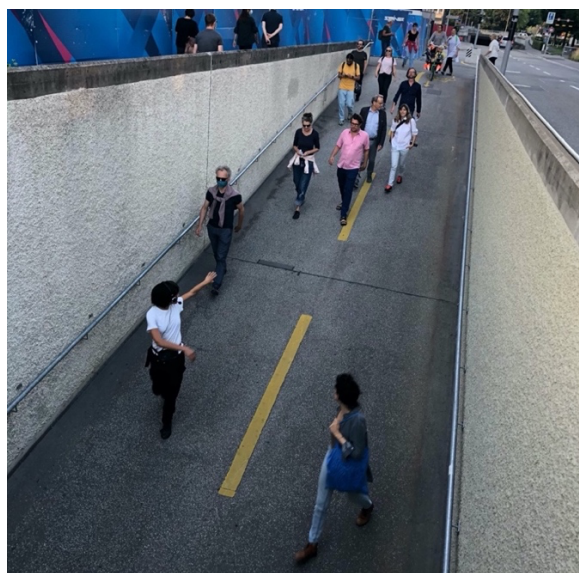


図 6-2 《Avatar tours # 1: Zurich Altstadt》ツアーパフォーマンス中の記録写真

19 名のツアーゲストが、willimannarai の案内を聞きながら、アルテシュテッテン地区を巡った。

(撮影：2020 年 9 月 10 日 / Bruno Alder)

- ⑬ ツアー後、参加者にツアーの感想やそこから考えたことの共有や議論を行った。
- ⑭ 期間中に作成されたマップドローイングと脚本をまとめて、1冊の本を制作した。

(5) 活動主体の装い：

ウィリマンと「わたし」は、別々の場所にしながらにして、3章の香港、4章の中之条の活動時と同じくユニフォームである白いTシャツ、黒いパンツ、黒い靴、黒い靴下、同じカツラに加え、互いにJabraのヘッドセットを装着した。また、ツアーパフォーマンスの際は、外を実際に歩くウィリマンは、ツアー参加者に声を届きやすくするために、さらにポータブルスピーカーを装着した。

6.2.2 《Avatar tours #1: Tokyo Ueno》概要

以上の実践《Avatar tours #1: Zurich Altstetten》でえた経験をもとに、実践《Avatar tours #2: Tokyo Ueno》を行った。概要を以下にまとめる。

- (1) 表現活動の主体：ニナ・ウィリマン、「わたし」
表現活動の参加者：ツアーゲスト（ツアーに参加した東京および東京近郊の住民、チューリッヒの住民（2020年12月4日開催の発表時のみ））
表現活動の観客：東京藝術大学大学美術館（東京）およびHelmhausヘルムハウス美術館（チューリッヒ/スイス）の展覧会に訪れ、パフォーマンス・インスタレーションを鑑賞した東京および東京近郊の住民、チューリッヒの住民
- (2) 活動期間：2020年9月16日から2020年12月30日⁵⁹
- (3) 活動場所：日本・上野周辺（東京芸術大学を拠点）、スイス・チューリッヒ（ウィリマン自宅、ヘルムハウス美術館）
- (6) 発表場所（期間）：上野公園周辺（12月4、12、13、19、20日）、東京藝術大学大学美術館（2020年12月10日-20日）、ヘルムハウス美術館（2020年12月4日-2020年12月22日、2021年3月2日-4月5日）、
- (4) 活動概要：

⁵⁹ スイス・ヘルムハウス美術館での本来の展覧会期間（2020年12月4日から2021年1月24日）に合わせ、本来ならば2020年12月30日以降も《Avatar tours #1: Tokyo Ueno》活動を継続予定であった。しかし、スイス国内での新型コロナウイルス感染症者数の増加を受け、美術館が一時閉鎖隣、会期変更を行った。「わたし」たちもそれに伴い、活動を中止。変更後の会期は、2020年12月4日～22日および2021年3月2日～4月5日となり、再開後の3月2日からは、ヘルムハウス美術館周辺のチューリッヒ旧市街にて、新たなアバターツアーズの活動として、《Avatar tours #3: Zurich Altstadt》を実践中である。（2021年3月10日現在）

《Avatar tours #1: Tokyo Ueno》の活動の中で行った取り組みを時系列順にし、以下に示す。

- ① ウィリマンと「わたし」による歩く実践の前に、予め歩く場所を「わたし」が決め、その順路で通るかかる場所の歴史や言い伝えに関する調査を行う。場所によっては、予め「わたし」一人で歩き、二人での実践の時間帯に開館時間が終わってしまう施設は「わたし」が一人で中を見学した。また、台東区の地元の歴史家ボランティアガイドの方による案内をお願いした。
 - ② 1日1回2時間（17:00-19:00（日本時間）/9:00-11:00(スイス時間)）を目安に、「わたし」とウィリマンが声のみのインターネット電話で繋がりながら、「わたし」が上野周辺を歩き、その時々に見えるもの・聞こえたものなど感じたことを、「今、私は高さ7mほど、幹の太さ2-3mほどのクスノキの前に立って、その奥にのぞいている石造りの四角い建物の国立西洋美術館本館を見ている。私の背後にある銀杏並木から地面に落ちた銀杏の匂いが鼻をついてくる。右手に90度まわって、真っ直ぐ進む。この本館は、国立西洋博物館はル・コルビュジエが設計して…」というように言葉にしてウィリマンに伝えていく。同時に、「わたし」から伝えられたことをもとに、ウィリマンが即時的にそれをA4版の白い紙にペンでドローイングや短い記述、キーワードを書き取ったりすることで記録し、マップドローイングをつくっていく。
- その際に、①で調べたことを、「わたし」がウィリマンに歩きながら、言葉で伝え、その会話の中で出てきた問いについて話し合う。（(5)にて歩いた日時・場所の詳細を提示。）

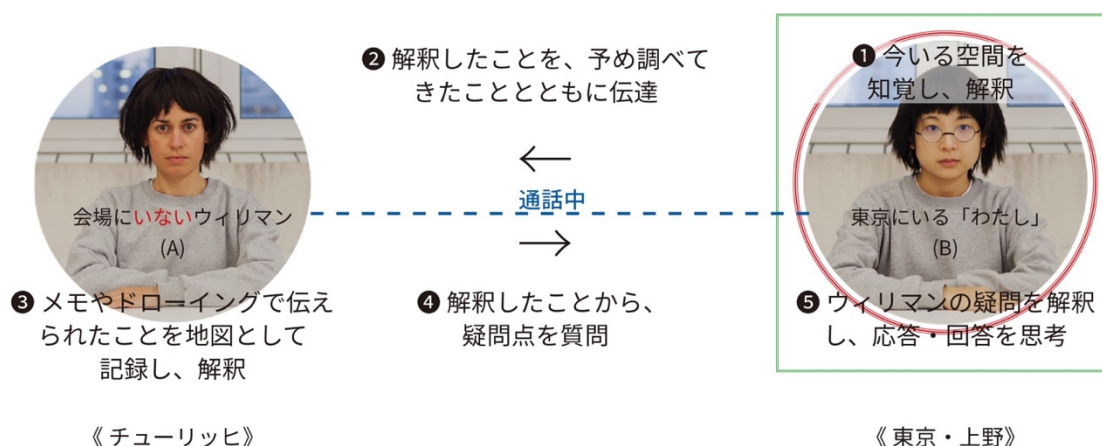


図6-3 《Avatar tours #1: Tokyo Ueno》における「アバター」の仕組み

ウィリマンと「わたし」の間で伝達と解釈が回ること、互いがもつイメージが重なり合う。

- ③ 歩き終えた後に、ウィリマンと「わたし」のこの活動専用のオンライン上のノートやチャットボードに、「わたし」が①の中で調べたこと、②で話した内容、話しかれな

かった細かな詳細に関して、書き込む。オンライン上で調べたことに関しては、リンクを貼り付けて共有する。また、ウィリマンも「わたし」の話から興味を持ったことに関して、自ら調べ、調べた内容を同一のチャットボードに記録を残し、「わたし」と共有する。また、②の実践で感じたこと、考えたことを、そのチャットボードにウィリマン・「わたし」の両者が自由記述していく。

④ 歩く実践は行わず、それまで歩いてきた道中ででてきたトピックについて話し合ったり、歩きながらでは共有しきれなかった詳しい説明を「わたし」からウィリマンに口頭でおこなったり、逆にウィリマンが調べた内容を「わたし」に口頭で共有したり、そこからさらに対話をおこなったりということを行う。

⑤ ウィリマンと「わたし」でともに、柳 美里[著]『JR上野駅公園口』（ウィリマンは英語版、「わたし」は日本語版）を読む。

⑥ 東京・チューリッヒの住民とこの「アバター」による歩きの実践を共有するために、《Avatar tours #1: Zurich Altstetten》と同様に、参加者を招いたツアーを企画する。ツアーの概要や流れ、巡る順路について、ウィリマンと「わたし」で話し、ウィリマンがツアーの順路を決定する。

⑦ ツアーパフォーマンスの脚本執筆のため、ツアーで話す内容に関して、①、②の実践だけでは不足した知識をウィリマンと「わたし」の双方が適宜調べる。

⑧ **脚本を執筆する。**これまで歩いてきた経験、「わたし」がウィリマンに伝えたこと、それをもとに2人で話したこと、調べたことを踏まえ、主な執筆はウィリマンが行い、「わたし」が補足加筆を行う。

⑨ それまでに執筆した脚本を用い、ウィリマンが決めたツアーの順路で、**ウィリマンと「わたし」だけでツアーパフォーマンスのリハーサルを行う。**各リハーサル後、適宜脚本の追加・修正を行う。

⑩ 予め招待した1～3名の**参加者を実際に連れて、テスト・ツアーパフォーマンスを行う。**計3回行った。

⑪ ツアーパフォーマンスの参加者募集を呼びかけるポストカードを作り、「わたし」たちが個人的に、そして《Avatar tours #1: Tokyo Ueno》を発表する東京藝術大学大学美術館にて、配布することで、参加の呼び掛けを行った。また、もう1つの展覧会場であるスイスのヘルムハウス美術館のウェブやフライヤーの配布を通して、参加の呼び

掛けを行った。

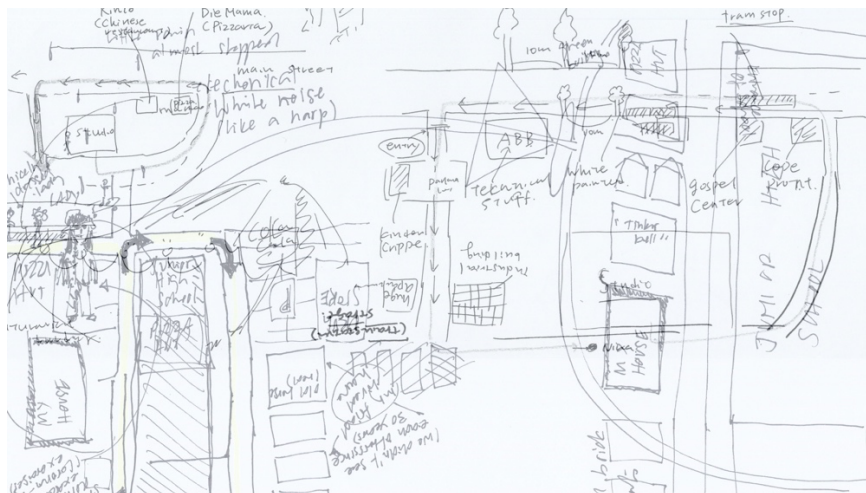


図6-4 ツアーパフォーマンスの告知・招待状等に使用したイメージ

《Avatar tours #1: Zurich Altstadt》の活動においてウィリマンと「わたし」が各々描いた東京とチューリッヒのマッピングを重ね合わせている。

『Willmann/Araiは、世界的に移動規制がかかるなか、ともにチューリッヒと東京の街を歩き、物理的・身体的移動を超えたアナログとデジタルの旅の可能性を探ります。2018年より、独りが何役をも演じる落語を参考に、willimannaraiという二人の共通の-avatarを介したプロジェクトを展開させてきました。本作は「Guided tour guide（ガイドされるツアーガイド）」として機能し、いくつかの場所、時間、もの、歴史、空間とともに、時に身体をも翻訳し重なり合いながら、上野公園を参加者とともに歩きます。本プロジェクトは、チューリッヒにあるHelmhaus美術館にて2020/12/4-2021/1/24で開催される展覧会「Am nächsten Tag ging die Sonne auf」（あくる日、太陽が昇ってきた）（添付PDF）で同時開催されます。（以下、詳細省略）』

引用6-1:「わたし」がツアーパフォーマンスへの招待状(メーリングリスト)に使用した文章の抜粋。(2020年12月8日送信版)



Avatar tours #2: Tokyo Ueno [ツアーパフォーマンス Tour performance]
Willimann/Arai

集合場所 meeting point : 東京芸術大学美術学部正門前 (※ 雨天決行)
Tokyo University of the Arts (main entrance)

2020. Dec. 12 (Sat) 15:30 - 17:00 / 2020. Dec. 13 (Sun) 14:00 - 15:30
2020. Dec. 19 (Sat) 14:00 - 15:30 / 2020. Dec. 20 (Sun) 14:00 - 15:30

・持ち物: 暖かく歩きやすい服装、マスクの着用をお願い致します。
・所要時間: 1 時間程度を予定していますが、野外ツアーのため、所要時間が延びる場合もございます。予め、お時間には余裕を持ってご参加ください。

※ 当日は出発前に感染症予防のガイドラインに則り、検温させていただきます。
※ 本パフォーマンスは予約制ではありませんが、参加人数の事前確認のため、ご参加頂ける日程を本メールにご連絡いただけると幸いです。
問合せ先: araimayumi0@gmail.com (新井麻弓)

図6-5 展覧会会場に置いたツアーパフォーマンス参加者募集を呼びかけるポストカードの表面と裏面

⑫ 期間中に作成された全てのマップドローイングを日本とスイスの2つの展覧会会場で、発表する。

⑬ ツアーパフォーマンスを行う。ツアー中、ある地点から次の地点へと向かう途中には、willimannaraiとなった「わたし」を介したツアーゲストとウィリマンの対話も行われる。場所・日時・参加者の人数に関しては、(5)にて述べる。

表現活動《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》は、本番のツアーが5回行われたこともあり、毎回ツアーを重ねるごとにそこでえた反省点や観客からの感想、議論、想起された点を次の回に積極的に取り込み、変更をおこなった。



図6-6 《Avatar tours #1: Tokyo Ueno》ツアーパフォーマンスの仕組み

ウィリマンと参加者の間に「わたし」が入り、三者の間で伝達と解釈が回ることによって、「ウィリマン」と「わたし」がどのように重なり合っているのか・いないのか実践者自身が見えてくる。

⑭ ツアー後、参加者にツアーの感想やそこから考えたことの共有や議論をその場で行い、あるいはメールやメッセージのやり取りを通じて行った。

⑮ 「わたし」とウィリマン間で、それぞれが、チューリッヒ、東京のツアーパフォーマンスの参加者、展示会場の観客からもらった感想やそこで行われた対話について共有する。

⑯ 期間中に作成されたマップドローイングと脚本をまとめて、1冊の本を制作することを、2021年3月現在行っている《Avatar tours #3: Zurich Altstadt》の実践後に、まとめて制作する方向で計画している。

(5) 活動日時ごとの活動場所・内容一覧：

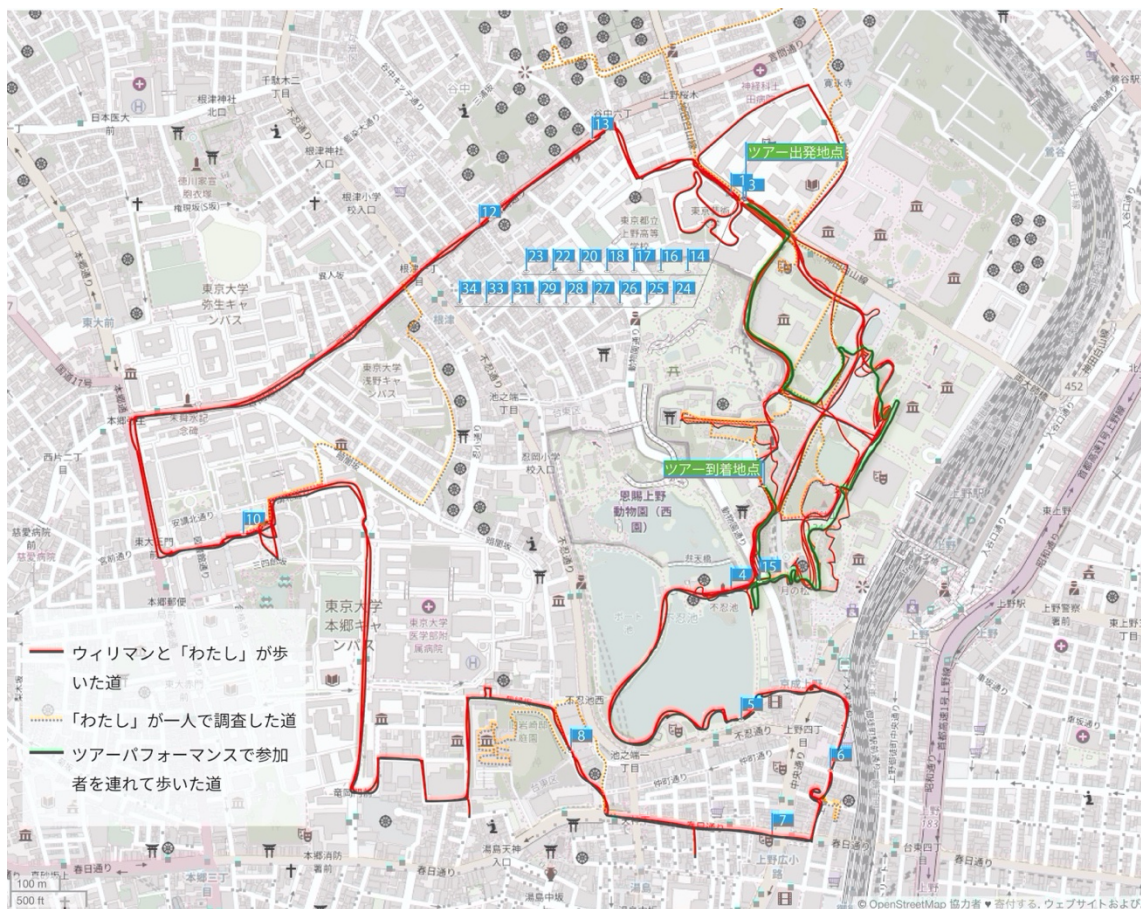


図 6-7 《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》表現活動期間内で、ウィリマンと「わたし」が歩いた道
地図中の番号は、以下の活動番号と照らし合らしながら示した。赤線は二人が歩いた道、オレンジ色の破線は開館時間等の関係で「わたし」が一人で調査した道、緑色の線はツアーパフォーマンスで参加者を連れて歩いた道をそれぞれ示す。

(地図引用元：©OpenStreetMap contributors,

<https://www.openstreetmap.org/export#map=16/35.7146/139.7690> (2021 年 1 月 24 日にアクセス))

[1]

活動日時： 9月16日 15:30-17:30(日本時間)/8:30-10:30(スイス時間)

活動場所： 東京藝術大学美術学部上野校舎（以下、芸大）内美術館入り口～芸大構内岡倉天心像～大浦食堂前～絵画棟横廃棄物置き場～木材工房～デザイン棟～芸大図書館前～芸大正門前から学外へ～桃林堂～寛永寺～社会教育実践研究センター～国立博物館/国際こども図書館の間～黒田記念館～芸大正門前

活動内容概要： (4)②、(4)③

[2]

活動日時： 9月17日 - 10月26日

活動場所：「わたし」の自宅

活動内容概要：(4)①

以前根津を調べていた際に集めていた地域の資料を読み直し、上野に関する本やインターネット上の記事を読み、歩く道を考える。また、東京藝術大学博士審査展の事務局である美術学部教務課や大学美術館とやりとりをしながら、新型コロナウイルス感染予防対策に準じた校内や学外のツアーの可能範囲を話し合う。最終的に事務局から「学内でのツアーは難しい」という旨の回答をもらい、学内での実践を断念した。

[3]

活動日時：10月27日 17:00-19:00(日本時間)/9:00-11:00(スイス時間)

活動場所：芸大正門前～旧東京音楽学校奏楽堂～東京都美術館～芸大生が寄贈した彫刻作品が展示されている通り～トイレミュージアム～上野公園大噴水～国立博物館の方角を眺める～スターバックス～桜並木～花園稲荷神者～神社前の坂～不忍池入口～弁天堂

活動内容概要：(4)②、(4)③

[4]

活動日時：10月28日 17:00-19:00(日本時間)/9:00-11:00(スイス時間)

活動場所：不忍池弁天堂～ボートのりば～ボート池と蓮池の間～野外ステージ～不忍池の蓮に関する歴史が書かれた看板

活動内容概要：(4)②、(4)③

[5]

活動日時：2020年10月29日 17:00-19:00(日本時間)/9:00-11:00(スイス時間)

活動場所：不忍池の蓮に関する歴史が書かれた看板～成人映画館の上野オークラ劇場～つたに覆われたパンダ像～ヨドバシカメラ上野店～パチンコ店舗～アメ横商店街入口～ケバブや中華料理を出す店やマスクや消毒剤を販売する最近できた店舗～松茸を販売する店舗～アメ横商店街内運動靴量販店

活動内容概要：(4)①（その日辿る道を②の前に、予め「わたし」一人で辿る）、(4)②、(4)③

[6]

活動日時：2020年10月30日 17:00-19:00(日本時間)/9:00-11:00(スイス時間)

活動場所：アメ横商店街内運動靴量販店～欧米諸国の軍の制服を扱うミリタリーショップ～いくつかの商店が並んで入っている建物の2階にある寺（摩利支天徳大寺）～アメ横商店街通りへ戻る～金券屋～JR御徒町駅～ユニクロ～いくつかの小さな食堂や宝石店～松坂屋～上野広小路前駅～お江戸上野広小路亭

活動内容概要：(4)①（その日辿る道を②の前に、予め「わたし」一人で辿る）、(4)②、(4)③

[7]

活動日時：2020年11月2日 13:00-16:30、16:30-18:30(日本時間)/8:30-10:30(スイス時間)

活動場所： お江戸上野広小路亭～飲食店～店先でふぐが水槽の中で泳いでいるふぐ料理
店舗前～韓国化粧品店舗～酒類を提供する飲食店や風俗店、外国人労働者の接待を売り
にする飲食店～総合ディスカウストア「ドン・キホーテ」～老舗和菓子屋～湯島駅
～サッカーボールが置き去りにされている車のない駐車場～69年代に建てられた湯島ハ
イタウンA棟～旧岩崎邸庭園入口

活動内容概要： (4)①(②の前に、開館時間の関係上「わたし」一人で旧岩崎邸庭園
の見学を行う)、(4)②、(4)③

[8]

活動日時： 2020年11月5日 17:00-19:00(日本時間)/9:00-11:00(スイス時間)

活動場所： 旧岩崎邸庭園入口～無縁坂を通過、旧岩崎邸庭園敷地の外周を歩く～東京
大学の敷地との間にあるたんぽぽ保育園～三菱経済研究所～文京区教育センター～空き
地～東京大学外壁前～東京大学竜岡門～大学運動場～東京大学医学部附属病院～東京大
学理学部～東京大学本郷キャンパス工学部前～コンビニエンスストア「ローソン」～安
田講堂前～銀杏並木通り～

活動内容概要： (4)①(②の前に、開館時間の関係上「わたし」一人で旧奏楽堂およ
び黒田記念館の見学を行う)、(4)②、(4)③

[9]

活動日時： 2020年11月6日 17:00-19:00(日本時間)/9:00-11:00(スイス時間)

活動場所： 芸大絵画棟

活動内容概要： (4)④

[10]

活動日時： 2020年11月10日 17:00-19:00(日本時間)/9:00-11:00(スイス時間)

活動場所： 東京大学本郷キャンパス工学部前(以下、東大)～コンビニエンスストア
「ローソン」～安田講堂前～銀杏並木通り～東大正門前～東大の外壁沿いに歩く～言問
通り～東大キャンパス～いくつかの小さな新しい飲食店舗、イタリア料理店や小料理店
～根津駅～食料品店「赤札堂」～牛井や食堂屋～病院～言問通り沿いの信楽焼のためき
の置物が店先に置かれた飲み屋

活動内容概要： (4)②、(4)③、(4)⑤(以降、二人とも各自で(4)⑤を行う。)

[11]

活動日時： 2020年11月18日 18:30-20:30(日本時間)/10:30-12:30(スイス時間)

活動場所： 芸大絵画棟

活動内容概要： (4)④

[12]

活動日時： 2020年11月19日 17:00-19:00(日本時間)/9:00-11:00(スイス時間)

活動場所： 言問通り沿いの信楽焼のためきの置物が店先に置かれた飲み屋～いくつかの
寺～東京消防庁 上野消防署谷中出張所～言問通り沿いの本光寺

活動内容概要： (4)①(その日辿る道を②の前に、予め「わたし」一人で辿る)、(4)

②、(4)③

[13]

活動日時： 2020年11月20日 17:00-19:00(日本時間)/9:00-11:00(スイス時間)

活動場所： 言問通り沿いの本光寺～花屋～有機野菜屋～オルゴール屋（2章で述べた関さんのお店）～様々な鳥を飼っている、鳥カフェ～古道具屋EXPO～建築事務所～大黒天～芸大絵画棟裏手～桃林堂～芸大正門前

活動内容概要： (4)①（その日辿る道を②の前に、「わたし」が台東区の歴史家ボランティアガイドの方による案内のもと）、(4)②、(4)③

[14]

活動日時： 2020年11月21日 17:00-19:00(日本時間)/9:00-11:00(スイス時間)

活動場所： 芸大正門前～[1]から[13]で辿った道～芸大正門前

活動内容概要： (4)②、(4)③、(4)⑥

これまでウィリマンが描いてきたマップドローイングを見ながら、[1]から[13]で辿った道を、時間をはかりながら全て辿りなおし、ツアーの辿る道を考え始める。

[15]

活動日時： 2020年11月22-23日

活動場所： 各自の自宅等にて

活動内容概要： (4)①、(4)③、(4)⑥、(4)⑦

[16]

活動日時： 2020年11月24日 17:00-19:00(日本時間)/9:30-11:30(スイス時間)

活動場所： 芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園旧正門～上野動物園正門～上野東照宮～精養軒～時の鐘～桜並木～不忍池前

活動内容概要： (4)①、(4)②、(4)③、(4)⑥、(4)⑦、(4)⑧（以後、ツアーの脚本は、二人で歩く実践をしていない時にも各自共通のオンライン上のドキュメントで適宜書き進めていく。）

[17]

活動日時： 2020年11月25日 18:00-22:00(日本時間)/10:00-14:00(スイス時間)

活動場所： 芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園旧正門～上野動物園正門～国立西洋美術館～東京文化会館～正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前

活動内容概要： (4)②、(4)③、(4)⑥、(4)⑨、(4)⑫（ヘルムハウス美術館のインスタレーション搬入作業）

[18]

活動日時： 2020年11月26日 17:00-22:00(日本時間)/9:00-14:00(スイス時間)：会議/ツアー練習

活動場所： 芸大正門前～黒田記念館～旧東京音楽学校奏楽堂～東京都美術館～芸大生が寄贈した彫刻作品が展示されている通り～トイレミュージアム～上野公園大噴水～国立

博物館の方角を眺める～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～正岡子規記念球場
～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～時の鐘～精養軒～上野東照宮～上野動物園正門～上野恩賜動物園旧正門～東京都美術館搬入口～芸大正門前

活動内容概要：(4)⑥、(4)⑨、(4)⑫ (ヘルムハウス美術館のインスタレーション搬入作業)

[19]

活動日時： 2020年11月27日 22:00-24:00(日本時間)/14:00-16:00(スイス時間)

活動場所： 各自の自宅等にて

活動内容概要：(4)⑨ (実際には外は歩かず、ツアーパフォーマンスの練習を行う。話す内容とその翻訳の確認を行なっていく。)、(4)⑫

[20] 2020年11月28日 15:30-18:30(日本時間)/7:30-10:30(スイス時間)

活動場所：芸大正門前～黒田記念館～旧東京音楽学校奏楽堂～東京都美術館～芸大生が寄贈した彫刻作品が展示されている通り～トイレミュージアム～上野公園大噴水～国立博物館の方角を眺める～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～時の鐘～精養軒～上野東照宮～上野動物園正門～上野恩賜動物園旧正門～東京都美術館搬入口～芸大正門前

活動内容概要：(4)⑩、(4)⑭

テストツアー参加者：2名

[21] 2020年11月29日-12月1日

活動場所：各自自宅等にて

活動内容概要：(4)⑦、(4)⑧、(4)⑪

[22]

2020年12月2日 17:30-19:00(日本時間)/9:30-11:00(スイス時間)

活動場所：芸大正門前～黒田記念館～旧東京音楽学校奏楽堂～東京都美術館～芸大生が寄贈した彫刻作品が展示されている通り～トイレミュージアム～上野公園大噴水～国立博物館の方角を眺める～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～時の鐘～精養軒～上野東照宮～上野動物園正門～上野恩賜動物園旧正門～東京都美術館搬入口～芸大正門前

活動内容概要：(4)⑨、(4)⑧、(4)⑪

[23]

活動日時：2020年12月3日 17:30-22:30(日本時間)/9:30-14:30(スイス時間)

活動場所：2回行なった。

1回目：テストツアー

芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園旧正門～上野動物園正門～国立博物館前～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～桜並木～時の鐘～精養軒～上野東照宮～上野動物園正門～上野恩賜動物園旧正門～東京都美術館搬入口～旧奏楽堂

～黒田記念館～芸大正門前

活動内容概要：（４）⑩、（４）⑭

テストツアー参加者：１名

２回目：１日目を踏まえ、参加者なしでウィリマンと「わたし」のみでテストツアー
芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園旧正門～上
野動物園正門～国立博物館前～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～正岡子規記
念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～桜並木～時の鐘

活動内容概要：（４）⑨、（４）⑧

[24]

活動日時： 2020年12月4日 17:30-19:30(日本時間)/9:30-11:30(スイス時間)

「わたし」の活動場所：芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上
野恩賜動物園旧正門～上野動物園正門～国立博物館前～銀杏並木～国立西洋美術館～東
京文化会館～正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～桜並木
～時の鐘

ウィリマンの活動場所：ヘルムハウス美術館前

活動内容概要：（４）⑬（英語でツアーパフォーマンスを行う）、（４）⑭、（４）

⑧、（４）⑫（2020年12月4日～22日および2021年3月2日～4月5日の期間、ヘルムハウス美術館『Am
nächsten Tag ging die Sonne auf（あくる日、日が昇った）』展に参加し、マップドロ잉等をイ
ンスタレーションとして発表。）

ツアー参加者人数：チューリッヒにて計30名（ただし、外気の寒さにより、最初から
最後まで聞いていた観客は2名）、東京にて3名。東京のツアーゲストは、全員日本語
非母国語話者の美術関係者であった。内、知人2名。



図 6-8 チューリッヒでの《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》ツアーパフォーマンス記録写真

スイスでの展覧会オープニングで、美術館前でツアー脚本を読み上げ、チューリッヒの住民たちを上野公園の想像上のツアーへと案内するウィリマン。(撮影：2020年12月4日 /Vreni Spieser)



図 6-9 上野での《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》ツアーパフォーマンス記録写真 01

図 6-8 とほぼ同時刻に撮影した記録。図 6-8 の通り、ウィリマンが伝えた言葉は、「わたし」によって即時的に上野公園で実際にツアーとして行われる。(撮影：2020年12月4日 /Zoé Schellenbaum)



図 6-10 チューリッヒでの《Avatar tours # 1-3: Zurich-Tokyo》インスタレーション・ビュー01

東京の会場（図 6-11、図 6-12）と同様に、1枚の大きな地図になるようにマップ・ドローイングを描いたとおりに並べる。写真左端の机で、ウィリマンは「わたし」との通信を通してマップ・ドローイングの実践を行い、それに伴ってインスタレーション全体の構成も日々変化させていった。画面では、東京の会場と同様、ツアーパフォーマンスの短い記録映像が流された。スイス・チューリッヒ、ヘルムハウス美術館にて。（撮影：2020年12月16日 / ニナ・ウィリマン）

[25]

活動日時：2020年12月8日 18:00-20:00(日本時間)/10:00-12:00(スイス時間)

活動場所：芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園

旧正門～上野動物園正門～国立博物館前～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～

正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～桜並木～時の鐘

活動内容概要：（4）⑮、（4）⑨、（4）⑧

[26]

活動日時：2020年12月10日 17:30-19:00(日本時間)/9:30-11:00(スイス時間)

活動場所：芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園

旧正門～上野動物園正門～国立博物館前～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～

正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～桜並木～時の鐘

活動内容概要：（4）⑮、（4）⑨、（4）⑧、（4）⑫（12月10日～12月20日まで東京藝術大学大学美術館『博士審査展』に参加し、マップドローイング等をインスタレーションとして発表。）



図 6-11 上野での《Avatar tours # 1-2: Zurich-Tokyo》インスタレーション・ビュー01

《Avatar tours #1: Zurich Altstadt》および《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》のそれぞれの活動期

間に制作されたマップ・ドローイングとツアーパフォーマンスの様子を短くまとめた記録映像を、活動概要とツアーの紹介文・招待状とともに展示した。東京藝術大学大学美術館にて。(撮影：2020年12月17日 / 松尾宇人)



図 6-12 上野での《Avatar tours # 1-2: Zurich-Tokyo》インスタレーション・ビュー02

《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》表現活動中でウィリマンが描いたマップ・ドローイング全体像。

(撮影：2020年12月17日 / 松尾宇人)

[27]

活動日時：2020年12月11日 17:30-19:00(日本時間)/9:30-11:00(スイス時間)

活動場所：芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園
旧正門～上野動物園正門～国立博物館前～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～
正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～桜並木～時の鐘

活動内容概要：(4) ⑮、(4) ⑨、(4) ⑧

[28]

活動日時：2020年12月12日 15:30-17:00(日本時間)/7:30-9:00(スイス時間)

活動場所：芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園
旧正門～上野動物園正門～国立博物館前～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～
正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～桜並木～時の鐘

活動内容概要：(4) ⑮、(4) ⑬(日本語でツアーパフォーマンスを行う)、(4)
⑭、(4) ⑧

ツアー参加者人数：8名(博士号審査員および美術関係者の知人2名。)

[29]

活動日時： 2020年12月13日 14:00-15:30(日本時間)/6:00-7:30(スイス時間)

活動場所： 芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園
旧正門～上野動物園正門～国立博物館前～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～
正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～桜並木～時の鐘

活動内容概要： (4) ⑮、(4) ⑬ (日本語でツアーパフォーマンスを行う)、(4)
⑭、(4) ⑧

ツアー参加者人数： 6名 (知人4名。他2名の参加者は、美術館での展覧会を見て興味をもち、参加。1名は、前日に見に来た上で、翌日改めてツアーに参加するために再訪された。美術関係者5名。)

[30]

活動日時： 2020年12月16日 21:00-23:00(日本時間)/13:00-15:00(スイス時間)

活動場所： ヘルムハウス美術館

活動内容概要： (4) ⑮、(4) ⑨、(4) ⑧

実際には外は歩かず、ツアーパフォーマンスの練習を行う。話す内容とその翻訳の確認を行なっていく。ウィリマンは、ヘルムハウス美術館の「わたし」たちのインスタレーション内の机につく。「わたし」は、ウィリマンとテレビ電話でつながり、壁にかけられたモニターには、「わたし」がうつされている。美術館の観客は、ツアーパフォーマンスの練習の様子を見ることができる。



図 6-13 チューリッヒでの《Avatar tours # 1-3: Zurich-Tokyo》インスタレーション・ビュー02

ツアーパフォーマンス練習時、話し合いの際は、「わたし」もヘルムハウス美術館の展示会場に現れる。(撮影：2020年12月12日 / ニナ・ウィリマン)

[31]

活動日時： 2020年12月17日 17:30-19:00(日本時間)/9:30-11:00(スイス時間)

活動場所：芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園
旧正門～上野動物園正門～国立博物館前～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～
正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～桜並木～時の鐘
活動内容概要：（４）⑮、（４）②、（４）⑨、（４）⑧

[32]

活動日時： 2020年12月18日 21:00-23:00(日本時間)/13:00-15:00(スイス時間)

活動場所： ヘルムハウス美術館

活動内容概要：（４）⑮、（４）⑨、（４）⑧（[30]と同様）

[33]

活動日時： 2020年12月19日 14:00-15:30(日本時間)/6:00-7:30(スイス時間)

活動場所：芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園
旧正門～上野動物園正門～国立博物館前～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～
正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～桜並木～時の鐘
活動内容概要：（４）⑮、（４）⑬（日本語でツアーパフォーマンスを行う）、（４）

⑭、（４）⑧

ツアー参加者人数： 9名（美術関係者知人5名。他4名は、美術館での展覧会を見て興味をもち、予め予約の上、参加。内、1組の40-50代ほどの夫婦と30代前後男性は近隣在住の方々と、上野のツアーということで興味をもって参加。）



図 6-14 上野での《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》ツアーパフォーマンス記録写真 02

毎回 6～9 人ほどのツアー参加者たちは、willimannarai の案内を聞きながら、上野公園内を巡った。

（撮影： 2020 年 12 月 19 日 / 松尾宇人）

[34]

活動日時： 2020年12月20日 14:00-15:30(日本時間)/6:00-7:30(スイス時間)

活動場所： 芸大正門前～黒田記念館～旧奏楽堂～東京都美術館搬入口～上野恩賜動物園

旧正門～上野動物園正門～国立博物館前～銀杏並木～国立西洋美術館～東京文化会館～

正岡子規記念球場～摺鉢山～時忘じの塔～上野清水寺～不忍池前～桜並木～時の鐘

活動内容概要： (4) ⑮、(4) ⑬ (日本語でツアーパフォーマンスを行う)、(4)

⑭、(4) ⑧

ツアー参加者人数： 9名 (美術館関係者知人7名。他2名の内、1名は知人の紹介で参加。もう1名の50代前後男性は、GoToトラベルを使い、西東京から1泊で上野観光に來られた。偶然通りかかった東京藝大での展示を見て、ツアーに参加。)



図 6-15 上野での《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》ツアーパフォーマンス記録写真 03

たまたまツアーパフォーマンス前を通りかかった人々も立ち止まって、ツアーに耳を傾けることこともあった。(撮影：2020年12月20日 / 縣健司)

[35]

活動日時：2020年12月21日-24日

活動場所：各自の自宅

活動内容：(4)⑭

[36]

2020年12月24日 22:00-24:00(日本時間)/14:00-16:00(スイス時間)

活動場所：各自の自宅

活動内容概要：（4）⑮

[37]

活動日時：2020年12月25日-30日

活動場所：各自の自宅

活動内容：（4）⑭

[38]

2020年12月30日 19:00-21:00(日本時間)/11:00-13:00(スイス時間)

活動場所：各自の自宅

活動内容概要：（4）⑮

（6）活動主体の装い：

ウィリマンと「わたし」は、別々の場所にしながらにして、3章の香港、4章の中之条の活動時と同じユニフォームである白いTシャツ、黒いパンツ、黒い靴、黒い靴下、同じカッラに加え、互いにJabraのヘッドセットを装着した。また、ツアーパフォーマンスの際は、外を実際に歩く「わたし」は、ツアー参加者に声を届きやすくするために、さらにポータブルスピーカーと防寒用で紺色のウィンドブレーカーを装着した。また、2020年12月4日のヘルムハウス美術館外でのツアーパフォーマンス発表時には、ウィリマンも同様の格好をして行った。

6.3 「わたし」たちの気づきの交換録#4

この節では、表現活動《Avatar tours #1: Zurich Altstetten》の活動期間中に「わたし」とウィリマンが記述した気づきの交換録の抜粋を載せる。

本章の6.2.1(4)活動概要③でも述べたように、この表現活動における気づきの交換録は、ウィリマンと「わたし」がGoogle Documentを利用し、毎回歩く実践後に、1つの文章を同時に一緒に英語で綴るということを行った。そこでは、自身の経験である行ったこと、起こったこと、感じたことを、ウィリマンも「わたし」も一人称である“I”（私）を使い、英語で綴っていった。

本論文中には、私、新井麻弓によって翻訳された邦訳版のみを以下に掲載した。

*

2020 年 7 月 9 日 10:27 - 11:27 (スイス時間)、17:27- 18:27 (日本時間) スイス・チューリッヒ

今朝の新鮮な空気。太陽。目的地に向かうたくさんの配送車、作業服を着てタバコを吸っている男たち。ビルの横にある駐車場は、半分がコンクリート、半分が泥や砂で、秩序なく駐車された車が、なんだか私を挑発しているように見える。これは、ニコルが話していた「汚染された土地」の一部なのだろうか？駐車場の端の外来種のベルーフクロイター *Berufkräuter* (ヒメジョンの仲間) が生い茂る小さな坂道を通らなければならない。

ようやく大通りに出て、街の方向に向かって進む。「街」とは、つまりチューリッヒのことだ。正確に言えば、ここもチューリッヒの市内である。しかし、同じ通りでありながら、私が普段住んでいる側とここでは、大きく環境が異なる。ここには、中古車屋、洗車場、修理屋がたくさんある。車の影に座っている男がいる。彼はとても疲れているようにみえる。レストランの清潔な白いテーブルには、3つの人形をそれぞれの椅子に座らせている一人の女性以外は、誰も座っていなかった。私は何も言わなかった。私は、彼女について私自身に話しているところを、聞かれたくなかった。そうすると、私は気がついた。私は、彼女を見えなくしてしまったのだ。彼女が存在を私の記憶から消し去ってしまったのだ。

人のことをその人のすぐ後ろで話すのは怖い。すれ違う人に、私がその人の話をしていることを聞かれることも躊躇われる。しかし、私は実際には半分見えていないのだ。だから、半分の私だけ、それを躊躇した。

一人の女性がリサイクルステーションに来て、緑色の（ワイン）ボトルを3本、ガラス容器入れに入れている。彼女は独り言をいっているが、よく見たら、私と同じようにヘッドセットをつけていた。私は、それを見て安心する。この社会には適応しようとする強い衝動があり、あえてその規範から外れた行動をするには大きな勇気が必要である。私はこの圧力を、通り過ぎる人々が私に対してもつであろう敵意を予測し、感じることができる。

私は過去、現在そして未来を同時に記録している。

私は目の前の通りで一人の老婦人を見つけた。彼女は、小さな花がたくさんプリントされた白いワンピースを着て、アディダスのスリッパを履き、使用済みと思われる白いビニール袋、使い古した黒いハンドバック、黒いサングラスをかけている。彼女は歩きながら私を追い越していった。彼女はすでに数分前に立ち去ったが、私はまだ彼女を「見ながら」、描いている。

私は自分の身体に制限を感じる。自由に動くことができない。私は常に右と左で混乱し、

次の瞬間には、自分の左右の位置関係も忘れてしまう。自由に見ることもできない。見えているものはすでに選択されているものだけ。休みたいのに立ち止まることもできない。歩き続けている。歩きながら、同時に座っている。私は聞くことに集中している。目の前にあるものを見るために、注意深く聞かなければならない。通過する列車の音が響いてくる。いくつかの列車が通過している。周りには冷たい風景が広がっており、誰も私に「こんにちは」と言ってくれないが、たくさんの玉蟲色をしたハエたちは私のところにやってくる。

犬の糞を踏んでしまった、ことに気づいた。

前に通ったりサイクルステーションの近くに、赤い犬の糞用の袋でいっぱい金属製のゴミ箱を思い出した。そのゴミ箱を再び見つけると、白い犬が近づいてきて、私の手を舐めた。私はもう一度ゴミ箱の方を振り返った。犬の糞袋の上にはたくさんのハエが飛び回っているのが目に入った。

＊

2020 年 7 月 10 日 10:00 - 12:08 (スイス時間)、17:51- 19:08 (日本時間) 神奈川県川崎市

夕方、たくさんの子供たちが買い物袋を持った母親たちと一緒に帰宅している。一日中雨が降りつづけて道は濡れ、空気はとても湿っている。まるで台湾の空気ようだ。太魯閣の山の中を思い出させる。

湿度は 90%を超えていると思う。

突然、手に血が付いていることに気がついた。右足には蚊に刺された跡があった。だんだん痒くなってきた。

私の周りに、たくさんの子供たちがいる。多くの子供たちが、とても奇妙なものを見るように私を見つめてくる。彼らは戸惑っている。母親たちは子供たちに早く立ち去るように促す。子供たちは私から離れていくが、同時に後ろを振り返りながら、まだ私を見つめてくる。私は笑顔で手を振りながら話しつづける。母親たちは子供たちの腕を引っ張ろうとする。

私は小児を狙う不審者に見えるだろうか？

血のついた手を、大きな花（紫陽花）の前にかざしてみる。そのさらに後ろには、中学校の正門が見える。

宅配業者や帰宅途中のサラリーマンが数人、私の横を通り過ぎていくだけで、街は子供たちを除いて静まり返っている。みんなマスクをしている。

本屋に入り、ビジネス書コーナーへ向かう。市場の不安感を極める。サラリーマンは昼寝中に貯金を増やす。お金についての講義（世界一！）。誰も教えてくれなかったお金の話。今すぐに会社の上司の奥さんをゲットするべし！5年で億万長者になれる！

アリ・キエフの『リスクの心理学』を開く。373ページの第4章「リスクをなくす」を開く。街の中で起こっていることから、だんだんと小さな極小の世界に入っていく感じがする。たくさんの言葉がお互いに語り合っている。今見ているものを自分自身で表現しなければならないが、表現すべき言葉が多すぎて、表現の優先順位がわからなくなる。

リスクに対する3つのツール。

過去（自分の古い考え）に別れを告げる方法

自分の感情をコントロールする方法（ケーススタディ）

感情的な反応がどれだけトレーディング活動に影響を与えるか。

ケネスは、マーケット・ニュートラルでポートフォリオを持つジュニアトレーダーです。ケネスはコーチングを受けたいと思っています。彼は自分の感情をコントロールできるだろうか。

少年のような「小人（つまらない人）」(易経 20)の思索。小人にとっては欠点ではない。高貴な人にとっては恥ずかしい。全てを俯瞰できる塔はどこにあるのか？

私にとっては、どれも全て同じように見えるアパートや駐車場の連なりの中でどうやら迷子になったようだ。家庭と仕事の間に挟まれたサラリーマン生活の閉塞感の中で一息つく。私は息をすると同時に、見て、描写する。時々、描くことに集中しすぎて、呼吸のタイミングを忘れがちになる。遠くまで見ようとするが、なかなかできない。なぜなら、その瞬間、隣にあるものを描写するのにすでに幾分か時間が必要で、遠くまで描写する前に、すでに私自身がその前を通り過ぎてしまい、そしてまた次の世界を見ているような気がする。物語ることで自分を見失うことはできるのか？自分自身の物語に没頭せよ。

偽の赤レンガでできたアパートや家が多く並んでいる。それを説明するまで、気に留めたことがなかったことに驚かされる。家の前の庭にバラが咲く偽の赤レンガの家がある。

帰り道に公園を通ると、飼い主たちに見守られた20匹ほどの犬が吠えている。

*

2020年7月17日 15:30 - 16:29 (スイス時間)、22:30 - 23:29 (日本時間) スイス・チューリッヒ

全体の地理的な方向性と状況の詳細を同時に把握することは不可能だと考える。そこで今日は、自分の知覚を同期させ、皮膚・鼻・耳などの身体感覚に耳を傾けることに集中することにした。

私は自分の鼻に従い、右に進む。

まるで薬物的恍惚に溺れているかのようなマッシュルームに何度か出会った。体は青、ピンク、赤色をしていた。私は冷たい灰色の道を歩きつづける。彼/彼女はこの灰色の世界からトリップしているようだが、私はまだここにいる。

ビール缶、タバコ、ペットボトル、コーヒーカップがたくさん捨てられている。通りを辿っていく。白い巨大なトラックが猫用のドアのようなところから出てきた。後ろには POST と書かれている。男がそのトラックを運転している。黒いサングラスをかけているが、今日は灰色の天気で、太陽は見えない。ヤクザ映画に出てきそうな男が目浮かぶ。

高速道路に続くカーブした道に囲まれた、不思議な小さな公園に到着した。ここはともうるさい。ベンチが2つあって、片方は壊れかけている。私は壊れた方のベンチを選び、空を見上げる。たくさんのプラタナスの木が見えた。幹は、ミリタリー柄のような特徴的な模様がある。木々はとても高く、20～25メートル程はある。木の後ろには、郵便配送センターの建物が見える。隣の建物は、斜めに傾いており、配送センターの建物に寄りかかっているように見える。

配送センターは、この辺りでは有名な記念碑的な建物である。毎日、たくさんの手紙がトラックで運ばれてきては、夜には列車のコンテナが行き来する。夜、横になっていると、よくその音が聞こえてくる。インターネットでその建築家を検索した。チューリッヒ観光局のホームページでは、親切なマンディが案内してくれた。

ベンチに座って、この機能的でかつ記念碑的な何かに感心していると、急に強い雨が降ってきて驚いた。私はレインコートも傘も持ってきていなかったもので、本能的に橋の方向に走った。なぜこのような反応をしたのか後になって考えると、避難場所としての橋を連想したためだ。レッド・ホット・チリ・ペッパーの曲を思い出した。マンディは、郵便配送センターを建てた建築家が誰なのか、正確には教えてくれない。

私はしばらくこの橋/シェルターに留まり、そこにあるものを観察して楽しむことにした。

ドアを見つけた。扉の横には「Kinder Theater Schmetterling - Lager 1 Bühnen set design 8」と書かれた紙が貼られている。8...いや、待てよ...もしかしたら8ではなく、ただの2つの円なのかもしれない。

橋の下には、未開封の鶏肉のパッケージ（肉は美味しそうなピンク色をしているが、パッケージの中には怪しげな液体がみえる）が落ちており、その横に石とコンクリートと道路の縁石の間に生えている小さなエルダーツリー（ニフトコの木）が生えていた。狭い道路の反対側には、ビールの空き缶が転がっている。エルダーツリーの1メートル横には、2つのパニーニとユニフォームを着たスーパーヒーローが描かれたカードが落ちている。上を見ると、聖書の一説が引用された大きな看板がある。Google 翻訳は、日本でその意味を教えてくれる。神さえも宣伝をする。

*

2020 年 7 月 20 日 10:00 - 11:00 (スイス時間)、19:00- 20:00 (日本時間) 神奈川県川崎市

アパートを出ると、WiFi の接続に小さな問題が発生した。右耳から奇妙な電子音、ホワイト・ノイズのような音が聞こえる。最初はエレベータの遮断効果が原因かと思ったが、しびれた感じはそのまましばらく続いた。天気の良いか、湿度が高すぎるのか…。

外に出ると、前回の散歩の様子を思い出した。夕方 5 時頃には家の隣の保育園から出てきた子連れの親たちがたくさんいた。そのため、子供以外で面白そうな人を探すのは難しいかもしれない、と思った。しかし次の瞬間、青い T シャツを着た男が、テイクアウトのピザが入った箱（近くのピザハットで買ったのだろう）を持ち、もう一方の手には携帯電話を持っているのが見えた。一瞬判断に迷ったが、その男は面白そうに見えたので、付いて行くことにした。

気づかれるのは、少しこわい。私のところにやってきて、怖い顔で「おい、お前が俺を付けてきていることはわかっているぞ」と言われることを想像する。

男の歩くペースは速く、街角で男が左に曲がる時には、すでに私は追いつくために小走りにならなければいけなかった。途中で気がついた。男はとても速く歩くため、実は気づかれる心配はない、と。むしろ、男の歩く速度に合わせるのはかなり大変である。男の足の長さのせいだろうか。日本人ではないかもしれない。男の足が速いからそう思うのか、それともゆっくり歩くアジア人のイメージは、植民地化された私の心の中のステレオタイプの投影か。しかし、実際は、目の前を通り過ぎていく時に一瞬だけ見た男の横顔を少しだけ覚えていたということに気がついた。男は坂道を下り、大通りに向かっていく。大通りの両側は銀杏の木に囲まれている。これもまた私のもつ日本の紋切り型だが、今回は絶対に私の単なる想像ではない。銀杏の木のことを私に伝えた後、その通り沿いにはたくさんの銀杏の木がある、ということに気がつかされた。私が銀杏の木の存在を意識するのは、いつも秋になってからだ。たくさんの銀杏の実が落ちて、誰かがそれを踏んでいくたびに、臭いはきつくなってくる。

10メートルほど前にいたピザ男が横断歩道を渡ったので、またしても見失わないように走らなければいけなくなった。とっさに変わったばかりの赤信号を渡った。その途中で気づいた。床に落ちていたキラキラした何かに目を奪われた。鍵だった。その鍵は、とても複雑な形をしていた。少なくとも、数日前に自宅のレターボックスで見つけた鍵よりもはるかに複雑そうだ。どこかのアパートの鍵に違いない。私はとりあえずその鍵を握り、ピザ男を追いかけて走り続けた。Tシャツの下から汗が流れてくるのを感じる。私が次の信号待ちをしている間に、ピザ男はその先の坂道を登っていく。信号が青に変わる頃には、男は角を曲り、並んでいる複数の車の後ろに消えていった。ここは車が多いようだ。男は私の視線から逃れていく。男はどこだ？間違いなく見失ったと思う。しばらく追いかけて続けようと思っていたので、自分でもがっかりした。悔しい思いをしばらく噛み締めていると、何かの匂いが鼻についた。すぐそばにゴミ収集センターがあることに気がついた。

さて、どうしようかと思いつつ、少し歩き続ける。黒いバッグを持った女が、この先のスーパーに入ろうとしているのが見えた。「マイバスケット」。私は女の黒いバッグになぜか惹かれ、そこに何が入っているのか、さらに女が中に何を入れようとしているのか気になった。私は女の後に続いてスーパー「マイバスケット」に入った。中に入ると、また女を見失ったのではないかと少しパニックになった。女はビールコーナーの前にいた。今夜の夕食のお供を選んでいるようだ。女は缶ビールとアイスクリームと炭酸水を買って、カウンターでお金を払い、黒い袋に入れる。私はスナック菓子の棚の後ろで、女がまだいるかどうかを時々確認する。荷詰めが終わった女を追って、私もスーパーを出た。女はスーパーのすぐ隣にあるマンションに向かって歩き、中へ入って行ったことに気づいたときは、がっかりした。建物の名前は「パレス・ステージ」。偽の赤レンガでできていて、90年代から2000年代の建築物のようだ。とても醜い。駐車場で腕を振りながら歩いている若い男がいた。運動しているのだろうか。若い、おそらく学生だろう。黒いハーフパンツに黒いTシャツを着ている。疲れているようにも見えるし、少し悲しそうにも見える。いい考えとは思えないが、私はその男にもついていった。携帯電話で時間を確認した。そろそろ1時間が経つ頃だと気がつく。私は後ろを振り返り、来たときと同じ道を辿った。

*

2020年7月22日 10:51 - 12:08 (スイス時間)、18:51 - 20:08 (日本時間) スイス・チューリッヒ

KGBのエージェントを装ったような面白そうな男を見つけた。男はブルージーンズにダークブルーのジャケットを羽織っている。外はかなり暑いので、男は変わり者だろう。周りに長袖の服を着ている人は一人もいない。男はとてもゆっくりと歩いている。あまりにもゆっくりなため、私は付いていくのを少し躊躇った。男は携帯電話を持ち、時には腕に

つけた時計を確認している。おそらく、何かを待っているのだろう。

男は背が高く、痩せ型で、自分の存在をとても意識している人のように見える。

YouTube で見たプーチンの歩き方を分析した動画を思い出した。

私は男を追いかけて角を曲がる。男は相変わらずゆっくりと歩き、ほとんど常に、携帯電話を見ている。なので、私は周囲の環境を観察する時間がもてる。大通りの角には、スペイン語で" Mi mamá (私のお母さん)"と書かれたイタリアン・ピザを提供するレストランがあり、そのすぐ隣には中華系レストランがある。

ABB のビルと保育園 BAMBI の間で、男は突然、そして驚くべきことに左に曲がった。私は緊張する。この狭い通りには、男と私しかいないからだ。今振り返られたら、男は私の存在に気づくだろう。もしかしたら、上着の胸ポケットから銃を出してくるかもしれない。今まであまり気付いていなかった小さな横道だった。もし男が初めからここに目的があるとすれば、こんなに長い遠回りをせずに来られる。男の行動には、無駄があるように感じる。さらに不思議なことに、彼はこの細い道の突き当たりで、さらに左に曲がった。つまり元いた場所に戻るということだ。

最後に男が入った建物は、実は私の家の目の前だった。私は驚いたと同時に、この建物を確認することに興奮した。なぜなら、この建物のことがずっと気になっていたからだ。私の部屋の窓から、この建物の内部が少し見える。

建物の壁には、いくつかの企業の名前が書かれてあった。その中には Lycamobile や Radgenossenschaft の名前もあった。Rad（輪）について考えてみると、この近くに自転車がたくさん置いてある場所があるため自転車に関連した組織かと思っていたら、かつての移動型民族ジェニシェ・シンティ・ロマのスイスの人権保護団体だった。「輪」は、彼らの移動のシンボルだ。

振り向くと、スタジオの入り口の横に座って携帯電話をいじっている男がいて、この男はもしかしたら尾行できるかもしれない、と考えながら観察した。するとドアが開き、女と男 2 人、計 3 人が出てきた。そのうちの一人が私に気がつき、通りの向こうから叫んできた。「日本とつながっているのか?」。思わず私も叫んだ。「誰かが私に気付いたの? 私だけじゃないと?」。私だけではない。私はそこにいた施設長に気がついた。私は施設長に手を振り、少し離れて男の後を追いかけた。もう一人の男は、どうやら施設長の部下らしい。

店の前で、タバコを吸っている二人の男に出会った。私は彼らにこの場所と仕事について尋ねる。二番目の質問が厄介だと気付いたのは、その内の一人が「geschützter Arbeitsplatz」と答えたときだった。私はこの言葉をどう訳せばいいか知らない。「複雑すぎる内容」というボタンが必要だ。

この NGO は、施設管理の他に、自転車を修理してアフリカに送っているらしい。彼らは「アフリカ」と言うのが、かなり具体的な場所を指しているようだった。

感銘を受けたのは、自転車をできるだけ小さくして発送するために、自転車を解体する

方法が決まっていること。「ここではほとんど女性が自転車を修理し、男性はあまりしない」。施設長であり自転車の修理工の男は、以前はレンガ職人、トラックやタクシーの運転手、ソーシャルワーカーだったと笑顔で話した。私にはその笑顔の真相が読めない。

そこで、しばらく話していると、別の男がやって来て、そこにいた人々と親しそうに、抱き合いながら歓喜の声があがった。男は、コロナに感染し、回復して今ちょうど戻ってきたそうだ。私は、初めてコロナに感染した人に会った。チューリッヒでも、東京でも、まだ会ったことがなかったのだ。紺色のユニフォームを着て中に入ってくる。とても元気そうで、本人も話題のウイルスに感染したことを少し誇らしげに話してきた。周りの人たちも彼を歓迎している。

自分のスタジオに戻る。階段を登りながら、目の前でマスクもせずに大声で話している人にどう対応すればいいのかと自問する。私はここにいないので安全だ。しかし、私はここにいるのだから、100%安全というわけではないと考えた方が良いでしょう。どうすれば自分を救えるのか。

*

2020 年 7 月 24 日 11:13 - 12:10 (スイス時間)、18:13- 19:10 (日本時間) 神奈川県川崎市

外に出てみると、道路は完全に濡れている。湿気を含んだコンクリートの匂いもする。空は灰色。まだ傘をさしている人もいるが、雨はもうすぐ止みそうだ。傘をさそうか迷ったが、カツラのために傘を差すことにした。

家の前の通りで出会った女に付いていく。女はかなりゆっくり歩いている。最初は足を怪我しているのかと思ったが、どうやら歩くりハビリしているようだ。女は自分のペースで歩いていく。私は女についていくことを少し躊躇った。この速度ならば、彼女はすぐに私が付いていっていることに気づくだろうし、尾行行為自体が女をからかっているようにも感じたからだ。しかし、結局私は彼女についていくことにした。女は中学校のある通りを右に曲がった。その角で彼女はまた右に曲がる。私たちは大通りに続く道を歩く。左手には大きなドラッグストアの駐車場があり、そのすぐ後ろには幼馴染が住んでいた古い赤い家（おそらく 70 年代のもの）が見える。もう 25 年も会っていないなと思う。

大通りの角で女は再び右に曲がった。私は女が円を描いて歩いていることに気が始めた。先日のチューリッヒの「KGB の男」のように。おそらく彼女は歩く運動をしているのだろうと、推測した。女はリハビリをしているのか、あるいは COVID-19 のよる運動不足の解消かという最初の考えに戻った。ここ日本では、私だけでなく、多くの人々があまり外出せず、自宅で過ごしていることが多く、他人と直接顔を合わせることがあまりない。特に現在は、感染者数も再び増加しているため、尚更である。私自身も同居している人や

スーパーのレジ係、映画館での仕事のお客さん以外は、ガラス越しに顔を合わせることはほとんどなくなった。それらの人々との間にこれといって会話があるわけではない。ほとんどお金を交換するだけの関係だ。だからこそ、お金がウィルスを媒介することにも恐怖を感じることもある。狭い映画館のチケットカウンターの中には、アルコール消毒剤がたくさん置いてある。見知らぬ人が潜在的に脅威となった時代。だからこそ、全く知らない人を街中で追いかけて、知らない人生に思いをはせながら近づいていくことは、より刺激的なことだ。

今まで知ったこと、見たことが頭の中で理解できるようになってきたので、説明すべきところ、しなくてもいいところがわかるようになってきたのです。一緒に地図を埋めていくような感覚だ。

ピザハットの角で立ち止まっていると、ちょっと着飾った女が一人。私はその女についていくことにした。女はとても高いヒールを履いているが、歩く速度はかなり早い。女は坂道を登ったり降りたりしながら歩いていく。マスクのせいで息苦しくなり、汗も出ていた。私の顔の周りに、湿気と汗を感じる。顔の皮膚がベタベタしてくる。自分はこのベタつきに気づいていないのかもしれない。方向ばかりに気をとられている。チューリッヒの今日は涼しくて爽やかな日なのだろう。

駅前に立って、目の前の通りにあるお店をリストアップしてみる。銀行、いくつかのドラッグストアとヘアサロン、高齢者向けのマンション、理学療法クリニック、高級スーパー、弁当屋、コンビニエンスストア、花屋。ドラッグストアと花屋の間には狭い小さな道があり、そこから神社につながっている。一人の男が上に向かってるのが見える。男は階段の途中で立ち止まり、手を合わせて祈り、小さな神社の建物（犬小屋のように見える）に挨拶した。私はその男について行こうと思ったが、小さな境内で二人だけになると尾行していることに気づかれ易いと判断し、断念した。

そこで時間となり、私は家に戻ることにした。帰路で、私と同じ白のTシャツに黒いパンツを着た10代の若者を見かける。私はしばらくその男の後を追って坂道を上ったが、最後には男を残して自分の道を進むことにした。

駅へ向かい、また元いた通りに戻った時、私は自分が指示されているのではなく、自分が指示しているのだと感じた。私はただ、自分がどこにいるのか、そして前に何が見えるのかを説明しているだけです。本当にこれでいいのだろうかと自問自答した。私は、ゲストがホストになり、ホストがゲストになるという状況を覚えている。今、私はホストからゲストになり、そしてまた私自身がホストになっている。

時々、後に起こることに影響を与えるような決断を、自分ではあまり意識せずに下していることに気がつく。それは自然に起こったことをそのまま受け入れただけのように感じ

られる。しかし、実際には基本的な決定をしたのは私自身である。起こったことは自分の責任でもあるということを、自分の前で否定することはできない。

*

2020 年 7 月 29 日 14:32-16:10 (スイス時間)、21:32-23:10 (日本時間) 神奈川県川崎市

外は雨が降っている。通りを見してみる。誰もいない。まったくの静寂だ。いつもなら午後 6 時頃には、会社帰りの人や、保育園から帰宅する子供たちがたくさんいるはずなのに、ちょっとした違和感を覚えた。

まずピザハットまで歩いて行くことにした。傘をさした女 2 人が中学校の入り口から歩いてくるのが見えた。付いて行くことにしたが、すぐに駐車場へ向かい、車に乗り込んで去ってしまった。私はがっかりして、通りへ引き返した。

家の近くのドラッグストアの駐車場に、一人の男がいた。85 歳前後だろうか。透明な傘とステッキを持って、ゆっくりと歩いている。その男はドラッグストアに入った。中に入る直前、店の前に置いてある小さなキャリーバックに傘を置いた。その中から犬が頭を出している。柴犬だ。犬はとても悲しそうな目で私を見ていた。男はなぜこのキャリーバックに傘をさしたのか（老人とこのキャリーバックとの関係が不明である）。男は確かに何も持たずにこのドラッグストアに来たのだ。

ドラッグストアの店内に入り、男についていく。男は、老犬用（14 歳前後）のドッグフードを手取る。彼はそのドッグフードの会計後、店内をしばらく歩き回った。何かを探しているようには見えない。ふと、誰かの商品が入ったカゴに手を入れた。私は立ち止まって男を見る。男は何をしているのだろうか？

すこし遠くから観察する。あのカゴは男の連れらしき女のカゴであり、14 歳の犬は、彼の犬で私が入り口で見た犬だ。男は女と外に出る。キャリーバックから犬を取り出す。犬は疲れた様子で、あまり歩くことに乗り気ではなさそうだ。全身を激しく何度か左右に振り、歩く気力を起こそうとしているように見える。彼らがドラッグストアを出た後、私はしばらく彼らの後を追いかけた。

*

2020 年 7 月 30 日 15:30-16:45(スイス時間)、22:30-23:45(日本時間) スイス・チューリッヒ

今日は、私はかなり大きな声で、ほとんど叫ぶように話しているような気がする。叫ば

なくてもいいよ、と伝えられるが、私の周りでは巨大なトラックが絶えず走っており、大きな騒音に包まれている。強い日差しの下で、大きな車の音や車のガソリンの匂いを想像する。これから 1 時間歩かなければならない。さてと…。

郵便配送センターに向かって歩く。今日はとても暑いので、帽子かサングラスが必要だ。配送センターの前で、急に引き返すことにした。なぜかはよくわからない。歩いて戻り、橋の後ろで右に曲がる。大通りに出て、コープ・プロントに行き、そこで私の家の方向に戻る男たちの後を追った。彼らは正面のビルに消えた。そこにはいつも KGB の男がいる。（彼はほとんど毎日、私の窓から見える。）

白い T シャツを着て、茶色のズボンを履き、紙と電話とフェイスマスクを持った 2 人の男が前から歩いてくる。ニコルが、ここは以前工場があり、化学物質による汚染地区のため、フェンスで囲まれている、と話していたことを思い出す。二人は突然、10 メートルくらいの距離をおいて歩き始めた。おそらく Covid-19 のソーシャルディスタンスのルールを示したポスターを思い出したのかもしれない。携帯電話でニュースをチェックしたところ、スイスでは今日 200 人以上の新しい感染者が数えられたようだ。最近は本当に急激に感染者数が増えている。彼らはホッケースタジアムの建設現場を通りかかった。白い建物で、キャンディのような丸い窓を持つとても奇妙な建物だ。おとぎ話に出てくるようなイメージである。車の横で立ち止まる。一人が車の下を調べている。彼らは自分の車を探そうとしているようだ。初めは、車を盗もうとしているのか、道に落ちていたゴミを拾って回収している市の職員か疑った。彼らが車の下をチェックしている間、私は彼らがもしも私の存在に気づいていたらと、少し緊張した。正直、帰りたかったが、携帯電話で見ている振りをして、その場に居続けた。結局、彼らは車に乗って去っていったので、私は彼らを追うことを諦めた。

運送会社プランツァーのエリアでは、多くの労働者がトラックの積み下ろしに追われている。私は 50 歳くらいの女を追いかける。女は黒いバッグを持ち、右手にはフェイスマスクを持っていた。明らかに労働者ではない（そこには例外なくほぼ男しかいない）。彼女は Altstätten 駅に行き、3/4 番線で列車を待つ。駅までは長い直線の道だった。私は何度も強い太陽の光を思い浮かべる。徐々に体力を奪われていく。女の声で、Zurich HB/Pfäffikon 行きの電車が 4 分遅れているとアナウンスされている。どうやらこの女はその列車を待っているようだ。女は停車しては過ぎていく他の列車に入らない。私は女と一緒にホームに残り、涼しい影の下でしばしの休息をとる。汗をかいた。

遅れが 6 分になったところで（どうやら Wipkingen 駅が封鎖されているようだ）、私は帰ることにした。

キオスクのような小さな店の前に何人かの作業員がいる。私は店の中に入ってみる。何台かの自動販売機といくつかのテーブルと椅子がある。店を出ると、彼らが私に気づく。

私は何か悪いことをしたような気分になり、ここは「公共」の場所かどうか尋ねた。彼らは「そうだよ、入っていいんだよ」と言う。

その中の一人が尋ねた。「あなたは私たちの仲間か？」

私が言われていることが分かっていないと気づき、男は質問を変えた。

「事務所の人？」

私が「いいえ」と答えると もう一人が「どこに繋がっているんだ？」と尋ねてきた。

私はこう答えた。「東京です！」

男：「東京はもう夜じゃないの？」

私：「そうです、夜の 11 時半です。」

もう一人の作業員が突然叫んだ。

「私たちはここでも繋がっている！」

私は叫び返す。

「どこに？」

「ヒューストン！ヒューストン！聞こえますか？」

男は叫び続ける。

「聞こえるか？グランド・コントロール、聞こえますか？」

最初に尋ねてきた作業員が私にきく。「何か欲しいものがあったの？」

「財布を忘れてしまって、鍵しか持っていないんです。」

男は私に「店についておいで」という。男は、アイスクリームを奢るよと言った。私は R ロケットという名前のアイスを選んだ。スイスの有名な子供用の氷菓子だ。私もこれが食べたかったのでちょうどよかった。男は私に「何か飲み物は必要か」ときく。彼は私にアップルジュースを選び、支払いを済ませる。(正直、アップルジュースはあまり好みではないが、彼らの親切さと社交性に感謝した。)

私はヒューストンに、「さよなら」と挨拶をする。

*

2020 年 8 月 10 日 11:05～12:05 (スイス時間)、18:05～19:05 (日本時間) 神奈川県川崎市

数日前に小さな手術をした。手術後、麻酔医が部屋に来た時、私は急に目を覚ましたらしく、彼を見るなり英語で「私はまだ自分自身ですか？」と尋ねたらしい。それを聞いたとき、私はその光景を突然思い出した。しかし、それは私の記憶ではなく、本で読んだことや映画で見たシーンのものと認識していた。

手術以来、私は少し気持ちが弱くなっているように感じる。私は麻酔の影響についての記事を読んだことがある。事実、麻酔下では人間はほとんど気絶状態になっているらしい。麻酔は、製造初期の頃はエーテルで生成されていた。麻酔下では、あなたはあなた自

身と切り離された状態にあるのです、と私の療法士は言った。あなたは再び地面に戻ってこなければならないのです。

今日はとても暑く、湿度が高く、曇っている。外出すると、突然、私は叫んだ。「待って。この電子音は何？すごいうるさい！」イヤホンのケーブルをチェックしてみたが、どこにも異常はなさそうだった。周囲を見渡してみると、私が言っているのはセミの鳴き声だということに気がついた。大量のセミが鳴いている。最近はこの音を毎日聞いているので、気がつかないうちに、その音を意識しないようになっていた。蟬の鳴き声だと聞く。とても驚いた。

私は知らない人の犬の散歩について行ってうちに、迷子になった。

最初はこの種類の犬と名前を知らないと思っていたが、犬の姿を説明しているうちに、足に特別なヘアカットが施されていることから、トイ・プードルだとわかった。両足の下の部分に、ちょうどボールのようなものがあるような感じ。飼い主である男は、私と同じように白いTシャツに黒いパンツを履いているが、少しパジャマのようにも見える。私は男の後を追って、今まで行ったことがなかった近所のこの場所に辿り着いた。男がマンションの中に消えた後、別の犬を連れた者が現れた。20歳前後で、茶色の巻き毛の小型犬を連れており、白髪で、男か女かはよくわからない。顔にマスクをしているので、検討もつけない。犬は頭にプラスチックのカバーをしていた。

東京近郊には犬好きが多いのかと思った。少なくとも私の近所では、そのようだ。今日は特に犬が多い。子供と犬。小さな子供と小さな犬。特別なヘアカットをされた犬。

再び私は方向を見失った。犬や人を観察して説明することに集中しすぎて、自分がどこにいるのかを伝えることを忘れてしまった。迷子になっていることに気づきつつも、追いかけている対象者はどんどんと進んでいく。しばらくすると、私の頭はオーバーロードした。

「ここからもう一度始めよう」と私は言った。最近、少しこのあたりの土地勘がついてきたように感じて、リラックスし過ぎてしまったようだ。「方角も角度もよく分からなくなってしまった、ごめん」と、私に伝える。ここが丘になっていることはわかる、しかし、私は坂が1つしかないと理解していたのだ。実際には、たくさんの坂があり、道は常にアップダウンしていることに気がついた。

向きを説明するにもテクニックが必要だ。立体的な説明。例えば自分が歩いているところを伝えると同時に、全体を見渡すことができるような説明を、どうやって伝えればいいのか。自分が描いた地図のパーツを組み合わせることもできない。

今朝、ひじを蚊に刺されたことを発見した。とても痒い。実は私も全く同じ場所に刺された。Google がハッキングし、人間の DNA 情報を盗むために蚊をプログラムし、肘に

「ポート」を作ったのか…

陰謀論は好きではないが、あまりにも多くの偶然や繰り返しが重なって、ある種の「隠された計画」を信じることを避けられないときがある。世界中で起こっている出来事とコロナ・パンデミックとの間に奇妙なつながりを作り、それを信じ、ヨーロッパ中でデモをしている人たちにも、そういうことが起こっているのかもしれない。私たちは突然、自分たちが考えるよりも大きな世界と繋がり、私たちの今いる安全な第一世界でも、感染が広がり、大量な情報によって圧倒され、自分たちの無力さをどう受け止めればいいのかわかってなくなっている。混乱を対処するために、人間はフィクションを作る傾向がある。狂ってしまった世界を自分たちで説明するフィクションを。

*

2020 年 8 月 11 日 11:35～12:35 (スイス時間)、18:35～19:35 (日本時間) スイス・チューリッヒ

今日は近所のいくつかの場所の地理を確認しに行った。

まず、入り口から右へ進んだつもりだったが、左であったことに気がついた。どうやら根本的に全体の方向を間違えているかもしれないことに気づき、まずは想像している私の地図を調整することにした。まず、スタジオの近くにある保育園に案内するよう頼む。

「左側に子供たちが遊んでいるのが見えるでしょう？」。自分でも笑ってしまっている。どこから勘違いしたのだろうかと混乱する。私は 0 地点であるスタジオ入り口に戻ることにした。自分の発言が間違っていなかったかどうかを自問自答する。私の目の前には建物があり、その建物の中にはいくつかの機関があり、中でもそこに Radgenossenschaft があるかどうかを確認する。私は「はい」と答え、次に「では、左に曲がってまっすぐ進んでみて」と言う。「自転車のワークショップがあるよね？」と尋ねる。「いいえ」…私は初めからすでに勘違いをしていたようだ。地図を書き換えてみる。

ぐるぐる回る道を通して、小さな緑豊かな公園にたどり着く。迷彩柄のような美しい特殊な模様をもつ幹の木の横にある壊れたベンチに座りたいと思った。私はこの風景が好きだ。都市の中にあるポケットのような密かな場所のように感じる。私は、それほど美しい場所だとは思わないが、だからこそ、ここにいると、世界でこの場所を知っているのは自分だけのように感じるのかもしれない。

公園の中で座っていると、前回来た時よりも草が刈られており、時間が経っていることがわかる。自然がより飼いならされることで、公園の雰囲気が変わる。しかし、それでもベンチは壊れている上、ゴミ箱はいっぱいだ。「Di Mama」と書かれたピザボックスが 2 つ、地面とゴミ箱の上に置かれていた。ゴミ箱の上のピザボックスの上には、蓋の開いた

タッパーがあり、そこには得体の知れない焼けた料理が入っている。肉か、腐ったキノコか。ゴミ箱を支えている金属棒に沿って蟻の道が作られており、その道はタッパーへとつながっている。

私に向かってくる男がいる。彼はとても短いジーンズ（破れている）を履いていて、Tシャツを着ていない。痩せていて、肌は日焼けし、骨の周りにしわが寄っている。彼の後ろから犬も現れた。

ベンチに座りながら、郵便配送センターを見て、毎日どれだけの手紙が処理されているのだろうと考えた。夜になると貨物列車の揺れる音が聞こえ、昼間はトラックの行き来を見ている。

若い郵便局員（黄色とグレーのユニフォームを着ているので、すぐにそうだとわかる）が2人、私の横の壊れたベンチに座って昼食をとっている。

橋の柱に描かれたマッシュルーム（のグラフィティ）の前には、何トンものゴミで作られた大混乱が広がっている。厳密に言えば、そのマッシュルームは消されている。誰かがマッシュルームの上にグレーのペンキを塗ったようだ。柱のグラフィティのあった部分だけにそのグレーのペンキが塗られていたので、本来消すはずの落書きのあった部分が強調されてしまっているというパラドックスの効果を生んでいる。

私は、グレーの塗装の下にマッシュルームの絵がまだ見えているような印象を受ける。それがそのマッシュルームそのものなのか、私の記憶の痕跡なのかはわからない。

マッシュルームの柱と金属製のフェンスの間にある大量のゴミの山には、ベッドの一部であったと思われる木材、壊れたベンチ、絵の一部、木材で作られた何かの構造物など、たくさんの要素が見える。木造構造物の上には、枯れたバラの花もある。ゴミの山の周りには、空き瓶、テイクアウトのコーヒーカップ、ペーパータオル、クッキーのパッケージ、枯れ葉、缶ビール、タバコなどが散らばっている。

グラフィティは消したのに、なぜゴミを掃除しなかったのだろう？

*

2020年8月18日 13:30～15:10 (スイス時間)、20:30～22:10 (日本時間) スイス・チューリッヒ

今日はラウラと会う。彼女と会うのは去年以来だ。ほぼ1年間、会っていなかったのかとしみじみ思う。

彼女は今、ドイツの大学での博士研究のための準備をしているそうだ。彼女は将来の博士研究について話す。それは民族学的な物品の返還についてであった。

彼女は、アートとメディアの研究で学士号を取得し、私と一緒に学際的研究で修士号を取得した。現在、彼女はコロンビア北部のコギ族やアノワコ族などの先住民族との共同研究を計画している。コロンビア出身のパートナーのおかげで、彼女は偶然にも彼らとのつながりを得て、さらに興味を持ち始めたそうだ。パートナーは音楽関係の仕事をしているが、趣味が合い、一緒にコロンビアにも行くらしい。

「あなたはパートナーからある種の「利益」を得ていると感じますか」と尋ねる。彼女は答える。「はい。彼の存在が自分の鏡になっているような気がして、そのおかげで自分の立場を自分で問えるようになりました。また、コロンビアの先住民族グループとのコミュニケーションの上での阻害要因を取り除いてくれている」という。というのも、彼はいつも彼女に、「その場の文脈に合わせて、何をどこまで自分その研究を進めたいのか、他者にわかるように説明するべき」と、いつも思い出させてくれるからだそうだ。

暑くてだるい一日だ。みんな少し疲れている。

私はラウラに近所の一部を見せることにした。まず、秘密のサーバーかと思われる隣の建物を見せに連れて行く。インターネット上では何の情報も得られなかったが、入り口に何か書かれていたので、ラウラに読んでもらうことにした。コルト・データ・センター。ようやくウェブサイトを見つけた。しかし、調べてみてもこの会社が具体的に何をしているのか会社なのかいまいちピンとこなかった。わかったことは、グローバルに活動していること、特にアジアとヨーロッパで活動している。コルトは日本にも5つのデータセンターを持っている。私は後で彼らにメッセージを送り、彼らがウェブサイトで告知しているチューリッヒの会社の建物の中のガイドツアーの条件について尋ねた。

ラウラに ABB の会社の建物も見せて、最近、日立に買収されたことを知ったと伝えた。ラウラは、ビルを出たところに偶然いた ABB 社の社員と思われる男性（私にはトラムに乗るために彼が急いでいるように見えた）に、ふと声をかけて、この状況と彼の意見を聞く。彼は、15 年前から ABB で働いていると言った。彼は、続ける。彼は、日立が ABB を完全に買収した後、ABB の技術を引き継ぐことだけに主眼を置き、スイスの労働者を完全に見捨てるのではないかと心配していた。「私たちは高すぎるのです」と彼は言う。

動物好きのラウラに呼ばれて駆け寄ってきた小型犬は、すっかり興奮して吠え続け、飼い主を困らせている。

今日、私は実際に彼女を導くだけでなく、彼女の身体・知覚を通して自分が経験することが度々あった。つまり、ある意味、彼女は私をもてなしたのだ。

*

2020年8月12日 15:55 - 17:00 (スイス時間)、22:55 - 00:00 (日本時間) スイス・チューリッヒ

今日は、以前 KGB 諜報員のような男を追いかけて通った道を再度確認したいと思った。（私はその後もたびたび彼が同じ服で、同じ道を繰り返し歩いているのを見た。）というのも、昨日はその道を歩こうとしたのですが、完全に方向を逆に理解してしまっていたことに気付いたからです。そのため今日はリベンジである。

今日は自分で自分を導くことができると確信している。というのも、昨日はなんとなくエリアの概要を把握して修正したためである。

しかし、それは、思った以上に複雑だった。「工業用建物」というのはどういう意味だろうか。前回、男を尾行したときに描いた地図では、「工業用建物」は、保育園も入っている細い通りの入り口のマークになっている。しかし、この地域にはたくさんの工業用建物があるため、完全に混乱してしまった。

スタジオの近くには、私が「工業用建物」と思っていた建物がある。それは巨大な灰色の建築物で、廃墟のようにも見えるが、中が空であるようには見えない上、荒れ果てた感じもない。ただ、人の気配を感じられない。周りに誰もいない上、夜になっても明かりがない。インターネット上でこの場所についての情報を探してみたが、何もなかった。最近、誰かがこのあたりには「サーバーがある」と教えてくれた。

Di Mama の隣にある中華料理店 King To のメニューをしてみる。いつか食べてみようと思いつつ、まだ通えていない店である。いつもここを通る際は、テーブルは外に置かれているものの、店は閉まっているように見える。たくさんの種類の料理がメニュー表に書かれているが、どれもあまり今ピンとくるものはなかった。台南に滞在していた頃、毎晩自転車で夕食を探しに行っていたことを思い出す。麺類とチャーハン。King To の前にはニオイヒバ(*Thuja occidentalis*)がいくつか鉢に植えられている。それは、よく家の前にフェンス代わりに置かれる典型的な植物の一つだと私が教えてくれた。

近くのコープ・プロントでは、ついアイスクリームを買ってしまった。先日食べたロケットという名前のアイスは売り切れていたため、ヴィネントゥー (Winentou) を買うことにした。暑さの中、氷菓子のようなアイスが食べたくなったからだ。パッケージには笑顔のネイティブ・アメリカンが描かれており、背景にはティピー（平原に住む部族が使用する移動用住居）や拷問用の杭が描かれている。この時代錯誤のブランディングに疑問を感じる。なぜアイスクリーム業界では、征服のメタファーが人気なのだろうか。

コープ・プロントの隣には Zoe gospel center がある。建物はこのあたりではかなり大きく、ゴスペルを練習する教会だけでなく、古着を売るファッションセンターや本屋も入っているようだ。ゴスペルセンター前には大きなガラスケースがあり、様々なものが展示されている。最初は小さなガラス箱を描いていたが、しばらくすると、その箱の中に全てを描ききることができないと気づいた。それは、私が想像していたよりもはるかに大きなガラスケースのようだった。そこには、福音書や楽譜、キリスト教に関連したテキストなどは入っているのかと予想していたが、実際にはプラスチックのフォークやスプーン、お皿が入ったピクニックボックス、帽子、自転車、ハイキング用のストック、バックパック、登山靴、矢印のプラカードであると私は自分に言い聞かせる。これらのものとゴスペルやキリスト教との間にどんな関係があるのだろうかを考える。スクリーンには「イエスは私たちの人生を美しくする」と書かれていた。山での野外活動が、いかに大切に美しい時間をスイスでは象徴しているかが伝わってきた。

「汚染地区」前を通ると、とても良い香りがする。私は金属製のフェンスと有刺鉄線に囲まれた空間を見る。ゴミが散乱している中に糸杉 (*Cypressus sempervirens*) が生えている。糸杉の匂いは、ゴミの匂いを覆い隠し、この空間のイメージを一変させている。

*

2020 年 8 月 18 日 13:30~15:10 (スイス時間)、20:30~22:10 (日本時間) スイス・チューリッヒ

今日はラウラと会う。彼女と会うのは去年以来だ。ほぼ 1 年間、会っていなかったのかとしみじみ思う。

彼女は今、ドイツの大学での博士研究のための準備をしているそうだ。彼女は将来の博士研究について話す。それは民族学的な物品の返還についてであった。

彼女は、アートとメディアの研究で学士号を取得し、私と一緒に学際的研究で修士号を取得した。現在、彼女はコロンビア北部のコギ族やアノワコ族などの先住民族との共同研究を計画している。コロンビア出身のパートナーのおかげで、彼女は偶然にも彼らとのつながりを得て、さらに興味を持ち始めたそうだ。パートナーは音楽関係の仕事をしているが、趣味が合い、一緒にコロンビアにも行くらしい。

「あなたはパートナーからある種の「利益」を得ていると感じますか」と尋ねる。彼女は答える。「はい。彼の存在が自分の鏡になっているような気がして、そのおかげで自分の立場を自分で問えるようになりました。また、コロンビアの先住民族グループとのコミュニケーションの上での阻害要因を取り除いてくれている」という。というのも、彼はいつも彼女に、「その場の文脈に合わせて、何をどこまで自分その研究を進めたいのか、他

者にわかるように説明するべき」と、いつも思い出させてくれるからだそうだ。

暑くてだるい一日だった。みんな少し疲れている。

私はラウラに近所の一部を見せることにした。まず、秘密のサーバーかと思われる隣の建物を見せに連れて行く。インターネット上では何の情報も得られなかったが、入り口に何か書かれていたので、ラウラに読んでもらうことにした。コルト・データ・センター。ようやくウェブサイトを見つけた。しかし、調べてみてもこの会社が具体的に何をしているのか会社なのかいまいちピンとこなかった。わかったことは、グローバルに活動していること、特にアジアとヨーロッパで活動している。コルトは日本にも5つのデータセンターを持っている。私は後で彼らにメッセージを送り、彼らがウェブサイトで告知しているチューリッヒの会社の建物の中のガイドツアーの条件について尋ねた。

ラウラに ABB の会社の建物も見せて、最近、日立に買収されたことを知ったと伝えた。ラウラは、ビルを出たところに偶然いた ABB 社の社員と思われる男性（私にはトラムに乗るために彼が急いでいるように見えた）に、ふと声をかけて、この状況と彼の意見を聞く。彼は、15 年前から ABB で働いていると言った。彼は、続ける。彼は、日立が ABB を完全に買収した後、ABB の技術を引き継ぐことだけに主眼を置き、スイスの労働者を完全に見捨てるのではないかと心配していた。「私たちは高すぎるのです」と彼は言う。

動物好きのラウラに呼ばれて駆け寄ってきた小型犬は、すっかり興奮して吠え続け、飼い主を困らせている。

今日、私は実際に彼女を導くだけでなく、彼女の身体・知覚を通して自分が経験することが度々あった。つまり、ある意味その瞬間、私ではなく彼女が私をもてなしていたのだ。

*

2020 年 8 月 20 日 16:00 - 17:34 (スイス時間), 23:00- 00:34 (日本時間) スイス・チューリッヒ

今日は一人で歩いています。スタジオのドアから出ると、IKEA の白いお皿がたくさん置いてあったので、後で帰ってきたときに持っていこうと決めた。スタジオにはあまりお皿がない。

最近、自分が本当にチューリッヒを歩いていると感じるようになった。風景の色を見

て、感じる。この感覚はこの体験をととても楽しくしてくれるし、自信を持って歩けるようにもなった。

ついに今日は、いつも気になっていた近所のピザ屋 Di Mama に入った。中は、20～30 平方メートルの広さだった。コーヒーを注文しようとしたが、立ち止まって、今コーヒーを飲みたいのかどうか自問自答した。男の目の前で自分と会話していたため、男は少し混乱したような表情をしていた。結局、私はカフェ・クレームを注文した。私は男にいくつか質問をしたかったのだが、彼は「そちらのテーブルにどうぞ」と言い、部屋の隅にあるテーブルを私に勧めてきた。私は、そこに座って大声でカウンターに向かって話し、会話を続けるべきか、それともコーヒーを飲み終わるまで待つべきか、少し迷った。そうこうしているうちに、一人の地元民らしき女性が入ってきた。彼女は、変なキーホルダーのついた鍵だけを持って、その男性と話を始めた。二人はとても仲が良さそうだった。

私はこのレストランの中と、窓から見える風景を観察して待つことにした。4 枚の窓の上部には、1m×0.5m ほどの大きさで、緑、白、オレンジの 3 色で描かれた『Di Mama』のロゴがあり、その横にフォーク、スプーン、ナイフのイラストが隣り合っている。窓の下の方にはコカコーラのロゴマークのステッカーがストライプ模様に貼ってある。コカコーラがこの店を支援しているのかと思った。オーナーは 2 人いる。一人は若くて身長が高い、もう一人は小柄で年老いている。テイクアウトのレストランなので、店の前には注文するためのカウンターがあり、その上にはメニューや値段を表示するモニターが 3 台ある。天井には、吊るされたテレビが 1 台あり、そこには魚が口を開けている様子が映し出されている。（ドキュメンタリー映画か何かだろうか、ビデオは一時停止されていた）。

私はあまり深く考えることなく、その男に一つの質問を投げかけた：「あなたはどこから来たのですか？」この質問は、この地域について彼の言葉を聞くための質問のつもりだった。しかし、私はこの質問を発言しなかった。そして、すぐに気がついた。この質問を口にしようとしたことを後悔した。私は自分の軽率さを恥じると同時に、この「アバター」という手法がある意味自分を助けてくれる手立てだと思った。なぜなら、そこには私のフィルターのようなものもあるからだ。その質問がその場や状況に不適切かどうかを判断できるからだ。彼らのアクセントから推測しても、私は彼らの出身地を尋ねたりはしない。イタリア語よりも強いアクセントがある。南部バルカン？ギリシャ？それともトルコ？

私は彼らが混乱しているのを感じて、少し居心地が悪くなった。彼らは私のことをどう思っているのだろう。もしかしたら、私のことをスパイやエージェント、あるいは何かを操っている、あるいは操られていると思っているのかもしれない。私が英語で独り言をブツブツと話し始めると、（よくあることなのだが、）彼らの態度に少し恐怖を感じた。私は彼らに、この近所のゴミ箱からたくさんの Di mama のピザボックスを見つけたこと、そしてそれが彼らのレストランに興味をもち始めた理由であることを伝えた。その場を落

ち着かせるために、私は自己紹介をすることにした。私は自分の名前と東京から来たことを伝えた。男はさらに困惑した様子で、私の両親のうちのどちらかが日本人なのかと尋ねてきた。私はこう答えた。「両方です。」彼は笑い出した。彼は私の目を見て、それを信じてくれなかった。（なぜ日本人が「アジア人」に見えなければならないのか？）彼は私の正しいスイス・ドイツ語を理解してくれたと思う。私が「アーティスト・イン・レジデンス」を通して、この地域を訪れ知っていったと話すと、彼らは明らかに安心した様子になった。どうやら、彼らが私と気持ちよく話すためには、それが必要な情報だったようだ。

忙しそうにピザを焼いている男に、さらに質問をしてみた。彼の声は訛りがあり、オーブンの音や外の車の音がかさなり、聞き取りづらい。彼が言うには、彼らの顧客はほとんどが近隣のオフィスの人たちで、特に ABB の社員が多いそうだ。それに比べて 30 分しか休憩時間がない郵便配達センターの人は少ないという。彼らによると、このレストランは約 20 年、隣の中華料理店の King To は約 30 年経営しているそうだ。

Di mama を後にして、何人かの人に勧められていたタイレストランへ向かう。初めて大通りを渡った。残念ながら今日は閉まっていたが、今度パッタイを食べに来て、ここで話そうと自分と話した。

長らく気になっていた Zoe Gospel Center もようやく訪ねてみた。中はちょっとしたクリニックのようで、真っ白で光沢感のある防腐剤が入った空調の効いたロビーだった。私の入館を告げる電子ベルが聞こえてきた。事務室と思われるバックスペースから女性が現れた。彼女は 50 代か 60 代くらいの色白で、人懐っこい笑顔をみせた。私はこの場所について、いくつか質問を始めた。この教会の会員数は何人いますか？会員の人々はこの辺りに住んでいますか？「誰も住んでいませんよ！」女性は少し驚いた様子でそう答えた。その答え方は、私が彼女を馬鹿にしていると感じ、それを少し非難しているような響きもっていた。この周辺は住宅が少なく、会員の人々は外からやってきますが、なぜここに教会を建てたのですか？私は彼女がストレスを感じているのを感じる。「これはどんな質問なの？」彼女は尋ねる。「私たちは、人々に伝道するためにここにいるのです。あなたがイエスを探しているなら、私はあなたのためにここにいます。でも、彼女（「彼女」と言って横を向いています、どうやら私が話している「誰か」のことを指しているようです）はイエス様を探しているようには見えません。」それは、私を追い払うための非常に友好的な言葉遣いだった。次に彼女が発したのは、「もう時間がないです、仕事があるので。」私は、彼女に「良い一日を」と言ってその場を去った。

申し訳なさ。私は人を混乱させたくないし、不快にさせたり、怖がらせたり、騙されたいと思わせたくない。また、このような不快な状況に彼女だけではなく、自分も追い込んでしまった自分自身にも申し訳なく思った。

正直なところ、彼女がとても友好的な方法で私を非難し、追い払ったことに少しショックを受け、怖くなった。彼女が私に対して「イエスを探していないようですね」と言った瞬間、意味がわからず自分の中にイエスを探しました。もちろんできませんでしたが、よ

うやく彼女の意味がわかりました。私はここにいるべきではなかったが、私はここにいた。

Di mama の男たちと彼女の違いは、彼らは私の「ゲーム」に参加することを受け入れたということではないだろうか。彼女はそうではなかった。彼女は私が彼女自身を攻撃するか、馬鹿にする存在だと感じていた。私は白人女性として、このフレンドリーな有色人種の年配女性をこのような防御的な立場に置いたことを恥ずかしく思う。彼女は拒絶されることに慣れていて、分別があるのかもしれない。それでも、私の質問の仕方は不適切だった。とても繊細な問題だ。個人的に彼女を傷つけていなければいいのだが。

また、あとになって Di mama の男たちを怖がらせてしまったような気もしてきた。スイス社会のヒエラルキーの中で、彼らのような人が私のような人に支配されている。それが問題だ。私は無実ではない。

それは、白人のヨーロッパ人とアジア人という自分の二面性と結びついている。私は私の中で常に揺れ動いているが、もう一方の私は「白人ヨーロッパ人」という身体をもっています。

次回、このような状況になったとき、どのように対処すればいいのか、まだ悩んでいるが、誰も傷つけないという明確な気持ちはある。

*

2020 年 8 月 31 日 17:38-19:08 (スイス時間)、00:38-14:08 (日本時間) スイス・チューリッヒ

出かける前に、チューリッヒのコルト・データ・センターについて調べてみた。そこでずっと滞在し、仕事をしている人がいるのか、あるいは全て機械によってセキュリティなどが管理されているだけなのかが気になったからだ。Google で調べても、人が働いているかどうかはよくわからないが、チューリッヒのコルト・データ・センターは、Swisscom や EWZ、BT などの会社のデータを管理し、サービスを提供していることはわかった。

また、近隣の郵便局の配送センターでは手紙のみを扱っていることがわかった。小包などの荷物には別のセンターがあるようだ。ウェブサイトによると、そこには 1 日に数百万通の手紙が届くそうで、夕方（郵便局が閉まった直後）が 1 日の中で最も忙しい時間帯だそうだ。

一方ニコル曰く、ユトリベルクには今でも鳩を使って輸送をしているところもあるそうだ。

Badenerstrasse の反対側の坂を上った時に見える鳩小屋やダナ・ハラウェイの著書の中に出てくるレース用の鳩の章を思い出した。鳩の家に帰ろうとする強い意志を持っていることに感銘を受けた。ただし、「家」とはあまり管理されてなく汚い pigeon loft のことだが、実際にチューリッヒのアルトシュテッテンの丘の上にあるものよりも、英語のその響きの方が魅力的に聞こえる。

今日、私は初めて列車の線路の反対側に行ってみることにした。まだ自分の身近な環境を理解するのに精一杯で、自分の周囲の半径を広げることがなかなかできない。いまだに、円形道路を通り過ぎると、途端に方向がわからなくなってしまう。

橋の上を歩いていると、チューリッヒの中心街の方角に虹が見えた。ここからは、公園の迷彩柄の幹の木など、色々なものがいつもと違う視点から見えてくる。

橋の先にあるサッカー場までくると、シュレーバーガルテン（賃借制家庭菜園地区）に通じる工事中のパイプライン（何のためにあるのかはわからない）のようなもので、渡ることができた。

庭園は絵画的で美しく、私の田舎で過ごした子供時代を思い出させてくれる。ざっと見た限り、そこにはイチジク、リンゴ、サラダ菜、ひまわり（5m の高さのモンスター-ヒマワリも！）、チェリー、バラ、ズッキーニ、トウモロコシ、カボチャ、ブドウ、豆などです。私にとっては、24 時間 365 日騒音が絶え間なく聞こえてくる 30 本のレールウェイのすぐそばに、これほど多くの種類の植物が植えられていることには驚かされた。人の気配がしない。庭園の後ろには、「シアター・オブ・ドリーム」または「スイス・ライフ・アーリーナ」と呼ばれる新しいホッケースタジアムの記念碑的なファサードが見える。

急に雨が降り出した。傘を持ってこなかった私は、雨に濡れないような場所を探したが、影になるような場所はない。仕方ないのでポプラの木のそばに立つことにした。雨が止むのを待ちながら、いつも迷ってしまう円形道路の部分について自問自答した。説明のおかげで、私の地図はついにその部分を完成させることができた。私の理解はパーツごとに集まり、1 つの大きな地図を作り上げていく。円を正しく表現するには複雑な構造であり、それに対して都市のほとんどの部分は直線でできていることに気付かされた。

角に、とてもシンプルなレストランがある。私が雨を避けるために屋根の下に立っていると、一人の女性が出てきた。ドアには「オープン」と書いてあるので、レストランは「開いていますか？」と尋ねつつ、中を覗くと、テーブルの上に椅子が置かれている。彼女は怪訝な顔をしながらも「はい」と答える。私は食事をすることもできるのか尋ねると、彼女は「私は何かを作ることもできますよ」と言った。彼女は壁に貼られたアイスク

ルームの入った段ボールを指差した。私は「アイスクリームを食べるには寒すぎるから、また別の機会に来るよ」と彼女に言う。彼女は中に消えていった。

人々が私に対して、疑っているような反応をとることは、寂しいことだ。彼女の疑惑は耳からも伝わってくる。

レストランの後、道がまっすぐ続いていないことがわかる。庭園はオレンジ色のプラスチックのフェンスで囲まれていて、それは「シアター・オブ・ドリーム」の建設現場のものだった。ネット上で NZZ の記事を見てみると、庭とスポーツの間の領域をめぐる対立について書かれていた。その記事によれば、庭師とスポーツ選手は歴史的に長い間敵対してきたという。

私は左に曲がり、Vulkanstrasse（火山通り）に戻ってきた。なぜこの通りは Vulkanstrasse という名称がつけられているのだろうか。素早くグーグルを開く。何年か前にこの通りに建てられた住宅兼オフィスビル「Vulcano」についての情報しか出てこない。その名前は、バットマンの家のようなデザイン（黒いガラスのファサード）を想起させる。実際、その通りだった。ウェブサイトにはこう書いてあった。『ボルケーノ・チューリッヒ・アルテシュテテン Vulcano in Zurich-Altstetten での生活は、普通の生活ではありません。妥協を許しません。制約ありません。ボルケーノ Vulcano は自分の欲しいものが何かを知っています。自信に満ち、一貫した人々のためにあります：すべて』

直感的に、Vulcano という名前は、モダンなスタイルの建物には合わないと感じた。その名前は、私にはもっとヴァナキュラーな建築物を想像させた。

そこではマグマの代わりに何が噴出しているのだろうか。もしかしたら強力な消費欲かもしれない。

*

2020 年 9 月 9 日 18:00 - 19:30 (スイス時間)、1:00 - 2:30 (日本時間) スイス・チューリッヒ

このエリアは、チューリッヒ市で最大のシュレーバーガルテンだ。40 カ国以上の国籍をもつ人々がここでガーデニングをしている。全ての庭園の土地はチューリッヒ市のもちもので、組合で組織された庭園の借り手たちによって管理されている。

このことを知っていた私は、ここは公共の空間に違いないと思っていた。私は昨日までこの庭園の中にツアーの中で参加者を案内することを計画し、それも含めツアー時に配布する地図も改めて描いていた。実際、庭園の中はたくさんの植物や野菜、果物が植えられており、とてもきれいで、小さなレストランもある。

昨日、ここでテストツアーをした際に、そのレストランのテーブルの周りに座っていた

園芸家たちが、私に話しかけてきた。彼らはかなり酔っ払っていて、一斉に話してきたので、最初のうちは何を言っているのかよくわからなかったが、すぐに私のことを疑っているということに気がついた。彼らのうちの一人はどうやら私が彼らを取り締まるためにここにきたと思ったようで、別の一人は私がジャーナリストだと思ったようだ。最後にレストランのオーナーらしき女性が出てきた。「ここはプライベートな空間で、あなたはここにいる権利はない」と怒鳴った。私はアーティストであり、あなたたちに何も害をあたえようとしていないと説明すると、彼女は「それは、私には関係ない」と言い、彼女は「とても嫌な経験をしたことがある」と言った。

私は不思議に思った。なぜこの人たちは私にそんなにも攻撃的なのかと。そして、この土地の所属に混乱した。私有地なのか？それとも、公有地なのか？

この女性のいう「嫌な経験」とはどういう意味なのだろうか？私は、それはきっとスタジアムの話をしているのではないかと思った。

6.4 表現活動の考察文

この節では、以上の「わたし」とウィリマンによる気づきの交換録を踏まえた上で、本章で主に取り上げる表現活動《Avatar tours #2: Tokyo Ueno》に関する考察を述べる。

6.4.1 表現活動の背景

1.1 なぜ「アバター」なのか

本章で取り上げるこの表現活動4《Avatar tours #2: Tokyo Ueno》は、タイトルにも名前が入っている通り、この「アバター」という手法がこの活動の軸となっている。アバターとは、本章6.2.1(4)①や6.2.2(4)②で前述したとおり、二人がインターネット回線を通して通話し、どちらか一方の身体を通して、もう一方が向こう側の世界と間接的に触れあうことをさす。また、そこで直接世界と触れあいう一方に伝え合う橋渡しの役割を担う側を willimannarai ウィリマンナライとよぶ。

3、4、5章で述べてきたように、「わたし」たちが様々な表現活動を通して相手の構えとの重なりあいを体験し、そこにつながりを生むことを試みてきた。一方、Willimann/Arai というデュオとして活動を始め、常にとともに活動が続けてきた「わたし」とウィリマン自身の構えの重なり合いは、活動の中心には据えてこなかった。このアバターという手法は、今一度「わたし」たち自身の構えの重なり合いに改めて向き合うために、自分たち自身で作り出したものである。

アバターには、もう1つ大きな要素がある。それを説明するために、まずこれまで展開してきたアバターを用いた活動の一覧をみていきたい(表6-12)。

2018年11月	《How to disappear (completely): Uniformity 4》
2019年12月	《Reflection fig.3: Otherness》
2020年7-9月	《Avatar tours #1: Zurich Altstetten》
2020年10月	《How to disappear (completely): Uniformity 5》
2020年10-12月	《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》
2021年3月	《Reflection fig.4: Self》
2021年3月	《Avatar tours #3: Zurich Altstadt》

表6-12 2021年3月現在におけるアバターを用いた表現活動一覧

特に2020年4月以降は、世界規模の新型コロナウイルス感染拡大により、思いがけず2021年3月現在まではこのアバターを用いた活動が中心となっている。それは、離れた土地を拠点とするウィリマンと「わたし」が直接物理的な対面なしに、活動が続けられる手法だからである。

そもそもアバターを用いた最初の活動《How to disappear (completely): Uniformity 4》は、当時ヨーロッパを中心に長距離フライトに対する環境問題への配慮不足を指摘する気運の高まりきっかけだった。ウィリマンも「わたし」も、その年は特に国外での活動が偶然重なり、約半年ほどの間にアメリカ、アジア、ヨーロッパ間の長距離移動が続いていた。また、この活動期間が非常に短かったということもあり、「わたし」たちは遠隔地における共同表現活動の手法としても、アバターを開発し、それを用いた活動を行うことに決めた。

1.2 なぜ歩き、そしてツアーなのか

アバターを用いた表現活動から、さらに「アバター・ツアーズ」シリーズへと展開したのは2020年7月9月に行なった《Avatar tours #1: Zurich Altstetten》からであった。

2020年4月以降は、世界規模の新型コロナウイルス感染拡大により、多くの感染者、死者がでていの中で、世界中で移動の自由が奪われてしまった。ウィリマンと「わたし」は、2020年2-3月上旬の台湾での活動を境に、同じ場で会ってともに活動することは現時点ではできていないが、それだけではなく、そもそも個人の国内移動ですら、自粛も含め、交通公共機関をできるだけ使わない近隣の移動にほとんど制限された。

「わたし」たちはこの制限された状況を逆手にとり、移動に着目することにした。とりわけ、歩くという身一つで行える最も素朴な実践を行うことで、自分の周囲の環境に対し、

五感がより敏感になると考えた。しかし、通常、私たちは、同じ場を一緒に並んで歩いたとしても、まったく同じ視野を共有することはできない。それぞれが別々の意識を向けながら、同じ風景を見て感じてそこにいる。それは、5章で取り上げた台湾での実践においても、「わたし」、ウィリマン、李、ヒジウがともにタロコの山の中を何度も歩いたがその経験から全く異なる言葉を紡いでいったことから、明らかである。

しかし、このアバターの手法を用いて歩く実践を行うことによって、遠隔地にいる実際には歩かない側(図6-3(A))の人間は、相手(図6-3(B))のいる世界を知るために、相手の意味付ける世界を聞き、そして、あたかも自分自身もそこをあるいているかのように感じる。逆に言えば、相手(図6-3(B))のとらえる世界の中でしか歩くことはできない。歩いている側(図6-3(B))の人間は、自分の視野やそのほかの身体感覚から得られた情報を歩いていない相手(図6-2(A))と共有することで、自分のもつ構えを相手(図6-3(A))に貸し与えることができ、相手のもつ構えに自分のもつ構えを重なり合わせえるのではないかと考えたからである。

ツアーを企画した理由は、ウィリマンと「わたし」の構えの重なり合いを試みた一連の実践と経験を第三者とも共有するためであった。また、6.2.1 (4) ⑦および6.2.2 (4) ⑧でも述べた通り、ツアーの脚本は、実際には歩いていない側(図6-3(A))が主に執筆をする。これは移動が規制される状況の中、その地元の人々やその土地に対してより親しみがある人々が、「よその」に案内されることによって、普段とは異なる側面から視点をもってその土地を歩き直し、それによって参加者が、各自の構えに再発見するきっかけになることを願った。

1.3 なぜ映像はなく声だけの実況なのか

「わたし」たちは、香港、上海、台湾など、現地の人々と十分な言葉によるコミュニケーションが取れない状況の中で、活動をすすめてきた。また、それぞれの地域の人々とのコミュニケーションに限らず、「わたし」とウィリマンの間においても同じく、様々な場面で、意思疎通がうまくいかずにお互いが葛藤したり、疑心暗鬼になったりすることがある。しかし、「わたし」たちは、この経験を通して、誤解やすれ違い・理解の遅延も含めた上での言葉によるコミュニケーションは、「わたし」たちに思いがけない新たな発想を与えてくれるものであり、また想像を広げてくれるものであると見えてきた。

今回の実践においても、同様の考えにより、映像による実況は一切せず、不自由であり不便ながらも、お互いの言葉に耳を傾けるということに注意することにした。

1.4 なぜ地図を描くのか

本章6.2.1(4)①や6.2.2(4)②で述べたように、「わたし」たちはアバターを用いた歩く実践の中で、実際には歩かない側(図6-3(A))の者が歩く側(図6-3(B))から伝えられる言葉を聞くだ

けではなく、そこから即時的に聞いたことをA4版の白い紙にペンでドローイングや短い記述、キーワードを書き起こし、残していく。

これは、「1.3 なぜ映像ではなく声だけの実況なのか」で述べた内容の続きでもある。つまり、歩かない側(図6-3(A))の人間が、どれだけ耳を傾けているのかその都度自覚し、より相手が捉える世界を受け取りやすくするための手法として行なった。

人が歩く速度は、列車や自転車などに速度に比べると遅いが、速度が遅い分人は多くのことを受容しながら動いている。そのため歩く側(図6-3(B))が、自身で感じた多くの情報を伝えていく中で、歩かない側(図6-3(A))がそれらの情報に溺れ、単に「聞いているつもり」にならないよう、受け取った情報を記録し、風景をつなぎ合わせる。それにより、歩かない側(図6-3(A))は、自身がどれほど想像できているのか、あるいはどこが想像できていないのか確認し、疑問点を相手に適宜確認していくことができると感じたためである。

6.4.2 表現活動の内容

本章 6.2.2 (4) で述べたように、表現活動《Avatar tours #2: Tokyo Ueno》の中で、ウィリマンと「わたし」は、さまざまな種類の実践を行った。この節では、それらを通して、「わたし」たちがどのように重なり合いを試み、その取り組みの中でどのようなことに向き合っていたのかについて述べる。

(1) 歩く実践およびツアーを通してみえてきた重なり合い

ここでは、活動期間を A から D の 4 期に分け、6.2.2 (4) で示したそれぞれの活動に対応した番号①～⑩、および 6.2.2 (5) で示した時系列順に並べた活動場所・内容一覧番号[1]～[36]とともに述べていく。

A 期 ([1]～[13] 上野周辺地域を 1 周回り終えるまで) : 一方的な情報提供者

「歩く」とは単純な運動でありながら、移り変わっていく自分を取り巻く世界から、とてつもない情報量を感じつつづける行為だ。②の活動を始めて、まず「わたし」たちが感じたことは、自分のいる世界を相手にも想起してもらうためには、限りない情報の中から何を相手に伝えるのか、まずはある程度取捨選択する必要があるということだった。

それでも、「わたし」は近くにあるもの、遠くに見えるもの、今通り過ぎる人々の様子、横に何か建っていて、どのような素材で、どんな時代のいつくらいにつくられた建築物のかなど、1 つ 1 つ説明せざるをえないと感じた。同年 7-9 月に行った《Avatar tours #1: Zurich Altstetten》の活動場所であったチューリッヒの工場地帯・アルテシュテッテンや私の自宅近所の住宅街である神奈川県川崎市と比べても、とりわけ上野周辺地域ではそれを感じざるを得なかった。なぜならば旧岩崎邸庭園、湯島・仲町通りやアメ横商店街、不忍池、

上野清水寺、ボートワン博士像などなど、1つ1つの場所に様々な歴史や時代背景が複雑に絡み合っているためである。そういう訳で、活動開始当初は特に、右も左も検討がついていないウィリマンに対し、普段は15分ほどで通り過ぎてしまうような狭い範囲を歩くにも、2時間以上かけて伝えていくこととなった。

②の活動がそのような調子だったため、「わたし」は、予め次に歩く場所の歴史や時代背景、関連事項などを調べていき、②が終わると、オンライン上のノートに話しきれなかった内容などを共有していった(①・③)。この活動は、「わたし」にとって、そこにかつて生きた先人たちの成したことを学び直すいい機会となったが、同時に「わたし」に居心地の悪さを感じさせた。それはその活動が、どうしてもウィリマンに対して一方的に「教育」するような形になりがちだったからである。「わたし」は、この活動を続けるごとに、ウィリマン自身が自由に上野を歩く機会を奪い、ウィリマンの中に「わたし」の偏った「上野」像を築いてしまうのではないか、という不安に苛まれた。同時に、ウィリマンが「わたし」の与えた情報をどのように受け取り、捉えたのか、確認し、場合によっては、修正・編集したい気持ちにも駆られた。

「わたし」は、アバターの手法を使うということが、「わたし」がここで担っている willimannarai の役割が、伝える情報の取捨選択も含めて、意識的にも無識的にも、相手の想像を操作すると気がついた。つまり、構えを重なり合わせるということは、相手に自身の構えを引き受けることをある程度強いることでもあると、考えた。

B 期 ([14]～[19] 第1回目のテストツアーを迎えるまで) : 瞬間を共有する対話の発生

[1]～[13]にかけて上野周辺地域(上野・湯島・根津)を一周し、かつ[14]では、[1]～[13]で歩いた道を再度これまで描いたマップドローイングを見ながら辿り直した。それにより徐々にウィリマンは「わたし」の目の前の風景を感じられるようになってきたと伝えてきた。また、ウィリマンは何がどこにあるのか伝えられるよりも先に「わたし」にその場所について伝え、少しずつだが「わたし」を導くようになっていった。ちなみに、[14]以降歩く範囲が上野公園のみと狭くなったのは、1時間半ほどに収めようとしていたツアーパフォーマンスに対し、[1]～[13]で歩いてきた範囲では広すぎると判断したためである。

このように「わたし」とウィリマンの間の主従関係のバランスが少しずつ変化してくると、②の活動の中で今度は自然と「わたし」は「今」起こっていることやその場の個人的な記憶も、積極的にウィリマンに伝えるようになっていった。例えば、公園の灯りに照らされた真っ黄色のイチョウの木の下弦の月がぼんやりと見えることだったり、真っ暗になった東照宮の誰もいない宮の前の通路でインコを右肩に乗せて、そのインコと話しながらゆっくりと散歩している中年男性とすれ違ったことだったり、東京国立博物館前の噴水周辺を6人の若者たちがスケートボードの練習をしており、この場所のようにまっ平で開けた

場所が都内では少なく、スケートボード練習場として人気な場所の1つであることを伝えた上で、自身のスケートボードの思い出などを話す、などである。それらは、まさに「わたし」がその瞬間ここにいてウィリマンに伝えられることでありながら、A 期に感じていた「教育」とは違ったウィリマンとの対話が生まれていった。その経験は、あたかも本当にウィリマンとともに歩いているかのようにであった。

C 期 ([20]~[24] テストツアーから 12/8 英語版ツアーパフォーマンス本番まで)：距離をつなぐ機械的存在

C 期に入ると、ツアーにむけて歩く範囲も狭くなり、同じ道を繰り返し歩いたため、ウィリマンはその道を彼女の中で具体的に想起できるようになっていった。

活動⑦では、A 期のように「わたし」が一方的にウィリマンに調べた情報を伝えるだけではなく、ウィリマンも自ら私事として上野公園一帯の調査を始めた。それにより、脚本の中にも、彼女自身が英語・ドイツ語の文献から調査した内容が取り込まれていった。

11月28日には、第一回目のテストツアーを2人のツアーゲストに参加してもらい、行った(活動[20])。そして、12月4日の第1回目のツアーパフォーマンスは、東京とチューリッヒの当時開催となった(活動[24])。東京では、日本語が母国語ではない3人のツアーゲストが参加し、英語でツアーを行った。

実際にゲストがいる状態でツアーを行うと、「わたし」の心持ちも自身の役割も変わるように感じた。これまでは、ウィリマンと「わたし」の間だけの対話だったのが、ツアーゲストが入ることにより、「わたし」はゲストとウィリマンの「橋渡し」をする役目となる。そのため、アバターという手法を用いた「伝える」技術の向上とそれ自体に慣れることに、必死になっていった。

英語によるツアーを行うことは、「わたし」にとって、1つの作業のように感じられた。その中で、自分自身を、チューリッヒにいるウィリマンと東京にいるゲストの間に立ち、左耳に伝えられる情報を次々に処理し続ける機械として捉えていった。また、その「伝える」という情報処理が順調にいかない場合は「失敗した」と感じ、自分自身を責めた。同時に、ウィリマンも「もう少し早くスムーズに話すことはできないのか」と、たびたび私の「処理能力」に不満を漏らした。逆に、言い間違えが少なく、ウィリマンの伝える速度とできるだけ時間差がなく、流暢に発話し続けられた際には、ある種の達成感に満たされた。一方、「わたし」を介してゲストとウィリマンが会話をする際には、「機械」よりも多少「人間」としての心持ちが生まれたが、結局「機械」という認識はなかなか消えなかった。「わたし」は、この時点で、《重なり合うとは、相手とぴったり息を合わせ》、あたかも1人の人間がただその場で喋っているかのように振る舞うことだと、感じた。

しかし、その考え方はD期に入り、日本語でツアーを行っていく中で大きく変わっていった。

D期（[25]～[36] 日本語翻訳版ツアーパフォーマンスから活動最後まで）：重なり合えないと出会う

i. 言語間の翻訳の巧拙

12月4日に、チューリッヒと東京で同時開催した1回目のツアーパフォーマンスを終え、D期からは、東京だけでツアーゲストを集め、日本語でツアーを行った。この場合、ツアー中にウィリマンが英語で「わたし」に伝えた内容を聴きながら、その場で日本語に通訳していかなければならない。

「わたし」は、英語でのツアーに比べ、日本語でツアーを行うことにもどかしさを感じていた。その要因を、初めのうちは、翻訳で生じる《間》だと考えていた。「わたし」は、予め脚本を繰り返し読んできているものの、本番でも一文ごとにウィリマンの英語を聞き取り理解した上で、日本語に置き換える。この翻訳作業にばかり気を取られ、自分の英語や日本語に対する自信のなさパフォーマンスに滲み出ていたように感じた。流れるように話せないために、ツアーゲストにとって聞き取りや理解が難しいのではないかと、心配した。しかし、この「間」に関しては、活動⑭の中で、ツアーに参加したゲストらに聞いてみたところ、

「（…）特に理解の過程には支障はなかった。むしろ、その間の際に（新井が）ロボットのように動かなくなることが面白かった。（…）」（12月13日ツアー参加者/ツアー後のゲストとの会話の中から抜粋）

と返答が来た。この間に関する質問は、ツアーの度に行ったが、毎回同様の意見が返ってきた。そのため、特にこの《間》を懸念する必要のないということが見えてきた。また、同様に「わたし」がツアー最中に話す日本語についても毎回ゲストに聞いていたが、それも特にわからなかった箇所はなかったとのことであった。そこから、このアバターツアーズの活動において、言語間における翻訳の「上手い・下手」という基準は関係ないということに気がついた。むしろ、英語があまり得意ではない上に、日本語にも自信がないということも含めた「わたし」そのものがツアーを通して見えてくることの方が意味があるようだった。

ii. 演じない演技

また、別のツアーゲストは、次のようなことをツアー後に話してくれた。

「（…）《演じない演技》ということについて考えることができて面白かった。（…）」（12月19日ツアー参加者/ツアー後のゲストとの会話の中から抜粋）

アバターツアーにおける「わたし」の役割や振る舞いに言及した感想であった。実際、「わたし」たちは、この《Avatar tours #2: Tokyo Ueno》のツアーの初めに、「わたし」について「willimannaraiです」とゲストに自己紹介している。「わたし」たちは、willimannarai

がウィリマンと「わたし」が重なり合った状態だと考えていたが、具体的に重なり合うとはこの場合何を指すのか、はっきりとした答えを持てずにいた。しかし、ツアーを通してゲストと対話を続けていき、その上でウィリマンと話し合う中で、willimannarai とは、「わたし」がウィリマンを演じるわけでも、willimannarai という架空の人格を作り上げ、それを演じるわけでもなく、ましてや「わたし」を消すわけでもない、ということがみえてきた。willimannarai とは、ウィリマンの語りを、「わたし」が代わりに《語り直す》というアバターの過程そのものによって、「わたし」に自然と起こる状態を指していたのだ、という答えに行き着いた。

しかし、これらを踏まえてもなお、「わたし」は上野公園でゲストを導きながら大きな違和感を拭ききれなかった。特にそれは、自分の言語と言葉に置き換えていった頃から強烈に目の前に現れ出した。

iii. 日本語変換から自分の言葉への置き換えへ

日本語によるツアーパフォーマンスの回数を重ねるごとに、「わたし」はウィリマンの語りを代わりに語るためには、伝える内容をできるだけ自分の言葉に落とし込む必要があると考えるようになっていった。そのためには、センテンスの背後にあるウィリマンの考えの読み直しと、それを自分の日本語にしていく「書き直し」の実践が必要であった。それらの過程を経て、『「わたし」の声』へと代わったその脚本をもう一度読むと、今度はまたその内容そのものにも、違和感を感じ始めた。

その内容は、A 期に「わたし」が彼女に伝えたことを下地にされている。それは「わたし」が、日本やアジアの歴史に触れる機会の少なかった白人西洋人であるウィリマンに対して、半ば強引にまとめた情報でもあった。その上で、ウィリマン自身が解釈し、調査した内容が含まれている。話の主題は、明治維新からの急速な西洋との絡み合いで生まれた日本の歴史のうねりやその歪みとなっている。「わたし」は其中で、急速な西洋化の流れに自ら巻き込まれていく日本のある種の滑稽さを、自国の抱える問題の内省として語るのではなく、白人西洋人である彼女が指摘していること自体に（彼女は脚本の最後で(本章 6.6 参照)、自らその奇妙さについて自白しているのだが、それにもかかわらず）違和感を感じていた。

また、それを「わたし」は自分の声でツアーゲストに伝えることで、「1.3(「わたし」のなかの)ウィリマンについて」で述べたような、ウィリマン個人の様々な経験によってつくられた彼女の構えそのものと「わたし」の構えの圧倒的違いを感じることであった。「わたし」はツアーの最中、自身を取り囲むゲストの存在を通して、自分が「ウィリマンとは違う人間なのだ」と突きつけられているような、逃げ場のない気持ちとなっていた。あるツアーゲストは、ツアー後に以下のようなコメントを残した。

「(…) 同じ内容でも、「誰が」発言するのか、というのはやっぱり重要なんだね (…)」
(12 月 19 日ツアー参加者/ツアー後のゲストとの会話の中から抜粋)

このゲストは、ツアーで話している人物と内容のズレのようなものに興味をもってツアーに参加していたと話した。ツアーゲストと「わたし」の間に不安感の相乗効果のようなものがあったのだと考える。

中身がウィリマンでありながら、表現方法が「わたし」であること。つまりアバターの手法自体が生む違和感、「わたし」たちの重なり合わなさ、「わたし」たちが重なり合ったからこそ見えてきたものである。

iii. 重なり合いの強弱

また、他のゲストからの感想には、次のような感想があった。

「(…) ウィリマンさんと交信(電話?)をして「yes, yes…」といているところを見ると、「ああアライさんがこっちにいるんだ」と思い出す瞬間になりました。(…)」(12月20日ツアー参加者/ツアー後にいただいたメール本文から抜粋)

このツアーゲストは「わたし」がゲストに向かって語る際は、「わたし」以外の何者かが話しているように認識していたことを示している。そして、ふとした瞬間に、ウィリマンがゲストにむけてではなく「わたし」に話しかけ、二人の間に短い会話を交わしている際は、「わたし」が「わたし」だと認識できたとのことである。

また、次のような感想もあった。

「(…) 新井さんが、右から左、左から右へと話しながらゆっくり動いているのが、ロボットのようなだった(…)」(12月19日ツアー参加者/ツアー後のゲストとの会話の中から抜粋)

この感想からは、ツアーゲストが「わたし」の語り部分を、ウィリマンでも「わたし」でもない、ロボットかのように認識していたことを示している。

このように、ツアー中は、「わたし」は何か1つの人格だけに捉えられることなく、アバターの手法により、自然といくつもの人格を行き来しながら、ゲストの目の前に現れていたということが見えてきた。そこには、「わたし」のウィリマンとの重なり合いの強弱が関わっていると考ええる。

(2) マップドローイングの展示を通した重なり合い

活動⑫のマップドローイングを用いたインスタレーションでは、ウィリマンが描いたマップドローイングを全て並べていくと、ウィリマンがどのように上野の土地を思い描いているのかが浮かび上がってきた。特に、東京の美術館において、「わたし」がウィリマンの描いた地図を並び直すことは、ウィリマンの想像のなかを迷子になるようで、苦労した。最終的には、どうしてもつながらないと感じる箇所は、「わたし」の想像で描き直すように、つなげて並べていった。

部分ごとにマップを見ていた時にはあまり気づかなかったが、全体を俯瞰して見てみるとウィリマンがどのように上野の地形を認識し、あるいはどこを想起することに苦労してい

たのかが見えてきた。例えば、不忍池を②の活動の中でたびたび通っていたため、彼女のなかでは5つも池があることになっていた。また、東京国立博物館の敷地があまりにも広く、さまざまな角度や場所から見えるため、ウィリマンの地図の上では、いたるところに東京国立博物館が分散していた。そういった「誤解」は、少しずつ新たな風景を見せる装置となった。

(3) Avatar tours における参加者と実践者の関係性

本活動 Avatar tours は、これまで3、4、5章で取り上げた実践を含め Willimann/Arai のほとんどの活動と比べ、参加者と実践者の関係性に異なりがある。本活動以外の活動のほとんどが、活動を始めるにあたって、活動および発表する地域の人々とのつながりをつくりたいという想いが背景にあることである。一方、今回の Avatar tours においてまず着目しているつながりは、参加者であるツアーゲストとのものよりも、実践者である「わたし」とウィリマンの間におけるものである。参加者であるツアーゲストは、それを目撃し、体験する存在である。また、実践者にとっては、本節の(1)で述べたように、自分たちの重なり合いを、重なり合わなさも含め映し出す鏡のような存在であった。

この違いにより、活動⑪のツアーパフォーマンスの告知の際には、どのような形の情報・呼びかけ方を提示するべきか迷いが生じた。ポストカードやメールの招待状を使ったイメージとテキストの組み合わせを通して、「わたし」たちの重なり合いがツアーの根底のテーマとなっていることについては示したつもりである、ゲストがどのようなものを期待すべきなのか汲めるような情報のつくり方ができたかどうかについては、非常に疑問が残った(図6-4、6-5、引用6-1)。

活動⑭を通して、ツアーに参加されたゲストから頂いた感想によると、ツアーを純粋に「上野ツアー」として一人ひとりの参加者なりに楽しんだ人が比較的多かったように感じた。そして中には、次のような感想もあった。

『(…)参加者である自分の立ち位置についてどう振舞っていいのか少し迷った。(…)]

(2020年12月12日ツアー参加後、12月19日に送られた感想より抜粋)

予め広報の時点で、ツアーで体験できること、このパフォーマンスを望むためのゲストに期待されうる態度のようなものを、もうすこし明瞭化した形で伝えるべきだったのではないのか。また、ツアーの中でも、それらを示す「わたし」たちの態度を、今回の経験を踏まえ、もうすこし明快に示せた方が良いのではないのか。これらは、次回に向けての反省点である。

6.4.3 表現活動の考察まとめ

ウィリマンと「わたし」は、本活動の中で、様々な取り組みをもとに風景の共有を通して、互いの構えの重なり合いを試みた。活動当初、「わたし」にとって、構えの重なり合いとは、想像世界と現実世界の差を超えた互いが体験する風景の溶け合い、あるいは、あたかも1つになっているかのように演技続け、自分たち自身もそのように信じ込んでいくことを指すと考えていたのである。

しかし、ツアーパフォーマンスの際のツアーゲストの存在に感じた戸惑いや、彼らからツアー後にもらった感想や質問を受ける中で、その考え方は大きく変化していった。構えが重なり合うこととは、他者と溶け合って1つになることではなく、むしろ重なり合っていないこと、そこに現れる他者との圧倒的な違いを含めて他者を認識することであると気づいていったのだった。

仮に、英語のツアーパフォーマンスを繰り返していき、「わたし」のもつアバターを通じた「伝える」技術が活動[24]で発表した時点よりもずっと向上していき、ウィリマンの伝えてくる脚本もほとんど覚え、ウィリマンの語りも差し置いて、「わたし」がスラスラとゲストに向かって語り始めた時、そこには、もうウィリマンの存在する意味は無くなり、ツアー中「わたし」との間にもう何も対話も意思の疎通も生まれまいだろう。そうなった場合、Avatar tours としてゲストに参加してもらう意味はどこまであるのだろうか？また、ウィリマンと「わたし」の重なり合いは、どこにあるのだろうか？

前節の(1)で述べたように、本活動を通して、特に私は日本語翻訳でこのツアーを行うことを通して、もどかしさや、不安、違和感や不安定さなどといった感覚を味わっていた。このように、他者との違いに直面することは、ある意味での精神的苦痛を伴う。しかし、同時にバラバラの他者がいて、その違いを認識するからこそ、言葉が発せられ、その言葉が別の言葉を誘発し、対話が生まれる。その対話は、Avatar tours という活動をつくりだしたように、新たな何か、新たな「わたし」を生み出す力となっていく。

5章では、李との対話を通して、重なり合いとは、《その重なりにみえる自分自身に向き合うこと》だと見えてきたが、また同時に、重なり合うということは、《相手との違い・重なら合わなさに向き合うこと》でもあるということを本章を通して捉えることができた。

以上のことが、今回《Avatar tours #1: Tokyo Ueno》の活動から見えてきたことである。この《Avatar tours》は、シリーズとして現在も継続しており、今後の活動からまた新たな重なり合いの側面を見出すことができるだろう。

6.6 《Avatar tours #2: Tokyo Ueno》2020 年 12 月 20 日版

ツアーパフォーマンス脚本（和訳版）

脚本はチューリッヒの自宅にいるウィリマンによって原文の英語で読みあげられ、「わたし」はそのウィリマンの声を聞きながら即時的に日本語翻訳をし、ツアーを行った。以下は、その脚本の和訳版である。

《Avatar tours #1: Tokyo Ueno》2020 年 12 月 20 日版ツアーパフォーマンス脚本（和訳版）

原文執筆（英語）：ニナ・ウィリマン、新井麻弓

日本語翻訳：新井麻弓

パフォーマンス：ニナ・ウィリマン、新井麻弓

[東京藝術大学美術学部正門前]

Hello! こんにちは。

I'm very happy to welcome you here today. 今日ここでお迎えできて嬉しいです。

Maybe I should introduce myself: もしかしたら自己紹介すべきでしょうか。

I am willimannarai. 私は、Willimannarai です。

Usually I speak English, but today I would like to translate myself into Japanese in order to feel closer to you. 私は、普段英語を話すのですが、今日は、日本語に翻訳していきたいと思います。

私は、このツアーの主催者です。

しかし、実は私はホストであり、また同時にゲストでもあります。

あるいは--違う言葉で言うと

I'm A GUIDED TOURGUIDE. わたしは、ガイドされるツアーガイドです。

うーん… さて…他に何と言えればいいのか…。

聞かれなければ

普段わたしは自分のことは何も話しません。

私は人ではあるが、個人ではなく、複数形でしか存在していません。

私はこの2ヶ月間これからいく上野公園とその周辺で過ごし、

ここが何層もの時間のアーカイブであることをを見つけました。

そしてまた、日本と西洋の複雑な歴史的絡み合いの表れでもあるということも見えてきました。

ここチューリッヒは朝の7時半で辺りは暗く、街はまだ眠っています。時折、電車やトラムが通り過ぎていく音が聞こえ、その振動が建物や自分の骨に伝わり、響いてくるのを感じます。私は Jabra ヘッドセットを装着して、デスクに置いたノートパソコンの前に座って、コーヒーを飲んでいます。私の声はインターネットを通じて、今日みなさんに紹介したいと思っている上野の左耳に送られています。

日没後は少し寒くなりそうなので、みなさんにカイロを持ってきました。必要な方は遠慮なくお知らせください。

今日は（撮影者氏名）が記録撮影をしてくれます。写真・映像に写るのが嫌な方は言うてください。あなたが写されている写真は使いません。

↓

[歩き始めながら話す]

これから訪れる上野公園は、日本で最初に作られた公園の一つです。

上野公園は1873年に西洋の手本に基づいて作られ、敷地内には博物館、図書館、動物園などの近代国家の文化施設が建設されました。そこには日本の急速な近代化と明治初期を特徴づける西洋の文化や社会の借用と同化を見ることができます。

上野公園は、寛永寺がもともとあった土地に設立されています。

寛永寺は江戸城の鬼門除けとして1625年に建てられました。寛永寺が「鬼門除け」と呼ばれたのは、江戸城の北東の方角、つまり悪霊が通る不吉な方角であることからです。

1868年の上野の戦いでは、寛永寺の建物のほとんどが焼失してしまいました。

明治新政府は、その跡地に西洋医学の研究所を建設する予定でした。しかし、政府に雇われた西洋医学者であるボートワン博士は、医学研究所ではなく公園を建設するように政府に進言しました。

↓

[旧動物園正門前]

ここは、上野恩賜動物園、通称・上野動物園の旧正門です。

この動物園は、1882 年に開園した日本初の近代型動物園です。ヨーロッパのそれをモデルにしていますが、西欧の指示の元に建設されなかった世界で初めての動物園です。

開園当初、動物園は後で訪れる国立博物館に所属した施設で、クサガメやオオサンショウウオなど日本の固有種を中心に展示していました。ですが、1886 年に管轄が宮内庁に移ってからは、アジアゾウなど外国の王族からの「贈り物」や、フタコブラクダなど「戦利品」といった海外の珍しい動物が、集められ展示され始めました。

↓

[歩き始めながら話す]

大日本帝国が成長し、アジア全土に拡大していく中で、この上野動物園は帝国主義の壮観を見せる重要な場となっていました。それは、たった一日で移動できる帝国の縮図でもあったのです。

第二次世界大戦後期 1943 年、政府は動物園の職員に人間に危害を及ぼす可能性のある動物をすべて殺すように命じました。公式には、爆撃で動物園が破壊された場合、動物たちが逃げ出すことを恐れたとされています。しかし後に、この虐殺は精神的・カルト的な自己犠牲の儀式として行われたということを示唆する文書がいくつか発見されました。動物の死は、日本国民が自分たちの死に備えて心の準備するために行われたという見解です。第二次世界大戦後、アメリカは国交正常化の証として、上野動物園に「新しい」動物を寄贈しました。

動物園の中には、現在でもゾウの檻の隣に殺された動物たちの記念碑があります。

↓

[動物園正門前]

すみません！ここは、たくさんの人たちがいて、ちょっと騒がしいですね～おそらく皆さん、上野動物園の最大のアトラクションでもあるジャイアントパンダのシャンシャンを見に来たのでしょう。

上野動物園のジャイアントパンダは中国からの借り物で、生まれた赤ちゃんの所有権は中国が持っています。シャンシャンは 2017 年にこの動物園で生まれ、今年 2020 年 6 月で 3 歳になりました。本来は 2 歳で返還されるはずだったのですが、オリンピック開催に合わせ、上野動物園の要請により 1 年間延長され、この 12 月末に中国に帰る予定です。現在も生きているジャイアントパンダは世界で数千頭しかいません。シャンシャンはもうすぐ繁殖期を迎えますが、上野動物園ではパートナーを見つけることができません。そのため多くのパンダが飼育されている中国に帰らなければならないのです。

現在、シャンシャンは新型コロナウイルス感染拡大の影響で完全に制限されてしまっている中国へのフライトを待っています。そして、ちょうど今朝、中国への帰国が来年5月に延期になったというニュースを見ました。

パンダの個体数までもがパンデミックの影響を受けるということは、不思議なことです。ですが、こうした新たな感染症も、もとを辿れば人間と動物の関係性から発生したものであり、その関係性のバランスが崩れた結果として引き起こったといった方がいいのかもしれない。

では、進みましょう！

↓

(歩きながら参加者との対話)

↓

[桜並木・スターバックス]

(指さして) 向こう側には有名な桜の通りが続いています。(指さして) 反対側にはスターバックスカフェも見えますね。スターバックスは世界最大のコーヒーチェーンであり、アメリカのコーヒー文化を代表する企業です。2020年には、世界70カ国以上に3万店舗以上を展開しています。上野公園店は2012年にオープンしました。トリップアドバイザーによれば、「都内で最も美しいスターバックスの一つ」だそうです。

私の友人の一人は、スターバックスがここにできたことは、上野公園の「美化計画」全体の中で最も大きなターニングポイントだったと言っていました。彼女によれば、ここにスターバックスができてから、上野公園の来園者層さえも大きく変わったそうです。

↓

[歩き始めながら話す]

上野公園の正式名称は「上野恩賜公園」です。というのも、1923年に東京を襲った関東大震災をうけて、その翌年大正天皇が東京都に対して上野公園を贈ったことに由来しています。この地震は東京に大きな被害をもたらしました。何千人もの死者や負傷者、多くの行方不明者が出ました。建物が少なく開けた土地をもつ上野公園は、安全な場所なため避難所へと変わりました。

現在、上野は都内でも最も多くの路上生活者が住む地域の一つです。上野公園の「美化計画」のなかで、路上生活者たちは木の絵が描かれた金属パネルの後ろに片付けられました。在日韓国人作家・柳美里氏は小説『JR 上野駅公園口』の中で、そう描きました。彼女は、天皇のもともとの意図に反したこの立ち退きを皮肉に指摘しています。

天皇は、東京の人々への贈り物として公園を送りました。彼は、震災で被災した人々の避難所として、そして行方不明になった愛する人を探す人々の希望の場として、この公園の重要性を認識していたはずで

↓

[ボードワン博士像前]

手前にいるのは、日本政府に医学研究所の代わりに公園を建設するように説得したオランダ人医師・ボードワン氏です。1970年代には彼の業績をたたえ、銅像が建てられました。しかし、物語はここでは終わりません。像が設置されてからしばらくして、その像の顔が、実はボードワン氏自身ではなく、ボードワン氏の弟の顔をモチーフにされていたということが発見されたのです。この発見後、その像はすぐに撤去され、2006年には正しい顔に交換されました。

↓

[歩き始めながら話す]

広場の向こうに見える数百の青い円筒は、錦鯉のための水槽です。まだ水は入っていませんが、この週末に開かれる関東甲信地区錦鯉品評会の準備をしているのでしょう。そこで出される錦鯉は非常に高価だと聞いています。

↓

[東京国立博物館]

先ほどお伝えした、動物園が所属していた東京国立博物館がこちらです。

その起源は、1872年に帝国の美術品や科学標本の公開展示を行ったことにあります。それは、その翌年に開催されたウィーン万国博覧会の国際展のための準備として開かれました。その収集事業は非常に大規模なものだったようです。日本各地の最重要品目をリストアップし、それぞれ2点ずつ収集し、1つはウィーンに送られ、もう1つがこの博物館で展示・保存されました。日本が万国博覧会に参加したのは、これが初めてであり、非常に重要で歴史的な出来事でした。また、それを機にヨーロッパではいわゆるジャポニズムとよばれる日本ブームが起こりました。

現在の東京国立博物館は、日本最大の博物館であり、世界でも最大級の規模を誇っています。今日では、日本とアジアの美術品や文化品を収集、保存、展示しています。

私の一番古いここ国立博物館での記憶は、小学1、2年生の頃に両親に連れられ、博物館前で何時間も長い列の中に立たされたというものです。それは、古代エジプト文明展に入るためでした。

↓

(いちょうの木々の間を通りながら、参加者との対話)

↓

[国立西洋美術館]

国立西洋美術館は、アジア全体の中でも最も重要な西洋美術コレクションをもつ美術館の一つです。ルネッサンスから 20 世紀初頭までの美術品を展示しています。建物はスイス・フランス人の建築家ル・コルビュジエによって設計されました。

創始者の松方幸次郎は、造船会社・川崎造船所の会長を務めていました。カワサキという名前は皆さん、ご存知だとも思います。そうです、今日ではバイクを製造している会社として世界的に有名です。

松方氏は第一次世界大戦中、ロンドンで美術品の収集を始めました。彼は美術館を建てるつもりでコレクションの一部を日本に持ち込みましたが、1920 年の経済危機により、松方の計画は中断され、ほとんどの財産を失いました。また、彼はロンドンにコレクションの一部を残していましたが、1939 年の火災でそれも焼失してしまいました。第二次世界大戦中、パリに残していたもう一つのコレクションは、フランス政府によって「敵国の財産」として没収されてしまいました。

戦後、松方氏は亡くなり、フランス政府は作品のほとんどを日本に返還することに決めました。これが、この国立西洋美術館の設立へとつながりました。

↓

(歩きながら参加者との対話) : 「シキ・マサオカ」を知っていますか？

↓

[正岡子規記念球場]

正岡子規は、この球場の名前の由来となった人物です。俳人であり作家でもあり、また大変な野球好きでもありました。彼はよくここ、上野公園で野球を楽しんでいました。また、多くの野球用語の日本語翻訳も行いました。彼の文学のお陰で、日本では野球が盛んになったとも言われています。

↓

[摺鉢山]

さて、私たちは、摺鉢山の頂上に到着しました。この丘は 1500 年ほど前の古墳丘です。円形をしていて、正面が西向きになっています（ちょうど日が暮れる頃の西の方角を指さす）。この古墳の埋葬施設の詳細は、発掘調査が進んでいないため、いまだに明らかになっていません。このメインの古墳以外にも、周りには古墳群があったようですが、いずれも現在までにその姿は消えています。

↓

[時忘れじの塔前]

この記念碑は「時忘れじの塔」と名付けられています。二人の子供をもつ母親がそこにいます。一人は彼女の腕に抱かれています。隣に立っているもう一人の子供は、彼女の手を握り、空を指差しています。みんな空を見えています。私の頭のなかでは、この記念碑はとても迫力のあるもので、非常に気に入っています。

この記念碑は、東京大空襲の犠牲者を悼む慰霊碑として建てられました。つまり暴力や苦しみについて語っていると思いますが、わたしには同時に「思いやり」についてもこの像から感じられます。またその思いやりの像が、女性像で表現されているということが、私は全く不思議ではありません。

この女性は、誰なのでしょう？この公園にある数多くの男性の記念像とくらべ、この女性像とその子供達には名前も歴史もありません。

みなさん、鶴の折り紙は見えますか？近くの柱に数多くの折り紙が固定されています。この鶴の折り紙を折る行為は、一種の折りなのだと言いました。私は、折り紙の精神的な側面について知りませんでした。ヨーロッパでは、折り紙は単に飾りに使うことが多いです。文化の移ろいの中で、意味性が失われ、形だけが残るということは興味深いです。

↓

[歩き始めながら話す]

鶴の折り紙を 1000 枚折ると願いが叶うという言い伝えがある聞き、また、鶴は長寿を意味するとも読みました。

(歩きながら続きを参加者との対話)

↓

[清水寺]

ここ清水寺は、江戸時代に京都にある清水寺を模して建てられたお寺です。

ちょうどその頃、旅が盛んになり始めたのですが、一般に旅の手段は徒歩以外にはありませんでした。普通の人の足で、東京から京都まで歩いて平均 25 日ほどかかるので、これは誰にでもできるわけではなく、また 25 日分の食費や宿泊代などを考えると、気軽には行けませんでした。それを踏まえると、このそっくりなお寺を建てるということは、「旅をしないで旅する」ためのある種の戦略だと私は理解しています。

この「旅をしないで旅をする」という考え方は、昨今の状況を考えると、とても面白いコンセプトだと思います。また、このアバター・ツアーズにも非常に関連しています。

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は、予想以上に国際間の観光産業を完全に停止させてしまいました。デジタル技術はある世界を模倣して擬似的につくり出すことに役立ちますが、アナログな「もう一つの世界」への欲望を満たすことは、難しいのではないでし

ようか。このアバターツアーズの活動を行っていくなかで、私はしばしば自問自答していました：植民地主義的な投影を超えた「もう一つ」へのこの執着は何なのか？私たちは本当に「他者」に興味を持っているのでしょうか？あるいは、単にそう想像しているだけなののでしょうか？「他者」とは、単に、自分たち自身の空想で満たされた「未知」のままの空間なののでしょうか？

（指を刺して）みなさん、向こう側に琵琶湖は見えますか？

嘘です。これはちょっとした冗談です。もちろんここから琵琶湖は見えません。でも、この向こうにある「不忍池」という池は、実は京都の清水寺の「近く」にある琵琶湖と解釈されてきました。では、早速行ってみましょう。

↓

[不忍池]

目の前に広がる池は不忍池です。これは天然の池で、昔は海とつながっていました。この池は、3つの部分に分かれていて、私たちの目の前にある池はハスの葉で覆われているので、蓮池と呼ばれています。

ここに住んでいる生き物について少しお話していきたいと思います。

ここにはたくさんの鳥がいますが、その中でもカワウという珍しい渡り鳥がいます。

また、この池にはカッパも住んでいます。想像してみてください。カエルの手足と頭、亀の甲羅を持った人間のような姿が、この池の中にいることを。皆さんは、カッパを見たことがありますか？

数年前、この池に誰かがカミツキガメ放したという噂が広まりました。その噂は本当で、その証拠に卵が見つかったので、公園管理局は訪れた人を守るために柵を作りました。あるいは、カミツキガメを人々から守るためであったのかもしれませんが。

注意を払ってよくみると、この辺りには「スマートフォンゲーム禁止」と書かれた看板を見ることができます。これは、ここに生息するもう一つの危険な生き物、ポケモンGOのミニリュウからの防御策です。近年、そのミニリュウを追いかけるために、非常に多くの人々がこの不忍池を訪れては、ゴミを残して去っていくようで、不忍池の持ち主である寛永寺の人々を困らせてしまいました。また、ゴミ問題だけではなく、寛永寺の人々は、ポケモンGO ツーリズムが不忍池を普段とは違った賑やかさをもたせ、この池に住んでいる「本物の」龍を煩わせているのではないかと、あるいは叩き起こしてしまうのではないかと心配しました。この「本物」の龍は、古くからここに住んでおり、大蛇のような姿をしています。そして、若い女性を虜にして、池の中に連れ去ってしまうということでも有名です。

この不忍池の龍は、私にヨーロッパの神話に登場する女性のキメラである人魚姫を想起させました。人魚姫も男性の船乗りを虜にし、最後には彼らを海で溺れさせてしまいます。正直なところ、私はこの神話上の存在に、ある種の親しみを感じています。おそらく私もある意味ではハイブリットであり、異なる存在から構成されているからでしょう。

↓

[歩き始めながら参加者と対話]

実は、この池に連れ去られてしまう女性は、私たちの今日の話の中で登場した二番目の女性像で、また彼女も「犠牲者」です。どうすれば、私たちはこの公園の中にある他の女性の歴史を見つけることができるのでしょうか？ 私たちが、どこか別の場所からその記憶を見つけてこなければいけないのかもしれません。ここに何か痕跡を残した歴史上の人物を知っていますか？（続きを、参加者と対話する）

↓

[時の鐘]

今日、皆さんの前にアジア人の姿で現れることができたことを実はとても嬉しく思っています。正直に言うと、ヨーロッパ人の私が、日本人の皆さんに日本の歴史について語ることは、とても変な感じがして、居心地が悪いのです。

これは時の鐘です。

（ウィリマンは、新井に辺りがどれくらい暗くなっているのか、まだ鐘は見えるのか尋ねる。）

日本の伝統的な時間の仕組みは、いわゆる「束の間の時間制度」をもっています。昼と夜はそれぞれ6つの時間帯に分かれ、その長さは季節によって変化します。そのため、時間の長さは延びたり縮んだり和不規則です。例えば、冬の一刻は夏の一刻よりも短いといったものです。一方、西洋の時間は16世紀から17世紀にかけてキリスト教の宣教師によって日本に導入されました。それにもかかわらず、明治維新まではこの伝統的な「時制」が使われており、それが正式に廃止されたのは1868年、上野の戦いの年でした。

このツアーでは、西洋の時間の測り方と「キリスト生誕以後の年号」のもとお話ししてきました。このツアーの台本を書きながら、私は、自身が語る内容を日本の伝統的な時間の尺度で翻訳することができたらいいなと思っていました。しかし、それではおそらく参加者のみなさんにも理解してもらうことは難しいのではないかと考えました。

木々の後ろにある小さな家は、見えますか？ここは 1666 年からこの鐘を管理している家族の家です。今も日本時間午前 6 時、正午、午後 6 時の 1 日 3 回、この鐘を鳴らしつづけています。中央ヨーロッパ時間では、それは午後 2 時、午後 8 時、午前 2 時にあたります。

東京が徐々に暗くなっていく間に、ここチューリッヒでは、もうすぐ太陽が昇ってきます。

なので、このツアーもそろそろ終わりにしようかなと思っています。光があるうちに、みなさんと一緒に、同時に、自撮り撮影をして交換しませんか？もしも、暗すぎたら、ご自身のスマホのフラッシュライトを顔に当ててください。

（新井、参加者は時の鐘を背景に自撮りの準備をする。ウィリマン、新井は、参加者と息を合わせて、スマホのシャッターを一緒にきる。）

では、準備はいいですか？はい、ではいきます。3・2・1！

（その後、新井と参加者は一緒になって、ウィリマンと同時に集合写真を撮る。撮影後は、参加者に新井のスマホに送られてきウィリマンの自撮り写真を見せる。）

（ツアー終了。観客から感想を聞き、質疑応答を行う。）

第 7 章

「なる」論前章：形を重ねる (uni・form)

7.1 序文

ここまで、3 章、4 章、5 章、6 章とそれぞれの「なる」という体験が起こるきっかけとなっていく 3 つの試みに焦点を当ててきた。3 つの試みは、「自分を他者(相手)の構えの中においてみること」、「相手と自分の構えを重ねり合わせること」、「その構えの重なりに見える自分自身に向き合うこと」、という段階があることが見えてきた。いずれの試みも、はじめから「なる」という体験を得るために行われたのではなく、表現活動の中で積み重ねられた気づきと、「わたし」とウィリマンの間でその共有が行われたことによって導かれた営みであった。

第 7 章では、「なる」論の前章として、3、4、5、6 章で述べた表現活動の中身をさらに深く掘り下げていくために、Willimann/Arai の表現活動に通底する基本的態度としての表現とその意味付けの考察を行う。さらにそこから、その表現が、3、4、5、6 章で述べた活動において、どのような影響を与えていたのかについて検討する。

7.2 「わたし」たちの気づきの交換録#4

この節では、Willimann/Arai の表現活動の期間中に、「わたし」とウィリマンの違いが鮮明に露呈し、その違いやそこに起こった葛藤が記録された気づきの交換録の抜粋を載せる。

2016 年 10 月 1 日 スイス・ロマンモティエ

ウィリマンと「わたし」は、チューリッヒから電車で、スイスのフランス語圏にある田舎街に向かっている。ローザンヌよりも北西部、フランスとの国境にあるジュラ山脈の始まりに位置する村である。

“Romainmôtier” 「わたし」は、“o”の上に山のようなマークが、どのように口を動かして発音すればいいのかわからない。いつもウィリマンが発音する音を、聞いた通りに再現する。初めのうちは、ウィリマンは「わたし」の発音を直そうと何度も教えてくれていたが、そのうち諦めてもう指摘もしなくなった。

これから2週間強アーティスト・イン・レジデンスをする。「わたし」たちアーティスト・デュオにとっては、これが大学という組織の外で初めて招聘された活動である。いわばデビュー戦のようなものであった。「わたし」は昨日の夜から緊張し始めていた。そのせいか、あるいはいつもの癖のせいか、「わたし」は若干家を出遅れ、結果2人はチューリッヒからの電車を1本乗り遅れた。そのため、その後の乗り換えの予定も全部ずれ込んでいった。先に進むほど田舎街になり、思っていたよりも俄然本数が少なく、予定していた時間からどんどん引き離されていった。

一人で初めてアーティスト・イン・レジデンス等で滞在制作をしたり、一人でパフォーマンスを行ったりする時よりも、重圧を感じている。個人の楽観さが通用しない時。責任や評価がいい意味でも悪い意味でも二分される。人に見透かされた自分の未熟さが、ウィリマン個人の評価にも悪影響を与えてしまうのではないかという、申し訳なさや気後れのようなものを感じていた。ウィリマンに数週間前に言われた「私は、あんたの母親役はやりたくない!」という言葉はまだ引きずっているようだった。その場では、「母親役をやってほしいと思ったことは一度もない、あんたが勝手に勘違いしているだけだ」と言ったものの、相当後味の悪さが残っていた。

スイスのフランス語圏に滞在するのは、初めてだった。昨夜2人で調べた電車の乗り換えも、自分が遅れたせいで、全て変わってしまい、もうウィリマンに言われるがままについていくしかなくなっていた。

レジデンス先のオーガナイザーは、一体「わたし」たちのことをどう見るだろうか。ウィリマンに電車の中で、それについて聞いてみた。「さあ？」と言っただけだった。彼女は既に「わたし」が今回スイスに来る前に、オーガナイザーとミーティングを済ませていたからか、特に緊張もせずいつもの表情だった。

隣で、ウィリマンが携帯で頻繁に時間を確認している。かなり怒っている。

＊

2016 年 10 月 5 日 スイス・ロマンモティエ

マユミとコミュニケーションをとるのは、時にとても疲れる。すべてが少なくとも 3 倍以上の時間がかかるように感じるという事実に加えて、言語とのコミュニケーションの複雑さ、誤解、不可解さがそこにはある。さらに、彼女が文章を言い終える時には、私はその冒頭を覚えていないことが起こり、そしてその間に彼女自身も質問を忘れてしまっているということが起こる。私は、自分自身に言い聞かせる。これは、忍耐のためのいい練習だと。でも、時々糸が切れたように、私は焦って、次にイライラし、最終的には私は非常に後悔している。私は、いいホストになりたいし、私のゲストにきちんと対応し、耳を傾け、気を配り、ある時は助け、またある時は手放すことができるようになりたい。このバランスを取することは非常に難しいが、パワーバランスを適当に保つこともとても難しい。ホストとゲストの関係には、根本的に不均衡であるのではないかと疑っている。つまり、最終的に場を仕切る力がホストの手やホストが放つ最後の言葉に委ねられているように、責任もゲストよりもホストの肩に不公平に配分されているのではないか、ということである。

マユミは、私には責任はないと言う。彼女の言うとおりで、私は危険察知器やヘルパーとして、母親や保護者のように感じていて、おそらく彼女の意思に反してこれらの機能を実行しているのだろうと、私自身も分かっている。しかし、私はそれを制御することができない！それは自分の身に起こることであり、自分を克服することでもあり、同時にこの役割を重荷としても感じている。

友情や恋愛関係、あるいは共同作業というのも、一種のホストとゲストの関係と理解できないだろうか。理想的には双方が、均衡に力を持っていて、つまり両方が同時にゲストでありホストでもある状態である。

Es ist so anstrengend für mich manchmal mit Mayumi zu kommunizieren. Dazu, dass eh alles gefühlt mindestens dreimal länger dauert kommen noch die

Kommunikationskomplikationen mit der Sprache, die Missverständnisse, die Unverständnisse. Dann passiert es, dass ich mich am Ende ihres Satzes an den Anfang nicht mehr erinnere, und dass sie inzwischen die Frage vergessen hat. Ich sage mir, es ist eine gute Übung für mich in Geduld. Aber manchmal reisst mir der Faden, ich werde erst ungeduldig, dann genervt und dann tut es mir sehr leid im Nachhinein. Ich will eine gute Gastgeberin sein und auf meinen Gast eingehen, zuhören, achtgeben, helfen, wo man helfen kann und sein lassen, wo es besser ist. Es ist diese Balance, die schwierig ist, und ich finde, dass es sich auch auf der Machtebene um einen sehr schwierigen Balanceakt handelt. Ich habe den Verdacht, dass im Gastgeber-Gast-Beziehungsgespann eine grundlegende Imbalance herrscht: die Verantwortung lastet ungleich verteilt, systematisch bedingt meine ich, mehr auf den Schultern des Gastgebers als auf denjenigen seines Gastes, so wie schlussendlich auch die Macht in seinen Händen liegt. Das letzte Wort in seinem Mund.

Mayumi sagt zu mir, dass ich ihr keine Verantwortung schuldig bin. Wahrscheinlich hat sie recht, ich fühle mich als Mutter und Aufpasserin, als Gefahrendetektorin und Helferin, und übe diese Funktionen wohl gegen ihren Willen aus, das merke ich schon. Aber ich kann es nicht kontrollieren! Es geschieht mit mir, es überkommt mich, und gleichzeitig empfinde ich diese Rolle als Last.

Kann man eine Freundschaft, eine Liebesbeziehung oder auch eine Kollaboration auch eine Art Gastgeber-Gast-Beziehung verstehen? Im Idealfall ist das Machtgefälle ausgeglichen - sind beide zugleich Gäste und Gastgeber zugleich.

*

2016 年 10 月 12 日 スイス・ロマンモティエ

ロマモティエ滞在も終盤にさしかかったある夜。ジーザスは車で私たちを山の上の見晴らしのいい地点まで車で連れて行ってくれた。強風のなかで私たちは、霧に包まれた谷とジュラ山脈の下に広がる台地を望むことができた。すでに 1 番目のライトが点灯しているのが確認でき、あたりはゆっくりと暗くなっていった。

ジーザスは私たちを彼の元妻と一緒に、その近くのフォンデュレストランに招いてくれた。ジーザスの元妻は、いたずらっ子の目をしていて、私は初めて彼女に会った瞬間から彼女に疑わしく見守られているように感じていた。ジーザスは私たちにいくつかの物語を語り、私たちは皆耳を傾けていますが、緊張のせいで私の気は常に宙に浮いていた。ジーザスの元妻は、チーズのようにねちねちと、私たちに幾つかの質問をした。私たちは何を一体望んでいるのか、そしてその理由。なぜ私たちはいつも同じ服を着ているのか。彼女のこの発言で、ジーザスは驚き、改めて私たちを見て、「ああ！それは全く気にしたことがなかったし、気

づかなかったよ！」といった。彼女の質問は非常に鋭く、彼女の目は交互に私たちを見た。すると彼女は突然、何の迷いもなく、ぱっと私の髪を掴み、「彼らは本物ではないわ！」と言い放った。わたしは混乱した。そして、ゲーム（私からすると、これはゲームではないけれど）をキャンセルすることにした。かつらを脱いで見せる。終始フランス語で多分全く状況についていけないマユミも同じことをしてみせた。どういう訳だか騙されていて、その判然としない疑惑を見極めた、といったような様子で、ジーザスの元妻はとても誇らしげだった。視界の隅にジーザスの凍った顔が見えた。彼はしばらく何も言わず、私がかっかりしたかどうか尋ねると、躊躇して「はい」と言い、続けて「騙されたとも感じている」と言った。「あなたは私が思っていたよりずっと歳上だった。あなたは女性であり、女の子という年ではない。」

しばらくして、彼はさらに独り言のように、多分自分の娘と混同していたのだと思うと付け加えた。

私たちはジーザスを騙しましたか？

An einem der letzten Abende nimmt Jesus uns mit seinem Auto mit zu einem Aussichtspunkt auf dem Berg, von wo man bei heftigem Wind über das Mittelland und in nebelverhangene Täler blicken kann. Man sieht schon die ersten Lichter angehen, und es dunkelt langsam ein. Jesus lädt uns ein zum Fondue mit ihm und seiner Frau im nahen gelegenen Restaurant. Seine Frau hat schelmische Augen und ich fühle mich vom ersten Moment an misstrauisch beobachtet von ihr. Jesus erzählt uns ein paar Geschichten, und wir hören alle zu, aber die Spannung hängt spürbar in der Luft. Die Unterhaltung wird zäh wie der Käse, und dann beginnt Jesus' Frau uns mit Fragen zu löchern. Was wir denn genau wollen, und warum. Und warum wir gleich angezogen seien. (Bei dieser Bemerkung schaut Jesus uns erstaunt an, dann sie, und sagt: "Oh das hatte ich gar nicht bemerkt!") Ihre Fragen sind bissig, und ihre Augen mustern uns abwechselnd. Plötzlich greift sie aus dem nichts mit einer entschlossenen Geste in meine Haare und sagt: Die sind nicht echt. Ich bin perplex. Und entschliesse dann, das Spiel, (das in meiner Wahrnehmung keines ist), abubrechen. Ich ziehe die Perücke aus, zeige sie ihr. Mayumi, die wahrscheinlich nichts versteht, tut es mir gleich. Ich sehe den Triumph in den Augen von Jesus' Frau, die sich in ihrem diffusen Verdacht bestätigt zu fühlen scheint, irgendwie hinters Licht geführt worden zu sein. Aus den Augenwinkeln sehe ich Jesus' erstarrtes Gesicht. Er sagt für eine Weile nichts mehr. Als ich ihn frage, ob er enttäuscht sei, bejaht er zögernd und sagt dann, er fühle sich betrogen. "Ihr seid viel älter als ich dachte. Ihr seid ja Frauen, und keine Mädchen". Und nach einer Weile fügt er hinzu, mehr zu sich selbst, dass er uns wohl mit seinen Töchtern verwechselt hatte, die beide ausgeflogen sind und sich nie bei ihm melden,

und die er furchtbar vermisst.

Haben wir Jesus betrogen?



図 7-1 《The gift exercise / Invitation 1: Romainmôtier》記録写真

滞在先の隣になる喫茶店オーナーのジーザスは、スイス・ジュラ山脈にある展望台まで連れてきてくれた。フランス語の会話に交じれない「わたし」は、自然と風景の方に目を取られ、遅れをとりながらジーザスとウィリマンを追いかける。二人がまるで親子のように見えた。

(撮影: 2016 年 10 月 12 日 / 新井麻弓)

*

2017 年 7 月 20 日 東京・西荻窪

販売員は、心配そうに私が手に持っているプラグを見てから、並べられている商品に目をやり、私が Google で翻訳した「アダプタ adaputa」と表示された画面を見せて、アダプターを持っていないことを伝える。数時間探し歩いた後、私は暑さと自分の買い物が失敗したという事実に疲れ果てて諦めた。私の機器と私の言葉は日本とは互換性がなく、翻訳も最後の残されたバッテリーを消費していく。しばらくしたら、充電は空になって、私は完全に人とのコミュニケーションから遮断されるだろう。

Die Verkäuferin schaut den Stecker in meiner Hand besorgt an und gibt mir mit einem Blick auf die Produkte in ihrer Auslage zu verstehen, dass sie keinen Adaptor, „adaputa“, wie mir Google translate übersetzt, in Sortiment hat. Nach ein paar Stunden

Suche gebe ich auf, erschöpft von der Hitze und meiner Erfolglosigkeit. Meine Geräte und meine Sprache sind nicht kompatibel mit Japan, und auch die Übersetzung zehrt am letzten Rest der Batterien, sie werden in einer Weile leer sein und ich von der Kommunikation gänzlich abgeschnitten.

*

2017 年 7 月 21 日 東京・西荻窪

電気店で私が購入に失敗した後、マユミは私のためにインターネットで昨日のアダプターを注文してくれた。注文した品は、今日届く予定だった。しかし、滞在中の家のインターホンのベルが上手く作動せず、配送員がここまで来たにも関わらず、手に入れることができなかった。結局私の携帯の充電は全て空になってしまったので、23 時半にマユミのスタジオまで走った。そこには、私の旅行用アダプターが適合するアメリカ式のコンセントがある。(そこには「世界に適応」と書かれている)。

Nach meinen Misserfolgen in den Elektrogeschäften hatte M. einen gestern Adapter im Internet bestellt - nur hat die Lieferung heute nicht geklappt, da die Klingel offenbar nicht funktioniert. Da alle meine Batterien leer sind, bin ich nachts um halb 12 in M.'s Studio gelaufen. Hier gibt es nämlich eine amerikanische Steckdose, für die mein Reiseadapter passt (da steht drauf „adapt to the world“).

*

2017 年 8 月 12 日、サカダン

夕方、ヤヤとの長い会話の最後に、息子のキンボが猟銃を持って現れる。彼は酔っ払っている。彼は、私たちがこのサカダン村を訪れてから初めて話しかけてきた。しかし、何もわからない。幸いドロシーがいて通訳をしてくれた。「何度も同じ質問をされているが、何も変わっていない。」と訳してくれた。彼は、「消費」しに来ている客や、ここで仕事をするための材料を探している学生や科学者のことに言及する。マユミは「変化」とは何かと彼に問う。そして、彼は何を願っているのかと。「人々が私たちのことを覚えていてくれること。ただ来て、取って、忘れてしまうのではないこと」 ヤヤは、ゲストに土地に対する責任を教えたいと言う。彼女はホスピタリティを知識の交換、相互学習のプロセスとして捉えている。キンボは、子供たちが谷や学校に行くべきではないと考えている。そのためのお金と欲が谷から上がってきて、今ではみんなが客を奪い合うようになって、近所に不和をもたらしていると。ナツ（ヒジウ）の 15 歳の娘の夢は空港で働くこと。キンボは言う：お前たちが座っているこの場所は俺の家族のものだ！お前たちはここにいてはいけない。

私たちはここにいないべきではない。だが、私たちはここにいます。

Abends, am Ende eines langen Gesprächs mit Yaya über Gastfreundschaft erscheint ihr Sohn Kimbo mit der Jagdflinte. Dies ist das erste Mal das er zu uns spricht, seit wir hier sind, und wir verstehen nichts. Zum Glück ist Dorothy da und übersetzt: "schon tausendmal wurden hier dieselben Fragen gestellt, die ihr uns stellt, und nichts hat sich geändert". Er erwähnt die Gäste, die kommen, um zu konsumieren, die Studenten und die Wissenschaftler, die hier Material für ihre Arbeit suchen. Mayumi fragt was er denn meint mit „ändern“. Und was er sich wünsche. "Dass sich die Leute sich an uns erinnern. Dass sie uns nicht einfach kommen, nehmen und vergessen." Yaya sagt, sie möchte den Gästen Verantwortung für diesen Ort lernen. Sie sieht Gastfreundschaft als Austausch von Wissen, als gegenseitiger Lernprozess. Kimbo findet, die Kinder sollten nicht ins Tal und nicht in die Schule gehen. Dass das Geld und die Gier danach vom Tal hier hoch kam, und Zwietracht in die Nachbarschaft brachte, da jetzt alle um Gäste wetteifern. Die 15-jährige Tochter von Nac möchte im Flughafen arbeiten. Kimbo sagt: dieser Ort, wo ihr sitzt, gehört meiner Familie! Ihr solltet nicht hier sein.

Wir sollten hier nicht sein.

Aber wir sind hier.

*

2017 年 8 月 21 日 群馬県中之条

午前中、これまで溜まっていた借りたもののタグ付けやものの整理、トロフィーフォトの撮影リストなどウィリマンと手分けしてつくっていたら、急に山口さんがやってきた。隣町で元々電気屋をやっていた山口さんは、いわばこのスペースの大口顧客のようなもので、冷蔵庫やガスコンロ、洗濯物干し、布団、扇風機、ランプスタンドなど、ここでの生活に欠かせないものの半分ほどを、初めの頃に一気に貸してくれた人だ。彼は、ニコニコしながら、静かに扉を開けて入ってきた。山口さんからなかなか話始めないので、「わたし」から切り出し尋ねと、「ちょっと用事でこの近くに寄ったから、どうしているかなって思ってね。」といった。「わたし」はとりあえず椅子をすすめ、ウィリマンはキッチンでお茶の準備を始めた。山口さんは、「ここら辺のお祭りも結構おもしろいよ」といって、徐に iPad を出した。この近くでは、9 月の第一土日に毎年夏祭りが開かれるらしい。山口さんは、取り出した iPad を使って、自身で撮影したお神輿の写真を見せてくれた。お茶をつくり終えて、山口さんの方へ運んできたウィリマンに、山口さんは「きっと彼女には珍しいんじゃない？」と、iPad をウィリマンの方に向ける。中之条ビエンナーレには、海外からの作家も近年は多く来ているものの、あまり地域の人が直接交流する機会は少ないようだ。「わたし」たち

の「家」にたびたびやってきてくれる人たちの中には、ウィリマンとのコミュニケーションを楽しみにやってくる人も多かった。たまに、ウィリマンだけがビエンナーレのアーティストで、「わたし」は地元の中学生で通訳ボランティアかとさえ聞かれることもあった。こういった場面では、わたしは、ウィリマンと新井、という別々の個人であったということを思い返していた。逆に言うと、最近では Willimann/Arai という第3の人物の一部であるという感覚が染み付いてきていた。最近では、起きてユニフォームに着替え（途中から寝巻きも交換を通して借用した白い T シャツと黒のパンツになったが）、シャッターを開けた瞬間から新井とウィリマンは消え、Willimann/Arai になっている。それは、每晚 1、2 時まで「わたし」たちが布団をひいて寝る直前にシャッターを閉める直前までつづいた。そして、また次の日が来る…。

山口さんは、結局 2 時間ほど滞在して、様々なお神輿の写真をウィリマンに見せながら、「わたし」にそれぞれの説明の翻訳を求めた。横目で、ウィリマンが徐々に飽きてきていることと、早く溜まった事務仕事に戻りたいといった顔をしていることに途中から察した。徐々にウィリマンのことが気になりすぎて、山口さんの話は中途半端にしか耳に入ってこなくなった。

山口さんは、「わたし」たちの出来合いキッチンを目で見て、「今夜空いているから、夕飯に連れて行ってあげるよ。じゃあ、あとで迎えにくるからね。」と言い残し、その場を去っていった。「わたし」は、感謝の言葉を発しながら、きっとウィリマンは嫌がるだろうと頭の後ろで考えた。わたしは、ウィリマンに自分たちが山口さんに夕飯に誘われたことを説明した。ウィリマンは、あからさまに嫌な顔をし、「終わらせなくちゃいけないことがこんなに残っているのに」とタグの山を指差した。サービスのリミットはどこにあるのか？ものの価値とは何か？わたしたちは、どこまで来た人を受け入れるのか？しかし、この状況は「わたし」たちが作り出したものでもある。「わたし」たちは、話し合った。

結局、「わたし」たちは、今の Willimann/Arai の役目はゲストを受け入れ続けることと考え、山口さんの誘いにのることに決めた。

山口さんは、国道沿いの地元の若いファミリー層向けイタリアンに連れて行ってくれた。わたしはなぜか、疲れた顔のウィリマンから受けるであろう Willimann/Arai に対するマイナスイメージを少しでも補うように、気が張っていた。ビジネスマンの接待とは、こういう心持なのかと想像していた。「わたし」たちは食事を食べながら、山口さんからアイススケートの話、一緒に住んでいる猫 5 匹の話をひたすら聞いた。味はほとんど覚えていない。話はだんだんと同じことの繰り返しになってきたが、山口さんもわたしが翻訳することをちょっとずつ待っていたので、わたしの下手な英語で、ウィリマンに翻訳を続けた。「わたし」にとって、自分の翻訳はひどく穴ぼこだらけの風景にしか見えなかったが、中之条の訪れてくれる地域の人たちは、シルクハットから鳩を取り出すマジシャンのように、手をたたいて、すごいすごい！と毎度褒めてきた。わたしはその賞賛を受けるたびに、騙しているような罪悪感に苛まれたことと実情を知っているウィリマンがこの状況を知って「わたし」を斜

めから見る目を想像して変な汗がでた。はじめのうちは、自分は全然英語は得意な方ではないと説明していたが、途中から面倒になりただその賞賛を受け流すようにした。わたしは、100%クリアに見えなくても、この穴が少しでも広がり、ウィリマンが話全体を想像しやすいように、あるいは、彼女の想像が誤った方向に行かないように誘導しようとした。ウィリマンは、言葉や状況が分からない・自分では何も判断できないことに対して、これまで経験したことがないストレスを感じているようだった。その怒りの矛先は、わたしに間接的に、時には直接的にも、向けられた。わたしは、自分の英語の不勉強さを呪ったが、同時に、なぜそこまで分かることに執着しなければいけないのか不思議でもあった。この疑問をウィリマンに投げかけたが、彼女はすでに自分で作った壁に向かって、エンジンフル回転で真っ直ぐと進むことしか見えていないようだった。彼女は壁を壊せない自分の車にも怒っていた。そんな彼女に、わたしは本当に真面目だなと感心しつつ、Willimann/Araiの一部として信用していたし誇りにも思っていた。わたしなら、すぐに諦めて抜けられる場所があるところまでただ並行移動するだろうか、あるいは後ろに進むか。また、多くの場合は中之条の人たちは、彼女の壁なんて見えず、彼女との時間を純粹に楽しんでいるように見えた。ウィリマンは、多くのヨーロッパ人と同じように、母国語のスイスドイツ語に加え、ドイツ語・英語・フランス語・スペイン語・イタリア語が話せるので、彼女がこれまで訪れたことのある土地で、言語の上でここまで苦労したことはなかったらしい。

ウィリマンは途中からさらに疲れた目になっていた。わたしもそれを見て、急に身体の重力を感じ始めた。翻訳があるからか、翻訳をすること自体にも疲れたのか山口さんの話は、とてつもなく時間がかかって終わりが見えなかった。わたしは、話を聞きながら、去年スイスのロマモティエでウィリマンとともに出会ったジーザスのことを思い出していた。帰ってきた後に、その話をしたら、やはりウィリマンも同じことを考えていた。

*

2017 年 8 月 23 日 群馬県中之条

誰を見ているのだろうか？誰のためにここに座っているのか？鏡の前で2時間。美容師と彼の母親が巧みな手で私たちの偽の髪の毛を全く同じ髪型にカットしながら、私たちは鏡の中のカメラを見続けている。消えるためのもう一つのステップ。ラジオは90年代のアメリカのロックミュージックを流し、メランコリックでノスタルジックだ。美容師がカメラを覆っているの、この隙にちょっと視線をずらす。はい、まだそこにいる。

私は何日も待つから追いかけて、理解せずに聞き、誤解を避けようとするか、あるいは理想的には誤解生まれることを事前に防ごうとしている。夕方、何もわからないということに、私はへとへとに疲れている。それは、自分自身をいらいらさせる焦り、自分の無力さを受け入れることができないこと、そして完全なる依存関係からきている。マユミは私を世界

へと結びつけるものであり、私の監督者であり、私の乳母です。なぜなら、私自身は未成年であり、スーパーマーケットで決定を下すことも、右ボタンを押すことすらできないからだ。

私は私自身を彼女のリズムを良くも悪くも順応させ、彼女が私に与えたもの（彼女は彼女の最善を尽くす）に感謝して受け入れ、それについて文句を言わないようにし、私の焦りを責めないようにしなければならない。

私はマユミを観察する。

彼女は目標に向かって行動はしない、彼女は常に時間を忘れ、あるいはそれを真剣に受け止めず、人々や対話によって動かせられ、出会った全ての人や物事に毎度魅了され、毎日感化されている。彼女は何時間も遅れて、いつもギリギリであり、それでもまだゆっくりと聞こうとする時間をもとうとする。彼女の好奇心は誰の評価にも考慮されない。私は彼女についてそのことを賞賛している。それは刺激的でもある。しかし、私のリアリズムと激しく衝突する。私には、明確な構造と集中と効率が同時に必要である。私は一般的には特段何事も素早くこなす人間ではないと考えているが、マユミと比較すると、私は新幹線のようなのだ。

私の中のすべてが逆らっている、一人になりたい、自分のリズムで動きたい。私のステップ、私自身のステップを踏みたい。 私たちが一緒にいるとき、少しずつ、マユミと私が互いに溶け合うのは確かだ。プライベート空間も自由時間もない。すべてが仕事の一部である。私たちは朝起きてから夜寝るまで同じ部屋で隣り合って仕事をする。私はこれまで誰ともこんなにも近くで生きたことはない。恐らくカップルの関係ですらないかもしれない。これは私のこれまでの経験の範囲を超えており、すべてのレベルにおいて非常に大きな挑戦であるが、私たちがつくったこの仕組みの中でしか成立できないだろう。

Wen schaue ich an. Für wen sitze ich hier. Zwei Stunden vor dem Spiegel, die Augen auf die Kamera im Spiegel geheftet, während der Coiffeur und seine Mutter mit geschickten Händen unsere falschen Haare zu einer identischen Frisur kürzen. Ein weiterer Schritt zum Verschwinden. Das Radio spielt amerikanische Rock- Musik aus den 90ern die mich melancholisch und nostalgisch stimmt. Jetzt, wo der Coiffeur die Kamera verdeckt, wage ich einen kurzen Kontrollblick: Ja, ich bin immer noch da.

Ich verbringe die Tage zwischen warten, hinterherlaufen, zuhören ohne zu verstehen und dem Versuch, Missverständnisse zu vermeiden oder im Idealfall ihre Entstehung im Vorfeld zu verhindern. Am Abend bin ich hundemüde und weiss nicht recht wovon. Es ist wohl meine eigene Ungeduld, die mich ermüdet, meine Unfähigkeit, das eigene Handlungsunfähigkeit zu akzeptieren, meine totale Abhängigkeit. M. ist mein Link zur

Welt, meine Aufsichtsperson, meine Nanny, denn alleine bin ich unmündig, unfähig, im Supermarkt Entscheidungen zu treffen oder auch nur schon den richtigen Knopf zu drücken.

Ich muss mich wohl oder übel ihrem Rhythmus anpassen und das dankbar annehmen, was sie mir gibt (sie gibt ihr bestes) und versuchen, mich nicht darüber zu beschweren und ihr meine Ungeduld nicht anzulasten.

Ich beobachte M.

Sie handelt nicht zielorientiert, sie vergisst ständig die Zeit, oder nimmt sie nicht ernst, lässt sich treiben von den Gesprächen und Menschen, denen wir begegnen, ist fasziniert von allem und jedem, lässt sich begeistern von Alltäglichem. Sie kommt Stunden zu spät und ist immer auf dem letzten Drücker, und hat dennoch immer Zeit zum zuhören. Ihre Neugierde wertet nicht. Ich bewundere das an ihr. Es ist inspirierend. Prallt aber heftig mit meinem Realismus, Bedürfnis nach klarer Struktur und Fokus und Effizienz zusammen. Ich empfinde mich nicht als sonderlich schnelle Person, generell, aber verglichen mit M. bin ich ein Shinkanzen.

Alles in mir sträubt sich, will alleine sein, will seinen eigenen Rhythmus gehen. Will meine Schritte, meine eigenen Schritte machen. Es ist wahr dass wir uns auflösen ineinander, Stück für Stück, M. und ich, wenn wir zusammen sind. Es gibt keinen privat space, und es gibt keine Freizeit. Alles gehört zur Arbeit, wir arbeiten von Morgen früh bis wir Abends einschlafen im selben Raum, Seite an Seite, ich glaube nicht ob ich jemals so eng mit jemandem gelebt habe. Vielleicht nicht einmal in einer Paarbeziehung. Das überschreitet meinen Erfahrungsspielraum, ist eine enorme Herausforderung auf allen Ebenen - aber erlaubt erst die Art von Arbeit, die wir machen.



図 7-2 《The gift exercise / Invitation 2: Nakanojo》記録写真

第 4 章で取り上げた《The gift exercise / Invitation 2: Nakanojo》の活動の中で、ウィリマンと「わたし」のユニフォームである長髪だったカツラを、短く切り整えてくれている中之条の地元の美容師さん。引き換えに「イングリッシュレッスンと美容室前のガーデニング」をお願いされ、実行した。

（撮影：2017 年 8 月 25 日 / ニナ・ウィリマン）

*

2019 年 9 月 1 日 台湾・台南

今日は、2015 年のプログラム以来の友人たちベンヤミンとドロシーが、台北でのレジデンスを終えて、「わたし」たちのいる台南まで電車を乗り継いで来てくれた。夕方「わたし」たちは、孔子廟で待ち合わせをして、市場周辺の食堂を回った。

彼らと別れた帰りの電車の中、ウィリマンはすこぶる機嫌が悪そうであった。「わたし」がどうしたのか尋ねると、ドロシーの態度が気に食わなかったようだ。ウィリマンは、ドロシーを女性らしい女だといった。いつも自分が特別であるために、他と常に競い合うような態度をとってくる、と。ドロシーは、香港出身であり、香港人として、そして香港返還前に生まれたことを誇りをもっている。本人曰く、近年の中国本土との緊張関係の中、他の香港人たちと同様、デモに参加するたびに、その意識が強まったという。ドロシーのもつその誇りは、確かに「特別」であるための権利を守ろうとする強い意志の現れとして、時に日常的な会話の中でも感じられることがあった。だが、ウィリマンの気に食わなかった点とそれが、被っていたのかは最後までわからなかった。

ウィリマンは、続けて、でも「何」に価値をおいて特別とするかは、人それぞれだよねと、いった。ウィリマンは、「男性中心社会のなかで女性は、生き残るためにいつも競いあいの態度をもつように幼い頃から社会の中で育ってきて、そう振舞うように身体に染み付いてしまっている。そのため、フェミニズム運動が、なかなかこれまで進んでこなかったのも、女性 1 人 1 人を引き離そうとする慣習に女性たち自身が飲み込まれていたからだ。」と話

す。

「わたし」は、リジー・ボーデンによってドキュメンタリー風にフェミニズム運動の様子を撮影されたフィクション映画『Born in Flames』（1983）を思い出していた。映画を通して主人公イザベルが、考え方や広報の仕方が少しずつ異なることで対立関係にあった各フェミニズム・アクティヴィスト・グループをまとめ、全体で社会に立ち向かっていくという内容である。映画が示唆するフェミニズムは一つの原理主義的な主義主張ではなく、常に現在進行形で変化し続ける過程であり、複数のフェミニズムだった。それは、私たちのあり方の潜在的な可能性を示唆する実践であり、さまざまなソーシャルネットワークの広がりや個人と現実のつながりを生み出す場を提供するプラットフォームでもあった。

「わたし」（たち）は、助け合わなければいけないという局面に立たされていることを、日常の些末なことに追われたり、また牧歌的な社会の中に浮遊していたりすると忘れがちだ。

スイスは、西ヨーロッパで最も女性が選挙権を得るのが遅かった国であり、非常に民主的なことを重んじる国ではあるが、長年保守的な政治が行われてきた。そのスイスが今年、国内の各主要都市で何度もフェミニズム運動として大規模なストライキとデモンストレーションが街中で行われた。同時期に国会議員選挙もあり、スイス国内史上初の最も若年者層が多く、かつ最も多くの女性候補者が選ばれた。開票結果が伝えられた日、ドロシーからベンヤミンとベンヤミンの妹と3人で写った写真が「わたし」のスマホに届いた。ベンヤミンの妹も、27歳にして比較的保守層が多いとされる都市ザンクト・ガレンから議員に選ばれた。

7.3 ユニフォームという表現

これまで3章、4章、5章にわたって、表現活動の中で、活動の主体である「わたし」の中で、表現活動の対象である相手との間に起こった「なる」という体験に着目してきた。

この6章では、ウィリマンと「わたし」の表現活動に通底する試みについて述べ、そこからさらに、それまで語られてきた「なる」体験との影響関係を探る。

ともに動く

1章1.3で述べたように、ウィリマンと「わたし」が初めてともに取り組んだ表現活動の題材は、スイスのフィークダンスであった。スイスのフォークダンスを調査していく中で、それらのダンスを構成するステップが、さまざまなスイス周辺諸国のフォークダンスのそれらと同じであり、もともとそれらを引用して、再構成をされてつくられたということを知る。そこから確固たる振り付けが始めからあったのではなく、長い時間をかけてそれぞれのフォークダンスが、互いに影響し合って、展開してきたということが見えてきた。

「わたし」たちは、この個々のフォークダンスが影響しあっていった過程から着想をえて、新たな運動を生み出す。スイスのフォークダンスから3つのステップを抜き出し、それぞれ

に2人で名前をつけた。その名前を2人の好きなタイミングで発語される度、そのステップで踊り続けるというルールをつくって遊んだ [図 7-3]。始めは、2人のリズムが微妙にずれているのだが、途中からそのタイミングが合っていき、動きが一致していった。当時とくに言葉を使った十分な対話ができなかった二人にとって、ともに動くということは、言葉を超えてつながるという面白さを体感する体験となった。



図 7-3 《Swiss gymnastics: exercise 1》記録映像抜粋

ウィリマンと初めて取り組んだ活動。フォークダンスのステップの調査から文化の流動性を考え、そこから新たなエクササイズを生み出す表現活動。

（撮影：2015 年 8 月 28 日 / Willimann/Arai）

同じ格好をする

2015 年のチューリッヒでの活動期間を終えた「わたし」とウィリマンは香港へとび、そこでもともに活動を開始する。最初の表現活動は、周りの人を巻き込んで、同じ格好することであった。「わたし」たちは、白い T シャツ、黒の長ズボン、黒い靴下、黒い運動靴を 8 着ずつ購入し、活動拠点であったスタジオの前に服を並べ、「來跟我們一起拍張照片吧 Let's take a picture together!」と書いた看板を横に置き、街ゆく人々に声をかけた。ほとんどの人々は、忙しそうに通り過ぎていったが、まれに気になって足を止め、話をきいてくれたり、逆に広東語で話しかけてきた人々がいた。そして、最終的には数組と一緒に同じ格好で写真をとることができた [図 7-6]。また、「わたし」たちは、ヨーロッパとアジアから来た同じプログラム⁶⁰の仲間たちやプログラムを組織する教員や研究者や作家たちにも声をかけて、同様に、同じ格好で写真撮影を行った。

⁶⁰ 1 章「1.3 「わたし」とウィリマン」内で述べた、「わたし」とウィリマンが参加した異文化・異分野交流共同プロジェクト(Transcultural Collaboration)。ヨーロッパとアジアから 22 人参加した。



図 7-4(左) 《How to disappear (completely): Uniformity》記録写真 01

図 7-5(右) 《How to disappear (completely): Uniformity》記録写真 02

表現活動中にて香港(左)・杭州(右)においてユニフォームを調査。

(撮影: 2015 年 10 月 / 新井麻弓 (図 7-4)、ニナ・ウィリマン (図 7-5))



図 7-6 《How to disappear (completely): Uniformity / Practice 2》記録写真

ユニフォームの調査の一環として、「わたし」たちと同じ装いを用意し、通りかかりの関心を持った地元の人々に着てもらい一緒に写真を撮っていった。(撮影: 2015 年 10 月 10 日 / Willimann/Arai)

ユニフォーム

「わたし」とウィリマンは、表現活動を通し、2 人の間にある言語、教育、生活環境、知

識、人種、宗教、身体的特徴、年齢、専門分野、出身地といったさまざまな差異をみつけ、それにより「わたし」とウィリマンは違うという分断の構えが、互いの中にできていった。しかし、同時に、ともに動いたり、同じ格好をしたりすることによって、2人の間につながりが生み出され、それがこの分断の構えを乗り越えることに結びついていくと気づいていった。「わたし」たちは、こういった活動を、ユニ Uni（1つの、唯一の）・フォーム form(形)を表現しようとする試みだと自覚していったのだ。

また、肌の色、顔の形、目の大きさ、彫りの深さ、鼻の高さなど身体的特徴を含め、「違うもの」にあえて同じものを被せる、この装いも「ユニフォーム」とよび始めた。以来、それぞれが「ウィリマン」であり、「新井」であると表明されるべきだと判断したプロジェクト⁶¹を除き、「わたし」たちは、このユニフォームを着用し、活動を行っている。装いとしてのユニフォームの種類は、活動と共に徐々に増えていき、同じヘアスタイルをしたカットラ、白いTシャツ、グレーのトレーナー（冬用）、紺色のウィンドブレーカー（冬用）、黒の長ズボン・ハーフパンツ（夏用）、黒い靴下、黒い運動靴、大きな麦わら帽などがあり、季節や天候によって組み合わせを替え替えている。3章で述べた通り、ある特定の人に限定的に製作したものではなく、すべて大量生産品を選択している。

「わたし」たちは、この同じ装いを指すユニフォームを着用していない時も、表現活動を通して絶えず「ユニフォーム」を表現していると考える。ユニフォームの表現は、「わたし」とウィリマンの間にある分断の構えを乗り越え、つながりを見つけようとする試みである。

ユニフォームの表現がもつ3つの状態

ウィリマンと「わたし」は、このユニフォームの表現を通して、「ユニフォーム」には以下の3つの状態の幅があるという気づきをえた。

- [1] 同じもの
- [2] 第3の存在
- [3] 普遍的 universal なもの

「[1] 同じもの」とは、ウィリマンでありつつ「わたし」でもあるものである。

例えば、装いとしてのユニフォームを身につけることによって、ウィリマンと「わたし」の視覚的な差異は減り、共通点が増える。そうすることで、参加者や鑑賞者といった相手は、そこに1つの型を見つけ、ユニフォームは彼らに対して、1つの組で活動している2人という認識を助長させる働きをする。また、2人は、ふとした瞬間に互いを見て、瞬間的に自

⁶¹ 表現活動《Swiss Step Aerobics》(Willimann/Arai, 2018-)および、第5章で取り上げた活動《The gift exercise / Invitation 4.2 : Taroko National Park》。

身を鏡で見ているような感覚に陥る。この効果は、「わたし」たちに視覚的一体感を与える。つまり、ユニフォームは、ウィリマンと「わたし」以外の他者に対する主張としてだけではなく、「わたし」たち自身に、組んで活動しているという自覚を促す装置でもある。

次に、「[2] 第3の存在」とは、ある役割に徹して、ウィリマンでも「わたし」にも属さない何者かである。「わたし」たちは、自分たちの服から着替えるという行為を通して、新たな人物になるという感覚をもつ。とりわけ、カツラは物理的に地毛を覆い隠すため、「別人」になるという意識を強めている。この「第3の存在」とは、その時々周囲の環境や相手の願望や相手自身と同一化しながら、絶えず移ろい続ける有り様である。そのため、着用するウィリマンと「わたし」にとっては、ユニフォームは存在の不確定さを自覚させる装置である。私たちは、このユニフォームをきて第3の存在となった状態を、Willimann/Arai ではなく、willimannarai と呼ぶ。

最後に、「[3] 普遍的なもの」とは、「わたし」たちが自分自身を立ち返ったときに共通項として立ちあらわれる人間なるものである。太極拳の太極図を参考にモノトーンの装いを選び、生地素材も、できるだけ時・場所・場合といったシーンの選びにくいものを採用した。[2]に関しては、[1]のようなウィリマンと「わたし」自身への自戒の意味は特になく、主に他者への主張としての意味が強い。

この3つの異なる状態は、ある1つの表現活動期間中であつたとしても、時と場合によって、その都度変化し、時に複数の状態が重なりあう。

以上3つが、ユニフォームの表現がもつウィリマンと「わたし」自身への、そして参加者や鑑賞者といった相手への状態と主張である。表現活動中に「わたし」たちは、ユニフォームの表現することで、自覚的にも、そして無自覚にもそれぞれの状態を絶えず揺らぎながら変化している。

ユニフォームの（不）可能性

「わたし」たちは、装いとしてのユニフォームを着用し活動しながら、ふとした瞬間に鏡に写り込んだ2人を目撃し、その2つの像に、ある種の異様さを感じることがある。それは、自分たちが表現活動行ってきた中で、自分たちの中に構築してきたユニフォームの像と大きくずれたものが映り込んでいるからである。つまり、全く持って似ても似つかない2つの像なのである。こういった瞬間に、2人は、たびたび私たちは希求しているユニフォームとは、視覚情報の一致ではないということを、改めて思い知らされる。

そもそも「普遍的なもの」とは、体現できるものだろうか。「普遍的なもの」には、まず個の世界を前提とすることをやめる必要がある。それは、ユニフォームのいずれの状態も同様である。「わたし」たちは、客観的に外から「わたし」たちを眺めることで判断することをやめ、実践の中でともに活動し、行為し続けることで、ようやくユニフォームな状態を体得しようと試みる。ジュディス・バトラーによれば、「行為は、行為に先立って存在すると考えられる主体が行うものではない[……] 行為の背後にはなにも存在しない [……] 行為

がすべてである[……]ジェンダー表現の背後にジェンダー・アイデンティティは存在しない[……]アイデンティティは、その結果だと考えられている「表出」によってまさにパフォーマンスに構成されるものである」⁶²。

このバトラーの主張は、ウィリマンと「わたし」たちが、表現活動のなかで手に入れてきた感覚に近いものだと感じている。先の3つの事例のように、乗り越えは、自身の身が危険を感じたり、立場が危ぶまれるような不安定さをもったりするような状況で、無我夢中で目の前の実践をただただ取り組むことで起こっている。そのため、またその時期がすぎると、互いに分断の構えに戻ってしまう。ユニフォームを保っておくことは非常に難しい。しかし、ユニフォームを初めから不可能だとあきらめるのではなく、その可能性を希求する欲望を、毎回行為する中で再構成していくことに意義があるのではないだろうか。ユニフォームに近づいていくには、繰り返し表現し続ける他ないのである。



図 7-7 《How to disappear (completely)》: Uniformity / Practice 3》記録映像抜粋

ユニフォームであるカツラを、お互いが相手の動きを観察し、模倣しながら、相手の髪を切っていった。

（撮影：2017年7月26日 / Willimann/Arai）

7.4 各表現活動におけるユニフォームの表現

この節では、これまで3章、4章、5章で取り上げてきた各表現活動において、「わたし」とウィリマンがどのような「つながれなさ」を感じていったのか、それに対してどのようにユニフォームを表現していったかについて触れる。

⁶² バトラー、ジュディス 『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 竹村和子訳、東京：青土社、2018年。

7.4.1 実践1 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》の場合

ウィリマンと「わたし」のつながれなさ ― 言語

2015年8月27日、チューリッヒ。ウィリマンと初めてともに表現活動をはじめた頃、彼女から突然「言語的に優位で支配的な感じがするから、お互いの公平な立場を保つために自分の母国語ではない英語で話したい」と提案された。「わたし」は、それに対し、「自分は不公平だと感じていなかった」と伝えると、彼女は「あなたが良くて、私が嫌だ」と言われた。そこで「わたし」は初めて、話せる者のもつ優位性について、気づかされた。その優位性は、意図せず優位な立場に立つ者に対して、内省を促し、居心地の悪い思いをさせる可能性をもちうる。それはその後、「わたし」自身が台湾での活動において、特にヤヤとの日本語のコミュニケーションにおいて、実感していく感情でもあった。しかし、この時点ではまだウィリマンの意図を完全には掴めていなかった「わたし」は、忘れかけの中途半端なドイツ語を使っていたこと自体を、彼女に詫びた。彼女からは、「詫びる必要はないから、英語で話そう」と言われた。

当時、私は、2年弱のオーストリア留学から帰国し、まだ半年ほどしかたっていなかった。そのため、英語で話そうとすると、留学先で話していたドイツ語が出てきてしまって、頭の中で言葉を整理して話すことに時間がかかった。しかし、留学初期のほとんど他者と会話ができなかった状況と比較し、当時「わたし」はウィリマンを含めた周囲の人々とも、ある程度は対話ができていると勘違いしており、そこまで苦勞を感じていなかった。

一方、ウィリマンは、多くのヨーロッパ人と同様、母国語である(スイス)ドイツ語以外に、英語、フランス語、スペイン語とイタリア語を少々話す。さらに、彼女は舞台やダンスの仕事で、それまで西ヨーロッパ系、アフリカ系、南アメリカ系と、異なるエスニシティの人々と組んで仕事してきていた経験があった。しかし、ここまで言語の上で苦勞したことはなかったようだった。そのため、ウィリマンは特に、この状態で、2人の納得した形でともに表現活動を見出すにはどうすればいいのかと、躍起になっていた。その頃ウィリマンの2人間のコミュニケーションにおける言葉の葛藤について、香港での活動期間について、2人で当時を思い出しながら第三者に説明する際に、ウィリマンからたびたび聞かされ、その度に、そんなに苦勞していたのかと「わたし」は驚かされる。そういったことを踏まえても、ウィリマンと「わたし」は言語による深い分断の構えをもっていたことが伺える。

香港での活動期間以降、「わたし」は、ウィリマンが話す言葉を繰り返し聞いていく中で、知らなかった単語を使い方やそれが指し示す意味とともに覚えていった。それらの言葉、時にウィリマンが間違っ使用したり、「わたし」が誤って覚えたりすることも多々ある。また、ウィリマンは、「わたし」がどんな言葉を知っており、どんな言葉を知らないのか、徐々に把握していった。「わたし」が使う間違っ英語の文法を把握していくことで、「わたし」がその文法を使う際に、どのようなことを(正しくは)言わんとしているのか掴んでいった。

また、英語を基本共通言語として話すが、ウィリマンもドイツ語から翻訳しにくい単語に関しては、ドイツ語のまま使用した。こうして、「わたし」とウィリマンは、表現活動とともに続けていく中で、徐々に互いの中でだけで通じ合える言葉や文法を開発していった。この道筋は、通常の言語習得としては、誤った情報獲得の手法として、避けるべき営みだろう。しかし、正しい言語を知ることを目的としていない「わたし」たちにとって、逆にこの誤った理解は、時に新たな予期しない着想をえることがあり、次の表現活動を呼んでくるきっかけとなっていた。

こうした互いの間で生み出されていった言葉の約束事は、改めて話し合いのもと決めていったのではなく、会話の中で自然と、離れていた点と点がむすばれていき、線となって、つながっていき、そこで育って、2人の間で根付いていった。

「分かる」ではなく、「つながる」へ

以上のような状態で、言葉をつかった深い議論ができなかった「わたし」たちは、表現活動を進めていくために代わりの手立てを探っていった。結果二人は、「互いが直観で思いついたことを片端から一緒にやってみる」という手法を見つけていった。これは、これまで何の疑問も持たずに進めてきた「制作」方法の順序を単に変えたものであった。つまり、「行動を起こす前に、まず頭で考えて分かってしようとする」という段階を飛ばしたものである。ウィリマンも「わたし」も、初めのうちは、とくに個人ではなく、2人で行うにあたって、まず互いの間で理解し合わなければいけないと思い込んでいた。

私は、この「まず頭で考えて分かってしようとする」思考法を、従来の学術的な態度の現れだとも考える。美術の分野においても、やはりアカデミズムの世界では、基本として考えることが優先される。「わたし」も、美術予備校や美術大学において、まずクロッキー帳で構図やアイディアを一度まとめてから、「本番」の画用紙やキャンバスへ向かうようにと、身体に染みつくほど教えられてきた。しかし、ここでウィリマンと至った答えは、その「分かる」というステップを一旦置いておくことであった。

この代わりの手法を見つけてから、2人での表現活動も話し合いも、非常に進めやすいものとなっていた。どちらかの直感に従って、ともに行動をし、その後その経験をもとに、話しあいが行われ、それをもとに、次の行動が自然と導き出されていくように、行為と話し合いが繰り返されることによって、表現活動が進んでいったのである。話し合いに関しても、共通の経験を土台とするため、会話が具体性をもっていったことが、功を奏した。その結果徐々に、これまでうまく対話ができなかったのは、抽象的なことを話し合うための語彙や共通の土台が足りなかったためだったということが見出せていった。

また、経験をもとに行われる話し合いは、ともに経験した内容に対して、明確な理由を考え是非をつけようとするのではなく、次の行動へと移していくことを優先し、理性ではなく互いの感性をつなげていくことを行った。というのも、こういった活動を繰り返していく中で、二人とも、活動を意味付ける理由や意義は、行為を繰り返していく中で、自ずと実践す

る主体が手に入れていくものだと気づいていったからである。

「同じもの」としてのユニフォームの表現 — 交互に海に立つ

3章で取り上げた《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》の中におけるユニフォームの表現は、2人が同じユニフォームを装い、後ろ向きで立ち、交代しながら繰り返すということであった[図7-8]。「わたし」たちは、互いに、自らが活動の主体となって海の中に立ち続けることと、自分が既に経験した行為を鑑賞者となって眺めることの2種類の行為を行ったり来たりした。同じ格好をした後ろ向きの相手を眺めることは、その相手に自分自身を重ねて見ていくにつながっていった。活動後に、このことを「わたし」は次の様にノートに記した。

ウィリマンは、波が大きくなるごとに、左右にゆれるのではなく、波と一緒に上下に少しジャンプをしているように見える。高い波がやってくる。いまだ！と思ったタイミングで、軽く上下に飛ぶ。また、穏やかな波がいくつか続く。そして、また強い波がくる。軽く飛んでも避けきれないほど大きな波だった。顔のほうまで飛沫がくる。倒れそうになる。すぐに体勢をととのえながら、顔にかかった飛沫を拭う。塩の匂いが喉の奥をつんと刺す。あたりはだいぶ薄暗くなってきて、身体の輪郭がぼやけている。目の前で波間に揺れている白いTシャツと黒のパンツを着た身体を確かに後ろから見ながら、「わたし」は、その身体の目の前に広がる波を見ていた。ただ、身体に波のエネルギーを受けてた感覚があり、後ろに押される感覚と今日の前の波の動きのリズムが連動していく。水が腰までつかっていく。ウィリマンなのか「わたし」なのか、いまはどちらでもいいような気がしてきた。また風が強くなっている。ほんの少し肌寒い。

「わたし」とウィリマンは、浜に座る行為と海に立つ行為を行き来することで、鑑賞者と実践主体という役割を行き来した。そこで、片方が座っている間、もう片方が海に立っている行為を長時間眺めることにより、座っている片方がだんだんと立っているもう片方に自分自身を重ね合わせていき、まるで自分自身が海に立っているような感覚をえるという体験が起こった。それは、実践主体がウィリマンでもあり、「わたし」でもあるものとなっていくことであり、2人の間にあった分断の構えを乗り越えることに繋がった。つまり、3章の表現活動では、単に同じ格好としてのユニフォームだけではなく、2人が「同じもの」としてのユニフォームを表現することでもあった。



図7-8 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録写真

実施日、17時35分頃。海の中で立つウィリマンとビデオカメラの横に座り、ウィリマンとその周囲の変化を観察する「わたし」。（撮影: 2015年10月28日 / カティア・グレース）

7.4.2 実践2 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》の場合

ウィリマンと「わたし」のつながれなさ — 価値観

2017年8月21日、群馬県中之条。ウィリマンは、「わたし」に対して感じていたことを、その日、自身のノートに次のように綴った。

「彼女は目標に向かって行動はしない、彼女は常に時間を忘れ、あるいはそれを真剣に受け止めず、人々や対話によって動かせられ、出会った全ての人や物事に毎度魅了され、毎日感化されている。彼女は何時間も遅れて、いつもギリギリであり、それでもまだゆっくりと聞こうとする時間をもとうとする。彼女の好奇心は誰の評価にも考慮されない。私は彼女についてそのことを賞賛している。それは刺激的でもある。しかし、私のリアリズムと激しく衝突する。私には、明確な構造と集中と効率が同時に必要である。私は一般的には特段何事も素早くこなす人間ではないと考えているが、マユミと比較すると、私は新幹線のようなものだ。⁶³」

ウィリマンにとっては、物事を進めるにあたって「明確な構造や効率」に重きを置かれている。一方、（ウィリマンからすると、）「わたし」は、目標を持たずにその都度、衝動的に動き、反応し続け、効率を無視するという姿勢がある。これを読んで、私は非常にもっともな観察と記述だと驚いた。

⁶³ Nina Willimann. “Zettel 82: Nakanojo, 21. 8. 2017” *Fragmente 2015–2018*. Zurich, 2018. 本論文筆者(新井麻弓)本人による邦訳。

一方、「わたし」は、同日にウィリマンのことを、次のように当時書いている。

山口さんは、結局2時間ほど滞在して、様々なお神輿の写真をウィリマンに見せながら、「わたし」にそれぞれの説明の翻訳を求めた。横目で、ウィリマンが徐々に飽きてきていることと、早く溜まった事務仕事に戻りたいといった顔をしていることに途中から察した。徐々にウィリマンのことが気になりすぎて、山口さんの話は中途半端にしか耳に入ってこなくなった。

山口さんは、「わたし」たちの出来合いキッチンを見、横目で見て、「今夜空いているから、夕飯に連れて行ってあげるよ。じゃあ、あとで迎えにくるからね。」と言いきり、その場を去っていった。「わたし」は、感謝の言葉を発しながら、きっとウィリマンは嫌がるだろうと頭の後ろで考えた。わたしは、ウィリマンに自分たちが山口さんに夕飯に誘われたことを説明した。ウィリマンは、あからさまに嫌な顔をし、「終わらせなくちゃいけないことがこんなに残っているのに」と（借りたものに付けなければいけない）タグの山を指差した。サービスのリミットはどこにあるのか？ものの価値とは何か？わたしたちは、どこまで来た人を受け入れるのか？

「わたし」は、借りたものにタグやシールをつけ、誰からいつ借りたのか、わからなくならないようにするための体系化に必要な仕事と参加者との直接的なやりとりとの、どのようなバランスをもって、表現活動を動かすべきなのか、迷っていた。そして、「わたし」は後者を優先すべきだとし、ウィリマンは前者を優先すべきだとし、「わたし」たちはこの違いによって、それぞれの中で葛藤し、また多くの口喧嘩もした。ウィリマンは、この葛藤について自身のノートに次のように書き記していた。

「2017年9月12日 群馬県中之条

私たちの協働（ここでは、常に一緒にいること）と私たちの「ゲスト」との交換の両方に限界を感じている。もはや私は性格と発言の欠如に我慢できず、自分の服、髪、言葉に憧れ、自分の後ろで閉めることができるドアに憧れる。

Ich spüre eine Grenze, sowohl in unserer Zusammenarbeit (das ständige Zusammen-sein) als auch im Austausch mit unseren „Gästen“. Ich ertrage ich meine Charakter- und Sprachlosigkeit nicht mehr. Ich sehne mich nach meinen Kleidern, nach meinen Haaren und nach meiner Sprache, ich wünsche mir sehnlichst eine Tür, die ich schliessen kann hinter mir.]

しかし、「わたし」もウィリマンも結局は、表現活動をうまく進めていくためにより必要な活動をと考えた結果であり、目的は同じであった。つまり、「わたし」は、参加者とのやりとりを優先することによって、より多くの参加者が集まるきっかけづくりになると考えた。一方、ウィリマンは、活動を体系化していくことで、より効率的に借りるものを集め、

より多く人々と交換活動ができると考えたのだ。つまり、「わたし」たちは、お互いに何を優先するかという価値観の違いにより、2人の間に分断の構えをもっていった。

とはいえ、お互いに譲り合わず、しかし互いに折り合いをつけて進まなければいけないとわかっている「わたし」たちは、互いが優先すべきだと思う活動と互いの長所を生かし、緩やかな分業が自然と行われていった。「わたし」は主に中之条の住民とのやりとりを主導し、ウィリマンはタグづけやシールづけ、借りたものをリスト化する作業などを主導していったのである。

「第3の存在」としてのユニフォームの表現 — トロフィーフォト

一方、その中で「わたし」たちが行った主なユニフォームの表現は、同じ格好をして、真剣な顔で、ポーズを取り、借りてきたものと共に写真を撮るということであった。この写真撮影を、「わたし」たちはトロフィーフォトと呼んだ [図 7-9]。

このトロフィーフォトの撮影過程は、この中之条の表現活動の中でも、特にウィリマンと「わたし」がともに表現しているという意識を強めるものであった。「わたし」がカメラを主に担当し、ウィリマンがポージングを主に担当するという互いの得意分野を生かした分業があるものの、互いがそのカメラとポージングに撮影の間足並みを揃えて従わなければ、撮影ができないためである。また、撮影した写真を印刷し見返すことで、2人に一対で活動しているという認識を自分たちの中で強めさせていった。

さらに、「わたし」たちは、写真の中で2人が独特なポージングや顔の表情をしていることにより、普段のウィリマンや「わたし」とは別人になっているように感じた。「わたし」たちは、トロフィーフォトを通して、疲れや面倒さを感じている普段の自分から切り離された、「第3の存在」を表現していたのである。ウィリマンは、中之条から神奈川の私の自宅に引き上げた後、中之条での活動を振り返りながら、次のことを自身のノートに記していた。

「2017年9月20日 神奈川県川崎市

芸術に生産物は必要か？そして、何故あなたはまだ視聴者が必要なのか？ Mark Terkessidis は、コラボレーションを通して生まれる第三者の存在について語る。この3人目の人物は自分の殻を破り開けて、逃げ去っていき、私たちは観客として驚きながら、その場に残される。」

「わたし」たちは、この「第3の存在」としてのユニフォームを表現し、「わたし」たち自身で、その姿を見返すことにより、ともに「第3の存在」になるという自覚を持っていき、「わたし」とウィリマンの間につながりを生み出していったのである。そうすることで、毎朝「家」のシャッターを開ける度に、倦怠感と共に「今日も中之条の住民たちを招き入れるぞ」という信念と、招くことから逃れようのない状況を2人で共有していったのだ。そして、

本来ならやりたくない、あるいは苦手なことに対しても、積極的に身体を反応させ、動くことができ、この表現活動は回っていった。結果的に、ウィリマンと「わたし」の間にあった分断の構えを乗り越えることにつながった。



図 7-9 《The gift exercise / Invitation 2: Nakanojo》記録写真

交換として（貸して）もらったバーベキューに使う炭と共にトロフィーフォトを撮影する様子。

（撮影：2017 年 9 月 12 日 / 松尾宇人）

7.4.3 実践3 《The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park》の場合

ウィリマンと「わたし」のつながれなさ ― 歴史

2017年8月4日、台湾・花蓮県太魯閣国立公園サカダン

昨夜、ヒジウヤヤヤユリは、「わたし」、ウィリマン、ドロシー、ベンヤミン、エヴァを集め、日も完全に暮れ、家の外でヘッドライトと懐中電灯を照らしながらお祈りをした後、戦時中の古い写真を複写したアルバムや誰かが手書きでまとめた当時の地図などを見せた。それらは、全て日本軍によって太魯閣国立公園一帯を侵略していった際の資料だった。彼女らは、日本が占領時代にしたタロコ族に対するひどい仕打ちに対して話す。ウィリマンやドロシーやベンヤミン、エヴァも真剣にその話に耳を傾け、誰かわからないが時々声にならないような音で低く短くうめいていた。「わたし」は、その場で一人、日本人として申し訳さこの場から消えたいという気持ちでいっぱいになり、声を出さずに身体をできるだけ縮こませた。一方で、反射的に心の中で「日本兵士も全員がやりたくてこの戦争に参加していたわけではなくて、ただ1つの駒だっただろうに」とどこか写真の中に映る日本人兵士をかばっていた。この感情には、自分自身非常に戸惑った。普段ナショナリズムには意識的にも無意識的にも批判的な自分のつもりであったが、これでは

どこかでやはり自分もそこに加担しているのではないかと疑った。この気持ちは、とりあえず自分の内側に留めて、タロコの人たちやウィリマンや他の仲間たちには隠した。だが、隠しているうちに、みんなを裏切っているような気になり、強い後ろめたさを感じ始めた。

夜、ウィリマンにこの気持ちを正直に打ち明けた。するとウィリマンは、「私もそういう気持ちを持って、葛藤することも時にある」と言って、そっぽを向いて寝てしまった。正直、「わたし」は救われたと思ったが、次の瞬間、自分に対する恐ろしさも湧いた。でも一体この感情はどこからくるのだろうと考えた。写真に写っていた小さな日本兵。上半身くらいの大きさはある銃を肩に背負って、険しい山の幅 50 cm ほどの狭い崖道を列になって進む。

「わたし」は、2017年に台湾でウィリマンとともに表現活動を始め、日本統治時代に遺された様々な跡を目の当たりにしていく中で、日本人として罪悪感を感じるとともに、周りの人々と距離を置き、自らつながれなさを築いていった。

一方、ウィリマンもオランダやスペインによる台湾における統治時代の歴史を筆頭に、清や日本による統治時代の歴史、そしてタロコの人々のキリスト教の信仰の歴史を、タロコや漢族系台湾人の人々から聞いていく中で、ヨーロッパの植民地主義による侵略の歴史と重ねていった。それによって、徐々に自分自身を周りから切り離されたもの感じるようになっていった。以下は、当時ウィリマンによって書かれた気づきの交換録である。

「2017年8月9日、サカダン[...]3回目の山登り。息切れは少ないが、ザックの重さに疲れを感じる。うどんと、谷から持つことになったカメラ、たっぷりの水と4日間の着替え。ヒジウの家族全員と一緒に登る。途中で他の年配の村人に会う。みんなかなりの荷物を背負っているが、道中朝早くから酒を飲んでいる。

書くことは難しいし、時間が経ってもさほど簡単にはならない。自分の立場はそれほど明確ではなく、そこに大した問題はない。自分の「自発的」な衝動がイメージや偏見で墮落し、先入観にとらわれているような気がして、自分の直感を信用することができないでいる。ここは危険だ。毒蛇がいるし、どこにでも動物がいるし、壁にはゴキブリがいる。

私が、自分たちに対する彼らのもてなしの心を理解できないのは、自分自身を信じられないということが受け入れられないでいるからだ。私は何度も確認しなければならないように感じる。自分の指や足元を確認して、失敗をしないように、口の中を確認して、無謀なことを言わないように。抑圧のシステムとそのメカニズムを再現するような行動をしないようにと。

それなのに、避けられない。私はこのシステムの一部であり、私自身がメカニズムであり、私がここにいるのは、私を勝利する側に位置づけるこのシステムのおかげである。私

は私の足を動かす余裕のある非常口側の飛行機の席に座っている。⁶⁴」

「わたし」とウィリマンは、それぞれが、「自分自身」の歴史を目の当たりにすることで、ウィリマンと「わたし」という二者間だけではなく周囲の人々も含め、つながりを見つけれなくなっていくた。

「普遍的なもの」としてのユニフォームの表現 ― ともに地図をつくる

そこで、「わたし」たちは、タロコの文化や歴史そのものについて調査するのではなく、タロコや台湾全体の歴史を通して、自分自身（の歴史）と向き合うことにした。

「わたし」たちは、ヤヤやヒジウ、ヒジウの家族とともに、ノートの上で、ドローイング、漢字、わずかな日本語と英語の単語の混ざった共通言語を使い、彼らの歴史や文化を彼ら自身に語ってもらい、逆に「わたし」たちの歴史や文化を「わたし」たち自身で彼らに語り、そこに見出される重なる歴史について話しあい、共有していった。その対話の痕跡で「わたし」たちは、「地図」をつくった⁶⁵[図 7-10、図 7-11]。作り終えた後、「わたし」たちはその地図を眺め直すことで、そこで語られた互いの歴史や文化と自分自身の歴史が、お互いに地と図の関係にあることに気づいた。それにより、単に「わたし」とウィリマンが、ともに台湾に対して植民地支配をしていた地域から来た植民地主義の後継者であるという 2 人の間の共通項だけではなく、ヤヤやヒジウ、タロコの人々と「わたし」たちが、巻き込まれ、背負っている枠組みを超えて、ともに同じ時を生きているものという、つながりを見出すことができた。それは、結果的にウィリマンと「わたし」の間にあった分断の構えを乗り越えることにもなり、また「普遍的なもの」としてのユニフォームの表現となった。

⁶⁴ Nina Willimann. “Zettel 78: Sakadang, 9.8.2017” *Fragmente 2015–2018*. Zurich, 2018. 本論文筆者(新井麻弓)本人による邦訳。

⁶⁵ この地図は、《The gift exercise / Invitation 4.1: Sakadang/Datong》として発表。主に台北など都市から観客をよび、サカダンへのハイキングツアーをタロコの人々とともに開催した。観客は、おもに先住民社会に関心があっても普段関わる機会が少ない漢族系台湾人だった。道中配布した地図を通して、彼らとタロコの人々や「わたし」たちと、対話が生まれていった。



図 7-10 《The gift exercise / Invitation 4.1: Sakadang/Datong》閉じた状態のマップ

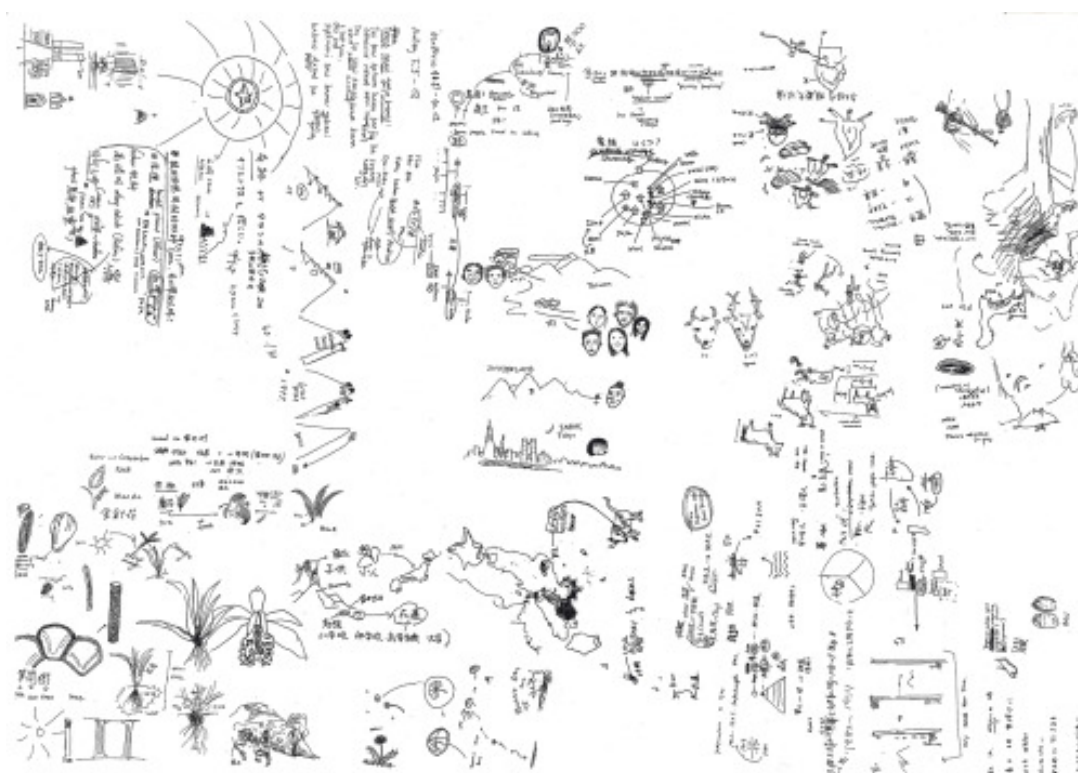


図 7-11 《The gift exercise / Invitation 4.1: Sakadang/Datong》開いた状態のマップ

図 7-10（上）、図 7-11（下） 5章で取り上げた台湾における表現活動のシリーズ初年度(2017)に行った活動《The gift exercise / Invitation 4.1: Sakadang/Datong》においてつくられたマップ。「わたし」たちをホストしてくれたタロコの人々は、ドローイングを主な共通言語とし、自分たちの歴史や生活に関する対話を行い、その痕跡を組み合わせでつくった。（製作時期: 2017 年 8 月）

7.5 ユニフォームの表現と「なる」の体験の関係性

この節では、これまで見てきた3章、4章、5章に取り上げられたそれぞれの「なる」体験とユニフォームの表現の影響関係を探っていききたい。

7.5.1 実践1 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》の場合

3章の香港の清水湾での事例の場合、交互に海に立つというユニフォームの表現によって、表現活動の対象であった清水湾に何かしらの変化があったかどうかは、判断できかねるため、ここでは一旦置いておく。一方、「わたし」とウィリマンは、互いが、表現活動の主体でありながら、浜辺で互いの海の中に立つ行為を観察することにより、表現活動の観賞者となった。つまり、鑑賞者と実践主体という両方の役割を行き来した。6.3.1で述べたように、交互に海に立つというユニフォームの表現によって、ウィリマンと「わたし」は分断の構えを乗り越えた。それにより、2人は浜に座っている間も、まるで海に立っているかのような感覚をもち、実践主体として表現対象の相手である海と応答を続け、より長い間、表現活動の相手の海を考え、真摯に向き合うことができた。つまり、ユニフォームの表現は、3章で述べた「なる」の体験を起きる後押しする形となったといえる。

また、鑑賞者となったウィリマンや「わたし」は、互いを眺めることで、自分自身を海、空、山という自然に囲まれた中に立ち続ける人間なるものと認めることがじっくりとできた。それにより、その後、私たちが、自然と人間がつながっている構えとしてとらえた香港の構えと重なる体験の中で、自分自身をその「自然と人間」の構図の中に埋め込むことができた。

7.5.2 実践2 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》の場合

4章の中之条での事例の場合、装いとしてのユニフォームやトロフィーフォトというユニフォームの表現は、表現活動の対象であった中之条の住民にとって、いくつかの効果をもって働いた。

はじめは、「わたし」たちがどんな場にも馴染めると思い、着ていたユニフォームが、中之条の住民にとっては、「わたし」たちを印象付けるための役割となっていた。街中で日中「わたし」たちが歩いていると、数日後活動拠点にいる「わたし」たちに、「こないだツムジの前の通りを歩いていたよね」などと声をかけられることが、多くなっていった。馴染むどころか、他の明確な差別化をうむ効果をよび、より早く住民たちに覚えてもらいやすくなった。

そして、交換活動を開始して1週間ほど経った頃、まずは「わたし」たちが借りたものとともにポーズをとって写真撮影をする様子を外から眺めていた住民たちの中で、「面白そうなので自分も一緒にはいりたい」と気軽に声をかけ、撮影に参加する者が現れ始めた[図7-

12]。他には、「わたし」たちと同じような白Tシャツに黒いパンツ姿で、交換の場に遊びに来る者も現れ始めた。さらに、そういった様子が記録された写真を見て、「楽しそうだから、わたしも」「あの人がやるなら、私も」といったように、さらに新たな人々が同じ様に写真と一緒に入ることを希望したり、同じ装いとしてのユニフォームで遊びに来たりと、交換活動だけではなくトロフィーフォトと通したユニフォームの表現にも参加する人々が徐々に増えていった。「わたし」たちが活動前に想定していたことは、住民たちとの交換が続いていくことのみであったため、こういった動きは、すでに「わたし」たちの想定を超えたものであった。

また、4章で述べたように、活動期間後半「わたし」たちが去ることにより、活動が中断され終了することになりかけたが、積極的に交換活動のみならず、ユニフォームの表現に参加してきた中之条の住民たちが、「わたし」たちに代わって、ユニフォームを着て新たに表現活動の主体となって新たなゲストを招き続けていくことになった。彼らは、単にゲストを招き入れるだけではなく、新たな交換が行われた際には、「わたし」たちがやっていたようにポーズをとり、真剣な表情で、借りたものともにトロフィーフォトを撮り続けた[図 7-13]。その写真からは、「わたし」がトロフィーフォトを撮影した時に感じた様に、彼らも何者かになっているようだった。彼らが、トロフィーフォトという活動で、willimannarai になることを、遊びのように楽しみながら、行なっていた。

初めはウィリマンと「わたし」の間にあった分断の構えを乗り越えるためのユニフォームの表現が、表現活動の対象であった中之条の住民たちに対して、「わたし」たちを覚えやすくさせたり、新たな対象を惹きつけたりする装置としての役目をはたしていったのだ。



図 7-12 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》トロフィーフォト（交換 No.48/
交換サービス「タオルとコーヒー 毎日お茶がコーヒーをもらう」）

（撮影：2017年9月4日 / Willimann/Arai）



図 7-13 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》トロフィーフォト（交換 No.75/

交換サービス「二人が次の展示を成功させるよう願う」）

（撮影：2017 年 9 月 18 日 / 村上久美子・瀬山康敬）

7.5.3 実践3 《The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park》の場合

5章の台湾における事例の場合、地図をつくるというユニフォームの表現は、活動に参加したヒジウやヤヤやヒジウの家族たちに、結果的に自分たち自身を振り返る場となっていたと同時に、「わたし」たち自身を信用できるようになるための過程にもなった。それは、ヤヤとヒジウが「わたし」たちの2017年の山の上のサカダン村での滞在最終日によんで、今回の表現活動・「わたし」たちの滞在を通してともに経験したことについて話してくれたときに知った。

時折ヒジウが英単語で通訳の補助をしてくれながら、ヤヤは、涙目で「わたし」たちに話しかけた。はじめは、日本人が自分の家にやってくると聞いて、すごくこわかったこと。親から幼い頃に聞いていた、この村で起こった日本人によるタロコに人々に対する仕打ちを思い出していたということ。でも、実際に会って、話してみたら、想像とちがって、心の通じ合える人間だったということ。そして、この時代に生きて、会えてよかったということ話した。ヒジウは、「わたし」たちの滞在によって、5章で述べたように、自分自身の置かれている状況や、自分がタロコの人間の一人として、タロコの社会にいま何ができるのかということを考えるきっかけになったと話した。そして、5章で述べた通り、また「わたし」たちとともに表現活動を行いたいと伝えてくれた。

台湾での表現活動においては、ユニフォームの表現は、ウィリマンと「わたし」それぞれが抱いたつながれなさに向き合うことで、かえって他者へ開かれていき、結果的につながりを見出すことができると気づいた。また、それにより、次の表現活動の展開へとつながって

いったのだ⁶⁶。

また、この表現活動を通して、ユニフォームの表現は、自己の境界線を別の人間や社会、文化に対して外へ外へと押し出していく様な「自己の拡張」ではないということを、改めて実感した。自己の拡張は、私にとっては、どちらか一方の台頭により、片方を覆い隠すような形をとるものであり、それは、植民地主義的思考を彷彿とさせるものがある。そうではなく、ユニフォームの表現は、別々のものでありながらも、同じ行為をすることによって、互いが互いを動かす原動力を目指す形である。



図 7-14 《The gift exercise / Invitation 4.1: Sakadang/Datong》記録写真

タロコのコホスであるヤヤとユリが「わたし」たちにタロコのコホス伝来の歴史を漢字やドローイングを交えて伝える。(撮影：2017年8月2日 / ニナ・ウィリマン)

⁶⁶ 2017年台湾滞在から帰国後も、2人は、日本およびアメリカ(私は、2018年4-7月の間、アメリカ議会図書館に保管されているGHQによる日本の接収資料の中から台湾統治時代を調査)・ヨーロッパ諸国の視点で書かれた台湾、台湾先住民族の歴史を調べることで、自分自身の歴史を探る活動を続けていった。そして、調査した結果や、そこでえた感情や気づきを、ウィリマンと「わたし」の間で絶えず共有していった。この調査活動によって、「わたし」たちは、ともに台湾に対して植民地支配をしていた地域から来た植民地主義の後継者であるという共通項だけではなく、ともに同じ時代を生きる者を見出すことができた。この調査した結果や経験は、翌2018年に台湾に戻った際に、5章で取り上げたリーディングパフォーマンスへと結ばれていく。

7.6 まとめ — 表現しつづけることから「なる」へ

以上を踏まえると、表現活動を進めるごとに、ウィリマンと「わたし」の違いが1つ1つ露わになったことで「つながれなさ」に直面していき、2人の間に分断の構えが生成されていったことがみえる。それは、他者を知る、あるいは他者とつながるための当然の過程であるともいえるだろう。

ウィリマンと「わたし」の表現活動をみていくと、あえてウィリマンつまり、共同実践主体とのつながりをしめすユニフォームという表現を行うことで、活動の主体である「わたし」たち自身がその表現を再帰的に鑑賞したり、考えさせられたりすることとなる。そうすることによって、表現活動の主体であるはずの「わたし」たち自身が、活動と対象となり、自分たちの間に本当のつながりを生む、ということがわかった。つながりのうまれた「わたし」たちを本来の表現活動の対象である相手が受け止めることによって、彼らは表現活動に対して、自発的な参加をしていった。それによって、表現活動はさらに動いていったことがみえる。つまり、表現活動は、分断の構えを生成するものでありながら、主体が行為し続け、主体自身によってその行為を再帰されることによって、その分断の構えを自ら乗り越えていくという仕組みをもっていることがわかる。

第 8 章

「なる」論後章：まとめ

8.1 序文

7 章では、「なる」論の前章として、これまでウィリマンと「わたし」の表現活動を通して行われてきた1つの「みえ（形 form）」を「重なり合わせる（unite）」ユニフォームという表現に着目し、その表現によって、「わたし」たち自身が対象となりどのように変化したのか、そして他者（相手）がどのような影響を受けていったのか述べてきた。

8 章では、ここまで3つの具体的な事例を示しながらみてきた「なる」という体験を、改めて表現活動、そして芸術実践の中身として見ていくことによって、芸術実践のもう1つのあり方を探る。

8.2 「なる」という表現活動

ここまで、表現活動の中身を描き出すために、「わたし」と、ウィリマンによるユニット Willimann/Arai のいくつかの活動を事例とし、表現活動の対象である相手とのかかわり合い、そしてそこから主体自身が得た気づきや起こった変化に着目し考察を進めてきた。

8.2.1 「なる」という体験

主体に起こる「なる」という体験の仕組み

改めてここで、ユニフォームの表現から繋げながら「なる」という体験のいくつかの仕組みについて段階的に見ていきたい。

まず、6章でも述べた通り、表現活動の主体である「わたし」とウィリマンがユニフォームの表現として、ともに何かしらの行為を始める。例えばそれは、本論文で見てきた事例の中では、「ユニフォーム」を着て、海に交互に入ることであったり、トロフィーフォトであったり、あるいは、ともに地図をつくることであったりした。そういったユニフォームの表現は、4章、5章の事例では、中之条の住民や李、ヒジウといった表現活動の対象であった他者らにとって、表現活動への参加の動機付けとなっていた。また、3章の香港の清水湾での事例の場合、表現活動の対象の1つであった清水湾が、「わたし」たちによる交互に海の中に立つという表現に対して、鑑賞者であったのか、あるいは参加者になったのかといった表現のかかわり方とその変化の受け取り方に関して、当時の実践する「わたし」の心境の変化のみによる判断になるため、ここでは一旦参加動機付けされた他者の中には入れないでおく。ただし、「わたし」とウィリマンの互いが、表現活動の主体でありながら、浜辺で互いの海の中に立つ行為を観察することにより、観賞者となり、そして参加者と移り変わっていったと読み取ることもできる。

いずれにせよ、表現活動の対象である相手の参加により、主体とのかかわり合いが始まる。そのかかわり合いを通して、主体である「わたし」は、相手のもつ世界を意味付ける枠組みを見出していく。3章でも述べたように、その枠組みを、私は「構え」とよぶ。「構え」とは、表現活動を実践する「わたし」が常にもっているものでもあり、「わたし」を取り巻く世界をとらえ、意味づけ、行為する枠組みであった。私の、言語、教育、生活環境など、知識や人種、宗教、性別、身体的特徴、年齢、職業、出身地、家族構成といった社会的要因などが、私の「構え」をつくっている。相手の構えを見出していった「わたし」は、「わたし」の意志の有無とは無関係に、それぞれの相手との「重なり合い」が起こる。その「重なり合い」は、本論文で取り上げた事例の中では、具体的に以下のような過程で起こった。

- [1] 相手を他者（相手）の中においてみる
- [2] 相手と自分を重なり合わせる

[3] 重なりに見える自分自身に向き合う

[4] 重なりの中の重なり合えない「わたし」たちと出会う

「[1] 相手に合わせる」は、3章で取り上げた香港での事例で述べたように、自分の構えを一旦忘れ、相手に全身で返答しながら、相手の構えを手に入れる、あるいは手に入れようと試みることである。「[2] 相手と行ったり来たりする」は、4章で取り上げた中之条での事例で述べたように、舞台のような設定された場において、招く・招かれるというホスト・ゲストの役割を、相手と繰り返し交換することによって、段々と相手の構えを体得することである。「[3] 自分自身と向き合う」は、5章の台湾での事例で述べたように、徹底的に自分自身のもっていた構えと向き合うことにより、自分の中にすでにあった「異質なもの」を見つけ、そこに相手の構えとのつながりを見いだすということである。

以上より、いずれの過程においても主体が相手と重なり合っていたものは、構えであった。「わたし」の構えと相手の構えとの重なり合いを通して、主体の中で新しい「わたし」のあり方が生まれるという体験が起こる。またそれは、相手の構えを「わたし」の体験として受け取ることとなり、結果的に相手とのつながりが見出された。ここでもう1つ重要なことは、構えは確かにもともとさまざまな社会的要因によってつくられているが、この「なる」の体験でみてきたように、一貫したものではなく、主体の行為によって変化していくものだといえる⁶⁷。

「なる」のうつりあい

以上のことは、表現活動の主体の中に起こる体験として、これまで描き出されてきた。一方、この「なる」の体験は、主体だけに留まる体験なのだろうか。

4章、5章の事例を見ると、表現活動の参加者という形で関わった人々は、その後、彼ら自身が表現活動を進める主体となっていくということが起こった。具体的には、4章の中之条の事例では、「わたし」たちが中之条の交換の場を去っていった後、これまで参加者として活動に参加していた中之条の地元の住民たちが、「わたし」たちに代わって、新たなゲス

⁶⁷ ジュディス・バトラーによると、(ジェンダー・)アイデンティティは、つねに「おこなうこと」によって構築されるものである。さらに、バトラーは、その行為は、行為前から存在すると考えられる主体によっておこなわれるものではないという。このバトラーのパフォーマティヴィティの概念と「なる」体験における構えの変化を比較したとき、どちらも、行為によって再構築されているが、バトラーの論の場合は、行為前には何も存在しないことを前提としている。一方、構えは、社会的要因によってつくられているとされているため、行為前、つまり主体が世界に存在する以前にも、すでに主体が受動的に引き受けたいくつか社会的要因によってつくられた構えはあるとなる。ただし、そういった構えをつくる社会的要因は選択可能な場合もあるが、構えを変化させる行為を起こす主体の場合も含め、それらの立場はある種の特権的な場にたつものであると考える。また、本論文では、自己同一性/アイデンティティという言葉の使用を避けてきた。それは、本論文が、書き進める私自身に、そして読者に、そもそも世界は個を前提としたものであるのかと問いかけるということを、1つの意図としてもったものだからである。(参照: バトラー、ジュディス 『ジェンダー・トラブル: フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 竹村和子訳、東京: 青土社、2018年、58頁。)

トを招き入れ、あの場を動かし、更なる交換を生んでいった。5章の台湾の事例では、活動に参加してくれた李やヒジウが、今年2020年に、今度は彼ら発信で新たな表現活動を企画し、逆にウィリマンと「わたし」を参加者として招待するということが起こった。これは、表現活動の主体の中で「なる」が体験されることによって、主体と相手の間につながりが見出され、主体・参加者・鑑賞者というそれぞれもっていた表現活動に対する役割の垣根を超え、参加者自身の中にも、「表現活動をしたい」という気持ちが起こっていったと、導きうる。私は、これを、表現活動の主体だけでなく、対象であった相手にも「なる」が起こったと考える。「なる」の体験は、必ずしも表現活動の主体だけに起こる重なり合いではなく、時に相手にも起こると捉えることができる。では、この表現活動の相手に起こる「なる」とは、どのような仕組みで起きていたのだろうか。

ここで、4章の中之条での事例をもとに、私が受け取った、参加者に起こった変化を改めて考察してみたい。動きが見られ始めたのは、次のようなことだったといえる。交換活動を開始して1週間ほど経った頃、まずは「わたし」たちが借りたものとともにポーズをとって写真撮影をする様子を外から眺めていた住民たちの中で、「面白そうなので自分も一緒にはいりたい」と気軽に声をかけ、撮影に参加する者が現れ始めた。他には、「わたし」たちと同じような白Tシャツに黒いパンツ姿で、交換の場に遊びに来る者も現れ始めた。さらに、そういった様子が記録された写真を見て、「楽しそうだから、わたしも」「あの人がやるなら、私も」といったように、さらに新たな人々が同じ様に写真と一緒に入ることを希望したり、「ユニフォーム」で遊びに来たりと、交換活動だけではなくユニフォームの表現にも参加する人々が徐々に増えていった。「わたし」たちが活動前に想定していたことは、住民たちとの交換が続いていくことのみであったため、こういった動きは、すでに「わたし」たちの想定を超えていた。そんな中、「わたし」たちが、つまりそれまでその場の管理人であった活動の主体が去ったことにより、活動が中断され終了することになりかけた。そこで、積極的に交換活動のみならず、ユニフォームの表現に参加してきた者たち自身が、「わたし」たちに代わって、新たに表現活動の主体となっていった。これは、活動の存続のために、彼らが今度は活動を動かしていく存在になるようなエンパワメントがされた、あるいは、なり代わらざるえなかったと捉える。また同時に、彼らから毎日送られてくる記録写真や動画を通して、「わたし」とウィリマンは、彼らの活動の鑑賞者となっていった。このようにして、もともと参加者だった者の中に、そしてもともと主体であった者の中にも、新しい自分の有り様が生まれた。

この事例から、このような参加者の変化において2つの着目すべき点浮かび上がる。1つ目は、住民たちが受けたユニフォームの表現への参加動機付けは、「わたし」とウィリマンだけによるものではなかったという点である。時に、それは中之条の住民同士で起こり合っていたのだ。つまり、「なる」の体験は、活動の主体であった2人だけが中心となった波紋のように発信したのではなく、ユニフォームを見つけようとする「わたし」とウィリマンの構えが、参加者や表現活動の新たな主体となった住民たちを媒介して、彼ら自身の構えと重なり合い、彼らの意志の有無に関係なく、また時に間接的に、「なる」が起こりあっていっ

た。そうして、新たな参加者や主体が生まれていったのだ。つまり、この表現活動全体で見られる「なる」の動きには、中心となる核がないということが導き出せる。これを、私は『「なる」のうつりあい』と呼びたい。これは、「なる」の「創発」ではなく、あくまでも「うつりあい」である。創発の場合、部分が集積され、組織されるが、「うつりあい」は、部分は必ずしも組織化されずに、個として自律的な組成を持った状態で、伝播され、また気がつくともまた異なるものに変化しているという、全体を持たない不定形な体験である。

「うつりあい」という言葉には、「感染る・移る・映る・憑る」という意味が含まれる。「移る」は、主体や参加者それぞれがもっていた構えの揺らぎを指す。「映す」とは、鏡のように主体、あるいは別の参加者が、その参加者自身を振り返るための存在となることを示す。「憑る」とは、頭の中で論理的に学びとることではなく、身体まるごとが変化したかごとく信じ込んでしまうことを指す。「感染る」とは、感染性の病原体のように、感染される者・感染する者それぞれの意図の有無に関係なく起きるということを示す。

2つ目の着目すべき点は、「わたし」とウィリマン、つまり元の表現活動の主体だった者の不在である。これは、台湾での Willimann/Arai の表現活動にも見られた。「わたし」たちは、2017 年以来毎年夏には台湾に戻り、また 5 章で取り上げた表現活動《The gift exercise / Invitation 4.2 : Taroko National Park》においては、定期的に 2018 年以来発表を続けてきているものの、今年度(2020 年)は、新型コロナウイルス感染症による渡航規制の関係もあり、3 月の台湾でのパフォーマンスを最後に、再訪することができていない。現在も、いつまでこの渡航規制が続くか先が見えない状況である。そんな中、李は、「わたし」たちを主体とした表現活動を行うため、「わたし」たちを台湾に招こうと企画を始めた。しかし、話し合いを重ねる中で、この状況を受けて、李やヒジウら自身が主体となり、表現活動を始めることを彼ら自身で決めた。

以上より、『「なる」のうつりあい』は、かかわり合いの中で表現活動の相手にも起こると、表現活動の主体と参加者の役割の境界が曖昧になり、さらに、元の主体が一度活動の場から去ることによって、その役割はひっくり返るということが、見いだせた。

8.2.2 「なる」の体験を中身にもつ表現活動

表現活動がもつ創造性

ここまで「なる」という体験の仕組みと広がりを見てきた。ここで、改めて表現活動の中身としての「なる」についてまとめていきたい。2 章で述べた通り、表現活動とは、何かを希求する心を表に現す試みであり、常に動きつづける行為そのものである。表現活動の主体がウィリマンと「わたし」の場合、ユニフォームを見つけようとする心を表に表す試みを行うことで、活動の対象である相手の自発的な参加が起こし、活動が展開していった。そこから主体は、一方的に相手に何かを促すのではなく、相手への応答を繰り返し、また逆に自分自身と向き合うことで、相手の構えを手に入れたり、相手の構えを自分自身の中に見つけた

りしていく。そうすることで、主体自身の中に新しい自己のあり方が生まれる。この営みを行う主体の身体は、主体は何かを外に働きかけていくという能動性だけではなく、自分自身に働きかける再起的な能動性を持ち、また同時に、相手の反応を待つて身体で聴き、直観的に感じるという受動性を持ち合わせている状態といえる。そういった身体を必要とする表現活動は、「わたし」とウィリマンのように、グループで活動を行ったり、参加者を招き入れたりするような表現活動に限らない。白いキャンバスに絵を描いたり、砂場でトンネルを造ったり、土を捏ねて壺をつくったりするような活動でも、多かれ少なかれ、主体が希求する心を表に現すとともに、素材という他者の反応を主体が聴くという、受動性が主体の身体になれば、活動は動いていかない。つまり、この2つの方向性をもつ能動性と受動性を同時に持ち合わせることは、何かをつくりだしていく創造的行為の基盤であるともいえるはずだ。

表現活動の主体

その先に、「なる」がうつりあうことによって、単に表現活動の主体とそれ以外の者といった「見る・見られる」の構造が曖昧になり、また主体が現場を去ることにより、参加者が（新たな）表現活動の動かす主体となっていく。これにより、元々主体だった者が逆に参加者や鑑賞者になり、役割がひっくり返るという主体の意味の飛躍が確認できた。それらは、主体だけでなく参加者も、表現活動を、初志貫徹した主体の強い意志の現れとしてではなく、主体のもつ「自己」とは異質な「他者」とのかかわり合いの中でこそ成り立っていると、共に捉えている現れである。また主体も参加者も、そのかかわり合いの中で生まれた予期せぬ出来事を歓迎し、柔軟に対応し、変化していった結果でもあるといえる。つまり、表現活動そのものだけではなく、表現活動の主体や参加者という役割自体も、予めかたちが定まり個人に依拠したものではなく、行為を続けることによって保たれるものであり、また行為を行う主体が移ると、表現活動の主体も移り変わっていくものなのだ。

以上より、表現活動の主体とは、限定された者によって制作の始めから終わりまで一貫して握られる権威なのではなく、活動にかかわりあう全ての者によって共有し、いわばリレーのように移り変わっていくものであるといえる。

8.3 「なる」という芸術実践

前節では、表現活動の中身である「なる」という体験と改めてまとめていくことで、表現活動のあり方を描き出すことを試みた。以上の議論を踏まえた上で、その表現活動を内側にもつ芸術実践のあり方は、どうなのだろうか。

芸術実践とは、2章で述べたように、緩やかにつながった個々の表現活動の寄せ集まりを内包するものである。そのため、芸術実践は、「なる」の体験がいくつも内側にもつことに

なる。本節では、本論文の結論として、実践者自身の経験や知を通して培った、「なる」の体験を内側にもつ芸術実践の意義や価値をふくめた在り方を、見つめていきたい。

芸術実践における考察

まず、表現活動の他に、芸術実践を構成する要素はなんであろうか。ここで、5章でも取り上げた Willimann/Arai の台湾での活動を事例に考えていきたい。

「わたし」たちは、5章でも述べたとおり、2017年8月以来毎年台湾へ戻り、《The gift exercise / Invitation 4 : Taiwan》シリーズの活動を継続的に展開してきている。5章で取り上げた表現活動《The gift exercise / Invitation 4.2 : Taroko National Park》は、そのシリーズの中の1つの活動である。「わたし」たちは、活動中も、そして毎年その年の台湾における活動に緩やかな区切りがついた後も、それぞれが自身の経験を通してえた気づきを共有しあう。その場には、「わたし」とウィリマンだけではなく、李やヒジウ、ヤヤといった「わたし」とウィリマンの活動に参加してくれた人々や、私たちを台湾に呼んでくれたレジデンスのオーガナイザーなどが含まれることもある。彼らと話していると、例え一番長い時間、様々なことを共に経験してきたウィリマンでさえ、同じ経験に対して全く別の捉え方をしていることがあり、互いに驚かされながら、なぜ異なる捉え方をしたのかという話し合いへとつながっていく。そうした対話を繰り返すことによって、それぞれが自分自身と再び向き合い、振り返り、時に自分自身に何かを再発見する行為となっていく。それは、まさに5章で取り上げた表現活動のように、自分自身をふり返り、そこに相手の構えを見出していた「なる」の体験と同じ構造をもつ。また、活動地である台湾を離れ、それぞれの拠点に帰った後も、台湾では調べきれなかった部分の調査を続けられ、調査した内容を再び共有し、話し合うという実践がウィリマンと「わたし」の間で行われる。そういった繰り返される考察の中で、共有された気づきは、入り口が違っても、対話を続けていくと結局いくつかの限られた論点に結びつくことが多い⁶⁸。そして対話を重ねるたびに、「わたし」やウィリマンの中にそういった論点は刷り込まれていき、それらは再び新たな表現活動の動機づけとなっていく。

以上より、考察は表現活動の内側にも外側にもあり、考察と表現活動は切っても切れない関係にある芸術実践を構成する重要な要素だといえる。芸術実践が、「やって・考える」⁶⁹というように、表現活動とそこから生まれる考察という2つの行いの循環で構成されると導きだす。また、表現活動がもつ「なる」体験と似た構造が、芸術実践全体にも見られたため、芸術実践はその部分に自己相似的な構造をもち、新たな表現活動が行われるたびに、その内側から新たな自己相似的な構造が増殖していくものだと考える⁷⁰。その構造は、

⁶⁸ ウィリマンと「わたし」の間で、話し合いで繰り返し集約される論点は、ホスピタリティ、翻訳、他者性、そして自己である。

⁶⁹ 須永剛司 「芸術のデザインからデザイン学を展望する」『計測と制御』 54巻、7号、2015年7月、5頁。「やって・みて・わかる」の概念を参照。

⁷⁰ 重箱のように中が外を再帰的に繰り返す入れ子構造というよりは、雪の結晶や樹木、人の腸の内壁など

この論文執筆の過程においても見えてきた。次の項では、論文執筆の過程で、どのように芸術実践の構造が見えてきたのか述べる。

「わたし」と私

これまで、私は、表現活動を行う主体としての〈「わたし」〉と、行った表現活動とその渦中の「わたし」について考察し、記述する主体としての〈私〉の2つの配役を、本来分かち難い自己の中につくり、芸術実践について描き出そうとしてきた。しかし、私はこの論文執筆という実践当初、まず自身の経験を書くためには、実際にその経験をした「わたし」とどのような距離感をもち、描きだすべきか頭を悩ませた。

まずは、できるだけ「わたし」から距離をとり、「わたし」の経験の外にある引用や参照も取り入れ、私なりに比較をしながら、「わたし」やそれぞれの表現活動全体を外から眺める様な気持ちで記述を試みてみた。しかし、私は書き進めるほどに、その記述が実際に表現活動の中で起こった出来事、「わたし」の中で起こった変化から、ますます離れたものになっていることに気がついていった。その営みは、語り直すというよりも、別の何かをつくっていくという感覚に近かった。私によって、つくられていったのは、別の『「わたし」』像である。私は「わたし」から距離をとるほどに、過去のある時点で表現活動を行っていた「わたし」の経験をきっかけとし、新たな創作を始めていることに気がついたのだ。私は、「わたし」を観察するため、「わたし」と向き合って応答するのではなく、私自身によって「わたし」を想像し、それを演じていってしまったのだ。結果としてそれは、過去のある時点に確かに表現活動をおこなっていた「わたし」からは、乖離したものになっていったのである。

一方、今回この論文執筆で試みたかったことは、新たなものを生み出していく創作ではなく、「わたし」に起こったことをふり返り、掘り下げていくという作業である。つまり、私は、ある過去の時点で活動をしていた「わたし」とのつながりを再度見出さなければいけない。色々と「わたし」と私の距離感の取り方を、実践を通して試していく中で、具体的に、次の様な方法にたどり着いた。それは、表現活動時に書いた文章やメモ、撮影した映像や写真を眺め、読み込み、そういった活動の記録の断片を確認したのち、改めて現在進行形の私によって受け取ったものを、私自身によって再び文章に起こすという行為を積み重ねだった。「わたし」が発したことと応答しようとすると同時に、「わたし」になった振りをするのではなく、現在進行形の〈私〉自身と徹底的に向き合うことだ。それまでの「わたし」を演じようとした私との過程と比べた時、相手を想像することと、相手に応答することは異なる営みだと見出せる。つまり、全ては「わたし」に起こったことを探るための行為でありながら、「わたし」を志向しようとはせずに、私自身に志向する営みである。それは、「わたし」と私の間に適切な距離を保つように心がけるのではなく、結果的に私は「わたし」に近

にも見られるフラクタル構造のようなものを想像する。そうして、各表現活動は、連綿とつながっている。

づいたり離れたりすることであった。またある瞬間、特に3、4、5章の各表現活動について書き起こした後には、それを読みながら、私が「わたし」を限りなく近く表象できたと実感することもあった。それはまさに、表現活動における「わたし」と相手との関係性と似ており、私と「わたし」の構えが重なり合い、「なる」が起っていたとも考えられる。表現活動を行う主体である「わたし」は、構えが揺れ動いているため、一貫した「わたし」ではないということを事例とともに述べてきたが、本論を記述する私も、常に定点にいる主体ではなく、揺れ動き、時に「わたし」と重なり合っていたのだった。つまり、ここでも芸術実践が表現活動と同じ構造をもつものであると確認できた。

ウィリマンと私

同様に、本論中にたびたび登場する、表現活動を「わたし」と共に行うウィリマンと私の関係も考えたい。

本論文中に登場するウィリマンは、ウィリマン本人によってドイツ語で執筆された記述を除き、全て私あるいは「わたし」の中のウィリマンであった。つまり、表現活動を通して「わたし」の中で、ウィリマンのもつ構えとの重なり合いが起き、手に入れてきたウィリマン像であった。そのため、本論文中のウィリマンも、私と同様に常に定点にいる主体ではなく、揺れ動き、時に「わたし」と重なったり、私と重なったりしているものだと考える。

これにより、本論文中における私・「わたし」・ウィリマンは、段階的な推移をもった1つの連なりであり、それぞれの極から互いに遠のきあったり、近づきあったり、時に重なり合ったりを繰り返しているといえる。現在進行形の考察する主体の私は、時間的にも空間的にも、全く同じ地点に戻ってくることは不可能である。私は、ウィリマンや「わたし」と近づき重なり合い、また遠のいていく、ちょうどバネのもつコイル構造の中で、ぐるりと回りながら、元の地点に戻っていたような気がしても、ほんの少し先へとズレれている⁷¹。そのように、主体が変化し続けることによって、相手とのつながりを見出し、芸術実践が展開していく。

芸術実践の在り方

以上を踏まえると、目的をもたずに変わりつづけること自体が芸術実践を動かす力であるといえる。その変化するコトとは、活動そのものであり、またそれぞれの実践者自身がもつ自己自身であり、主体・参加者・鑑賞者といった芸術実践における役割づけでもある。実践者は、考察と表現活動を繰り返すことで、常に実践者自身をふり返りつつ、相手と応答しようとする行為が行われ、モノやコトや時に人との間にある不可視のつながりを見出してい

⁷¹ このコイル構造は、私が高校生の頃に美術予備校でデッサンを習っていた際に、当時予備校講師であった須藤先生が、「デッサンは、バネ状に上手くなっていく」といった一言を、長らく鮮明に覚えており、今回この〈私〉について考察しながら思い出し、そこからヒントを得た。一方、ティム・インゴルドも、このコイル構造に進んでいく線のことを、生物が呼吸する行為を例に、生命の根本として言及している。（参照：インゴルド、ティム 『ライフ・オブ・ラインズ：線の生態人類学』 筧菜奈子、島村幸忠、宇佐美達朗訳、東京：フィルムアート社、2018年、165-173頁。）

く。したがって、芸術実践は、どこまでが作品か、制作か分かち難く、過程全てが work となりうる⁷²。その過程の中で、表現活動に関わった者が、能動性と受動性を併せ持った身体を獲得し、他者との間につながりを見出し、新たな自己を手に入れていくことが、芸術実践のもつ創造性そのものである。

⁷² 川俣正が自身のプロジェクトをよぶ際に使う「ワーク・イン・プログレス」という言葉がある。彼は、それを「当初とは違う方向に広がって(...)次から次と起こるさまざまなことで、軌道修正しながら進んでいく」ものとし、プロジェクトが「常に変化せざるを得ない状況の中で、変化していく方向を決定する(...)要因をその場やそこにかかわる人たちの身体を通したコミュニケーションにゆだねている。」と述べている。また、その変化をオートポエシスと重ねながら、プロジェクトの変化に対して、進歩・プログレスという言葉当てている。一方、私も本論文で述べてきた芸術実践も、他者によるかかわり合いの中で、予期しない出来事、偶然性に身をゆだねる姿勢は、川俣の「ワーク・イン・プログレス」と重なり、その連なりだとも考える。しかし、川俣の「ワーク・イン・プログレス」と違い、本論文の芸術実践は、「なる」の体験が繰り返されることにより、展開はしているものの、逆に、変化後、また元に近い形に「戻る」こともあるため、そういった変化を全て進歩という語を当てるには、違和感がある。本論文の述べる芸術実践は、そういった全ての変化を含めて連綿と続く過程全てが、芸術実践そのものになるという考えであるため、ワーク・イン・プログレスではなく、むしろ、「プロセス・アズ・ワーク」だと考える。(参照：川俣正 『アートレス：マイノリティとしての現代美術』 東京：フィルムアート社、2006年、177頁および122-123頁。)

第 9 章

おわりにー 私と「わたし（たち）」

9.1 序文

第 8 章は、本論文の終わりの章として、これまでどのような考察の流れによって、「なる」という体験が見えてきたのか述べることで、私（たち）と「わたし（たち）」という主体自身とのやりとりがもたらしたことについてまとめる。

9.2 おわりに: 私と「わたし（たち）」

本論文の緩い構想は、ウィリマンとの活動開始初期である香港滞在中、2015年秋頃から始まった。当時書いた、本論文に向けた小論文の題目は、「誰でも何者にもなれる：新井麻弓の場合」であった。「なる」という名称そのものは、使用していなかったが、当時から「なる」という体験に興味を持ち論文を書こうとしていた。しかし、その「なる」にあたる体験の仕組みについて、現在この文章を書いている私とは少し異なる見解を持っていた。

当時の私は、人やモノに備わっている固有の性質・特徴を属性⁷³とし、人は多数の属性の集合体であると定義づけした。つまり、本論文でいう構えに近い用語である。その上で、その属性は人やモノの間で貸し与えることができるとし、その属性の貸し借りによって、「なる」が起きるとしていた。つまり、「なる」を「属性の貸し借り」であるとしていた。また、その貸し借りが行われるのは、「なる」体験に関わる者、主体と対象がともに子供⁷⁴のようなのびのびとした身体をもつ必要があるとしていた。さらに、そういった身体をえるには、まず活動の主体が「舞台」となる場をつくり、主体も参加者も虚構の中に身を投じることで、生活としての現実の中で「自然」とされていた「わたし」の姿から解放させることだとしていた⁷⁵。

また、さらに活動を進めていった2017年から2018年にかけて書いた同じく本論文に向けた仮要旨では、題目を「入れ変わり続ける「あなた」と「わたし」 - 《トランスフォーメーション》という創造的メカニズム - 」としていた。これは、表現対象である「あなた」と主体である「わたし」の間で、〈見る者・見られる者〉のように主体による一歩通行的な能動性が起こるのではなく、〈見られつつ見る〉といったような互いに能動性をもった時に、トランスフォーメーション改め、「なる」が起こるとしていた。

しかし、今回さらに考察を進めていく中で、主体がつくる「舞台」としての場づくりは、目的ではないということがわかってきた。Willimann/Araiの表現活動の場合でいうと、ユニフォームというありえもしない、ある種の虚構性を表現するという行為を続けることによって、行為主であるウィリマンや「わたし」がその表現の対象となっていき、2人の中で自分自身を見つめ直す省察が起こっていると気がついた。その表現と省察の繰り返しの行為の先に、場が自ずと構築されていっている。つまり、場は行為を続けていった結果として

⁷³ 伊藤亜紗は「属性の貸し借り」について、テキスト「タ・イ・ム・マ・シ・ン」の中で、以下のように述べている。「わたしの属性は全部でいくつあるのだろうか。一〇〇だろうか。一〇〇〇だろうか。 […] その、わたしがいま持っている属性を、ひとつずつ、たとえばあの山に貸し与える。 […] 山は、わたしの属性を獲得するたびに、少しずつわたしになっていく。 […] 何千年後、何万年後の風景を、山であるわたしは見るのだ。」(引用：伊藤亜紗「タ・イ・ム・マ・シ・ン」(小林耕平の同名の作品内での寄稿テキスト)) <東京都国立近代美術館編『ドキュメント | 14 のタペ』 京都市: 青幻舎、2013年。>)

⁷⁴ 河合隼雄『子どもの宇宙』 東京: 岩波新書、1987年。

⁷⁵ 伊藤亜紗「『関係性の美学』の演劇的性格」『美術芸術学研究』第30号、2010年、39頁。

現れてくるものである。

また、表現活動の対象となる他者が能動性をもってくることに対しても、それ自体は目的ではなく、主体による表現と省察の繰り返しの行為の中に、他者が巻き込まれていく中で、自ずと能動性をもっていくとわかってきた。つまり、主体も他者も主体による表現に巻き込まれており、他者の参加もその先の他者の主体化も、すべて行為に対する後発的なものだと見出せた。

以上のように、考察の過程を辿ると、今回の論文を書くという実践を通して、「わたし」は自身が行った行為や体験に対していかにその総体を自覚せず、「わたし」は活動を一鑑賞者のようにその外郭しか捉えられていなかったということを実感した。終点なく進み続ける表現活動とともに、主体である「わたし」自身もつねに現在進行形であることを自覚することでもあった。

私は、今回、これまでウィリマンとともに記述してきた再帰的活動録を集めて再度読み直すとともに、表現活動でえた気づきや応答を書き出し、細かく時系列順に並び直していくということを行った。そこで、私は直感で「なる」という体験を描き出すことに対して、ある芸術実践の側面を語るものとして意義を感じていたものの、その体験が具体的にどのような行為を通して、どのタイミングで起こっていたのか、把握していなかったことに気づいていった。それは、「なる」体験を私自身が実感していくのは、それが起こったしばらく後に、自分自身での記述や振り返り、ウィリマンとの対話や記述の共有を通じて、じんわりと後から感じていったためである。そのため、今回私が行ったことについて以上を踏まえてまとめると、ウィリマンと「わたし」の対話からさらに一步引いた私という視点をつくり、私とのやりとりの中で、「なる」を内側にもつ表現活動・芸術実践の総体をとらえようとする試みであったのである。

「わたし」とウィリマンの活動は、「わたし」たち以外の他者の参加を含むこともあり、活動を実際に起こすための資金集めのための国や地方自治体や財団法人などの助成金申請の場等において、その活動を目論む社会的意義や大義名分を求められることが多い。また、6章の「「分かる」ではなく、「つながる」へ」(p.119)で述べたように、これまで自分自身が受けてきた小・中・高校や美術予備校・大学の場合でも、常々学術の世界では、明確な目的をもって行動するように教えられてきた。そういった教えが染みついた頭をもった私は、当初この論文執筆の中で、そもそもそれぞれの活動の目的は、何であったのかということに、頭を悩ませた。しかし、結論としてそこに目的はない、あるいは目的をもたないという目標をもっていた。それは、2章でも述べた通り、明確な目的を持って、その達成を目指そうとすると、対話が一方通行になったり、他者に対して能動性を迫る形になりがちだという、他者との活動の中で手に入れてきた気づきである。結局、全ての実践する主体自身が、自発的に動かないと長期的な変化を目指す表現活動は望めないということである。また、同時に、目的をもたないことによって、3章、4章、5章、6章で述べてきたように、より多くの気づきを得ることができると実感していったからだ。そして、その気づきをえるのは、先にも述

べてきたように、「わたし」に対して、ウィリマンや私といった相手との省察が必要となる。この目的をもたない表現活動と相手とともに自分自身を振り返る行為を繰り返し、活動も自身の変化も起こし続けていくことは、相手も、そして自分自身巻き込みながら進み続けていくことである。

私は、今回3章、4章、5章の3つの表現活動を主に取り上げてきたが、異なる表現活動を取り上げることで、当然ながらまた別の拡がりをもつ「なる」を描き出させるだろう。そのため、「わたし」は、この論文執筆でおこなった過程のように、表現活動と並行してウィリマンだけではなく、今後も私とのやりとりを続けていきたい。

本論文は、論文という形態をとった私とのやりとりの軌跡であった。私は、そうした論文も、芸術実践そのものの一部にもなりうることを願っている。

10. 用語と地図

本稿で使用された用語の意味をまとめる。

表現活動とは、何かを希求する心を表に現す試みであり、一つのかたちに定まった静的なモノというよりもむしろ、常に動きつづけるコト、行為そのものである。それは、活動を行う主体のもつ「自己」とは異質な「他者」とのかかわり合い、気づきと応答の積み重ねによって、時に本来の意図を超えて変化していく。

芸術実践とは、緩やかにつながった個々の表現活動の寄せ集まりを内包するもの。

●主題

「なる」とは、表現活動を実践する私が、私の意志の有無とは無関係に、表現活動の対象（相手）とかかわり合うときに生じる、私自身が対象と「重なりあう」体験。

「重なりあう」体験により、実践者としての新しい私（のあり方、有り様）が生まれるという体験もそこに含まれる。

●「なる」から起きること/「なる」のもつ価値や意義

創造性とは、白いキャンバスに絵を描いたり、砂場でトンネルを造ったり、土を捏ねて壺をつくったりするような、そこに何かをつくっていくという能動性のこと。

「なる」体験が**創造的活動**とは、「なる」体験が、新しい私をそこに生みだすこと。つまり能動的な体験であることを指している。

「なる」の**うつりあい**とは、この体験が、私がかかわり合った対象（相手）にも「実践者としての新しい私が生まれる体験」をもたらす。

●「なる」論のための道具立て

構えとは、表現活動を実践する私が常にもっているもの。私を取り巻く世界をとらえ、意味づけ、行為する枠組み。

私の、言語、教育、生活環境など、知識や人種、宗教、性別、身体的特徴、年齢、職業、出身地、家族構成といった社会的要因などが、私の「構え」をつくっている。

表現活動を実践する私は、かかわり合う相手の「構え」を見出す。それは、私と相手のかかわり合いをとおして、私が受け取り、私のなかに構築した相手をもつ世界を意味づける枠組みのこと。

10. 用語と地図

●本論文をかたちづくる配役

「わたし」とは、表現活動を行う主体。

私とは、行なった表現活動とその渦中の「わたし」について考察をし、記述する主体。

11. 参考文献一覧

1 1. 引用・参考文献一覧

1 1.1 引用

本文中の独文で執筆された「自己」省察文は、全て次の文献から引用。本論文筆者(新井麻弓)によって邦訳。

Nina Willmann. *Fragmente 2015 – 2018*. Zurich, 2018.

1 1.2 参考文献一覧

本論内で引用した文献とは別に、本論文を執筆、およびウィリマンとともに自分たちの表現活動を振り返る際の参考にしたものを以下に列挙する。

<単行本>

Thompson, Nato 編. *Living as form: socially engaged art from 1991-2011*. New York, N.Y. & Cambridge: Creative Time & MIT Press, 2012 年.

Willmann/Arai

The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo. 2017.

The gift exercise / Invitation 2.2: Zurich. Zurich: Amsel Verlag, 2019.

Willmann/Arai, Nac Hijiya & 李尚喬. *禮物交換練習 / 邀請 4.2: 太魯閣國家公園 The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park*. Taipei, 2018.

赤瀬川原平 『全面自供!』 東京：晶文社、2001 年。

石井美保 『めぐりながれるものの人類学』 東京：青土社、2019 年。

石川准、鷲田清一、荻野美穂他編 『身体をめぐるレッスン<3> 脈打つ身体: material』 東京：岩波書店、2007 年。

岩田慶治 『わたしとは何だろう：絵で描く自分発見』 東京：講談社、1996 年。

インゴルド、ティム

『メイキング：人類学・考古学・芸術・建築』 金子遊、水野友美子、小林耕二訳、東京：左右社、2017 年

『ライフ・オブ・ラインズ：線の生態人類学』 笥菜奈子、島村幸忠、宇佐美達朗訳、東京：フィルムアート社、2018 年。

『人類学とは何か』 奥野克巳、宮崎幸子訳、東京：亜紀書房、2020 年。

ヴィヴェイロス・デ・カストロ、エドゥアルド

『食人の形而上学：ポスト構造主義的人类学への道』 檜垣立哉、山崎吾郎訳、京都：洛北出版、2015 年。

『インディオの気まぐれな魂』 近藤宏、里見竜樹訳、東京：水声社、2015 年。

内田百閒 『東京日記：他六篇』 東京：岩波書店、1992 年。

11. 参考文献一覧

- 岡原正幸、小倉康嗣、澤田唯人他 『感情を生きる：パフォーマティブ社会学へ』
東京：慶應義塾大学三田哲学会、2014 年。
- 小田実 『何でも見てやろう』 東京：講談社、1979 年。
- 河野哲也 『境界の現象学：始原の海から流体の存在論へ』 東京：筑摩書房、2014 年。
- 木村大治 『見知らぬものと出会う：ファースト・コンタクトの相互行為論』 東京：東京
大学出版会、2018 年。
- 河合隼雄 『子どもの宇宙』 東京：岩波新書、1987 年。
- 川俣正 『アートレス：マイノリティとしての現代美術』 東京：フィルムアート社、2006
年。
- クリステヴァ、ジュリア 『外国人：我らの内なるもの』 池田和子訳、東京：法政大学出
版局、2014 年。
- クリフォード、ジェイムズ、ジョージ・マーカス 『文化を書く』 春日直樹他訳、東京：
紀伊國屋書店、1996 年。
- 黒川重人 『易経 全訳』 上巻・中巻・下巻、東京：藤原書店、2013 年。
- ケージ、ジョン 『サイレンス』 柿沼敏江訳、東京：水声社、1996 年。
- コイファー、ステファン、アントニー・チェメロ 『現象学入門：新しい心の科学と哲学の
ために』 田中彰吾、宮原克典訳、東京：勁草書房、2018 年
- コッチャ、エマヌエーレ 『植物の生の哲学：混合の形而上学』 嶋崎正樹訳、東京：勁
草書房、2019 年。
- ゴッフマン、アーヴィング 『スティグマの社会学：烙印を押されたアイデンティティ』 石
黒毅訳、東京：せりか書房、2001 年。
- コーン、エドゥアルド 『森は考える：人間的なるものを越えた人類学』 奥野克巳、近藤
宏他訳、東京：亜紀書房、2016 年。
- 西郷甲矢人、田口茂 『<現実>とは何か：数学・哲学から始まる世界像の転換』 東京：筑
摩書房、2019 年。
- ジョルダーニア、ジョーゼフ 『人間はなぜ歌うのか?: 人類の進化における「うた」の起
源』 森田稔訳、東京：アルク出版、2017 年。
- 須永剛司 「情報のデザインと経験の形」『情報とメディアー現代の教育』 8 巻、1998 年、
134-154 頁。
- 諏訪正樹
『「こつ」と「スランプ」の研究 身体知の認知科学』 東京：講談社、2016 年。
『身体が生み出すクリエイティブ』 東京：筑摩書房、2018 年。
- 諏訪正樹、藤井晴行 『知のデザイン：自分ごととして考えよう』 東京：近代科学社、2015
年。
- 諏訪正樹、堀浩一ほか 『一人称研究のすすめ：知能研究の新しい潮流』 人工知能学会監
修、東京：近代科学社、2015 年。
- チン、アナ 『マツタケ：不確定な時代を生きる術』 赤嶺淳訳、東京：みすず書房、

11. 参考文献一覧

2019 年。

デリダ、ジャック、アンヌ・デュフルマンテル 『歓待について：パリ講義の記録』

広瀬浩司訳、東京：ちくま学芸文庫、2018 年。

道元 『現代文訳正法眼蔵：1』 石井恭二訳、東京：河出書房新社、2004 年。

ハラウェイ・ダナ

『猿と女とサイボーグ：自然の再発明』 高橋さきの訳、東京：青土社、2017 年。

『伴侶種宣言：犬と人の「重要な他者性」』 永野文香訳、東京：以文社、2018 年。

東京都国立近代美術館編 『ドキュメント | 14 のタベ』 京都市：青幻舎、2013 年。

西田幾多郎 『善の研究』 東京：岩波書店、1979 年。

バトラー、ジュディス

『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 竹村和子訳、東京：青土社、2018 年。

『アセンブリ：行為遂行性・複数性・政治』 佐藤嘉幸、清水知子訳、東京：青土社、2018 年。

バフチン、ミハイル 『ドストエフスキーの詩』 望月哲男訳、東京：筑摩書房、1995 年。

バルト、ロラン

『表徴の帝国』 宗左近訳、東京：筑摩書房、1996 年。

『偶景』 沢崎浩平、萩原芳子訳、東京：みすず書房、2001 年。

平野啓一郎 『私とは何か：「個人」から「分人」へ』 東京：講談社、2012 年。

ビショップ、クレア 『人工地獄：現代アートと観客の政治学』 大森俊克訳、東京：フィルムアート社、2016 年。

フェーヴェル、リュシアン 『歴史のための闘い』 長谷川輝夫訳、東京：平凡社、1995 年。

藤田結子、北村文編 『現代エスノグラフィー：新しいフィールドワークの理論と実践』 東京：新曜社、2013 年。

マリノフスキ、プロニスワフ 『西太平洋の遠洋航海者：メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』 増田義郎訳、東京：講談社、2010 年。

宮本常一

『忘れられた日本人』 東京：岩波文庫、1984 年。

『山に生きる人びと』 東京：河出書房新社、2011 年。

『海に生きる人びと』 東京：河出書房新社、2015 年。

メルロー＝ポンティ、モーリス

『知覚の哲学：ラジオ講演 1948 年』 菅野盾樹訳、東京：筑摩書房、2011 年。

『東洋と哲学・哲学の創始者たち・キリスト教と哲学』 加賀野井秀一、伊藤泰雄、本郷均、加國尚志監修・翻訳、東京：白水社、2017 年。

モース、マルセル 『贈与論』 吉田禎吾、江川純一訳、東京：筑摩書房、2009 年。

山岸健、草柳千早、沢井敦、鄭映恵編 『風景の意味：理性と感性』 東京：三和書籍、2007 年。

11. 参考文献一覧

- ユクスキュル、ヤーコプ・フォン 『生命の劇場』 入江重吉、寺井俊正訳、東京：講談社、2012 年。
- ユクスキュル、ヤーコプ・フォン、ジョージ・クリサート 『生物から見た世界』 日高敏隆、羽田節子訳、東京：岩波書店、2005 年。
- 好井裕明、桜井厚編 『フィールドワークの経験』 東京：せりか書房、2000 年。
- ラトゥール、ブルーノ 『社会的なものを組み直す：アクターネットワーク理論入門』 伊藤嘉高訳、東京：法政大学出版局、2019 年。
- 老子 『老子』 蜂屋邦夫訳、東京：岩波書店、2008 年。
- ロジェ、カイヨワ 『遊びと人間』 多田道太郎、塚崎幹夫訳、東京：講談社、1990 年。

< 定期刊行物のなかの論文等 >

- Clifford, James. *On Ethnographic Authority*. *Representations*, 2, 1983, pp. 139-141.
- Huber, Jörg & Eva Lüdi Kong. *Care of the self*. *Journal of Contemporary Chinese Art*, 1, 1, 2014, pp. 97-114.
- 綾屋紗月 「当事者研究の実践で突きつけられ、修正を迫られるもの」『日本オーラル・ヒストリー研究』 8 巻、2012 年、101-107 頁。
- 綾屋紗月、熊谷晋一郎 「共同報告・生き延びるための研究」『三田社会学』 19 号、2014 年、3-19 頁。
- 伊藤亜紗 「『関係性の美学』の演劇的性格」『美術芸術学研究』 30 号、2010 年。
- 岡原正幸 「アートベース社会学へ」『哲学』 138 号、2017 年、1-8 頁。
- 小川さやか 「SNS で紡がれる集合的なオートエスノグラフィー」『文化人類学』 84 巻、2 号、2019 年、172-189 頁。
- 奥野克巳 「人類学の現在、絡まりあう種たち、不安定な『種』」『たぐい vol.1』 東京：亜紀書房、2019 年。
- 狩野愛 「トランスローカルな DIY アート・コレクティブ - 木版画をメディアにした A3BC の事例研究 -」『武蔵野美術大学研究紀要』 47 号、2016 年、31-42 頁。
- 熊谷晋一郎 「なぜ「当事者」か、なぜ「研究」か」『日本オーラル・ヒストリー研究』 8 巻、2012 年、93-100 頁。
- グロイス、ボリス 「新しさについて」『Я [アール]』 鷲田めろろ訳、2 号、2003 年、6-15 頁。
- 近藤祉秋 「『おっちゃん、それは化け猫に化かされとっだわ』：隠岐島の猫にまつわる語りから見る人間と動物の連続性」『文化人類学』 76 巻、4 号、2011 年、463-474 頁。
- 諏訪正樹、清水唯一朗 「オーラル・ヒストリーメソッドの再検討：発話シーケンスによる対話分析」『慶應義塾大学湘南藤沢学会』 14 巻、1 号、2014 年、108-132 頁。
- 諏訪正樹 「臨機応変さの探究：一人称研究と身体性」『第 30 回人工知能学会』、2016 年。

11. 参考文献一覧

下田正弘 「他者としての仏教-『可能性としての南アジア』試論-」『南アジア研究』 22号、2010年、158-169頁。

須永剛司 「芸術のデザインからデザイン学を展望する」『計測と制御』 54巻、7号、2015年。

高山真 「ライフストーリーとオートエスノグラフィー」『哲学』 138号、2017年、41-59頁。

田中彰吾 「拡張した心を超えて」『人体科学』 25巻、1号、2016年、77-80頁。

谷憲一 「『コスモロジー』研究と世俗主義批判：人類学的相対化の複層性という観点から」『くにたち人類学研究』 10巻、2015年、24-60頁。

中島裕昭、花家彩子 「上演芸術の経験を分析するための方法：花家彩子によるオートエスノグラフィー」『東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系』 64号、2012年、37-45頁。

永島聡

「ロジャーズにおける「共感」の概念について」『人間文化学研究』 9巻、2000年、144-154頁。

「多文化共生社会における“empathy”と「共感」：両概念は本当に重要なのか」『神戸常盤大学紀要』 13号、2020年、161-169頁。

野々村文宏 「美術の民族誌的転回へ向けて」『東西南北』、2005年。

ビジョップ、クレア、ボリス・グロイス 「事を構える（ブリング・ザ・ノイズ）」『TATE Etc.』 大森俊克訳、16号、2009年。

藤谷悠 「ハーフとひきこもりの部分的つながり」『言語文化教育研究』 17巻、2019年、339-359頁。

松田博幸 「ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を学ぶことができるのか? - 自己エスノグラフィーの試み -」『社会問題研究』 59巻、2010年、31-42頁。

宮原克典 「痒みの現象学試論：アトピー性皮膚炎の当事者研究の試み」『UTCP Uehiro Booklet』 12巻、2016年、143-154頁。

<パフォーマンス>

Willimann/Arai

Reflection fig.1: Hospitality. 2017

Reflection fig.2: Translations. 2018

Reflection fig.3: Otherness. 2019

<映画>

サファ・ファティ監督 『デリダ、異境から D'ailleurs, Derrida』[DVD]、ジャック・デリ

11. 参考文献一覧

ダ出演、青土社、2008 年。

リジー・ボーデン監督 『Born In Flames』 1983 年。

1 2. 図表リスト

第1章 はじめにー「わたし（たち）」について

図 1-1 ウィリマンと初めて撮影した Willimann/Arai のセルフポートレート

第3章 自分を他者(相手)の中においてみるー 香港・清水海岸

図 3-1 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》活動風景

図 3-2 香港島・北角の自室からの風景

図 3-3 香港での太極拳の練習風景

図 3-4 香港・下白泥から見える中国本土の風景

図 3-5 開発が続けられる香港島

図 3-6 ヴィクトリア港を九龍側へ渡るフェリーから香港島を眺める

図 3-7 《How to disappear (completely): Integration / Practice 1》記録映像抜粋

図 3-8 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 01

図 3-9 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 02

図 3-10 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 03

図 3-11 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 04

図 3-12 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 05

図 3-13 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 06

図 3-14 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録映像抜粋 07

第4章 相手と自分を重なり合わせるー 日本・中之条

図 4-1 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》活動場所前に立つウィリマンと「わたし」

図 4-2 《The gift exercise / Invitation 1: Romainmôtier》記録写真

図 4-3 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》活動拠点となった元店舗前の普段の様子

図 4-4 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》活動拠点前の JR 中之条駅へと続く街一番の大通り

図 4-5 活動初日の室内の様子

図 4-6 活動を伝えるフライヤー

図 4-7 活動 4 日目の様子

図 4-8 「わたし」たちが中之条を去る直前の台所

図 4-9 借りた炊飯器と小池さんの畑でとれたミョウガで炊いた炊き込みご飯

図 4-10 活動 23 日目の様子

図 4-11 活動 24 日目の様子

12. 図表リスト

- 図 4-12 県外からやってくる観客たち
- 図 4-13 ユニフォームをきた中之条の住民たちが新たな客を招き入れ続けた
- 図 4-14 招き入れた新たな客と共に遊ぶ中之条の地元の子供たち
- 図 4-15 「Willimann/Arai」役としてそれぞれが活動の主体となり、招き入れ続けた中之条の住民たち
- 図 4-16 「気軽にによります」というお願いと交換された招き猫
- 図 4-17 willimannarai セルフポートレート

第5章 重なりに見える自分自身に向き合うー 台湾・太魯閣国立公園

- 図 5-1 大日本帝國陸地測量部が作製した地図における太魯閣国立公園の領域
- 図 5-2 《The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park》記録写真
- 図 5-3 『禮物交換練習 / 邀請 4.2: 太魯閣国家公園 The gift exercise / Invitation 4.2: Taroko National Park』脚本表紙
- 図 5-4 滞在していたタロコのホテル・ヤヤの家の一部
- 図 5-5 サカダン村へ続く道・サカダン林道から望む向かいの山肌
- 図 5-6 サカダン村に残るかつて日本人の先生が住んでいた家の風呂場跡
- 図 5-7 畑を荒らす動物除けの罠に捕まった大猪の解体
- 図 5-8 ヒジウの息子ユブがキョンを狩るテクニックを伝えてくれる様子
- 図 5-9 サカダン林道によく生える食用の野草・マーダを図解したメモ
- 図 5-10 山の下の花蓮市市街の市場で売られているマーダ
- 図 5-11 日本の童謡と一緒に歌うサカダン村の村長・ダダオと「わたし」
- 図 5-12 ヒジウの息子ユブが教えてくれたムササビ狩りの方法
- 図 5-13 「わたし」たちの雄叫びにつられてやって来た犬とヤヤの家の真ん中に、踊りながらできあがっていった謎の「彫刻」
- 図 5-14 日本軍がかつて台湾・高雄の山道に残した酒盛りの痕跡

第6章 重なりの中の重なり合えない「わたし」と出会うー スイス・チューリッヒ、日本・上野

- 図 6-1 《Avatar tours # 1: Zurich Altstetten》のツアーパフォーマンスでウィリマンが参加者を連れて歩いた道
- 図 6-2 《Avatar tours # 1: Zurich Altstetten》ツアーパフォーマンス中の記録写真
- 図 6-3 《Avatar tours #1: Tokyo Ueno》における「アバター」の仕組み
- 図 6-4 ツアーパフォーマンスの告知・招待状等に使用したイメージ
- 図 6-5 展覧会会場に置いたツアーパフォーマンス参加者募集を呼びかけるポストカードの表面と裏面
- 図 6-6 《Avatar tours #1: Tokyo Ueno》ツアーパフォーマンスの仕組み

12. 図表リスト

- 図 6-7 《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》表現活動期間内で、ウィリマンと「わたし」が歩いた道
- 図 6-8 チューリッヒでの《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》ツアーパフォーマンス記録写真
- 図 6-9 上野での《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》ツアーパフォーマンス記録写真 01
- 図 6-10 チューリッヒでの《Avatar tours # 1-3: Zurich-Tokyo》インスタレーション・ビュー01
- 図 6-11 上野での《Avatar tours # 1-2: Zurich-Tokyo》インスタレーション・ビュー01
- 図 6-12 上野での《Avatar tours # 1-2: Zurich-Tokyo》インスタレーション・ビュー02
- 図 6-13 チューリッヒでの《Avatar tours # 1-3: Zurich-Tokyo》インスタレーション・ビュー02
- 図 6-14 上野での《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》ツアーパフォーマンス記録写真 02
- 図 6-15 上野での《Avatar tours # 2: Tokyo Ueno》ツアーパフォーマンス記録写真 03

第7章 「なる」論前章：形を重ねる（uni・form）

- 図 7-1 《The gift exercise / Invitation 1: Romainmôtier》記録写真
- 図 7-2 《The gift exercise / Invitation 2: Nakanojo》記録写真
- 図 7-3 《Swiss gymnastics: exercise 1》記録映像抜粋
- 図 7-4 《How to disappear (completely): Uniformity》記録写真 01
- 図 7-5 《How to disappear (completely): Uniformity》記録写真 02
- 図 7-6 《How to disappear (completely): Uniformity / Practice 2》記録写真
- 図 7-7 《How to disappear (completely)): Uniformity / Practice 3》記録映像抜粋
- 図 7-8 《How to disappear (completely): Re-naturalization / Practice 1》記録写真
- 図 7-9 《The gift exercise / Invitation 2: Nakanojo》記録写真
- 図 7-10 《The gift exercise / Invitation 4.1: Sakadang/Datong》閉じた状態のマップ
- 図 7-11 《The gift exercise / Invitation 4.1: Sakadang/Datong》開いた状態のマップ
- 図 7-12 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》トロフィーフォト（交換 No.48/交換サービス「タオルとコーヒー 毎日お茶かコーヒーをもらう」）
- 図 7-13 《The gift exercise / Invitation 2.1: Nakanojo》トロフィーフォト（交換 No.75/交換サービス「二人が次の展示を成功させるよう願う」）
- 図 7-14 《The gift exercise / Invitation 4.1: Sakadang/Datong》記録写真

1 3. 謝辞

本論文を執筆するにあたり、下記の皆様から多大なるご協力を賜りました。特に、ご多忙のなか審査員を快くお引き受けてくださった全ての先生方に、こころより御礼を申し上げます。皆様のご尽力なしでは、この論文を完成させることは不可能でした。ここに記し、深く感謝致します。

記

小山穂太郎、須永剛司、Michael Schneider、岡原正幸、井本由紀、OJUN、Nina Willimann、Patrick Müller、Daniel Späti、Nuria Kramer、松井みどり、Nac Hjiu、Yaya Huwat、Saysang Ukaw、Yubu Sysang、RubiQ Saysang、Riya Saysang、李尚喬、陳政道、村上さん・瀬山さん・小池さん一家、塩野谷さん親子、林敏行、Sally De Kunst、Milenko Lazic、Weichen Zhong、根来美和、藩美君、龔卓軍、Nicole Henning、Vreni Spieser、Captain Zip (aka Phil Munnoch)、Lorraine Fossi、Natalie Meister、Jasmin Schaitl、William Bilwa Costa、David Wiltschek、長田奈緒、Yukie Hori、Zoé Schellenbaum、Dorothy Wong Ka Chung、Benjamin Ryser、中津川侑紗、林頌介、井上潤美、しばたみづき、新井邦生・伶奈・理恵子・富雄、そのほか香港・中之条・台湾・Avatar tours の活動に参加してくださった各地域の住民の皆様（敬称略、順不同）